

大宰府史跡

昭和53年度発掘調査概報



昭和54年3月

九州歴史資料館

序に代えて

昭和53年度調査概報を公刊するに当って思うことは、第一に速報の定期化と、諸賢の協力を願うことである。

第一の速報はこの形の年次概報で万事がおわるわけではなく、疑問は疑問としてのこるし、総合的な考察は年々増加する資料の整理によってより精密になって行くであろう。

しかし、年報の形で速報が定期化することは何よりも大切なことと思う。私自身かつて昭和28年度の金光寺の調査では、日本考古学協会の年報に極めて短かい報告をしただけであったので、この度の再調査の報告は多年心にかかりながら、怠っていた報告の義務を幾分でも軽くしてくれるものと期待している。

次に早急に結論を出さぬことである。現実は発掘によって明確に把握出来ることに限るといつても、問題意識を持たぬままに発掘調査は出来ない。解釈の問題になると出来るだけ各条件から考慮することが必要である。わからぬことをわからぬままに放置すべきではないけれども、早急な結論をつつしむことは、調査担当者の留意すべきことである。自戒の意味でこの概報の序に代えて、一言述べておく次第である。

昭和54年3月31日

九州歴史資料館館長 鏡山猛

例　　言

1. 本概報は昭和53年度に実施した大宰府史跡の発掘調査概要の報告である。ただし第33次補足調査および第54次調査は昭和52年度の調査であるが、未報告があるので併せて報告する。また福岡県教育委員会文化課が委託をうけて行った条坊遺構に関する調査を併せて報告することにした。なお第60次調査は現在調査継続中であるためその報告については次回にゆずる。
2. 条坊の表示については鏡山猛『大宰府都城の研究』を準拠としている。
3. 検出遺構については九州芸術工科大学の沢村仁教授のご指導を得た。
4. 本報告の執筆・編集は当館調査課の石松好雄、倉住靖彦、高倉洋彰、横田賢次郎、森田勉、高橋章および調査補助員の山本信夫、真玉秀樹がこれにあたった。遺物の整理・復原には沢田康夫、伊藤かの子、井上とし子の協力を得た。写真撮影は学芸第一課の石丸洋による。
5. 仏像関係の遺物（僧形像・宝冠・懸仏）についての記述は学芸第一課の八尋和泉によるものである。

目 次

序に代えて

I 調査計画	1
II 調査経過	2
1 概 要	2
2 第33次補足調査	4
検出遺構	5
出土遺物	6
小 結	15
3 第54次調査	16
検出遺構	16
出土遺物	22
小 結	34
4 第55次調査	37
検出遺構	37
出土遺物	37
小 結	38
5 第56次調査	39
検出遺構	39
出土遺物	40
小 結	45
6 第57次調査	46
検出遺構	46
出土遺物	51
小 結	78
7 第58次調査	81
検出遺構	81
出土遺物	82
小 結	83

8	第59次調査.....	85
	検出遺構.....	85
	出土遺物.....	85
	小　結.....	87
9	第61次調査.....	88
	検出遺構.....	88
	出土遺物.....	88
	小　結.....	91
10	第62次調査.....	93
	検出遺構.....	93
	出土遺物.....	93
	小　結.....	95

表 目 次

第1表	第57次調査出土木製品一覧表	65
第2表	漆容器計測表	66
第3表	切出形木製品計測表	68
第4表	銅錢出土遺構・層位表	78

挿 図 目 次

第1図	大宰府史跡発掘調査地域図	折り込み
第2図	第33次補足調査地周辺図	4
第3図	第33次補足調査遺構配置図	5
第4図	S D 605 出土土器・陶磁器実測図	7
第5図	S K1538 A出土土器・陶磁器実測図(1)	8
第6図	S K1538 B・C出土土器・陶磁器実測図(2)	9
第7図	S K1538 D出土土器・陶磁器実測図(3)	11
第8図	S K1539上層出土土器・陶磁器実測図(1)	12
第9図	S K1539下層出土土器実測図(2)	13
第10図	S K1540出土土器・陶磁器実測図	14
第11図	S D 605出土刀子実測図	14

第12図	S K1539下層出土石製品実測図	15
第13図	第54次調査遺構配置図	折り込み
第14図	第54次調査H地区南北トレンチ遺構配置図	16
第15図	第54次調査層位模式図	17
第16図	S X1385・1390実測図	18
第17図	S E1387, S X1386実測図	20
第18図	木柄実測図	21
第19図	整地層下出土土器実測図	23
第20図	整地層出土土器実測図	24
第21図	S X1386・1390・1394, S D1401および青褐色粘土層出土土器実測図	26
第22図	S K1392・1396・1388, S D1395出土土器・陶磁器実測図	28
第23図	灰色砂層・灰色土層出土土器・陶磁器実測図	29
第24図	軒丸瓦拓影・実測図	31
第25図	木製品実測図	33
第26図	政庁地区区画施設配置概念図	36
第27図	第55次調査遺構配置図	37
第28図	第56次調査地周辺図	39
第29図	第56次調査遺構配置図	40
第30図	S K1418, S X1421・1423出土土器・陶磁器実測図	42
第31図	S K1424, S E1425出土土器・陶磁器実測図	43
第32図	S K1420出土土器・陶磁器実測図	45
第33図	第57次調査遺構配置図	折り込み
第34図	第57次調査層位模式図	46
第35図	S K1470, S D1443出土土器・陶磁器実測図	52
第36図	S D1427・1436・1433A・1438・1439・1429A・B・1437・1441出土土器・陶磁器実測図	54
第37図	整地層出土土器・陶磁器実測図	55
第38図	腐植土層出土土器・陶磁器実測図	56
第39図	暗茶色土層出土土器・陶磁器実測図(1)	57
第40図	暗茶色土層出土陶磁器実測図(2)	58
第41図	黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図	61
第42図	軒先瓦拓影・実測図	63
第43図	丸・平瓦および駕斗瓦拓影・実測図	64
第44図	木製食器実測図	69

第45図	木製生活用具実測図	70
第46図	木製工具類実測図(1)	71
第47図	木製工具類(2)・用途不明木製品実測図	72
第48図	守護札状木製品実測図	74
第49図	木造僧形像頭部実測図	74
第50図	金禹製品実測図(1)、錫銅製宝冠実測図	75
第51図	金属製品実測図(2)	76
第52図	銅錢拓影(2/3)	77
第53図	遺構時期別配置概念図	79
第54図	第58次調査遺構配置図	折り込み
第55図	各層出土土器実測図	82
第56図	第59次調査地周辺図	85
第57図	第59次調査遺構配置図	86
第58図	各層出土土器実測図	87
第59図	第61次調査遺構配置図	88
第60図	旧表土出土土器実測図	89
第61図	S K1521出土土器実測図	90
第62図	S D1522出土土器実測図	91
第63図	第62次調査遺構配置図	93
第64図	S K1525出土土器実測図	94
第65図	S K1525出土刀子実測図(1/2)	95

図版目次

- 図版 1 第33次補足調査 (上)西トレンチ・(下)東トレンチ
- 図版 2 第54次調査区全景
- 図版 3 (上) S A1410築地・(下) S D1395 A・B溝
- 図版 4 S X1385暗渠
- 図版 5 S X1390暗渠
- 図版 6 (上) S E1387井戸・S K1388土壤・(下) S X1386井戸
- 図版 7 下層遺構
- 図版 8 H地区の調査
- 図版 9 第55次調査区

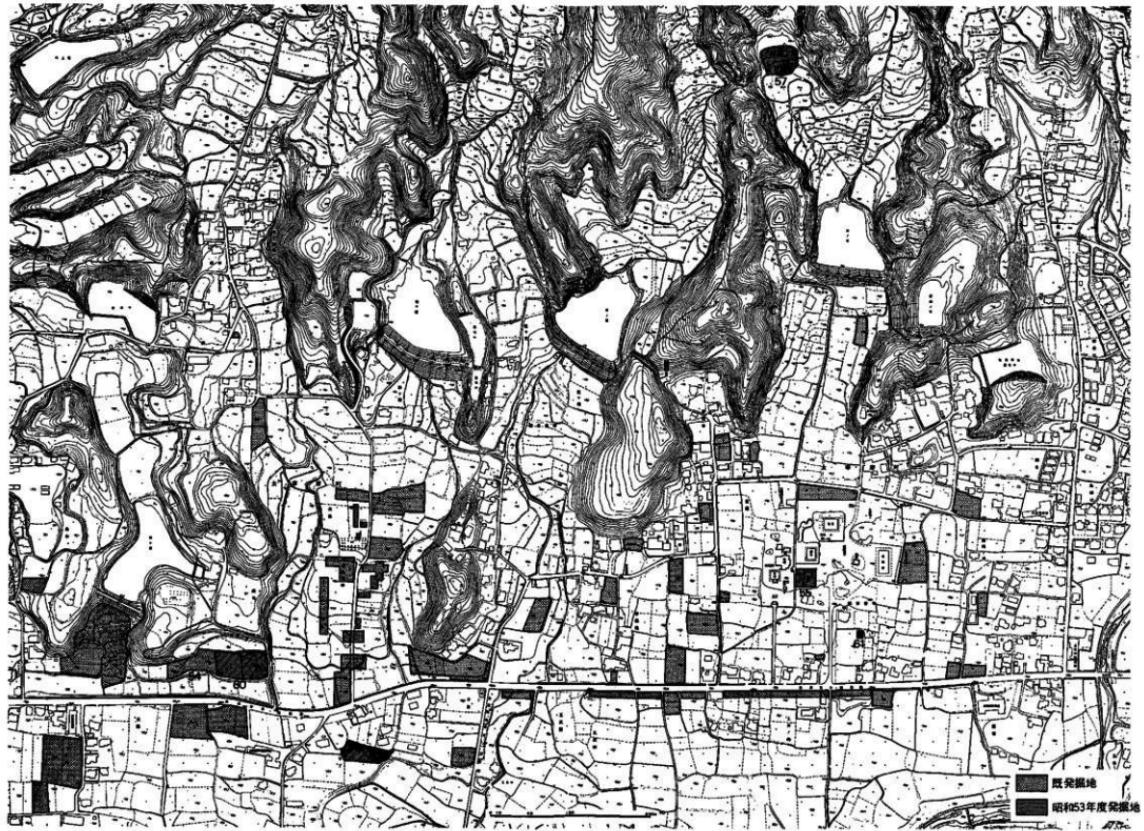
- 図版10 第56次調査区Aトレンチ全景
- 図版11 (上)第56次調査区Bトレンチ全景・(下)S E1425井戸
- 図版12 第57次調査区全景
- 図版13 S B1430礎石建物
- 図版14 (上)S D1429 A・B溝・(下)S D1427・1433 A・B溝
- 図版15 S B1440礎石建物
- 図版16 (上)S X1455歩廊状遺構・S D1437・1438溝・(下)S D1436溝・S X1454渡り石
- 図版17 (上)S B1440 A・B礎石・(下)S B1440礎石上の柱根
- 図版18 (上)S B1440礎石上の柱根・(下)S X1460暗渠
- 図版19 (上)S D1439・1441溝・(下)S D1438・1439の北側石積
- 図版20 (上)S K1470土壤・(下)S F1435石積遺構
- 図版21 第58次調査区全景
- 図版22 第59次調査区全景
- 図版23 (上)東西方向トレンチ・(下)S D1495溝
- 図版24 (上)S D1495溝・S K1447土壤・(下)S D1498溝
- 図版25 第61次調査区全景
- 図版26 第62次調査区全景
- 図版27 第33次捕足調査 S K1538 D出土土器
- 図版28 第33次捕足調査各遺構出土陶磁器・刀子・石製品
- 図版29 第54次調査各層位出土土器
- 図版30 第54次調査 S X1390・S X1394・S D1401・青褐色粘土層出土土器
- 図版31 第54次調査 S X1388・S K1391・S D1395 A・灰白色砂土層出土土器・陶磁器
- 図版32 第56次調査 S K1481・S X1423・S K 1420出土土器・陶磁器
- 図版33 第57次調査 S K1470出土土器・陶器
- 図版34 第57次調査SD1436・1438出土墨書き土器・磁器, SD1429腐植土層・暗茶色土層出土磁器
- 図版35 第57次調査暗茶色土層・黒灰色土層出土土師器・陶磁器
- 図版36 第61次調査出土土器・動物形須恵製品
- 図版37 第62次調査 S K1525出土土器
- 図版38 第54次調査・第57次調査出土軒丸瓦・軒平瓦
- 図版39 第57次調査出土丸・平瓦および熨斗瓦・雁振瓦
- 図版40 第54次調査出土木製品
- 図版41 第54次調査出土木製品
- 図版42 第57次調査出土木製品

図版43 第57次調査出土木製品

図版44 第57次調査出土木製品

図版45 第57次調査出土木製・土製人物・仏像

図版46 第57次調査出土金属製品



第1図 大宰府史跡発掘調査地域図

I. 調査計画

昭和53年度の発掘調査は昭和52年度に立案した新5ヵ年計画の第2年次にあたる。この新5ヵ年計画では観世音寺の伽藍配置および子院跡についての遺構確認と条坊地区の遺構を確認することを主眼としている。したがって今年度の調査もこの趣旨に沿って次の箇所について調査を行うこととした。

	調査地域	調査期間	調査面積	備考
1	大字観世音寺字今光寺991-1~3	5月~8月	1,495	金光寺跡
2	・字不丁 278-4	8月~10月	1,000	朱雀大路
3	・字日吉 254-1	11月~1月	1,075	左郭五条一、二坊
4	・字堂端 182	4月	255	観世音寺回廊西南隅

まず(1)は観世音寺の子院のひとつと考えられるものである。「筑前国続風土記」によれば観世音寺には49の子院があったといわれている。この観世音寺子院についてはこれまでほとんど研究はなされておらず、その位置すら不明なものが多い。これらの子院が存在したと考えられる地域は現観世音寺を中心として、四王寺山（大野城）の山裾一帯であるが、現在この地域は「観世音寺境内および子院跡」として史跡指定されている。この49院あったといわれる子院については地名等によってその所在地を推定しうるものがいくつかあり、金光寺もそのひとつである。観世音寺背後に「今光寺」の字名も残っている。この金光寺跡と推定される地域については昭和28年九州大学九州文化総合研究所によってその一部が調査されており、5間×7間の礎石建物が検出されており、出土遺物から室町時代に比定されている。今回の調査では、この建物の遺構を再確認するとともに、その他の遺構の存在の有無について知見を得ることを主眼とした。

次に(2)(3)は条坊遺構の調査を主眼としたものである。(2)の調査地域は政庁南門の真南約100mの地点で朱雀大路に相当する南方向の道路が推定されるところである。大宰府の条坊についてはこれまで鏡山猛の復原によるものを準拠として調査を進めてきたが、この復原案を実証するような遺構はこれまでのところ検出されていない。今回の調査地は左右両郭の中心線上でもあり、大宰府条坊復原の基準資料となるものである。この政庁前面についてはこれまでに14次、17次、32次の調査を行っているが、この調査において礎石建物1棟、掘立柱建物2棟分の遺構を検出している。また、この一画には「不丁」の字名も残っているところから、この地域一帯が官衙であった可能性が指摘されるにいたっている。この調査では条坊遺構の確認とともに、この建物跡等の遺構の広がりについても知見を得ることを目的としている。なお、この(2)および(3)については現在太宰府町によって計画されている観世音寺地区土地区画整理事業の事前調査をも兼ねている。

次に（4）については住宅改築にともなうもので昭和52年度に調査を行うべく計画したものであるが、既存庫裡の解体がおくれたため今年度にくり越したものである。延喜五年の『觀世音寺資財帳』によると回廊の西南隅が想定されるところである。

以上の計画については昭和53年5月12、13日に開催した大宰府史跡発掘調査指導委員会議において了承されたため計画どおり調査を実施することとした。

II. 調査経過

1. 概要

昭和53年度の調査は昨年度からの継続調査として藏司地区の調査を続行するとともに、今年度に繰り越されていた『觀世音寺』庫裡改築に伴う事前調査を第55次調査として最初に着手した。『觀世音寺』伽藍については昭和32年に回廊・中門等について調査が行なわれているが、後世における削平のため中門・回廊については痕跡すら残っておらず、塔跡を含む伽藍の東南部分については遺構の保存状況はほとんど期待できないことが明らかになった。

今回の調査地である回廊西南隅推定地も、講堂礎石とのレベル差からみて遺構は削平されている可能性が大きく、あまり期待が持てなかった。調査の結果は東南部同様後世の削平が激しく、回廊の痕跡すらも検出できなかった。また、これと期間をほぼ同じくして左郭八条一、二坊推定地の調査を行った。この調査は高等学校校舎建設に係る事前調査である。これらの調査終了とともに4月下旬より『觀世音寺』子院の金光寺跡推定地の調査に着手した。この金光寺跡推定地についてはさきにも述べたごとく以前に一部発掘調査が行なわれており、5間×7間の礎石建物一棟が確認されている。調査に当ってはこの礎石建物について再調査を行うとともに、この地域における遺構の範囲および保存状況について知見うるため、まず最初に地形に沿って東西方向のトレチを設定し調査を開始した。調査開始後間もなく、意外に広く遺構の存在することが判明したため、全面発掘調査に切り換え調査を続行した。その結果後に述べるごとく前回調査で判明していた建物の他に、5間×5間の礎石建物一棟および数条の玉石組みの溝等が検出され非常に良好な状態で遺構が保存されていることが判明した。遺構検出は一応9月26日に終了したが、その後実測および細部についての補足調査を行い11月中旬にすべての調査を終了した。

次に7月に入り、朱雀大路に相当する大宰府条坊中軸線の上にあたる地域の調査を開始した。この地域の調査は『觀世音寺』地区土地区画整理事業との関係から早急に遺構状況についての知見を得る必要性が生じたため、年度当初に着手する予定であったが、土地所有者の了解が得られず、やむを得ず延期したものである。この調査期間中、右郭十条三、四坊推定地において住宅

建設に伴う発掘届が提出されたため、その事前調査を合わせて行った。この地域はかつて調査が行なわれ遺構・遺物の存在が確認されている字「市の上」(現都府楼団地)に接する地域である。今年度後半期は政庁前面の左郭五条一、二坊推定地の調査を行うべく計画したが、当該地は未指定地であり、また土地区画整理事業との関係からも地主の了解を得るのが難しいのではないかと判断したため予定を変更して52年度に調査した藏司地区の第54次調査地の東隣接部の調査を行うこととし、11月2日に着手した。この調査は54年3月末日現在調査継続中である。このほか環境整備事業に伴う事前調査および住宅建築に伴う事前調査2件を各々、第61次、62次、63次調査として行った。

昭和53年度の発掘調査地を地区別に記すと下記のとおりである。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	備考
54	6 A Y T-A	1,135m ²	77. 11. 29~78. 5. 13	藏司
55	6 K K Z-B	70m ²	78. 4. 3 ~78. 4. 15	回廊西南隅
56	6 A Y I-D	80m ²	78. 4. 3 ~78. 4. 19	左郭八条一、二坊
57	9 K K K	1,100m ²	78. 4. 27~78. 11. 26	金光寺跡推定地
58	6 A Y I-D	830m ²	78. 7. 5 ~78. 9. 19	条坊中軸
59	6 A Y O	95m ²	78. 8. 22~78. 8. 30	右郭十条三、四坊
60	6 A Y T-A		78. 11. 2 ~調査中	藏司
61	6 K K Z	48m ²	78. 11. 24~78. 12. 6	觀世音寺
62	新町遺跡	44m ²	78. 12. 16~78. 12. 20	太宰府町

2. 第33次補足調査

昭和49年度に実施した左郭七・八条九・十坊推定地を対象とした第33次調査で、政庁中軸線からほぼ9町の距離に位置し、九坊と十坊を画するように南北方向にのびる2条の溝(S D 600・S D 605)を検出した。S D 605の最下層から貞応三年(1224)銘をもつ墨書き木札が出土するなど、必ずしも条坊に関する遺構と判断することはできないが、その位置から重視されている。昭和51年度には第33次地点の北側で宅地造成の申請が出されたため補足調査を行い、S D 600がさらに北に伸びることを確認している。

今回、第33次調査地の南側で住宅建築の申請が出され、この地が先述の溝S D 605の延長上に位置するところから、溝の有無を確認するために、第33次調査の第2次補足調査として発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和53年2月13日から25日までの2週間実施した。発掘にあたって対象区の西側、S D 605の推定延長線上にかけて、幅3m×長さ15mの東西方向のトレンチを設定し、また東側に幅3m×長さ15mの東北方向のトレンチを設定した。調査の結果、S D 605の延長と考えられる溝の肩部を西トレンチで確認した。また東トレンチでは多数の土壌を検出した。調査地



第2図 第33次補足調査地周辺図

の地番は、筑紫郡太宰府町大字太宰府字月見山2482-1番地である。

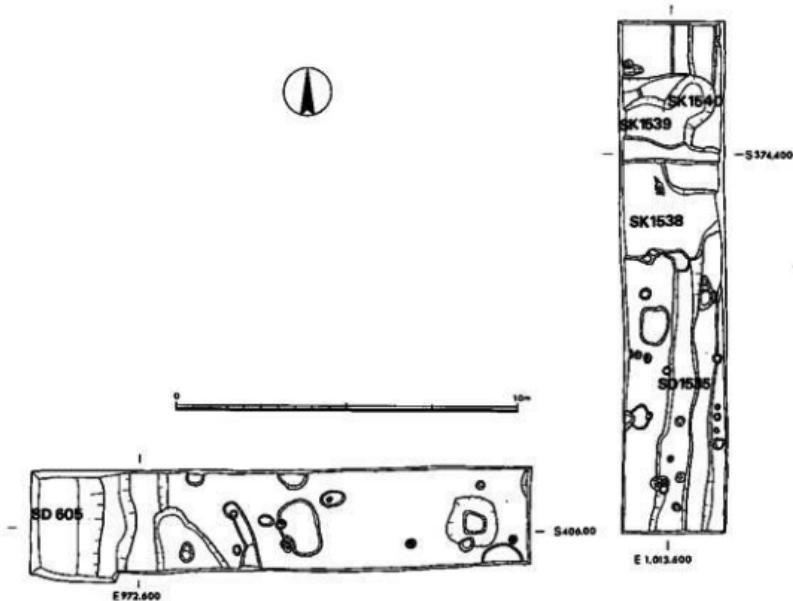
検出遺構

検出した遺構は西トレンチで溝1条、ピット、東トレンチで溝1条、土壙7基、ピットなどがある。

溝

SD 605 西トレンチの西端近くで南北に走る1条の溝を検出した。トレンチのさらに西側が道路に面しているため溝の東岸部分のみの調査にとどまり、溝幅などの詳細を明らかにできないが、深さは約1mをはかる。今回の調査の目的とした溝SD 605との関連であるが、第33次調査地点でのSD 605の東岸にくらべ今回検出した溝の東岸は約2.5m東に寄っている。しかし溝SD 605は南に行くにしたがって東側に寄ることが確認されており、別個の溝ではなく一連の溝と判断される。第1次の補足調査の結果などからSD 605は、やや蛇行気味に南北に延びる溝と考えられる。

SD 1535 東トレンチで検出された、灰褐色土を切り込んだ、南北に延びる小溝である。溝幅



第3図 第33次補足調査遺構配置図

約0.8m、深さ0.1mで、残りはよくない。

土壤

S K1538 東トレンチで検出されたもので、灰褐色土から掘り込んでいる。発掘区域が狭少なために全体を確認するに至っていないが、東西にさらに広がるようである。幅約3m、深さ約0.8mである。土壤の内部には3ヵ所に遺物の集中が見られプランを明瞭にできないが、埋土中に掘り込まれたビットの存在が推定される。そのためS K1538をA、B、Cの3ブロックに分け、遺物を取り上げた。またこれらの下位、S K1538下層にA、B、Cとは分離しうる一括土器群があり、これをDとした。この土壤が今回の調査でもっと多くの遺物を出土した。

S K1539 東トレンチで検出されたもので、灰褐色土から掘り込んでいる。これも発掘区域が狭少なため全体を確認していないが、方形の土壤と思われる。一辺1.5m、深さ約0.3mである。S K1539も埋土のちがいにより遺物を上層、下層に分けて取り上げた。この土壤からもかなりの量の土師器の杯、小皿が出土している。

S K1540 東トレンチで検出されたもので、灰褐色土から掘り込んでいる。S K1539に切られていて不整円形のプランになるようで、幅約1.3m、深さ約0.3mをはかる。土師器小皿数点が出土している。

出土遺物

出土した遺物は多量の土師器と陶磁器および刀子・銅鏡・石製品である。ここでは溝及び土壤から一括資料として検出された遺物を中心に報告することにする。

土器

S D 605 出土土器（第4図、図版28、別表）

出土した土器は土師器と陶磁器である。

土師器

皿、杯が出土した。切り離しは不明の1点を除けば、すべてが糸切りである。

皿 a (2~12) 口径8.2~9.1cm、器高0.9~1.6cmである。

皿 b (1) 口径6.5cm、器高1.65cmである。

杯 a (13~17) 13~16は口径12.4~13.3cm、器高2.4~2.7cmである。17はほかの杯より大型で、口径15.8cm器高3.8cmである。

陶磁器

青磁

龍泉窯系の碗が3点出土している。

碗 (18~20) 18は底部を欠く破片で、口縁部を内寄させている。復原口径は11.2cm、胎土は灰白色の精緻なもので、釉は淡い空色の強い緑色を呈する(I-6-a類)。19も底部を欠く

破片で、外面体部にヘラ描きの蓮弁を有する。復原口径17cm。胎土は淡茶灰色の精緻なもので、釉はくすんだ青黄色でうすく施釉されている(I-5-a類)。20は小片であるが19と同じく蓮弁を描いている。胎土は灰白色の精緻なもので、釉はくすんだ青灰色でうすく施釉されている。復原口径17.3cm(I-5-a類)。

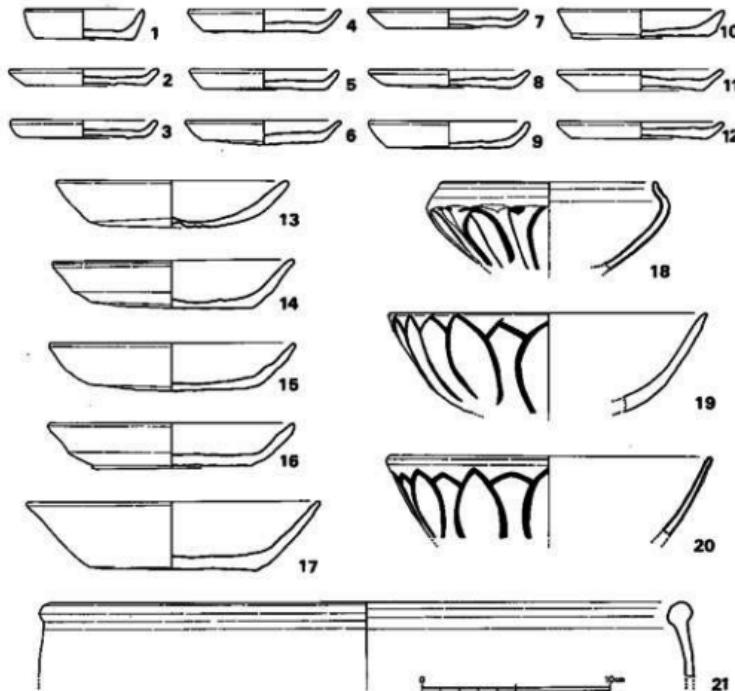
三彩

盤(21) 小片から復原すると口径は33.6cmを測る。胎土は黒色の粒子のまじった暗灰色を呈し、粗い砂がまじっている。綠釉を主体とし、残存部に黄釉での文様が見られる。

S D1535出土土器

出土したものは白磁の皿1点のみである。

皿 口縁端部はいわゆる口禿となっている。灰白色的胎土をもち、若干空色を帯びた灰白色の釉が全面に施釉されている。口縁部に油煙の付着がみられることから灯火器として用いら



第4図 S D 605 出土土器・陶磁器実測図

れたと考えられる。約半分残存し、それから復原すると口径11.0cm、器高は2.95cmになる。(IX-1・b類)。

S K1538出土土器 (第5~7図、図版27、別表)

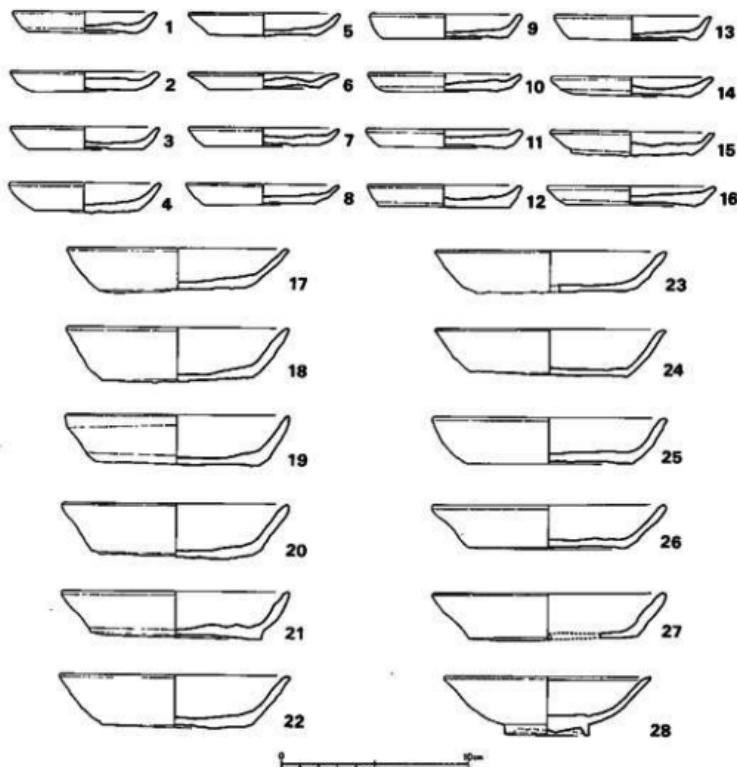
出土した土器は土師器と青磁、白磁である。

検出遺構で述べたように4グループに分けて取り上げたので、グループごとに説明していく。

A (第5図1~28、別表)

土師器

皿、杯が出土した。すべて糸切りである。



第5図 S K1538 A 出土土器・陶磁器実測図 (1)

皿 a (1~16) 口径7.8~9.0cm、器高0.9~1.35cmである。

杯 a (17~27) 口径12.1~12.9cm、器高2.4~3.0cmである。

陶磁器

出土した陶磁器は白磁の皿1点である。

白磁

皿 (28) 高台を有する小皿で、口縁端部は口禿になっている。空色を帯びた白色の釉を全面に施釉しているが、高台内面の一部は露胎である。見込みに沈線が一条めぐっている。復原口径は11.2cm、器高は3.15cmである。(IX類)。

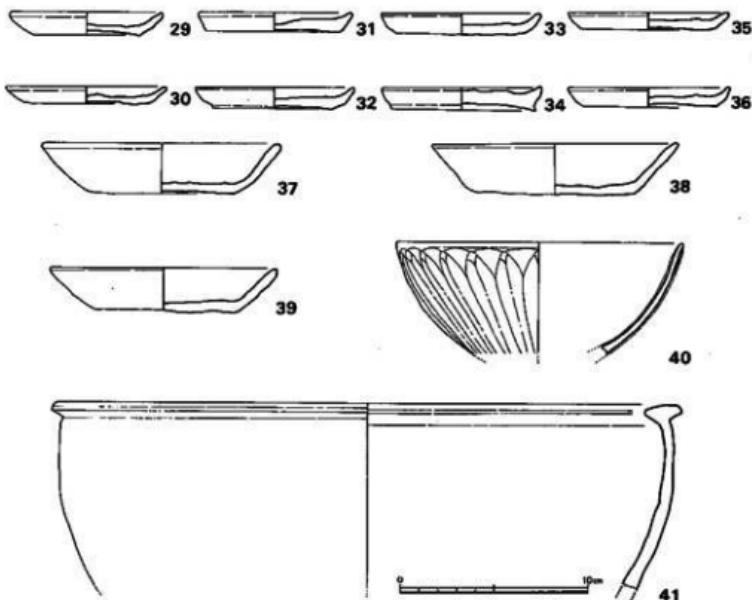
B (第6図29~38)

土師器

皿、杯が出土した。すべて系切りである。

皿 a (29~36) 口径8.3~8.8cm、器高0.9~1.3cmである。

杯 a (37~38) 口径は12.9cmと13.2cm、器高は2.75cmと2.8cmである。



第6図 SK 1538B・C出土土器・陶磁器実測図(2)

C (第6図39~41)

土師器

杯が1点出土した。

杯 a (39) 口径は12.2cm、器高2.4cmである。糸切り離された底部に板状圧痕がみられる。

陶磁器

青磁・黄釉陶器が各一点出土している。

青磁

碗 (40) 龍泉窯系の碗で、底部を欠く破片である。胎土は灰白色で、暗緑色の釉をやや厚く施している。復原口径は15.4cmをはかる。Ⅲ-2類かとも考えられるが、小片のため不明。

黄釉陶器

盤 (41) 胎土には粗い砂を含んでおり、暗灰色を呈する。黄灰色の釉が口縁部と内面全面に施されている。復原口径は29.6cmである。

D (第7図42~75、別表)

土師器

皿と杯が出土した。底部の切り離しは不明の皿1点を除けばすべて糸切りである。

皿 a (41~57) 44の底部切り離しは不明である。口径8.3~9.0cmで、器高は1.0~1.3cmである。

杯 a (58~73) 58~72は口径12.8~13.4cm、器高は2.5~2.95cmである。73は他の杯にくらべて大形で、口径17.6cm、器高12.9cmをはかる。65には乾燥時にできたと思われるヒビ破れを補正した跡が残っている。

陶磁器

白磁皿が2点出土している。

白磁

皿 (74~75) 74の口縁端部は口禿で、体部および底部の外面に空色を帯びた灰白色の釉をやや厚目に施している。口径は9.8cm、器高は1.6cmをはかる。(Ⅳ-1-a類)。75の口縁端部も口禿で、74と同じく空色を帯びた灰白色の釉を内面及び外面体部上半に施している。復原口径は10.0cm、器高は2.35cmをはかる。(Ⅳ-2類)。

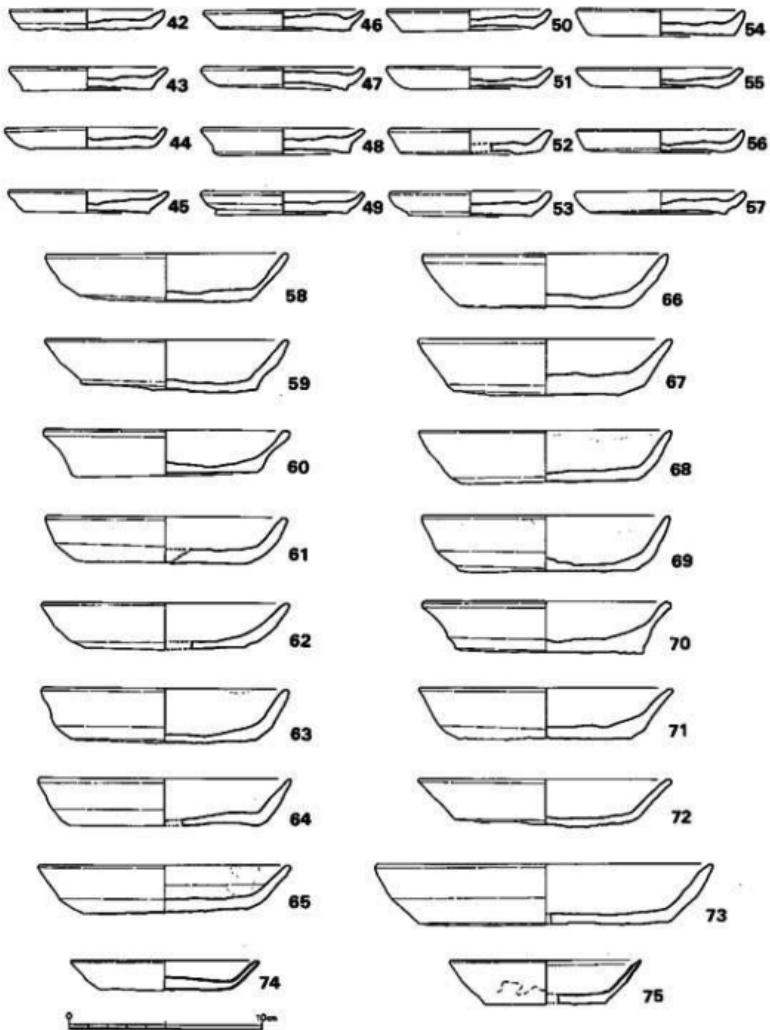
S K1539出土土器 (第8・9図、図版28、別表)

出土した土器は土師器と陶磁器であるが、検出遺構で述べたように上下2層に分離して遺物を取り上げたので、層別に説明していく。

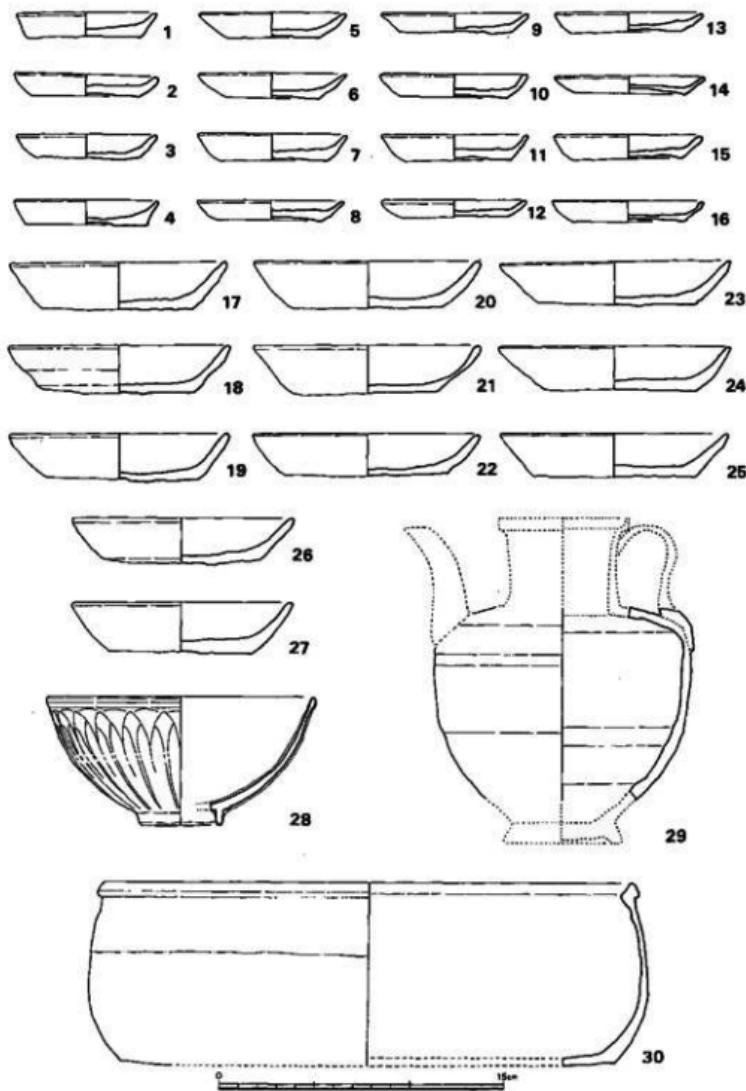
上層 (第8図)

土師器

皿と杯が出土した。すべて糸切りである。



第7図 S K 1538D出土土器・陶磁器実測図（3）



第8図 SK 1539 上層出土土器・陶磁器実測図（1）

皿 a (1~16) 口径7.6~8.4cm、器高0.95~1.45cmである。

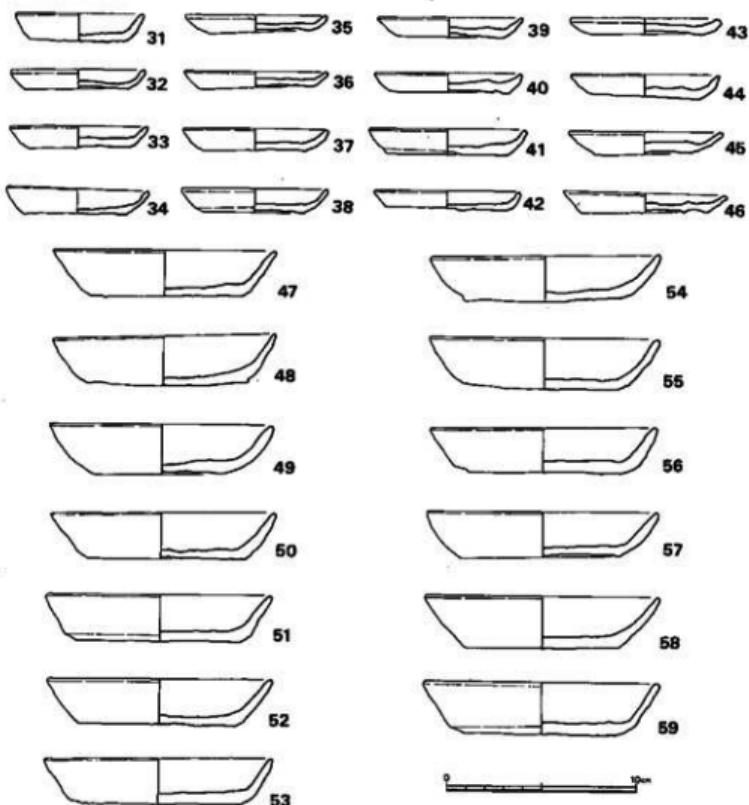
杯 a (17~27) 口径11.8~12.25cm、器高2.3~2.8cmである。

陶器

青磁、白磁、黄釉陶器が各1点出土した。

青磁

碗 (28) 龍泉窯系碗の破片である。体部外面の蓮弁は細く、鋸を有する。胎土は灰白色を呈する。釉は深い空色を呈し、高台先端をのぞくすべてに厚く施釉されている。復原口径は



第9図 SK 1539 下層出土土器実測図 (2)

14.2cm、器高は6.9cmをはかる。(III-2類)。

白磁

水注(29) 軸は内外面ともに施されているが、外面は灰白色で、内面はやや黄味を帯びた色調をなす。灰白色のやや粗い胎土のものである。最大径は肩部と体部の境にあり、肩部の径は13.4cmである。

黄釉陶器

盤(30) 暗灰色をなす胎土は砂粒を含む粗い質のものである。内面および外面上位に化粧土をしその上に施釉しており、黄灰色を呈する。焼成は硬質である。復原口径27.8cm、器高9.75cmである。

下層(第9図)

土師器のみが出土している。すべて底部を糸切り離しにしている。

土師器

皿a(31~46) 口径7.0~8.6cm、器高0.9~1.5cmである。

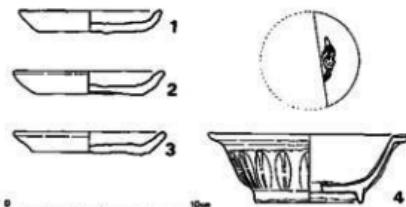
杯a(47~59) 口径11.6~12.5cm、器高2.4~2.9cmである。

S K1540出土土器(第10図、別表)

土師器と青磁が出土している。

土師器

皿a(1~3) 皿のみの出土ですべて糸切りである。口径7.6~8.2cm、器高1.2~1.3cmをはかる。

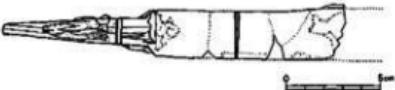


第10図 S K1540出土土器・陶磁器実測図

青磁
杯(4) 龍泉窯系の杯で、口縁部を大きく外反させ平坦な面にくぼみをつけている。見込みには双魚文を貼付している。胎土は灰白色を呈している。軸は高台先端を除くすべてに厚く施されている。復原口径10.7cm、器高3.7cmをはかる。(III-4・b類)。

その他の出土遺物

刀子(第11図、図版28) SD 605より出土したもので、刃部の中ほどから切先までを欠く鉄製の刀子である。鏃のため腐食が著しいが、茎部には柄と思われる木質が付着している。現存長18.45cm、現存刃部長9cm、茎部長7.8cm、闊部幅2.5cm、背厚0.25cm、茎部厚0.3cmをはかる。



銅錢 元豈通宝一枚がS K1539下層か

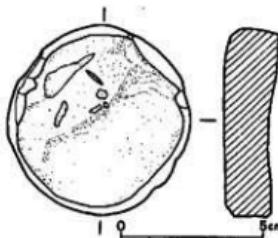
第11図 SD 605出土刀子実測図

ら出土している。

石製品（第12図、図版28） 円盤型の石製品で、石質は黒色の滑石である。表面とも磨いているが周囲はノミ状のもので削っている。直径6.8cm、最大幅1.85cmをはかる。

小結

本調査で検出した西トレンチ内の南北溝SD 605は第33次調査検出のSD 605と一連の溝と考えられる。第33次調査では発掘区のほかに28mの距離をおいて南側にもトレンチを入れ、そこでもSD 605の延長線を検出しているが、その間約1m東によっている。今回の調査区はさらに約80m南側に距離をおいており、第33次調査の結果からみてさらに東へSD 605が片寄ることは当然考えられ、東へ約2.5mのすれば許容されよう。またSK1538とSK1539の二つの土壌の層位的関係はプランからSK1538A、B、CとSK1539上層は同一時期のものであり、またSK1539下層はプランから明確にとらえられなかったが、SK1538A、B、Cより層位的に下層であり、SK1538のDは以上のものより下層である。しかしながら出土した遺物には大差なく、また出土遺物の土師器、陶磁器などは前二回の調査時出土のものとほとんど変化がない。したがって溝および土壌の終焉は13世紀後半～14世紀前半代のものと考えられる。



第12図 SK 1539 下層出土石製品
実測図

3. 第54次調査

第54次調査は大宰府政府跡の西側の台地に残る藏司跡の前面、約1.135mについて行なった。藏司にかつて建物群が存在していたらしいことは、文政3年(1820)の『觀世音寺村之内旧跡礎現改之図』に合計133個の礎石が描かれており、現在も台地上に3間×9間からなる東西棟の総柱の建物1棟の礎石23個が残っていることからうかがわれる。藏司の地名は大宰府府庁を構成する諸官衙の一つで、大宰管内の調庸物を収納する役割をもつ藏司の遺称と考えられる。昭和45年度に藏司の台地先端の西側を第4次調査として発掘調査し、東西方向に延びる築地1条を検出した。調査区の地形は上下二段にわかれており、その段差はおおよそ先の築地の延長線上にある。したがって今回の調査では藏司の諸施設の配置の解明をはかるとともに、藏司を画する施設の確認を目的の一つとした。一方、昭和46年度に実施した第14次調査では藏司台地の前面を走る県道開屋一山家線の南で大溝SD320を検出した。このSD320が北方にどのように延びていくのか、この点もまた調査の目的の一つとした。

調査区は大きな段差によって上下二段をなすため、調査の主点を上段(G地区)に置くことにした。地番は筑紫郡大宰府町大字觀世音寺字藏司489番地である。また下段(H地区)についてはSD320との関連で適宜トレーンチを設定することにした。地番は同上490番地である。

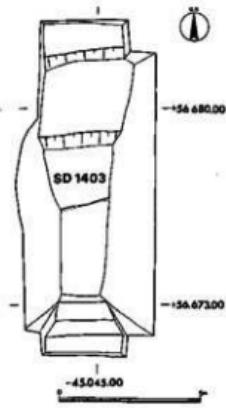
調査は昭和52年11月29日に着手した。土砂の堆積が深く昭和53年2月28日にいたって2条の築地などの遺構の検出を終え、引き続き写真撮影、実測を行なった。その後補足調査および下層遺構の検出にはいり、4月10日からはSD320の延長を確認すべくH地区にトレーンチを入れ併行して発掘を継続した。こうして発掘開始後約5ヶ月半を経た昭和53年5月13日にすべての調査を終了し、直ちに埋戻しを行なって原状に復原した。

検出遺構

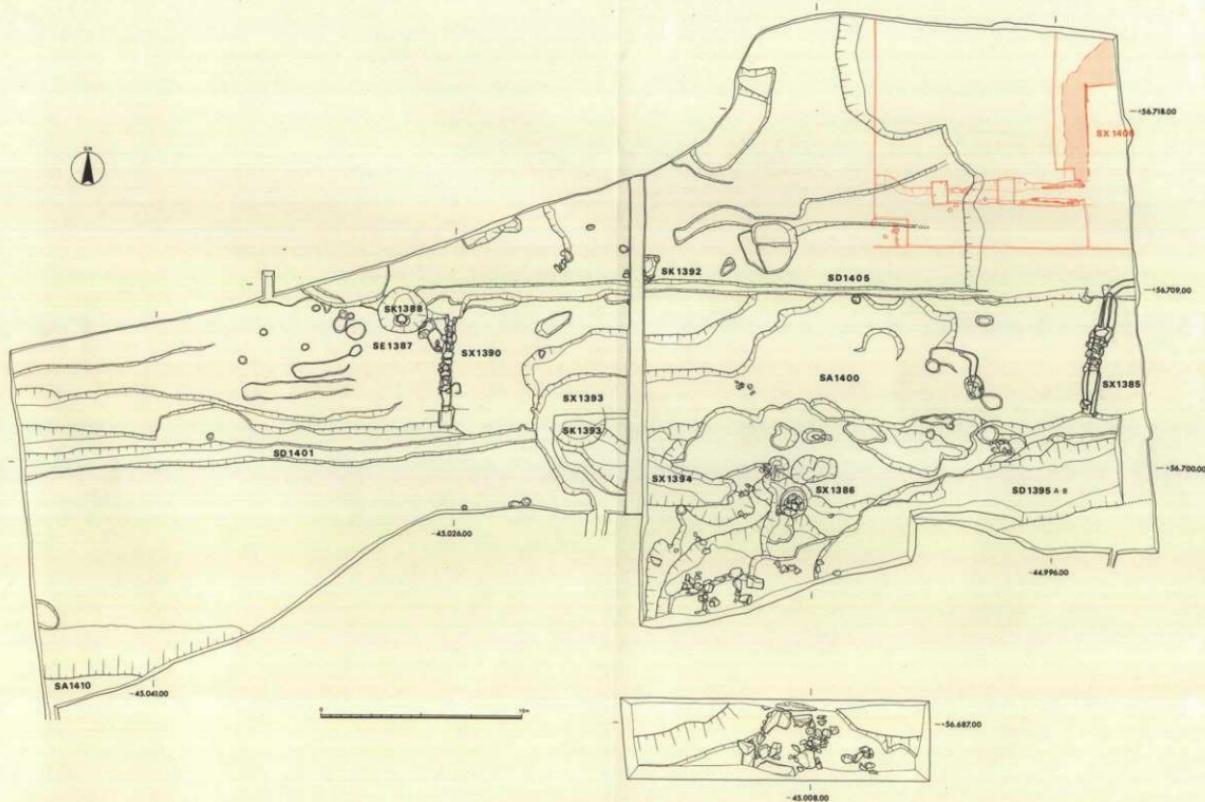
調査の結果、築地2条をはじめ、暗渠2、溝8、井戸2、土壌7、ピットなどを検出した。調査区は水田耕作などのためすでに相当深く削平され、また川ないしはおそらく洪水などの流水で大きく遺構面をえぐり取られ厚い砂層の堆積地となっており、遺構の残りは良くなかった。

土層の関係(第15図)

G地区 上から表土、床土、黄褐色土をとり去るとSA1400基壇の上面一部が見え始めた。一面に灰色土が覆っていたので、これを除去していくが、その下層は調査区域内の位置によって堆積土が異なっていた。
①は発掘区東側の土層を示す。SA1400の基壇を境として、南側は灰色土の下に茶灰色土、灰白色砂があり、整地土に続く。北側は灰色土の下



第14図 第54次調査H地区
南北トレーンチ遺構配置図



第13図 第54次調査遺構配置図

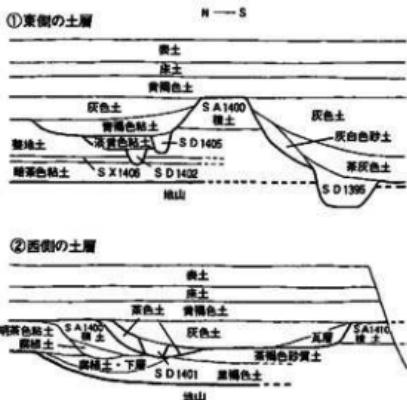
に青褐色粘土、淡黄色粘土があり、整地土に続くが、灰色土から整地土に達するところもある。S A1400は整地土上面に積土を行なって構築されている。下層の検出範囲は部分的に行なったものであるが、整地土の下は樹皮を數いたと考えられる跡（SX 1406）がみられ、次に暗茶色粘土となり地山に達する。②は発掘区西側の土層を示す。S A1400とS A1410との間にある灰色土を除くと、茶色土と瓦層に達する。下は茶褐色砂質土である。S A1410はこの上面に積土を行なって構築されている。S A1400は①の場合とは異なる明茶色粘土の上に積土を行なって構築されている。明茶色粘土と積土の間に腐植土がある。腐植土、明茶色粘土を取り去ると、腐植土下層となる。さらに下は自然木を含む黒褐色の有機質土である。

以上のように発掘区の堆積土は一様でないが、出土遺物などから造構と層位を整理すると、次のように時期区分ができる。

(I) S A1400が構築される以前のもので、造構としては明らかなものはないが、整地土上面から掘り込むS D1402、腐植土下層中のSX 1404、整地土下のSX 1406がある。遺物が出土した層としては腐植土下層、腐植土、整地土、暗茶色粘土、淡黄色粘土がある。下層造構の調査は一部についてのみ行なったので、詳細は知りえなかった。

(II) S A1400が構築される時期でその基壇は(I)の層の上面に認められる。S A1400に伴なう造構として暗渠施設SX 1385、1390、雨落ち溝SD 1405がある。SD 1405は淡黄色粘土なし整地土上面から掘りこむ。その他SX 1386、1394は灰白色砂の下から掘りこみ、出土遺物からみてこの時期に存在した可能性がある。青褐色粘土はS A1400の構築後に堆積したものであるが、基壇の上を覆うものではなく、出土遺物から基壇の存在時期に関連すると考えられる。茶色土はS A1400基壇の上にかぶり、SD 1401がその上から掘りこむ。S A1410はS A1400と同一層位面にあるが、現状では両者の関係が明らかではない。瓦層はS A1410基壇の北側に堆積していたことから基壇の存在時期に関連すると考えられる。

(III) S A1400の廃絶時期を示す造構である。(II)と同一層位面にあるが、SK 1392、SX 1396は基壇の上から掘りこむ平安時代のものである。また灰白色砂はS A1400の基壇南側が流失した際の堆積土と思われる所以、基壇の廃絶期を考える上で参考となる。



第15図 第54次調査層位模式図

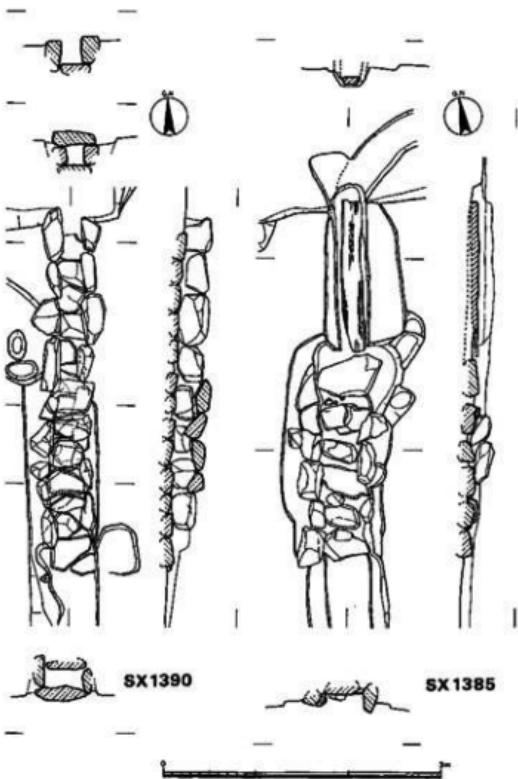
(IV) 新期の遺構が認められる時期で、(II) (III) と同一層位面に認められるものも含まれるが、出土遺物から平安時代以降と思われるものである。S D1395は灰白色砂から掘りこむ。S K1388、S E1387は S A1400基壇の上から掘りこむ。

(V) (IV)の遺構も全く廃絶する時期である。灰色土の出土遺物がその目安となる。

H地区 G地区よりも現状の比高差では 2 mほど低い。条坊関係の遺構の存在を予想したが、調査の結果、近世以降に深く擾乱をうけていることが明らかとなった。上から表土、床土を除くと暗灰色土となり、最下の地山面までに 2 mほど深く達する部分もあったが、その深部でさえ近世以降の陶器、ガラス片を包含していた。

築地

S A1400 発掘区中央を東西に延びる築地で、すでに基壇を明らかにしえないほどに削平をうけていたが、北側の小溝、2カ所の暗渠などから規模を推定できる。調査区内で約50 mを確認したが、その西端は不明瞭であった。東はさらに調査区外に延びる。暗渠 S X1390の東側のセクションを参考にすれば整地土に掘り込み地業が行なわれ、約70 mの厚さの積土が残存している。暗渠 S X1385（第16図、図版4）は全長約390 cm、内幅約40 cmをはかり、さらに南北にそれぞれ素掘りの溝が続くようである。暗渠は南側を花崗岩で構築しているが、それに連続する北側部分を木材を用いて木桶状につくっている点特異である。蓋部および側壁（板）の多くはすでに失なわれていた。暗渠 S X1390（第



第16図 S X1385・1390 実測図

16図、図版5)は花崗岩などの石材を用いて構築しており、一部に石蓋を残していた。北側は小溝SD1405に流れ込む。全長約400cm、内幅約40cm、暗渠内の高さ約20cm。二つの暗渠は約32.7mの間隔で設けられている。SX1390がSA1400の積土と併行して構築されたことは土層セクションによってうかがわれ、この築地に判ることは明らかである。また築地の北を限る溝SD1405は幅60~80cmで残存の深さ10cmほどをはかり、その位置から雨落溝と考えられる。以上の点からSA1400は東西約50m以上、幅約4mの規模の東西に延びる築地と考えられる。

S A1410 発掘区の南端を東西に延びる築地で、段差上段の南端に一部残存していた。崩壊した地形の関係で長さ約10mを検出したにとどまる。幅約3mにわたって版築状の積土を認めめたが、基底部幅、雨落溝などは明らかにできない。築地は瓦葺されており、その北側部分に大量の瓦の堆積が認められた。下部の瓦には丸瓦・平瓦が組み合わさった状態のものもあり、屋根の瓦がそのままあるいは逆転して落下した状態を示していた(図版3)。瓦層の下位は築地の盛土となっており、基壇化粧を認めるることはできなかった。

溝

S D1395 SA1400の南側を南西方向に流れる溝で、整地層を切り込んでいる(図版3)。溝幅約3.8m、深さ約1m。比較的汚れの少ない砂のみの埋土で、洪水などに起因する短時間の埋没によって溝の生命を終えたことを思わせる。溝の埋没後に同方向に流れる小溝が認められたので、これをSD1395Bとし、本来の溝をAとした。

S D1401 SA1400の南側に平行して東西に走る溝で、茶色土を切り込んでつくられている。幅0.9~1m、深さ約0.3mをはかり、溝底はわずかに西へ下降している。約25mを検出したが、西は調査区外に延び、東は不整形の大きな落ち込みSX1396によって切られている。その位置から当初SA1400の雨落溝とも考えられたが、セクションで築地の積土がこの溝まで及んでいないことが観察され、また暗渠SX1390の南排水口外に基壇肩と思われる段落ちが認められる点などから直接の関係ないと判断される。

S D1402 下層検出の溝で、東西方向に約7mを検出したが、両端ともにさらに延長すると思われる。溝の両岸の一部に長さ210~230cm、径15cm前後の丸太材が使用されていた。二本の丸太は55cmの間隔で若干のズレはあるが平行して置かれている。丸太を止める杭はなく護岸用とも暗渠の一部ともも判断できない。

S D1403 H地区西トレントで検出された溝底幅2.6mの東西溝で、現地表下約2mまで近世の溝の擾乱がみられるため掘り込み面は不明である(図版8)。溝底からは瓦・白磁が出土しており、平安期のものと考えられる。

S X1394 地山に切り込まれた溝状遺構で、約7mを検出した。残存状態の良いところで、溝幅約1.9m、深さ約0.6mをはかる。底面は北西へと傾斜しており地形と逆行する点、溝とするにはネックとなる。木札2点を検出した。

井戸

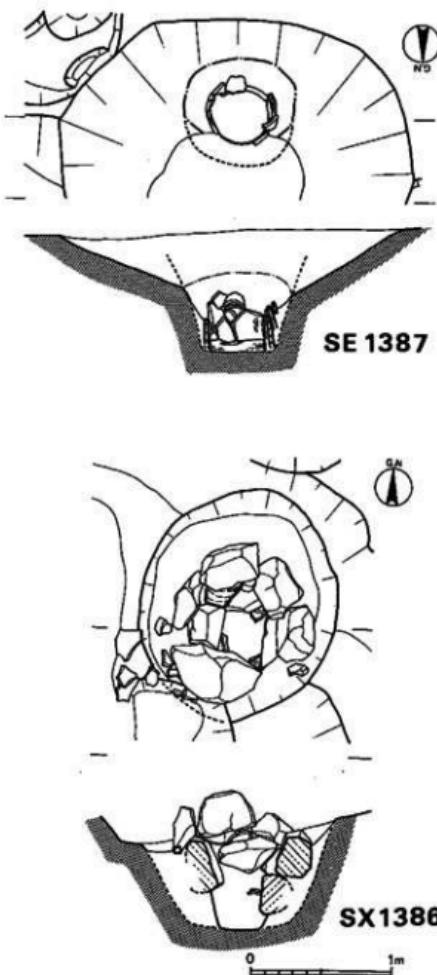
SE 1387 SK 1388に切り込んでいる。掘方はやや角張り気味の円形で、径約0.8mに復原される。底に内径38cm、残存高約10cmの曲物を据える。曲物の外側はていねいに平瓦で補強固定している。瓦の残りからみて曲物の高さは30cmほどであったと思われる。小規模であるが形状からみて井戸であろう(第17図、図版6)。

S X 1386 地山に掘り込んだ石組み造構で、形状は井戸に似る(第17図、図版6)。掘方は径1.4~1.65mの長円形をなす。石は方形に組まれ、一辺30cmほどの内幅をはかる。約70cmの深さで下部に石を欠くが、壇内から瓦類とともに木片が検出されており、内側に木組みがあったのかもしれない。

土壙

SK 1388 瓦溜りで、茶色土から掘り込む。掘方は径約2.4~2.5mの円形で、深さ約0.6mをはかる。壇内には多数の石とともに瓦が投げ込まれていた。SE 1387に切られている。

S K 1389・S K 1391 いずれも明茶色粘土から掘り込まれた不整円形の土壙で、知り合いからSK 1389が先行する。



第17図 S E 1387・S X 1386 実測図

S K1392 深さ0.2mほどの浅い不整形土壙で、整地土に掘り込む。壙内には土器・瓦・石などが投げ込まれていた。SA1400・SD1405を切っている。

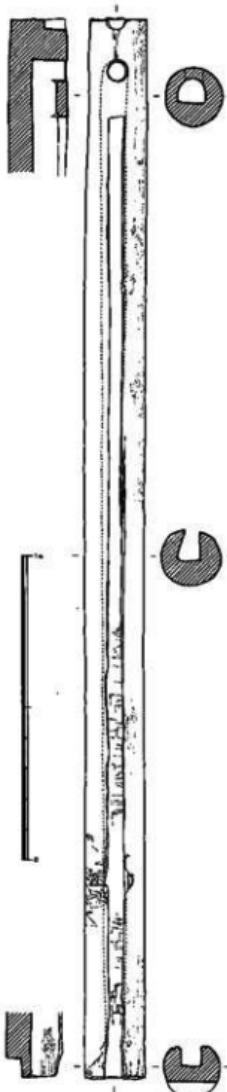
S K1393 切り合いからS X1396に先行しS X1394よりも新しいと思われる。長径2mをこえ、深さ約0.6mの長円形土壙であるが、完掘していない。

その他の遺構

S X1396 茶色土から切り込まれた径6mをこえる大形の不整円形状の落込みで、SD1401・SK1393・SX1394に後出する。

S X1404 腐植土下層中で認められた木樋である(第18図、図版40)。木樋は長さ3.46m、直径20cmの一木にU型の溝を掘り、上に木蓋をのせる。木樋の溝は東端では木口面より14cmほどで止っている。樋の東端両脇に45cm間隔で径9cmの杭が打たれ、樋の溝は上面を向いて据えられているが、据方などは認められなかった。導水のための関連施設とも考えられるが、上層にSA1400棗地基壙があるので周辺部まで下層の検出範囲が及ばず、構造的に知りえない。木樋の寸法は両端木口径が18.5、19.5cmで、中央径20cm。溝は、幅5.0cm、深さ10.0cmほどで、東端木口から31cmのところまでを上面から削平し、それより木口へ向って横から中をくり抜く。木口より14cmのところで径6.0cmの円孔を上から穿って溝と貫通させる。蓋は幅7~8cm、現存長47.0cmの板材である。西端木口の裏面には長さ6.0cm、深さ5.0cmほどのL字形の切り欠きがある。なお、東端の木口にも平面半円形を呈する切り欠きがあり、西端の木口から63cmの溝上面にはこれと直角の方向に走る幅4cmほどのあたりが認められる。このように手のこんだ作り方であるが、加工の目的が不明であることから建築材を転用して用いた可能性がある。

S X1406 調査区北東隅の淡黄色粘土層直下で検出された性格不明の遺構で、保存状態はよくなかった。1~2本の細い未加工の丸太材が約4.7mにわたって南北方向に置かれ、一部を細杭で固定していた。丸太材の北端には直角に東に折れる別の丸太材が接しており、約1.5mで調査区外に延びる。南端はSD1402



第18図 木樋実測図

に切られる。丸太材の西・北側には一面に1m前後の幅で木皮ないしは草様の植物繊維がまんべんなく敷きつめられ、それを縫うように細い未加工の木の枝が配されていた。その有様は草葺屋根の崩壊を思わせるが、周囲を画する丸太材との関係からすれば敷かれていた可能性が強い(図版7)。植物繊維の下には黒色の灰層が認められた。

出土遺物

調査面積の広さに反して出土遺物は大量に出土した瓦類を除けば量的に少なかった。削平や流水などによって遺構の多くが流失しており、良好な資料も少ない。ここでは整地あるいは遺構にともなう遺物について時期を追って述べる。

土器

整地層下出土土器(第19図、図版29、別表)

須恵器・土師器が出土しているが、須恵器に良好な資料が多い。1は腐植土下層、2~6は暗茶色粘土層出土。

須恵器

杯蓋(1~3) 1は擬宝珠形のつまみと口縁部先端の身受けのかえりが特徴をなす。天井部と体部との境の下に幅9mmほどの太い凹線がみられる。ヘラ削りされた天井部を含めて全体を横ナデ・ナデで調整している。2は擬宝珠形のつまみと口縁部先端に身受けのかえりをもち、全体に丸味をもつ。3は外に引きだされた口縁端部の特徴から蓋としたが、杯身となる可能性もある。

杯身(4) 無高台のやや不安定な底部の杯身で、外反気味の体部をなす。内面に漆状の付着物がみられる。

平瓶(5) 肩部から上を残す平瓶で、全体を雜なナデで仕上げている。外開きの口縁部を端部近くで内側に立ち上がらせ、丸くおさめている。内面に漆状の付着物がみられる。

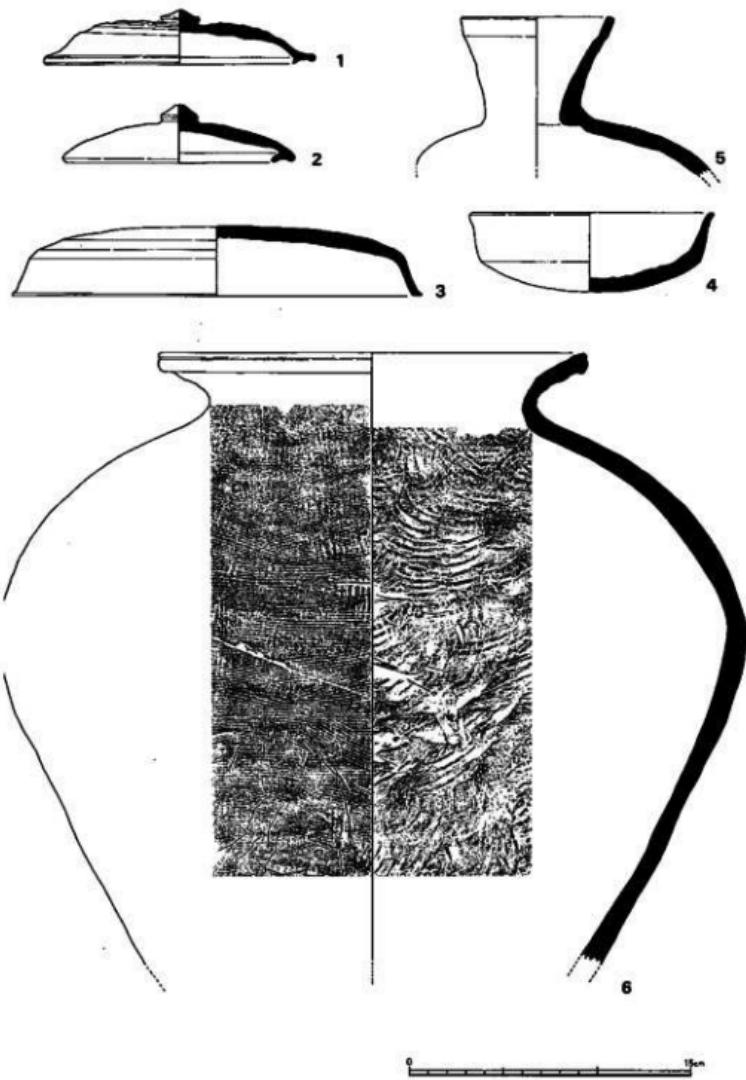
甕(6) 横径約40cmをはかる。やや外反する口縁端部に1条の沈線をめぐらす。外面は縱方向の平行タタキを横方向の刷毛目調整で消している。内面には青海波タタキを明瞭に残す。口縁部の内外を横ナデで仕上げている。

整地層出土土器(第20図、図版29、別表)

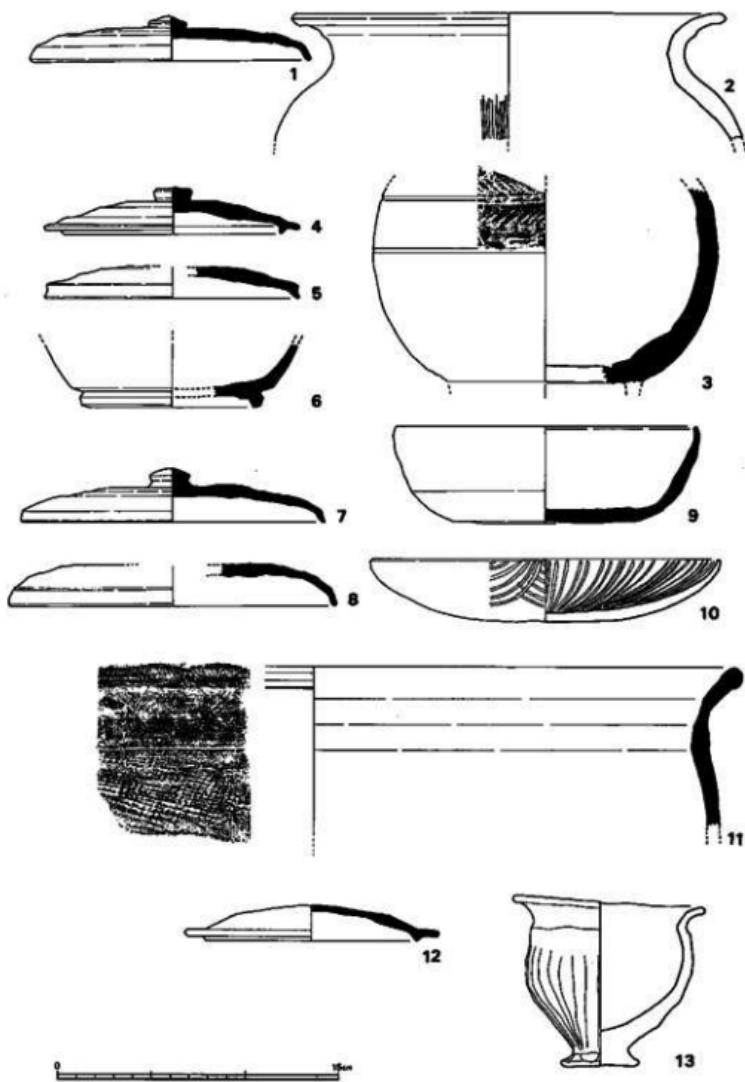
整地層出土土器には下層から濁茶色土(1~2)、炭層(3)、明黄色土(4~6)、淡黄色粘土(12~13)の各層出土のものが含まれる。また炭層に切り込み、淡黄色粘土によっておおわれるSD1402出土土器(7~11)も整地層の時期を示す。第20図には出土層位・遺構ごとに図示したが、一括して述べる。

須恵器

杯蓋(1~4・5~7・8~12) 天井部のつまみの有無、口縁端部の身受けのかえりの有



第19図 整地層下出土土器実測図



第20図 整地層出土土器実測図

無によって3種がある。1・7はやや扁平な擬宝珠形つまみと、体部からうすく引きのばしその端を折りまげたかえりのない口縁端部をもつ。8もこの類であろう。4は扁平なつまみをもち、口縁端部に身受けのかえりをもつやや小形の蓋である。12は身受けのかえりをもつが、つまみを欠く。5は口縁端部を引きだして断面三角形につくっている。つまみの有無は明らかでない。いずれも天井部をヘラ削りし、体部を横ナデ・ナデで調整している。

杯身（6・9） 6は高台杯で、体部と底部の境のやや内側に高台を貼付している。9は無高台の杯身で、やや内縫気味に立ち上がる体部の上端を内側に折り丸味を強調している。内面全体に漆状の付着物がみられる。

壺（3） 脚台付壺の胴部片で、新羅土器と思われる。外面をヘラ削りし、胴部中央付近にめぐらした数条の沈線の間に櫛状工具で綾杉文状の装飾を加え、さらに竹管文を配する。内面は横ナデしている。

壺（11） 口径45cmの大壺の破片で、胴部に格子目のタタキがみられる。

土器器

杯（10） 底部からそのまま丸く体部をつくっており、口縁端部も丸くおさめる。内面にていねいな放射状の暗文を施こし、外面にも暗文風のヘラミガキがみられる。

壺（2） 壺の口縁部片で、体部外面に部分的な刷毛目調整がみられ、内面をヘラ削りしている。口縁部の内外は横ナデで仕上げている。

壺（13） ほとんど砂を含まない精良な胎土をもちいてつくった小形の壺で、軟質に焼成されている。口縁部を横ナデしているが、体部は内外ともにヘラ削りで仕上げている。外面のヘラ削りは下から上へと施こされる。手造りでいびつな形態のものである。

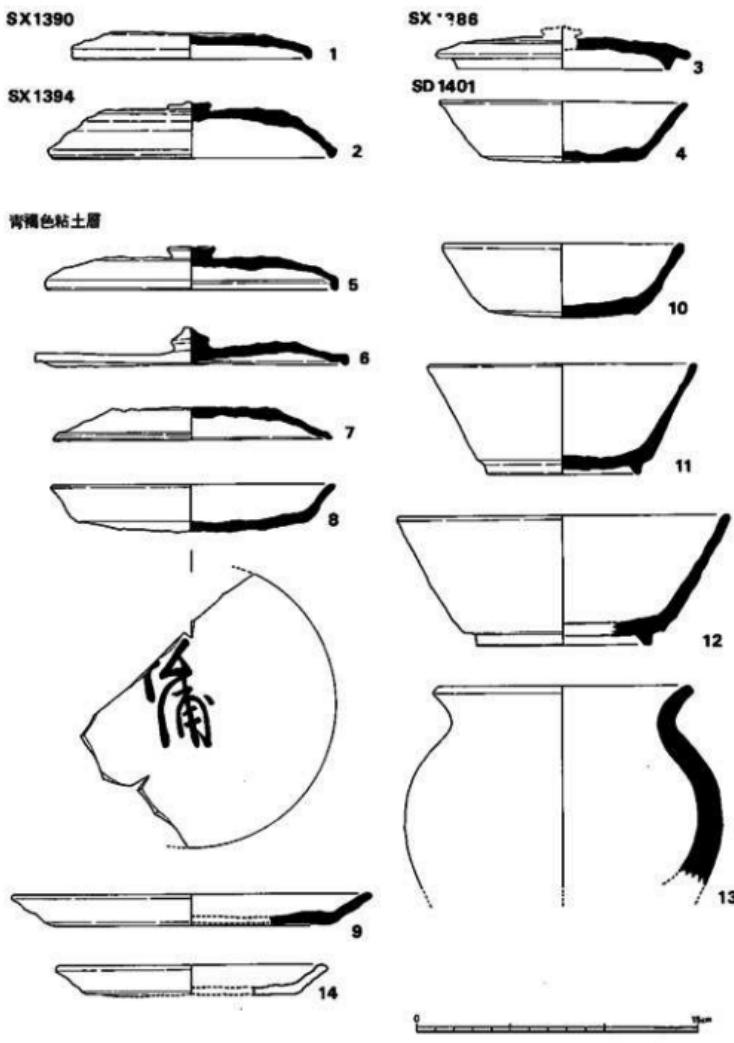
青褐色粘土層出土土器（第21図5～14、図版30、別表）

須恵器

杯蓋（5～7） いずれも口縁端部に身受けのかえりをもたない。5は扁平なつまみと体部を折りまげて引きだし丸くおさめる口縁端部を特徴とする。6はいびつな形をなすが、器高い蓋である。つまみは高い擬宝珠形で、体部を直角に折った断面三角形をなす。7はつまみを有さない。体部の端に凹線をめぐらし口縁端部をつくる。内面には墨が付着している。いずれも天井部と体部に明瞭な境がみられる。

杯身（10～12） 10は無高台の杯で、不安定な底部から立ち上がる体部はやや外反気味となり、端部を丸くおさめる。11・12は高台杯で、11の高台が底部と体部の境に近付き部分的に体部と一体をなすのに対し、12のそれは境から7mmほど内側に貼付される。12の体部は直線的に立ち上がるが、11はやや外反気味である。

皿（8・9） 9はほぼ水平の安定した底部からやや外反気味の体部が低く立ち上がる。8の体部はさらに強く外反するが、底部は不安定である。ヘラ切り離された底部に墨書きがみられる。字の大きさから二字と考えられ、「□浦」と読める。



第21図 S X 1386・1390・1394・S D 1401および青褐色粘土層出土土器実測図

壺（13）よく選ばれた胎土を硬質に焼成した広底の壺で、内外とも横ナデでていねいに調整している。調部下半にはタタキの痕跡がみられる。

土師器

皿（14）ヘラ切り離された底部は平底をなし、横ナデで再調整される。内底・体部にも横ナデの仕上げがみられる。

S X1390出土土器（第21図1、図版30、別表）

須恵器

杯蓋（1）暗渠内の底部からの出土で、半欠している。ヘラ切りされた天井部にはつまみを有さない。体部の先端をつまんで折りまげかえりのない口縁としている。

S X1394出土土器（第21図2、図版30、別表）

須恵器

杯蓋（2）天井部はヘラ切り離され、中央に扁平につくられたつまみを有する。天井部と体部との境は明瞭でない。かえりのない口縁端部はその内側に凹線をめぐらし小さく断面三角形状に取り出されている。硯に転用されており、磨滅した内面には墨の付着が認められる。

S X1386出土土器（第21図3、別表）

須恵器

杯蓋（3）ほぼ水平につくられた天井部に短かい体部がやはり水平につく。その境部の内側に断面三角形の突起が貼付けられ、身受けをなしている。欠失しているがつまみを有するとと思われる。内面はやや磨滅し、墨が付着している。

S X1401出土土器（第21図4、図版30、別表）

須恵器

杯身（4）無高台の杯で、安定した底部に外反しつつ立ち上がる体部がつく。体部は丸くおさまる口縁端部の近くでさらに外に向く。

S K1392出土土器（第22図1、別表）

土師器

杯a（1）完形が1点出土した。底部をヘラ切りされ、体部を横ナデされる。底部と体部との境は若干丸味をもつ。口径11.9cm、高さ3.2cm、底径7.7cm。

S X1396出土土器（第21図2、別表）

須恵器、土師器が出土した。須恵器は破片で下層の混入と思われ、除外した。

土師器

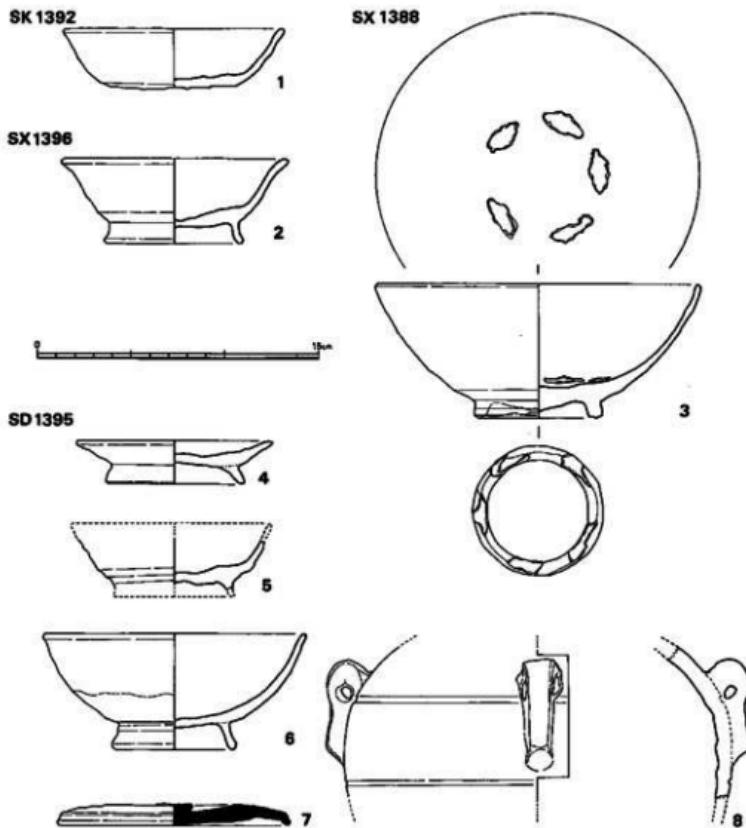
杯c（2）底部をヘラ切りされ、板状圧痕をもつ。やや長めの高台が体部と底部の境につき、体部下半に若干丸味をもつ。口縁部は外反する。口径12.2cm、高さ4.6cm。

S K1388出土土器（第22図3、図版31、別表）

青磁、白磁が出土した。

青磁

碗（3） 土壌底部から出土した。体部は丸味をもちら内湾し、器肉はうすい。胎土は青味をおびた暗灰色で、あまり精選されていない。釉は黄褐色を呈するが泡を多くつくり膨れあがっている。全面施釉した後に高台部の釉を持ちてあらく削り取っている。重ね焼きの目あとは内底の見込みと高台部5カ所に認められる。口径17.3cm、高さ7.2cm。



第22図 SK 1392・1396・1388・SD 1395出土土器・陶磁器実測図

白磁

碗Ⅱの破片が出土した。

S D1395出土土器（第22図4～8、図版31、別表）

須恵器、土師器、白磁、青磁、陶器が出土した。

土師器

皿c（4） 底部はヘラ切りされ、やや高めの高台をつける。口径10.5cm、高さ2.3cm。

椀（5・6） 5は小形のもので、体部下位にわずかな屈曲をもつ。6は、やや丸味をもつて体部からなり、体部の下半には指頭圧痕がみられ、長めの高台がつく。体部の内外面を横ナデされる。口径14.1cm、高さ6.2cm。上層出土。

須恵器

杯蓋（7） 断面長方形の口端部を下方に屈折させ、扁平な擬宝珠形のつまみを天井部にもつ。下層からの混入品と考えられる。

壺（8） 肩部の破片である。長胴形を呈し、胴部上位に最大径をもつと思われる。肩部には長方形板状の粘土からつくった把手が4ヶ所につくと考えられる。外面肩部の下はヘラ削りされる。最大胴部径20.8cm。

青磁

越州窯系Ⅰの破片が1点ある。

白磁

碗Vと思われる破片が1点ある。

陶器

1片あるが混入品と思われる。

灰白色砂層出土土器（第23図1～3、図版31、別表）

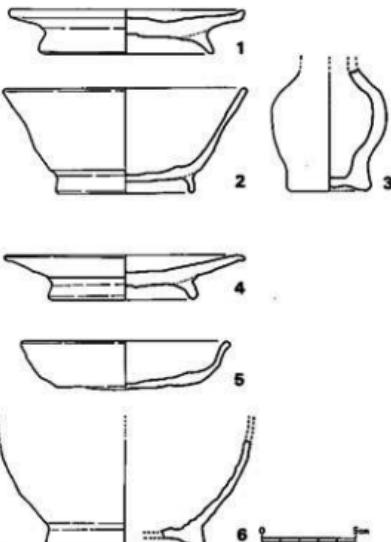
土師器、須恵器、青磁が出土した。そのうち土師器がもっとも新しい年代を示す。須恵器はすべて下層からの混入品である。

土師器

皿c、椀、壺、高杯が出土した。

皿c（1） 底部をヘラ切りされたものと思われる。高台は端部が丸く、やや高めである。口径12.7cm、高さ2.4cm。

椀（2） 底部をヘラ切りする。体部



第23図 灰白色砂層・灰色土層出土土器・陶磁器実測図

と底部との境に端部の丸い高台がつく。体部は直線的に外へ開く。口径13.1cm、高さ5.5cm。

壺（3） 脊部上位に最大径があり、胎土は灰白色を呈する。最大径6.2cm。現存高6.7cm。

青磁

越州窯系壺Ⅱが出土した。

灰色土層出土土器（第23図4～6、別表）

土師器、須恵器、青磁、白磁、陶磁器が出土した。このうち須恵器は下層の混入品と思われ、除外した。

土師器

皿c、杯a、c、碗、壺が出土した。

皿c（4） 底部はヘラ切りされ、端部の丸い高台がつく。口径12.9cm、高さ2.4cm。

杯a（5） 底部はヘラ切りされ、不明瞭な板状圧痕がつく。底部と体部との境は丸味をもつ。口径11.2cm、高さ2.6cm。

青磁

越州窯系壺Ⅱが4点、龍泉窯壺Ⅰが3点、Ⅲが1点、その他壺が1点出土。

白磁

Ⅰが1点、壺Ⅱが1点、壺Ⅳが3点、壺Ⅴが3点、皿Ⅳが1点出土した。

陶器

6は壺の底部と思われる。胎土はやや粗い灰白色で、外面には黄色味をおびた白色の釉がかかる。壺付部は施釉後に釉をかき取っている。その他、黄釉洗が1点、黄緑釉が1点、青白磁が2点出土した。

瓦類（第24図、図版38）

今回の調査で出土した瓦類は軒丸瓦94点、軒平瓦70点のほか、丸・平瓦・文字瓦である。これらは主に造構面直上の青褐色粘質土、灰色土層から出土している。

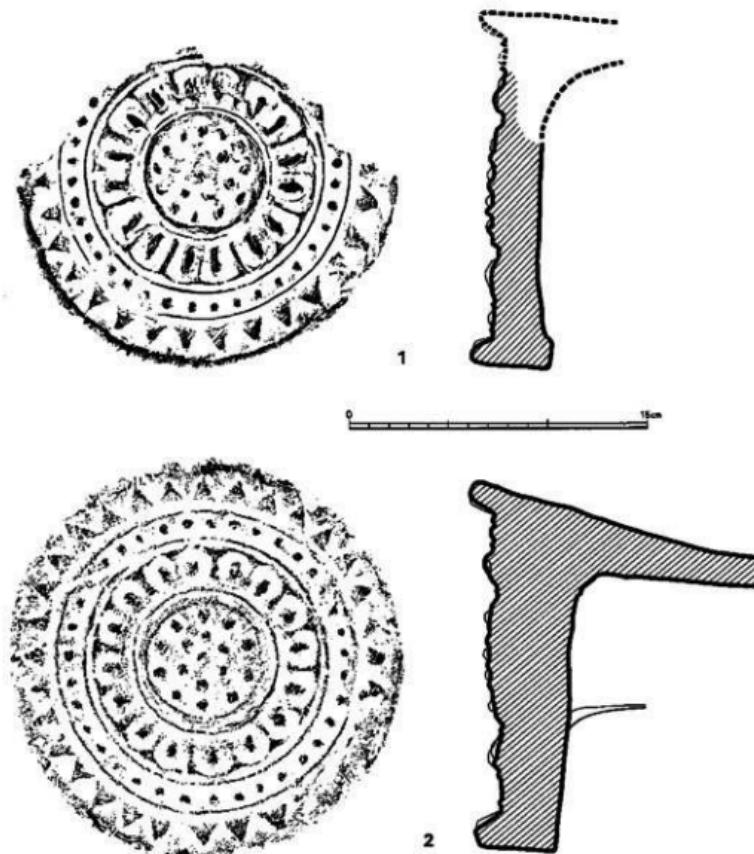
またSA1410付近において丸・平瓦が屋根からずり落ちたような状態で堆積していた。これらはほとんど凸面の叩きが繩目であるが、一部に「平井瓦屋」の印刻ある文字瓦が含まれていることは注目される。

まず軒丸瓦では総点数のうち約49%が老司式の系統に属するものであり、ついで河謹館式が25%を占める。老司式系統に属するもののうち第24図の1と2が最も多い。ここではこの2点について記しておこう。1は瓦当径約18cmの複弁八弁蓮華文で内区中房は圓線によって囲まれ1+6+12の蓮子を配している。蓮弁は比較的弁幅が広く、また子葉の盛上りが大きい。外区には38個の珠文と若干綫長の凸鋸歯文30個を配している。

この瓦当面文様は老司I・II式に比較して若干粗雑な感じを受ける。瓦当部裏面は指ナデによってていねいに仕上げられている。額部は周縁に沿って一段高くなっている。

丸瓦の取り付きは珠文帯と鋸歯文の境付近で比較的高い位置にある。この軒丸瓦を出土する遺跡としては大宰府政庁の南約2kmの所にある般若寺跡があるが、京都府下南山城の普賢寺出土の瓦の中にこれと同範と推定されるものがあり、きわめて興味ある点である。

2は瓦当径19cmで、瓦当面の文様は基本的には同じであるが細部において若干異っている。中房の蓮子は $1+6+10$ で1よりも最外側で2個減じている。蓮弁は複弁八弁であるが比較的短い。したがって子葉が円形に近くなっている。外区は珠文が36、鋸歯文33で正三角形に近い。



第24図 軒丸瓦拓影・実測図

瓦当厚は約4.5cmで比較的厚い。瓦当裏面、額部の特徴および丸瓦の取り付き状況は1と全く同じである。

次に、軒平瓦は総点数のうち56%が老司Ⅱ式とよばれるもので、次いで海道館式が27%を占めている。老司Ⅱ式の内区文様は向って右から左へ流れる偏行唐草文でゆるやかな波状を描く。向って左側端部に横方向の範割れが認められる。外区上縁はボタン状の珠文で両脇区および下縁は外面凸鎧曲文である。額は段額で全体的に作りはていねいである。

また丸・平瓦では政庁地区の他の調査地域と異り、格子目の叩きを有するものが少いことが特徴である。文字瓦は「平井瓦屋」「平井」「佐」等で、これらについてはすでにこれまでの概報で詳述しているのでここでは省略する。

木製品（第25図、図版41）

木製品は腐植土、腐植土下層、青褐色粘土で出土した。

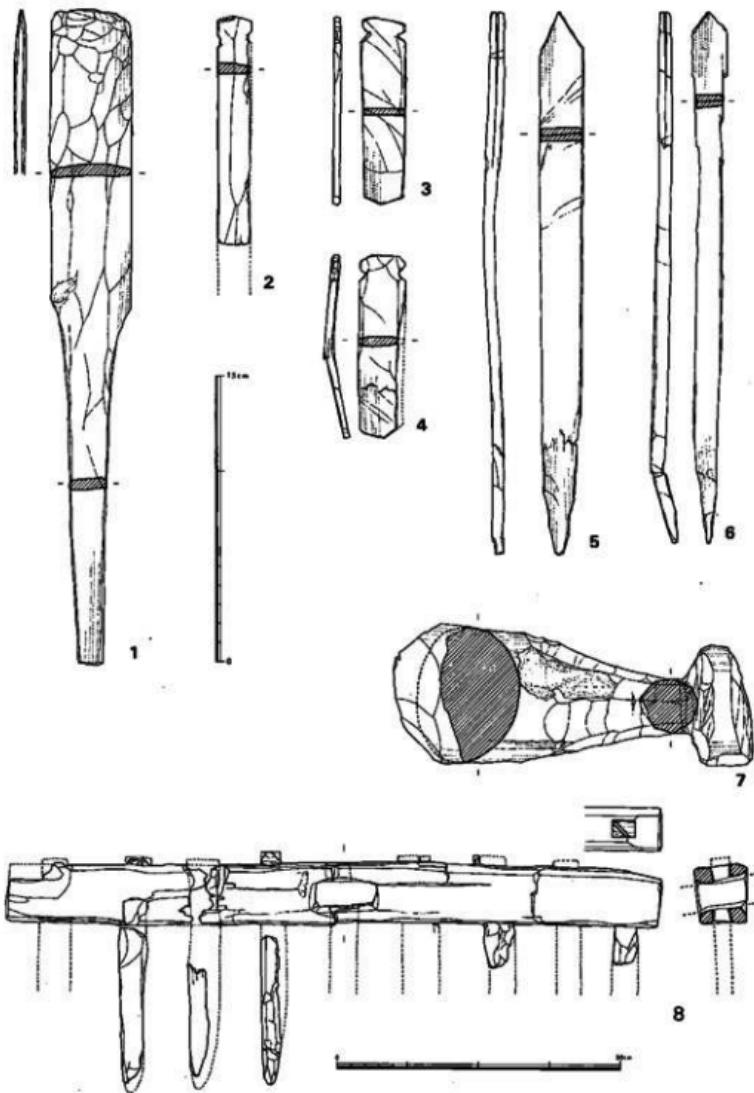
杓文字形木器（1） 縦割りした板材の表面に細かな削りを加えるが、裏面はあまり加えない。身の横断面は周縁に沿ってうすく加工し、中央がやや甲高となるが、受皿状とならず平坦である。柄部は両側辺から弓形に削りこんで幅狭くつくりだす。柄尻の方で次第に幅を狭める。長さ34.4cm、身の長さ15.7cm、身の厚さ0.6cm、身の幅4.3cm、柄の厚さ0.6cm、柄の幅最小1.3cm。腐植土出土。

木札（2～4） 2は下部を欠損する。上部を鋭く主頭状につくり、両側辺からV字形の切り込みを入れる。墨書きはみられない。現長12cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm。腐植土下層出土。3、4はほぼ同形、同寸法のもので、頂部を鈍角に下部を主頭状につくる。上部は両側辺からV字の切り込みを入れる。縦割りにした柾目板の表裏面に削りを加えて滑らかにしており、文字を書くためと思われるが、墨書きはみられない。未使用のものか。3は長さ9.7cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm、4は長さ9.6cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm。ともにS X1394出土。

削り掛け（5・6） 頂部を鋭く主頭に、下部を剣先状につくる。縦割りした柾目板材の側辺を加工したもので、5は側辺の切り込みはない。6は両側辺数カ所に割れ損じた跡があり、切り込みを入れた可能性もあるが、不明。1、2とも上半は縦に2枚にさしている。他に上半部を欠損したものが1点あるが、残存部側辺の切りこみはみられない。3点とも腐植土出土。5は長さ28.5cm、最大巾2.3cm、最大厚さ0.8cm。6は長さ27.9cm、最大巾1.8cm、最大厚さ0.8cm。他の1点は現存長19.2cm、巾1.9cm、厚さ0.5cm。

横槌（7） 広葉樹の枝を刀物で切断し、木口の一端にかけて細く削りながら更に上から切り込みを入れて、断面円形の柄部をつくる。他は加工を加えないままである。打部には木皮が残り、使用痕が殆んどみられない。長さ18.5cm、打部長径7.0cm、柄部最小径2.8cm、腐植土下層出土。

代搔（8） 断面方形の棒を台木として一直線に方孔を穿ち、9本の歯をさしこんだもの。



第25図 木製品実測図

尖頭状の齒は下からさしこみ、上部から楔で固定する。中央部に齒と直角に方孔があけられ柄の着装部とするが、柄部は出土していない。なお柄部を挿入したのち、齒を下からさしこみ、同時に固定する構造となっている。台木全長46.2cm、断面3.8×4.4cm、齒の現長11.0cm、齒の間隔3cm前後、柄の方孔2.4×5.0cm。腐植土下層出土。

以上のほかに曲物容器底板が青褐色粘土から出土した。

小結

調査の結果、築地2条のほか各種の遺構を検出した。概括すれば当初の湿地帯を整地して築地などの施設を築いたことを知りえたが、築地内側の施設を確認するには至らなかった。

築地の時期はそれを直接に示す資料を欠いており、層序にしたがって調査区の変遷をたどりつつ検討してみたい。

調査区の時期は大略五期に大別される。第Ⅰ期は整地の時期で、築地に先行する。下層遺構確認のためのトレンチでは調査区のほとんどで樹木・木葉が認められ、所々を杭で止めたかのような様相をうかがわせた。木葉にはまだ緑色を呈するものもあり、それは本来この地が湿地であったこと、整地に先立ち樹木・木葉および土砂を投入して基礎をつくり、その後に整地にいたったことを示している。すなわち築地、ことにSA1400の構築の上限を示すものである。整地下、整地層、あるいはそれに伴う遺構（SD1402・SX1404・SX1406）出土の遺物は大宰府政府の最下層にみられる掘立柱建物群の整地中の遺物と同時期ないしはそれに先行する時期のものであった。したがってその下限はおおよそ7世紀後半から8世紀初頭にかけての時期にあり、SA1400の構築がそれをさかのばることはない。

第Ⅱ期はSA1400の構築の時期である。SA1400に伴う暗渠SX1390から出土した遺物は8世紀代のものである。一方、基壇積土にかぶる青褐色粘土層、あるいはSA1400の南側段落ちの埋土中に切り込まれた溝SD1401などから出土した遺物をみれば杯蓋・高台杯の特徴などから8世紀後半～9世紀初頭の時期を示す。したがって第Ⅰ期との関係からみれば、SA1400構築の上限は8世紀初頭～前半頃に求めるのが妥当であろう。

第Ⅲ期はSA1400の崩壊の時期で、基壇を切ってつくられるSK1392・SX1396などの遺構からうかがいう。それらはおおよそ9世紀後半から10世紀前半の遺物を出土しており、この時期までにSA1400の崩壊を考えうる。

第Ⅳ期は溝SD1395A・B・井戸SE1387・土壤SK1388などの時期である。調査前、藏司前面の台状部（G地区）南端の段差は築地の遺構であろうとの予測をもっていた。さらに今回の調査区部分では段差が大きく北側に食い込んでおり、門などの施設の存在の可能性を考えていた。調査の結果はこの部分がSD1395の流水による崩壊であることを明らかにした。SD1395の遺物には12世紀代のものが含まれており、したがって溝の埋没と、築地SA1410の崩壊の下

限はこの時期にある。

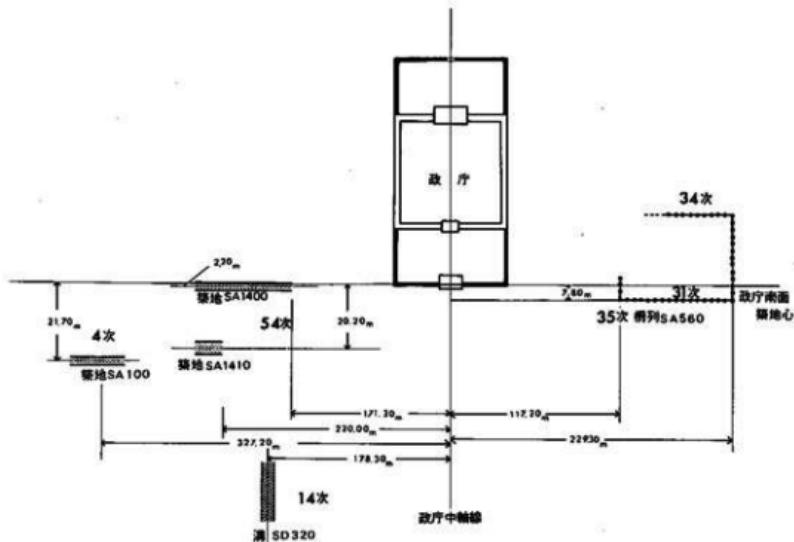
第Ⅷ期は調査区を厚くおおう灰色土の堆積の時期で、近世に属する遺物を検出しえなかった。この地区的遺構の下限を示し、およそ14世紀代に考えられる。

こうして築地S A1400は土層や遺構の切り合いから、8世紀初頭～前半代に構築され、9世紀後半には崩壊していることが知られる。ところでもう一方の築地S A1410の時期であるが、S A1400ほど明瞭ではない。S A1410の基壇は茶褐色砂質土に積土されている。その層序からすれば第Ⅰ期に後出するもので、S A1400と同期ないしはそれほど変わらない時期を上限に考えよう。一方、S D1395との関係から12世紀までにはその下限が求められる。使用期を知るもう一つの手懸りに基壇北側に転落した大量の瓦にある。ここに葺かれた瓦の、ことに文字銘に着目すれば、それはほとんど「平井瓦屋」「小□瓦」銘に限られる。今後の検討の素材となろう。いずれにせよS A1410の時期についてはそれほど明瞭でない。したがって2条の築地が併存したのか、あるいは拡張・縮少の結果なのか現段階では判断できない。仮りに併存した場合、その間の厚く堆積した砂質分の強い灰色土の下には遺構は認められず、この間は空間地であったと思われる。なお崩壊部を除けば今日の地形にみられる段差はS A1410の延長線上の位置を示しており（現在調査中の第60次調査地で確認している）、これをたどればS A1410は藏司台地西側の谷地の手前で北折する可能性が強まる。

官衙の区画の一つと考えられる南北大溝S D 320の北側での様相の把握を試みた台状部下段（H地区）の調査は目的を達成しなかった。二つのトレンチを入れた結果、地山近くまで近世の溝による擾乱がみられる。現在県道閑屋一山家線の北側路肩下を東西に流れる1条の溝があるが、近年整備されるまでこの溝はH地区を蛇行して流れている。調査の結果もそれを裏付けている。なお東トレンチでは多くの自然石が集積されていた（図版8）。G地区の調査結果から、もしこの台状部に礎石を使用した建物群が存在していたにしても、中世までには原位置を保つものはなくなっていると思われる。文政3年の『旧礎現改之図』に示された礎石のうちこの台状部に関するものは列をなして描かれており、したがって土止めに用いられたであろうこれら自然石の誤認ではなかろうか。

最後に藏司前面の2条の築地の性格にふれておこう。第26図は政府の周辺で検出された築地・櫛列・溝などの区画施設を模式化したもので、東西方向については政府推定中軸線、南北方向については政府南面築地の心を基準としてそれぞれの隔たりを示している。図示したように、S A1400、S A1410の推定心は政府南面築地心からそれぞれ2.20m、20.20mの開きをもつ。S A1400は南面築地と接近した線に並ぶが、2.20mの開きは両者が一連のものであるとする可能性を否定する。同様にS A1410と第4次調査検出の築地S A 100とは1.50mの開きがあり、谷地をはさむ地形的制約を考えれば接近した数値をもつとはいへ一連の施設である可能性は少ない。

この場合、第31・34・35次調査で確認した政庁東官衙が大きな手懸りとなる。政庁東官衙は政庁をはさんで藏司台地と対向する月山台地の東側に所在し、柵列によって区画される。その東西幅は政庁のそれにはほぼ等しく、南北幅はその3分の1に相当する規模を有しており、内部から掘立柱建物2棟が検出されている。すなわち政庁の東側にそれと並列して官衙が所在しているのであり、同様のことを相似した位置・地形にある藏司台地に求められる。SA1400・SA1410は政庁や第4次調査検出のSA100とは連続しない。藏司所在の官衙を区画する独立した施設であろう。同様にSA100もまた来木の丘陵を含む独立した官衙の区画と思われる。したがって往時において五条大路の北側には、政庁を中心に西側の藏司、来木、東側の政庁東(月山)の諸官衙がその東の学校院・觀世音寺などとともに前面をやや不揃いにしたまま立ち並ぶ姿を想定しうるに至ったといえる。



第26図 政府地区区画施設配置概念図

4. 55次調査

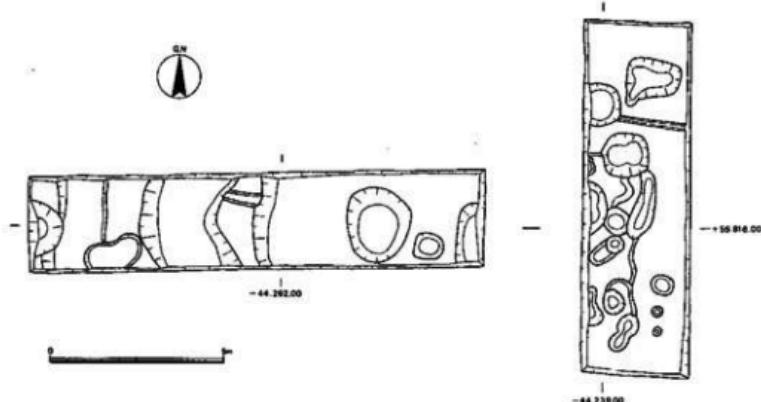
本調査は觀世音寺の庫裡改築にともなう事前調査である。旧伽藍については現在残っている講堂の礎石および塔心礎によりその具体的な位置を知りうるほか、他の造構については推定の域を出ない。しかし、觀世音寺については延喜五年の『觀世音寺資財帳』が残っており、その記載内容から各堂宇の位置および具体的な規模を知ることができる。それによると今回の調査地は回廊の西南隅にあたる位置になる。当該地は講堂、金堂が位置するところよりも約1m程度低くなってしまい、後世地下げが行なわれている。昭和32年に行なわれた回廊、中門等の調査結果においてもこれらの造構はその痕跡すらも残っておらず、完全に削平されていることが明らかにされている。したがって今回の調査においても回廊造構の遺存状況についてはきわめて悲観的であった。

検出造構

調査にあたっては西面回廊推定地および南面回廊推定地に各々東西、南北方向のトレンチを設定した。調査の結果は、各トレンチ内において中、近世の瓦溜りおよび土壤状のピットを検出したのみで、回廊に関する造構については何ら検出されなかった。

出土遺物

今回の調査による遺物は瓦類および土器類で量はきわめて少ない。これらはいずれも土壤状ピットおよびそれらを覆う盛土から主に出土した。



第27図 第55次調査造構配図

土器

出土量はきわめて少なく、須恵器および青磁類であるが、いずれもまとまとったものではなく、記述については省略する。

瓦類

軒丸瓦11点、軒平瓦4点および丸・平瓦類である。軒丸瓦は老司I式、鴻臚館式および中、近世の巴文のものであり、軒平瓦は鴻臚館式と中世の唐草文のものがある。

小結

観世音寺の伽藍についてはすでに述べたごとく、昭和32年に講堂、東回廊、中門について調査が行なわれており、その結果講堂と回廊の取付きについては明らかとなつたが、回廊の部分、中門については礎石はもちろん基壇の痕跡すら失われてしまつていて明らかにされた。今回の回廊西南隅の調査においても遺構は全く検出されず、回廊の遺構が残されている可能性はきわめて薄くなつたといえる。しかしながら現在の観世音寺境内の地形からみると講堂および金堂を含めた境内地西北部は部分的に池、道路等によって削平されているところもあるが、回廊の遺構が残されている可能性のある地域といえる。したがつて回廊の遺構に関して具体的な状況を知り得る手段が全くなくなったわけではなく、今後の調査によつては少なくとも北面および西面回廊の一部についてその遺構を知り得る可能性は残されているものといえる。

5. 第56次調査(右郭八条一・二坊)

本調査は筑陽高校の応接室・食堂・図書館建設に伴う事前調査である。

この地域は鼓石遺跡のなかに含まれ、昨年度も体育館建設の際に調査を実施している。今回の調査は左郭八条一・二坊の推定地にあたっていることから、条坊遺構および奈良・平安期の遺構の検出を目的として調査を開始した。

地番は筑紫郡太宰府町大字太宰府字鼓石 254-1・256-1 番地である。

調査は昭和53年4月3日に開始し、同年4月19日に終了した。

検出遺構

建設予定地にそれぞれA・B・Cの各トレンチを設定し調査した。

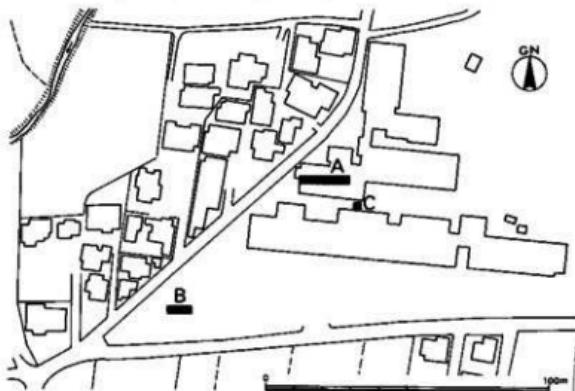
今回検出した遺構には顕著なものが多く、AおよびCトレンチでは、後世に削平されたためか明確な遺構の検出はできなかった。Bトレンチでは土壤・ビット・井戸を検出した。

土壤

SK1418 Aトレンチの中央部で検出したもので、上層は後世の擾乱を受けており、SK1418の底部がわずかに残っていたのみである。

SK1420 Cトレンチで検出した土壤で、その一部を検出した。上面はかなり削平された様で、深さ40cmが残っていた。土壤中では、土師器・須恵器・磁器片が出土したが、いずれも細片である。発掘区が小範囲であるため、遺構の性格については明確でない。

SX1421 Bトレンチの東端で検出したもので、深さ20cmの浅い落ち込み状のものである。ここからは、ほぼ完形に近い土師器の楕が出土した。



第28図 第56次調査地周辺図

S X1423 Bトレンチのほぼ中央部にあり、西へなだらかに落ち込むもので、埋土はS D14
24・S E1425の上面を覆っている。

SK1424 Bトレンチの西で検出したもので、長径2.40m、深さ0.3mのものである。埋土
は前述のS X1423と同じもので、同時に埋まったものと考えられる。

S E1425 Bトレンチ西面隅部で検出したものである。掘方の4分の1を検出したのみであ
る。井戸枠の残存状態は悪く、明確ではないが、枠の痕跡から推定すると、方形の縦板のもの
で、底部に曲物を据えたものであろう。

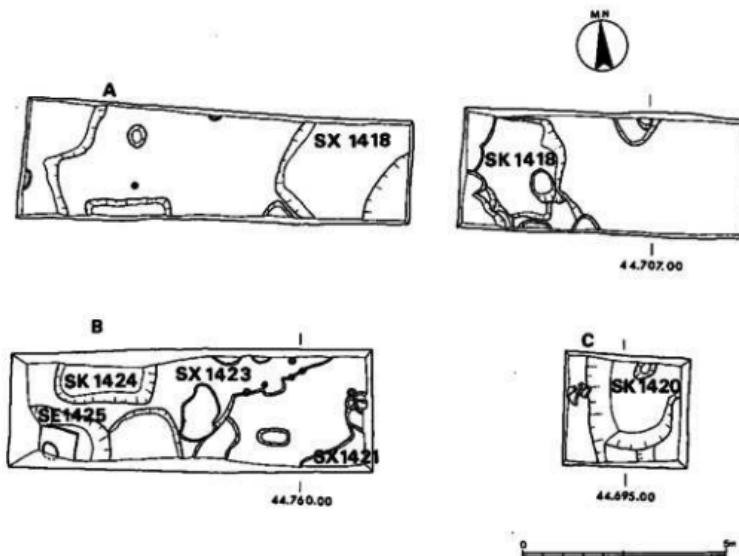
出土遺物

出土した遺物は、A～CトレンチのうちBトレンチものは比較的残存状態が良好であり、ま
とまって出土した。

SK1418出土土器（第30図、図版32）

土師器

鉢（1） 底の部分を欠いているが、口縁部および胴部はほぼ完全に残っている。口径18.8
cmのもので、口縁部の径が大きく鍋状を呈している。焼成不良で、調整については明確でない。



第29図 第56次調査遺構配置図

口縁部はヨコナデで、外面は煤の付着が著しい。

S X1421出土土器（第30図、別表）

土師器

杯C（2） ほぼ完形に近い状態で出土した。口径15.4cm、器高5.4cm、全体に器厚が薄く、外反した高台のものである。

S X1423出土土器（第30図、図版32、別表）

土師器

皿a（3～13） 3～5は糸切りで、6～13はヘラ切りのものである。前者は口径9.0～9.2cm、器高1.0～1.6cmのものである。後者は口径9.1～10.3cm、器高1.1～1.7cmのものである。いずれも内底をナデ調整し、外底に板状压痕を有する。

皿C（14） 口径9.7cm、器高2.4cmのものである。

杯a（15～16） 15は口径12.9cm、器高2.1cmのもので、16はそれよりも大きく、口径16.5cm、器高2.8cmのものである。全てヘラ切りである。

丸底の杯（17・18） 口径14.5cm前後、器高3.3cmのもので、いずれも摩滅が著しく、調整は不明である。18の内面にはヘラのあたりがみられる。

白磁

碗II-1が1点、IVが5点、V-1が1点、V-4が6点、VI-2と皿VIが2点ある。

碗（19～22） 19は皿で見込みに段を有する。高台はわずかに削り出している。高台部および底部には施釉されていない。皿II類である。20は碗で直立する高い高台を有し、V-1類のものである。21は20と同様、高い高台のものである。全体に小さく、小椀と考えられる。見込みと体部に細い櫛目がみられる。V類である。22は小椀の破片である。外面体部に櫛目が5本単位で施釉されている。復元口径11.4cmのものである。V-3・bに属する。

青磁

龍泉窯系青磁碗I-2が2点、皿I-2・bが1点、同安窯系碗I-1・bが10点、皿I-2が1点、越州窯系碗II-3が3点、IIが1点、その他に褐釉陶器7点がある。

皿（23） 全面に厚く施釉され、見込みには3本の櫛目で花文が描かれている。外底は釉をカキ取っている。I-2・bに属する。

S K1424出土土器（第31図、別表）

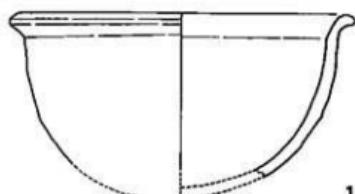
土師器

皿a（1～3） 口径9.0～10.0cm、器高1.4cmのもので、ヘラ切りのものである。

杯a（4～6） 復元口径15.0～16.4cm、器高2.3～2.7cmのものである。いずれも糸切りである。

丸底の杯（7・8） 7は口径15.4cm、器高3.0cmのもので、8は深くなり、器高4.0cmを

SK 1418



SX1421

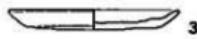


2

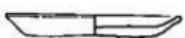
1



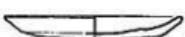
SX1423



11



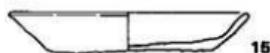
12



13



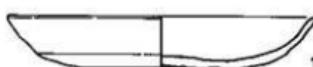
14



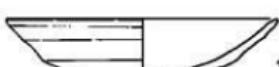
15



17



16



18



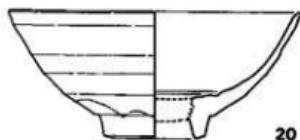
19



22



23



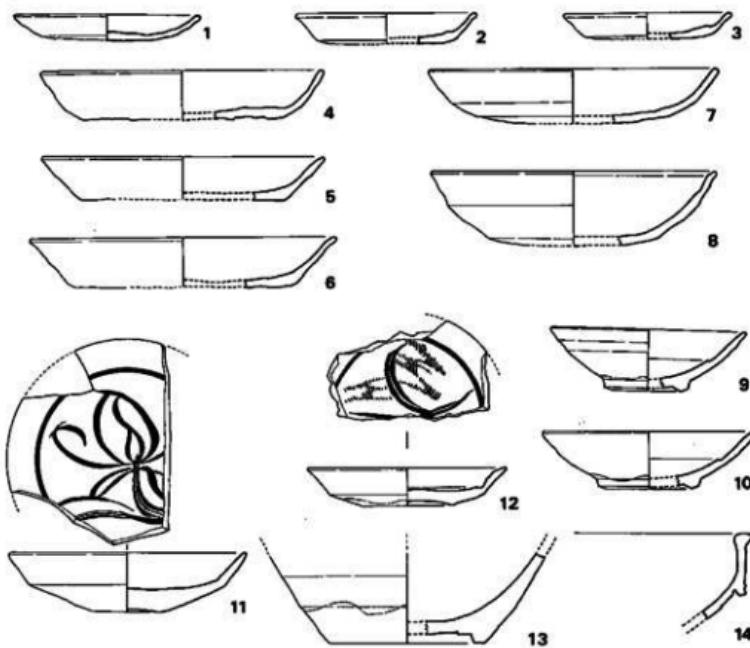
20



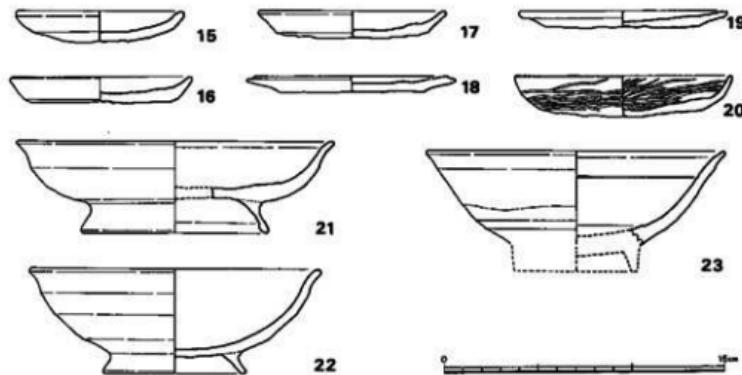
21

第30図 SK 1418・SX1421・1423 出土土器・陶磁器実測図

SK 1424



SE 1425



第31図 SK 1424・SE 1425 出土土器・陶磁器実測図

はかる。いずれも内面はミガキを行なっている。

白磁

皿 (9・10) II-1に属するもので、10は若干大きく、体部内面中位に段を有し、低い高台のものである。

青磁

皿 (11・12) 11は龍泉窯系の皿で、釉は厚く、見込みにヘラによる片彫りの草花文がある。12は同安窯系のもので、見込みにヘラと筆で文様を描いている。I-1・bに属する。

黄釉陶器

壺 (13) 黄釉壺の底部である。高台は削出しのもので基筒底となっている。

褐釉陶器

鉢 (14) 小片のもので、全形は不明であるが、直立した口縁をもつもので、口縁部は折り返されたため体部より厚くなっている。内面に櫛目の一一部が残っている。

SE1425出土土器 (第31図、別表)

土師器

皿 a (15~17) 口径 9.0~10.0cm、器高 1.4~1.7cm のものである。ヘラ切りで板状压痕を有する。

皿 (18・19) 口縁部に沈線をもち、口径 11.0~11.2cm、器高 0.8~0.9cm のものである。ヘラ切りで板状压痕を有する。

黒色土器

皿 (20) 口径 11.6cm、器高 2.2cm のもので、内面は黒色を呈し、内外面に粗いヘラミガキを施している。底部はヘラ切りである。

杯 c (21) 複原口径 17cm、器高 4.9cm をはかる。底部に細く高い高台がついている。

椀 (22) 口径 15.6cm、器高 5.6cm のもので、丸味をもつた体部から口縁部はわずかに外反している。高台は細く外開きのものである。

白磁

椀 (23) 底部を欠いているが、口径 16.0cm のもので、体部下半は露胎となっている。高く直立した高台の椀と考えられる。V-1 に分類される。

SK1420出土土器 (第32図、図版32、別表)

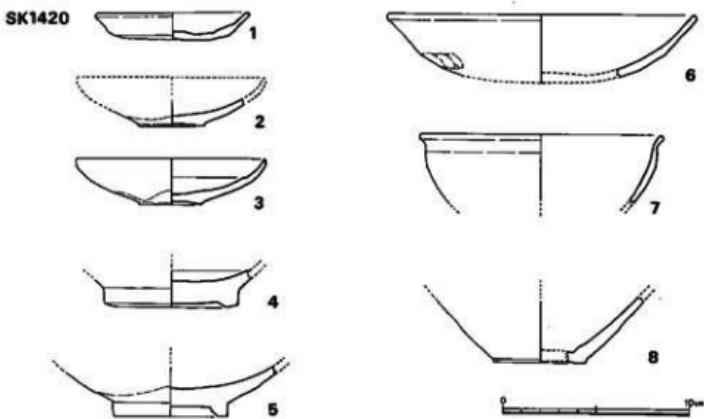
土師器

皿 a (1) 口径 8.2cm、器高 1.5cm で、ヘラ切りである。

九底の杯 (2) 口径 16.8cm で、体部下半に指頭压痕状のものがみられる。

黒色土器

椀 (3) 小片で全形は不明であるが、内面は黒色を呈しており、また口縁はわずかに外反



第32図 S K 1420 出土土器・陶磁器実測図

している。復原口径は13.0cmである。

白磁

皿（4・5） 4は口縁部を欠いている。口縁部が内弯し、体部内面中位に段を有している。体部下半は露胎である。VI-1-aに分類される。この他に1点出土している。

碗（6・7） 6は高台をわずかに削り出したもので、内底に段を有し、口縁部を玉縁にするものである。VI-1-aに分類される。7は細くてやや高い高台のもので、胎土は暗灰色で粗く、黄色味を帯びた白色を呈する。体部下半は露胎である。II-1に分類される。

高麗青磁

碗（8） 低く幅広い高台のもので、体部は外上方へ直線的に延びる。見込みは小さく、釉はくすんだ緑色のものである。

その他に青磁の番縁の破片が1点出土している。

小結

三トレンチのうち遺構の残りが比較的良好であったのはBトレンチである。主な遺構はS E 1425で、残存状態は余り良くなかったが、一部にその痕跡があり、井戸枠の形態は方形縦板のもので、底部に曲物をおいたものと考えられる。出土遺物から平安時代後半のものである。今回の調査では条坊に関する溝等の遺構は検出できなかったが、昨年度行なった第46次調査では奈良末期から平安期の井戸と溝が検出されており、それらとの関連も考えられる。

6. 第57次調査

第57次調査は觀世音寺子院の一つである推定金光寺跡について実施した。この推定地は現觀世音寺の北方約500mの地点に所在しており、現在の字名に今光寺の名を残していることから、以前よりこの地は金光寺跡に比定され、昭和28年には発掘調査も行なわれて、建物の一部が判明している。^(註1) この地域は因王寺山から派生する谷筋で、標高約67mの位置にあり、地番は筑紫郡太宰府町大字觀世音寺字今光寺991-1~3番地である。

発掘調査は約1,000m²について実施した。調査期間は昭和53年5月から同年11月までである。

S B1430・1440および溝は同一方向で、その軸線は国土座標系の北の方方位から西へ11度偏している（実測基準線もこの軸線に合わせた）。

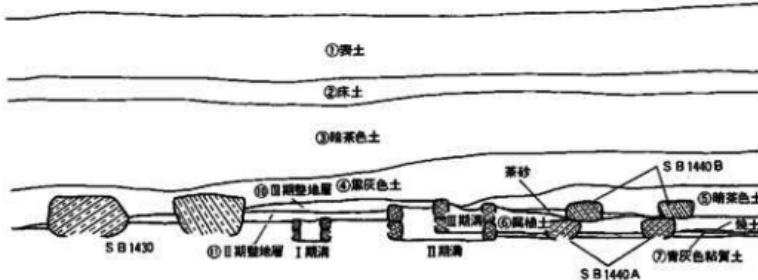
検出遺構

今回の調査で検出した主な遺構は、礎石建物2、建物の周囲に配された石組み溝数条、石積遺構1、暗渠状遺構1、土壙、柱穴などである。これらの遺構は、礎石建物の修復、増築、建替えなどから、大略3期の遺構に分けられる。この3期の遺構のうち残存状態が良好でかつ中心をなすのは第Ⅱ期にあるものである。

以下、各期別に遺構の概略を述べたい。3期にわたる基準は、今回検出した遺構のうちその中心的建物と考えられるS B1430が少なくとも3度の修復、増築を受けている。層位的な編年を示すものでないこと、さらに、礎石建物S B1430B・CとS B1440A・Bは必ずしも時期的に合致したものでないことを考慮した。また溝等、2期にわたって使用されたものについては重複するので、後述するのを省略した。

土層の関係（第34図）

土層については、遺構が谷筋にあるため後世の氾濫によって搅乱されていることもあるって必ずしも整然とした層序をなしてはおらず、明確に判断出来ない部分もあった。また発掘区の中



第34図 第57次調査層位模式図

央部を南北に走る溝によって層が分断された状況になっており、西半部地域と東半部地域の土層にはかなりの違いがみられる。東半部地域では、西半部地域に比べて遺構面が若干低いため、土の堆積も厚く、かなり整然とした層序が認められた。第34図に土層と遺構の関係を模式図に示したが、SB1430B・CとSB1440A・Bとの層位的前後関係については明確にし得なかった。東半部地域（とくにSB1440部分）の土層は、上層から①表土、②床土③暗灰色土④黒灰色土⑤暗茶色土⑥腐植土⑦青灰色粘質土⑧青灰色砂質土（地山）の順に堆積がみられる。①～③までには、近世の遺物が入っており、近世以降の堆積と考えられる。④は遺構面全体を覆い、層の厚さの違いがみられるものの普遍的にみられるものである。この層には近世の遺物はみられず、SH1445・SB1430部分ではこの層の下が遺構面となる。⑤はSB1440Bを覆い、Ⅲ期溝（SB1440の周囲）を覆っていて植物性の有機物と砂土が混入した土である。⑥はSB1440Bの下層にあり、SB1440Aを覆う層で、⑤より有機物の混入が多い。⑤⑥は東半分地域、とくにSB1430部分にみられるだけであり、またこの土層からは多量の木製品が出土した。⑦はSB1430の整地土で、その上面に焼けている部分がある。⑩はⅢ期遺構の整地土で、Ⅰ期溝を覆っている。⑪はⅡ期遺構の整地土で、Ⅰ期溝を覆っている。⑫は遺物を含まず、青灰色土と砂礫が混入している自然堆積層である。これは南側から北側にかけてゆるい傾斜をもち高くなっている。また、I～Ⅲ期の各溝の埋土は灰白色の細砂であり、この溝が流れていることを示している。これらの溝中には若干の遺物を含んでいる。

第Ⅰ期の遺構

前述したように、検出した遺構をSB1430の増改築によってI、II、III期に分けた。I期の遺構としては、SB1430Aとその周囲に配された雨落溝、土壤SK1470がある。

礎石建物

SB1430A 南半分地域で検出した礎石建物で、これは前回の調査で判明していたものである。東西7間、南北6間分を検出した。さらに南へのびるものかどうかについては住宅の敷地内に入るため明確にし得なかった。東・西と北に身舎の礎石列に並ぶ小礎石があり、縁を取り付いている。東・西の側柱礎石間の心心距離は13.93mで、柱間寸法は平均1.99mとなる。また南北方向5間分の総距離は10.07mで、平均2.01mとなる。この建物の東南隅、南側3個の縁東礎石に柱のあたりが残っており、その心心距離はいずれも1.97mである。この縁東のあたりから東柱は径20cmの方柱で、面取りしたものと推定される。縁東礎石と身舎の礎石は柱筋を合わせているので、東西および南北の柱間は1.97m前後の等間のものと考えられる。また側柱礎石と縁東礎石との距離は東・西・北で若干の違いはあるものの1.15m前後を測る。礎石と縁東礎石のレベル差は約20cmあり、東・西では側柱礎石と縁東礎石の中間の距離からなだらかな落ちがみられる。また、この部分には漆喰等の痕跡は残っていないかった。

東西の中心部3間と南北の北側柱列2間分のいわゆる3間×2間の範囲は、それを仕切る形

の礎石8個が周囲の礎石に比べると大きく、またその中にある礎石4個はそれの半分程の大きさであることが注意される。

礎石の残存状態は良好で、後世に抜き取られたものは5個あるものの、縁東礎石もそのほとんどが残存していた。縁東礎石の東・西隅についてはその痕跡がなく、当初からなかったものと考えられる。また、礎石を据えた方向については特別の意識もないようである。

溝

S D1426・1427・1428 S B1430に伴い連続する石組みの溝である。側石は部分的に残っており、Ⅱ期建物の整地の際にそのまま埋められている。幅は40cmで、側柱礎石と溝の心心距離は2.10mである。南側が低くなっている。南方へ排水されたものと考えられる。

土壙

S K1470 発掘区の西北部で検出し、S D1433より古期のものである。長楕円形のプランを呈し、3.2m×1.35m、深さ25cmを測る。埋土は植物性の有機物が混入した黒灰色土で、ここからは土器類の杯・小皿・木製品（木製の蓋）等が一括して出土した。

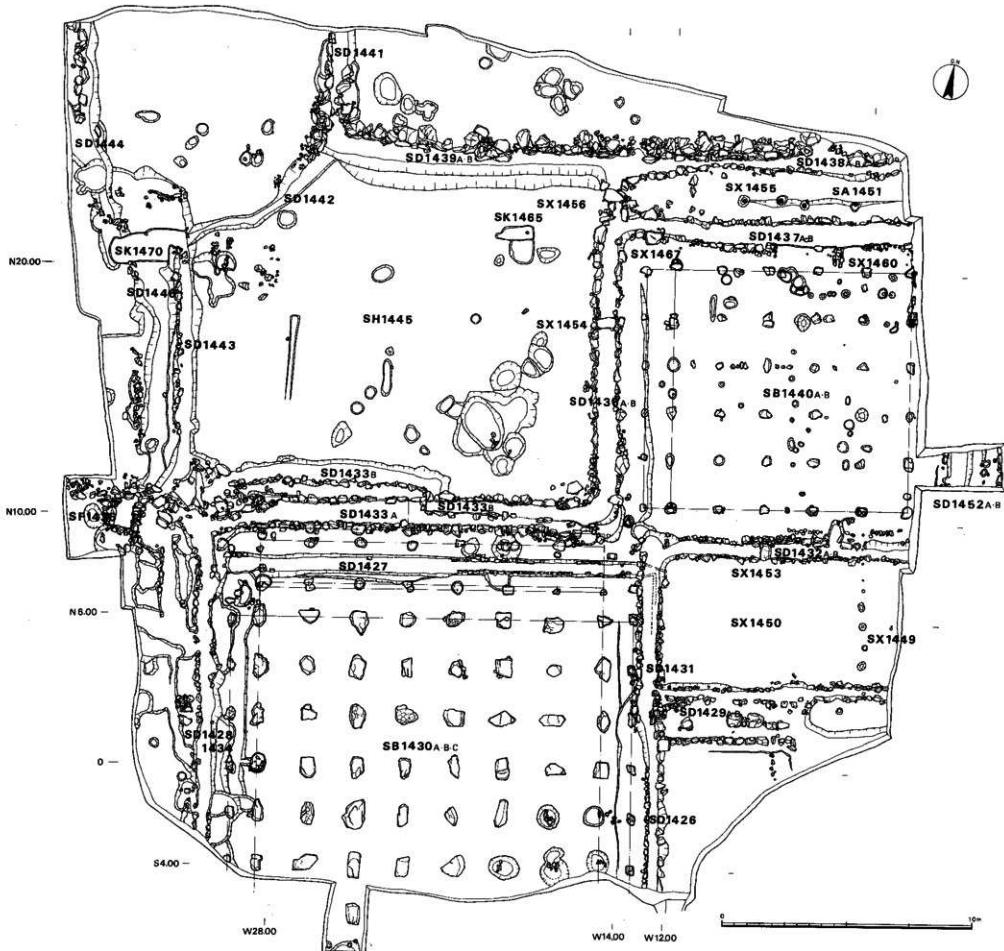
第Ⅱ期の遺構

第Ⅱ期では大規模な整備・拡充が行なわれている。S B1430の東北方に接する形で新たにS B1440が出現し、これらの建物を取り囲む形の溝が縱横にめぐらされる。

礎石建物

S B1430B 前述のS B1430Aの身舎部の礎石位置と同じであるが、縁が造り替えられている。東および西側の縁東礎石は第Ⅰ期のものとほぼ同位置で、北側においては1間分張り出した形となっている。側柱礎石から3.0mを測り、縁東礎石はⅠ期のものより20cm高く、身舎部礎石と同じレベルにしている。柱間は若干異なり、内側は1.38m（第Ⅰ期のものより若干北へずれる）、外側は約1.62mである。なお、残存状態は良好ではなかった。

S B1440A S B1430の東北方に接する礎石建物である。礎石はS B1430に比べひとまわり小さく、礎石列はわずかに西に偏しているが、S B1430とほぼ同じ方向のもので柱筋を合わせている。建物の規模は東西5間、南北5間で、西に縁が取りついている。東西および南北の側柱礎石間の心心距離はともに9.59mを測り、柱間の平均距離は1.92mとなる。このことから南北および東西の柱間は1.92m前後の等間のものと考えられる。この建物の遺構面に焼け面がみられ、またいくつかの礎石とS D1437・S D1432の側石に、部分的ではあるが、火をうけて著しく赤化しているのがあり、この建物は火災にあったものと考えられる。また東側柱礎石の北側の2個の礎石に柱根が原位置を保った状態で検出された（図版17・18）。北端の柱根は径10cm前後の方柱で、他方は柱と礎石の間に30cm角厚さ18cmの角材を置きその上に柱を立てている。この建物は再建されているので、新期に建て替えられた時、古期の礎石をそのまま再利用したものとも考えられるが明確ではない。この柱間は1.91mを測る。



第33図 第57次調査遺構配置図

溝

Ⅱ期の溝は S B1430B・1440A B・S H1445の周囲に配され、数条ある。そのほとんどが石組の側石をもつものである。

S D1431・1432 この2つは連続する。S D1431はS B1430Bの東側にあり、Ⅰ期の溝とほぼ同じ位置にあるが、幅は約60cmで広くなっている。内側の側石は縁東礎石に接する形で並んでいる。南側はほとんど残っていなかった。S D1432の西のコーナーの部分では側石はほとんど残っていないかった。溝のレベルは南が低くなっている、北から南へ排水されている。

S D1434・1433A・1436・1437 これらの溝は発掘区の中心部をよぎる形で走っており、主要な排水溝となっている。S D1434はS B1430Bの西側にあり、側石の残りはきわめて悪く、溝幅は不明であるが、S D1431と同じ規模のものと考えられる。S D1433Aは溝幅80cmを測り、側石も大きい。とくにS H1445側では、若干高くなっている。2段ないし3段に石を積んでいる。Ⅲ期溝の際には1段分が放置された形で埋められている。これはさらに北に直角に曲がり、同じ幅でS D1436に統く。S D1437はS B1440の北側にあって東西にはしり、S D1436に連続する。幅は80cmであるが、S D1436との接続部分は若干狭くなっている。S D1436・1437はS B1440の雨落ち溝を兼用したものである。

S D1438・1439・1441 S D1438・1439はS X1455・S H1445の北側を東西にはしり、S D1436に統くものである。この溝の北側は約1.0m高くなり、かなり大きな石で護岸されている。S D1441はS D1439から直角に曲がって連続するもので、その一部を検出したが、さらに北方にのびるものと考えられる。

S D1442 S H1445の北西のコーナーを斜めにはしる素掘りの溝である。幅60cm、深さ20cm前後の浅い溝で、S D1441とS D1443を連続させている。

S D1443・1444 北から南へ蛇行してはしる。S H1445の西を限るS D1443は他の溝と同一方向をとり、S D1434に統く。S D1443・1433A・1434の合流部分は流量が著しいためか氾濫の跡がみられる。

S D1429A S X1450の南側にある幅2mを測る広い溝で、深さ20cmであったが、その後縮少されて、東側に取り付けてあった幅40cmの細い溝と連続している(S D1429B)。

S D1452 S B1440Bの東側の扯張区で検出した。南・北にのびており、S B1440Bの東側の雨落および排水溝となるものと考えられる。

歩廊状遺構

S X1450 これは発掘区の東南部地域にあり、S D1429・1431・1432に囲まれた幅5.40m、長さ10mの部分で、ここには柱穴等の遺構はなく、全くの空地となっている。歩廊的な役割をもつものと考えられる。またここにはS B1440へ渡る為の渡り石(S X1453)がある。

S X1455 これはS B1440の北側にあり、S D1437・1438に囲まれた部分で、前述のS X14

50と同じ造構の状況を呈する。幅2.30mを測り、S X1450と同様に歩廊的な施設を考えた。これの先端部にはS H1445へ渡るための渡り石がある。

橋

S A1451 前述のS X1455の中央部やや南寄りで検出したもので、ほぼ柱筋が通る柱列である。検出した4個の柱穴にはいずれも柱根が残存していた。柱間は不規則で、東より2.05m、0.9m、2.1mを測る。

広場

S H1445 これは発掘区のほぼ中央部にあたり、S D1433・1436・1439・1443に囲まれた地域である。ここはS B1430・1440・S X1450よりも約40~50cm程高くなっている。ここでは建物等の造構はみられず、東北隅で土壤S K1465を検出したのみである。ここには庭園的な造構の存在も考えられたが、その痕跡もなく、後世の削平によるものであるのかも明確でなく、今回は広場的なものとした。

渡り石

S X1453・1454・1456・1467 溝には渡り石の施設があり、S X1467を除いて、現位置を保っていた。S X1453はS D1432上に渡されたもので、幅40cm、長さ65cm、厚さ15cmの扁平な石を用い、側石の内側にこれを受けるための石を置いている。S X1454はS D1436上に渡されたものである。S X1456は前2者とは異なり、両方の側石上にのせている。

暗渠

S X1460 S B1440Aの北辺部にある暗渠状の造構である。これは幅20cmの間隔をおいて両側に石を並べ、その上に平瓦を置き、暗渠状にしている。出口はS D1437に開いており、その底はS D1437の底と同じ高さで、暗渠とした場合には水が逆流することになり、他の用途の造構かとも考えられる。

第Ⅲ期の造構

これにはS B1430C、S B1440B、S D1433B、それにⅢ期溝を再使用したものがある。

礎石建物

S B1433C S B1433Bの北側をさらに1間分拡張している。拡張部分は西から3間分が最も大きく、側柱から拡張部礎石までの距離は4.78mを測り、東側3間分は3.52mである。拡張部の各礎石間の心心距離は側柱礎石に近い方から1.38m、2.10m、1.26mを測る。側柱礎石に最も近い礎石はⅢ期のものを再使用しており、他の2個はS D1433Aの両側石上に側石よりも若干大きめの石を配して礎石としている。

S B1440B S B1440Aよりも新期の建物である。残存する礎石は2個で、全体の規模は不明であるが、周囲の溝の側石は、新期礎石の高さまで積み重ねられており、Ⅲ期のS D1432・1436・1437はⅢ期にも続いて使用され、残存する2個の礎石は若干南へずれるもののほぼ同位

置にあり、Ⅱ期礎石を根石として利用している。このようなことから、同規模の建物が再建されたものと考えられる。

溝

S D1433B S B1430Bの拡張に合わせ、溝も造り替えられ、溝の幅はⅡ期溝の半分に縮少されている。これに連続する S D1434と S D1436については、明確ではないが、Ⅱ期溝をそのまま使用したものであろう。

時期不明の遺構

I～Ⅲ期のどれに属するか定かでない遺構として石積遺構 S F1435がある。

S F1435 S B1430の西北にあり、発掘区の西端に位置する方形プランをもつ石積の遺構である。この付近は数条の溝の合流点であり、氾濫が著しく、他の遺構との関連が明確でなく、どの期にあたるか位置付けられなかった。これは、一辺1.20m前後のほぼ正方形に近いプランを持ち、3段～4段の石を積み重ねて造られた深さ50cmのものである。溢枠的なものと考えられる。Ⅱ期には溝等の整備・拡充が行なわれていることから、この時期の可能性が強い。

出土遺物

S K1470出土土器 (第35図、図版33、別表)

この土壤からは土師器、褐釉陶器が一括して出土した。

土師器

皿 a (9～14) 口径7.4～8.7cm、器高1.2～1.5cm、底径5.0～7.5cmのものである。

皿 b (1～8) 口径6.8～7.7cm、器高1.8～2.1cm、底径4.2～5.1cmのものである。

皿 (15～19) 口径8.7～9.8cm、器高1.8～2.1cmのもので、すべて糸切りで、内底はナデ調整し、外底に板状圧痕を有する。

杯 a (20～25) 口径12.7～13.2cm、器高2.5～3.0cmのもので、すべて糸切りである。25は大形のもので、口径17.6cm、器高4.2cmである。内底中心部に菊花文のスタンプを押している。糸切りで、内底をナデ調整し、外底に板状圧痕を有する。

皿 (26) 口径21.2cm、器高2.8cmのもので、内底はナデ調整し、板状圧痕を有する。

褐釉陶器

壺 (27) 褐釉壺片である。底部は平底で、体部には粘土紐の巻上げ痕がある。胎土は茶灰色の密なもので、内外面に施釉され、外底の周縁に輪状に重ね痕がある。

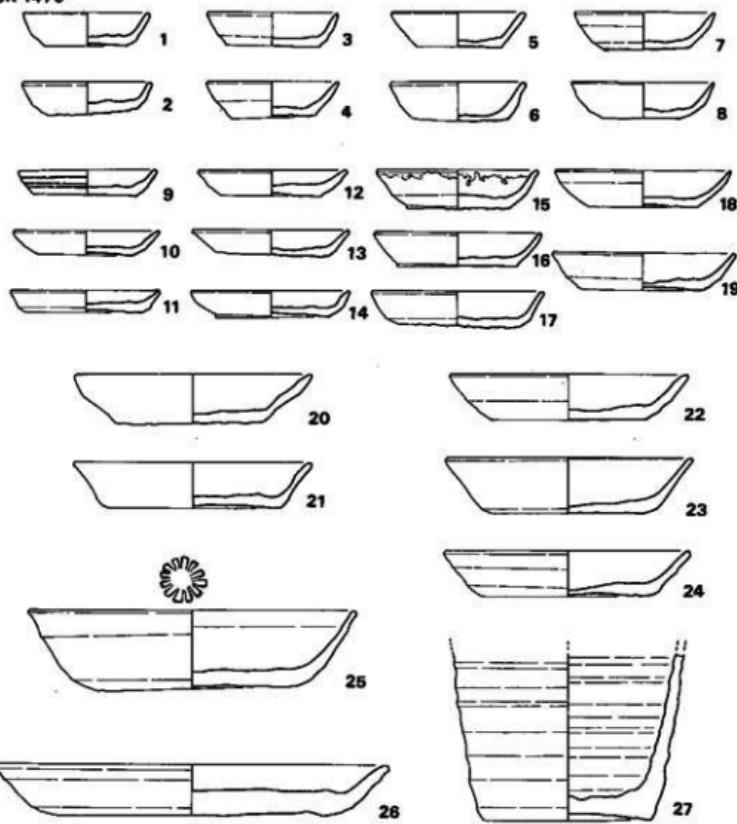
S D1443出土土器 (第35図、別表)

土師器

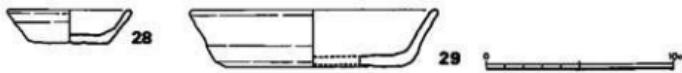
皿 b (28) 口径6.7cm、器高1.8cm、底径4.3cmのもので、糸切りである。

杯 a (29) 口径13.3cm、器高3.1cmのもので、糸切りである。

SK 1470



SD 1443



第35図 SK 1470・SD 1443 出土土器・陶磁器実測図

SD1427出土土器（第36図、別表）

土師器

杯 a (1) 口径12.9cm、器高3.0cmのものである。糸切りである。

黒釉陶器

椀 (2) 小片で、復原口径11.0cm、釉は鉛釉色を呈する。口縁の返しは少ない。

瓦質陶器

火鉢 (3) 外面は漆黒色を呈し、光沢がある。口縁部下に珠文のスタンプがある。

SD1436・1433A・1438・1439出土土器（第36図、図版34、別表）

土師器

皿 a (6) 口径6.8cm、器高0.9cmのものである。

皿 b (4・5) 口径6.1~6.2cm、器高1.9cm、底径3.8cmのものである。5には底部に墨書きがあり、明瞭に判読できないが、「為」の字か。糸切りである。

杯 a (7~11) 口径10.0~11.8cm、器高2.6cmのものである。11はやや器形を異にする。いずれも糸切りである。

瓦質土器

托 (12) 瓦質のもので、小片であるため全形を知り得ないが、托様のものと考えられる。

青白磁

椀 (13) 底部のみの破片である。高台部疊付と以下には釉がかかっていない。高台部内面に「上」の墨書きがある。

白磁

碗 (14・15) 14は円盤状の高台のものである。高台部疊付は施釉されていない。胎土は灰白色の粗いもので、釉は乳白色を呈し、うすくかけられている。15は小片で、釉は灰白色の透明に近い釉がかけられている。

陶器

壺 (16) 胎土には砂粒の混入が目立つ粗いもので、茶褐色のうすい釉がかかっている。

SD1429A・B出土土器（第36図・図版34、別表）

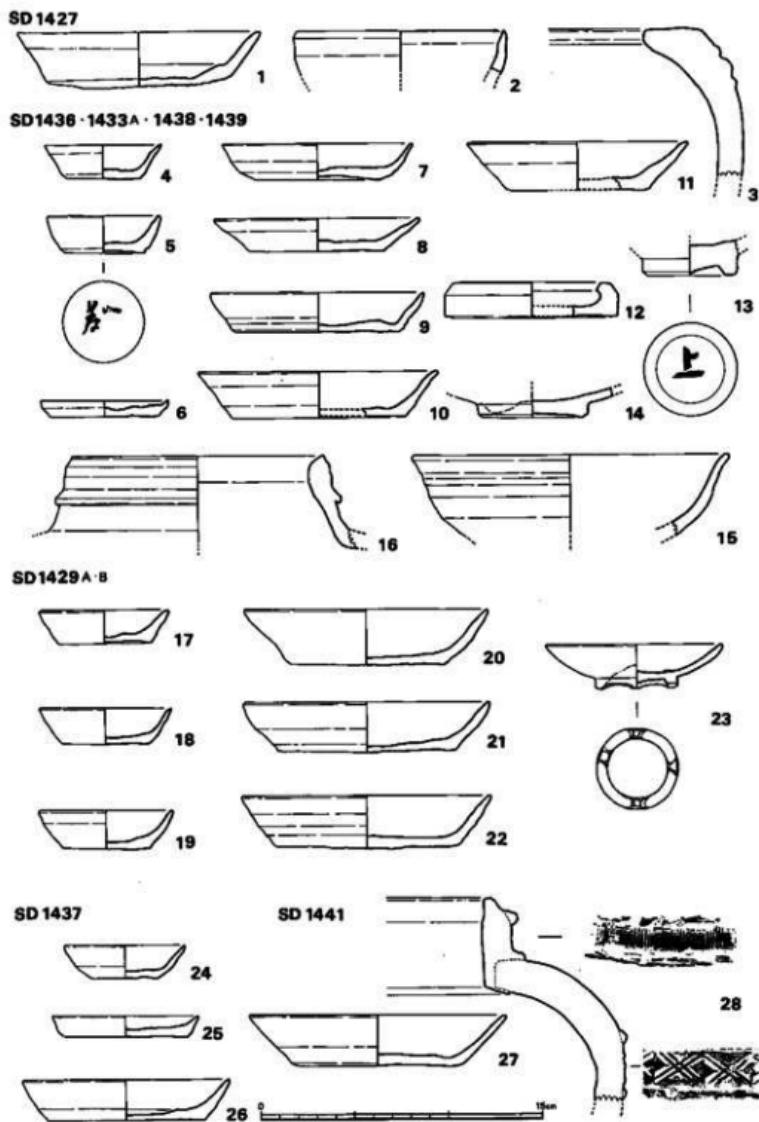
土師器

皿 b (17~19) 口径6.9~7.1cm、器高1.8~2.1cm、底径4.6~5.0cmのものである。全て糸切りで、板状压痕を有する。

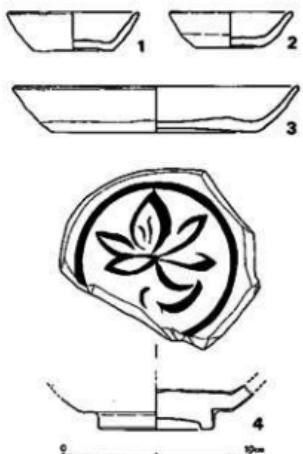
杯 a (20~22) 口径13.1~13.4cm、器高2.7~3.0cmのものである。糸切りである。

白磁

皿 (23) 口径9.4cm、器高2.4cmのもので、高台部を山形に4カ所切り込んでいる。釉は黄色味を帯びた白色を呈し、底部付近を除く全面に施釉されている。切り込みのない疊付部4カ



第36図 SD 1427 · 1436 · 1433A · 1438 · 1439 · 1429A · B · 1437 · 1441出土土器 ·
陶磁器実測図



第37図 整地層出土土器・陶磁器実測図

整地層出土土器（第37図、別表）

S B1440B および S B1430A の整地層より出土したもので、その量は非常に少ない。

土師器

皿 b (1・2) S B1440A の整地層である青灰粘質土層から出土したものである。口径6.7~7.0cm、器高1.9~2.1cm、底部3.6~4.2cmのもので、糸切りである。

杯 a (3) 口径15.2cm、器高2.4cmのものである。糸切りである。

青磁

碗 (4) S B1430A の整地層から出土したものである。竜泉窯系碗 I-2類のもので、見込みに片彫りの花文がある。

腐植土層出土土器（第38図、図版34、別表）

土師器・土師質土器・陶磁器がある。

土師器

皿 a (1~8) 口径6.9~8.6cm、器高1.1~1.6cmのものである。全て糸切りである。

皿 b (9~12) 口径6.5~7.4cm、器高1.6cm、底径4.0~6.2cmのものがある。

皿 (13~16) 7.6~8.7cm、器高2.0cm、底径4.4~5.5cmのものである。糸切りである。

杯 a (17~26) 口径と器高から3つに分けられる。口径11.6~13.0cm、器高2.0~2.4cmのもの (17~20)、口径12.6~12.8cm、器高2.4~3.2cmのもの (21~24)、さらにこれらより一回り大きい口径15.4~17.6cm、器高3.2~3.7cmのもの (25・26) である。すべて糸切りである。

所と内面4カ所に重ね跡がある。

S D1437出土土器（第36図、別表）

土師器

皿 a (25) 口径13.6cm、器高2.8cmのものである。

皿 b (24) 口径6.6cm、器高1.8cm、底径3.8cmである。

杯 a (26) 口径11.0cm、器高1.7cmのものである。

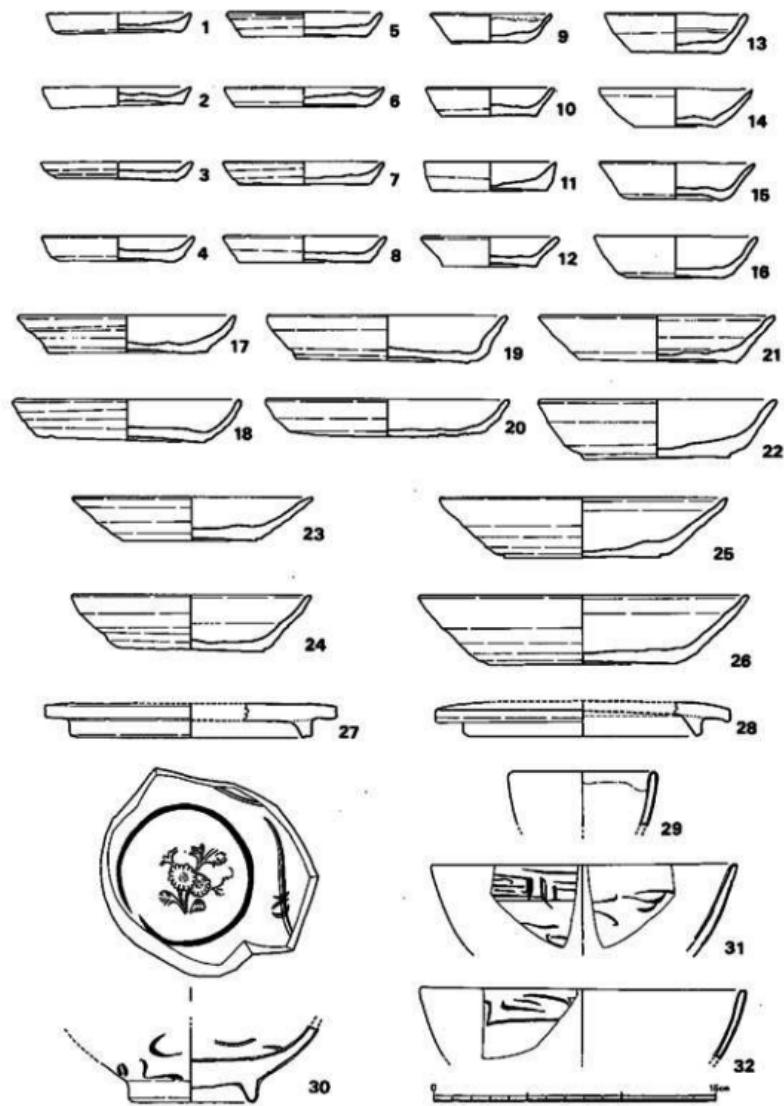
S D1441出土土器（第36図、別表）

土師器

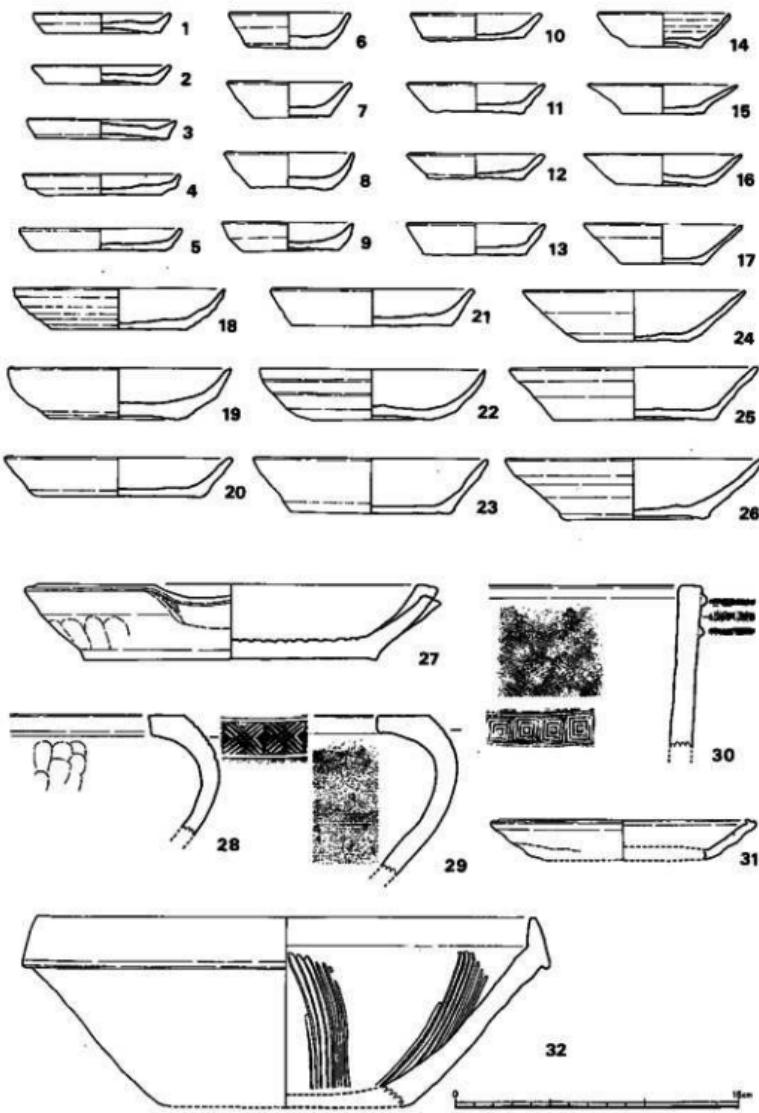
杯 a (27) 口径13.6cm、器高2.8cmである。

瓦質土器

壺 (28) 壺の口縁であるが、全形は不明である。丸味をもつ肩部に直立する口縁部を貼付けている。口縁部下に雷文と肩部下に斜格子目文のスタンプがある。内面は淡茶色を呈する。



第38図 属植土層出土土器・陶磁器実測図



第39図 暗茶色土層出土土器・陶磁器実測図（1）

青磁

香爐 (29) 口径8.0cmのもので、器形は明瞭でないが、内面に施釉されていないことから香爐の口縁部片と思われる。釉色はくすんだ緑色を呈する。

椀 (30~32) 30は全面に施釉された後、高台部内面の釉を輪状に掻き取っている。内面見込みに花文のスタンプがあり、体部に片彫の文様が描かれている。竜泉窯系椀II類である。31・32は口径16cm前後の口縁部片で、外面口縁部下に簡略化された雷文のヘラ描き文様がある。31の体部内面には草文を描いている。釉色はくすんだ緑色で、厚目に施釉されている。

土師質土器

蓋 (27・28) 蓋と考えられる。身受け部に厚い凸帯をめぐらしている。

暗茶色土層出土土器 (第39・40図、図版34・35、別表)

土師器・白磁・青磁・中国製陶器・日本製陶器がある。

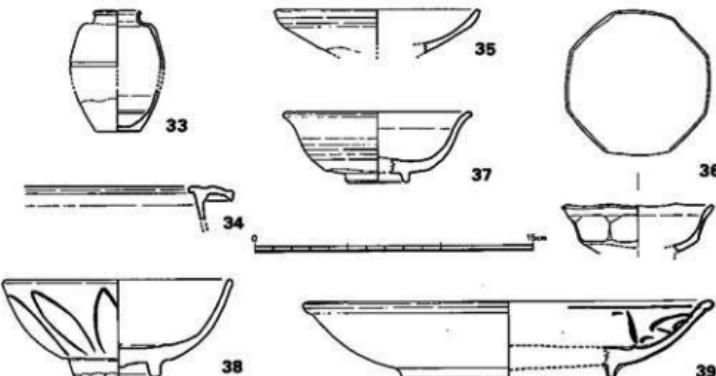
土師器

皿 a (1~5) 口径6.6~8.6cm、器高1.0~1.7cmのものである。糸切りである。

皿 b (6~17) これは口径・器高・形態から3つに分けられる。口径6.4~6.9cm、器高1.8~1.9cm、底径4.1~4.4cmのもの (6~8)、口径7.0~7.4cm、器高1.3~1.7cm、底径5.0~5.5cmのもの (9~13)、薄手で口縁が外反する口径7.0~8.4cm、器高1.7~2.2cm、底径3.8~4.4cmのもの (14~17) である。すべて糸切りである。

杯 a (18~23) 口径10.8~12.8cm、器高2.0~2.7cmのものである。いずれも糸切りである。

杯 b (24~26) 口径11.8~13.6cm、器高2.7~3.2cm、底径5.8~8.6cmである。薄手で口縁



第40図 暗茶色土層出土陶磁器実測図 (2)

が外反気味のものである。

白磁

椀（35・36） 35は体部が大きく聞くもので、口縁部は若干厚くなる。胎土はや、粗く、黃白色の釉がうすくかけられている。体部外面下半は露胎である。36は復原から平面が8角形の稜擁である。体部は削りによって稜をついている。胎土は純白に近いもので、釉は体部外面下半には施釉されていない。

青磁

椀（38） 口径12.2cm、器高5.4cmのもので、胎土は粗く、茶白色を呈している。釉は発色が悪く、緑色を帯びた灰白色を呈する。内外面に施釉された後、見込みは搔き取り、疊付部は削り取られている。ヘラ描きの蓮弁を有する。

盤（39） 口径22.0cm、器高4.2cmのものである。釉は内外面の全てに厚目に施釉され、釉色は淡緑色を呈する。体部内面にヘラ描きの草花文がある。

青白磁

椀（37） 口径10.0cm、器高3.8cmのもので、体部は丸味をもち、口縁部は外反させている。釉はや、空色を帯びた白色を呈し、体部下半には施釉されない。

灰釉陶器

下し皿（31） 口径14.0cm、器高2.3cmのもので、口縁部をわずかに直上につまみ上げる。内底に下し目が一部みられる。

黒釉陶器

茶入（33） 肩衝茶入である。復原口径2.4cm、器高6.5cmのもので、肩部は稜がとれ、丸味をもち、胴部がわずかに張り、上半に最大径があり、5.0cmを測る。胴部に一条の沈線（胴紐）がめぐっている。内面と胴部下半は露胎で、内面にはロクロ目が明瞭に残っている。胎土は非常に細かい漉土で、表面は灰色、内面は赤茶色のものである。底部は糸切りである。

黄釉陶器

壺（34） 全形は不明であるが、復原口径27.4cmのものである。口縁部を「く」字状に折り曲げ、上面を平らにしている。胎土は淡茶色を呈する粗いものである。釉はうすくかかる。

無釉陶器

摺鉢（32） 復原口径26.4cm、器高10.1cmのもので、口縁は厚くなりN字状をなす。体部内面には7本単位の幅広の横目を入れている。備前焼であろう。

土師質土器

下し皿（27） 口径22cm、器高4.0cmのもので、片口を有する。内底にヘラで基盤の目状の粗い下し目を入れている。体部内面は刷毛目調整し、外面は指ナデである。焦茶色を呈する。

瓦質土器

火鉢（28～30） 茶色を呈する硬質のもので、外面はヘラミガキによって器壁を密にしている。内面の調整は29では指ナデで、30は刷毛目である。外面口縁部下に雷文の連続文がスタンプされている。瓦質のものと色調が異なる事から、ここでは土師質土器にした。30は直線的な体部のもので、漆黒色を呈する。外面はヘラミガキによって密になっている。口縁部下に2本の凸帯をめぐらし、その間に梅花文をスタンプがある。内面は刷毛目調整している。

黒灰色土出土土器（第41図、図版35、別表）

土師器、白磁、青磁、黒釉陶器、染付、日本製陶器、中国製陶器、土師質土器がある。

土師器

皿 b（1～5） 口径6.4～7.4cm、器高1.4～1.7cm、底径4.3～6.8cmのものである。糸切り

杯 a（6～10） 口径10.6～13.2cm、器高2.0～3.3cmのものと10のように口径17.2cm、器高4.0cmの大形のものがある。糸切りのものである。

白磁

碗（11・12） 11は体部に丸味をもつものである。胎土は乳白色、釉は黄色味を帯びた白色で、体部外面下半には施釉されていない。12は口径9.4cm、器高3.5cmのものである。体部中位に稜をもつ、釉は黄白色で体部下半は施釉されていない。

青磁

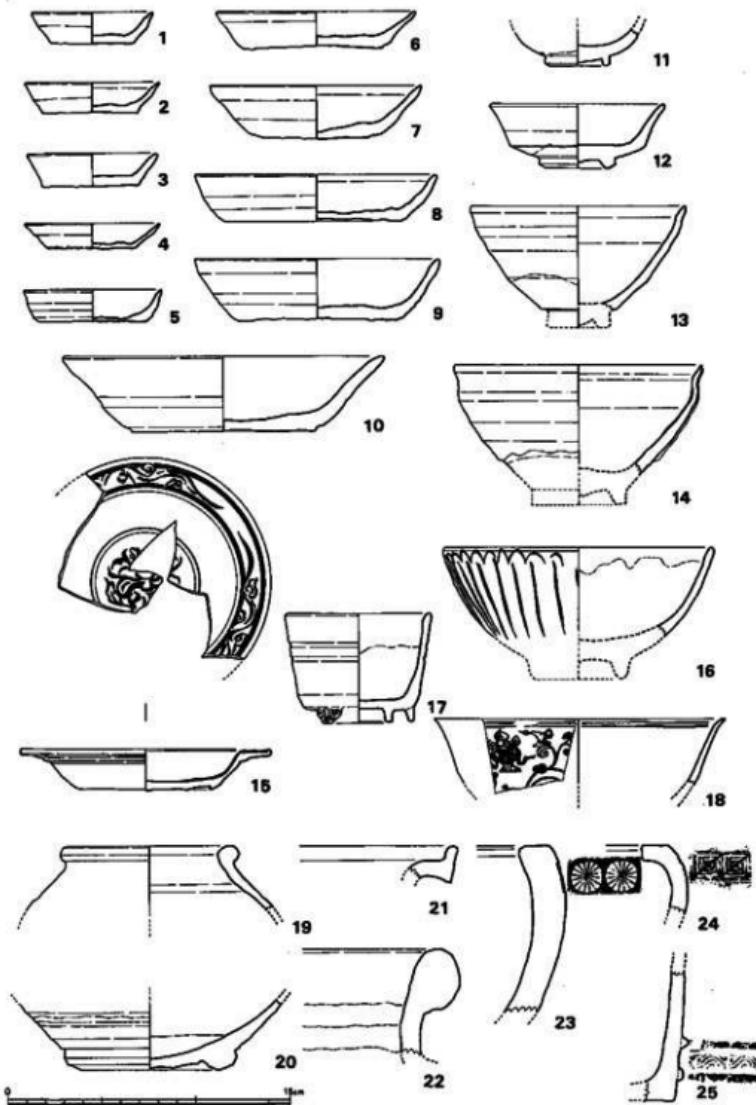
皿（15） 口縁部を「く」字状に折り曲げ、上面を平らにして削りによって若干凹ませ、この部分に片彫りの草花文を描いている。見込みにもヘラによる草花文を描いている。底部は基筒底で、釉は灰色気味のくすんだ緑色を呈し、外面の口縁屈曲部は露胎で赤褐色を呈する。

碗（16） 口径14.4cmのもので、体部下位は丸味があり、口縁部へは余り開かない体部をもつ。外面にはヘラ描きの蓮華文があり、弁の先端は連続した山形の刻線によって表現している。釉は口縁部付近が厚く、釉ダマリがみられる。釉色はくすんだ緑色を呈し、胎土は灰白色の粗いものである。

香爐（17） 口径7.8cm、器高5.9cmのもので、直線的な体部をもち、口縁部は丸くなっている。体部中位に2条の沈線がある。また体部と底部の境界に3個の獸足を貼付ける。この内側には獸足よりやや高い高台を削り出している。内面は体部中位以下は施釉されず、その他は全面にくすんだ緑色の釉がかかっている。

染付

碗（18） 小片からの復原であるので口径は不確実であるが、14.5cmを測る。外面には唐草文の一部がみられる。文様は青味のある白磁に深い青色で描かれている。口縁部内外面には2条の線が描かれている。



第41図 黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図

黒釉陶器

碗（13・14） いずれも底部が不明である。13は口縁部下の返しがあまりなく、内弯した体部をもつ。釉色は茶褐色のものである。以前調査された時の資料にも同様のものがある。14は口縁部下の返しが強く体部は直線的である。茶褐色（飴色）の釉は厚く、硝子質のものである。

褐釉陶器

壺（19） 茶褐色の釉がうすくかかったもので、胎土は砂粒の混入が目立つ、須恵質のものである。

鉢（20） 緑色を帯びた茶褐色の釉のもので、内面の一部と体部外面下半は露胎となっている。内底と壺付に重ね痕があり、その周囲は赤く発色している。

無釉陶器

甕（21・22） 21は口縁部の小片で、小さなN字口縁のものである。常滑焼と考えられる。22は口縁部を折り曲げ玉縁にしている。備前焼と考えられる。

土師質土器

火鉢（23） 胎土に砂粒の混入が目立った粗いもので、口縁部下に菊花文のスタンプがある。

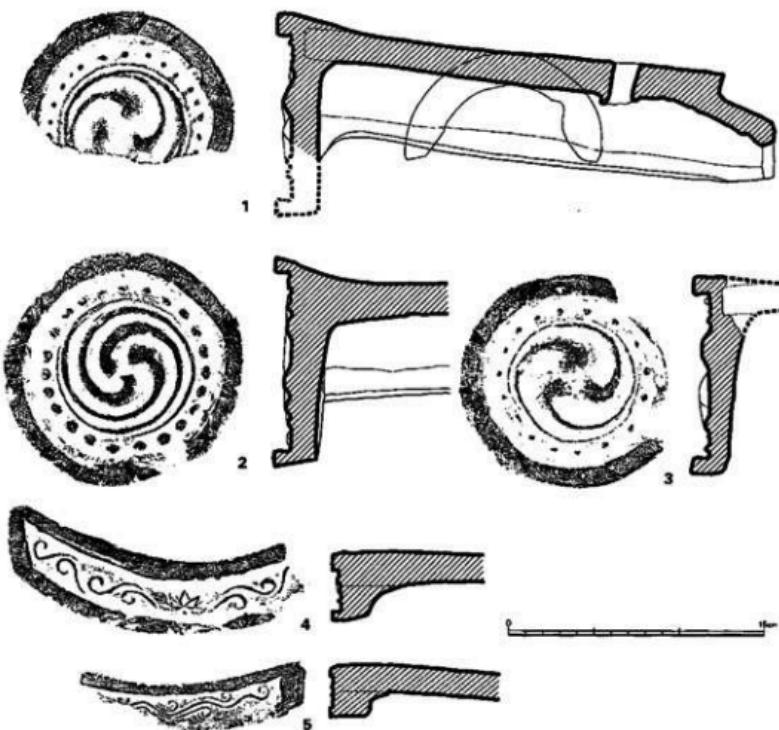
香爐（24・25） 25は口縁部を内へ直角に折り曲げ、上面を平らにしたもので、口縁部下に雷文のスタンプを有する。25は底部片で2本の凸帯をめぐらし、その間に雲形のスタンプがある。器型が小振りであることから香爐としたが、別の用途のものかもしれない。

瓦類（第42・43図、図版38・39）

瓦類は主に遺構の上に堆積した灰白色砂質土、黑色土から出土したが、出土状態については特にきわだった特徴は認められない。出土した瓦は丸・平瓦のほか、三つ巴文軒丸瓦30点、均正唐草文軒平瓦24点、および雁振瓦、熨斗瓦、鬼瓦がある。以下主なものについて述べる。軒丸瓦は4種類に分類できるが図示した以外のものはわずか1点であり、記述については省略する。1は、瓦当径12cm内区は右巻きの巴文で頭部は丸味を帯びている。尾は長く半周するあたりで他の巴と接している。内区と外区は圈線で画され、外区には小粒の珠文を配するが規則性が認められない。一部に削割れと思われる痕跡が認められる。周縁は比較的高い。瓦当裏面はていねいにナデられている。丸瓦部凸面には幅3cm単位の縦方向に走る縄目が残っている。この縄目叩きの後ていねいにナデが施されている。丸瓦部凹面は細かな布目と一部に糸切り痕が残る。両側縁はていねいにナデされている。玉縁先端から9cmのところに径14mmの釘穴が凸面から凹面向かって穿たれている。表面は灰褐色を呈し焼成は緻密である。2は瓦当径12cmで内区巴文の頭部は左巻きでやや尖り気味で尾は長く半周する。外区にはボタン状の比較的大きな珠文23個を配し、周縁は高く丸瓦の取付けは比較的低い。丸面凸面はていねいにヘラナデされている。この瓦は今回出土した軒丸瓦では古い方に属するものであろう。3は瓦当径12cmで内区は右巻きの巴文で頭部は丸味を帯びている。尾は長く約3分の2周する。外区には小さな珠文17個を

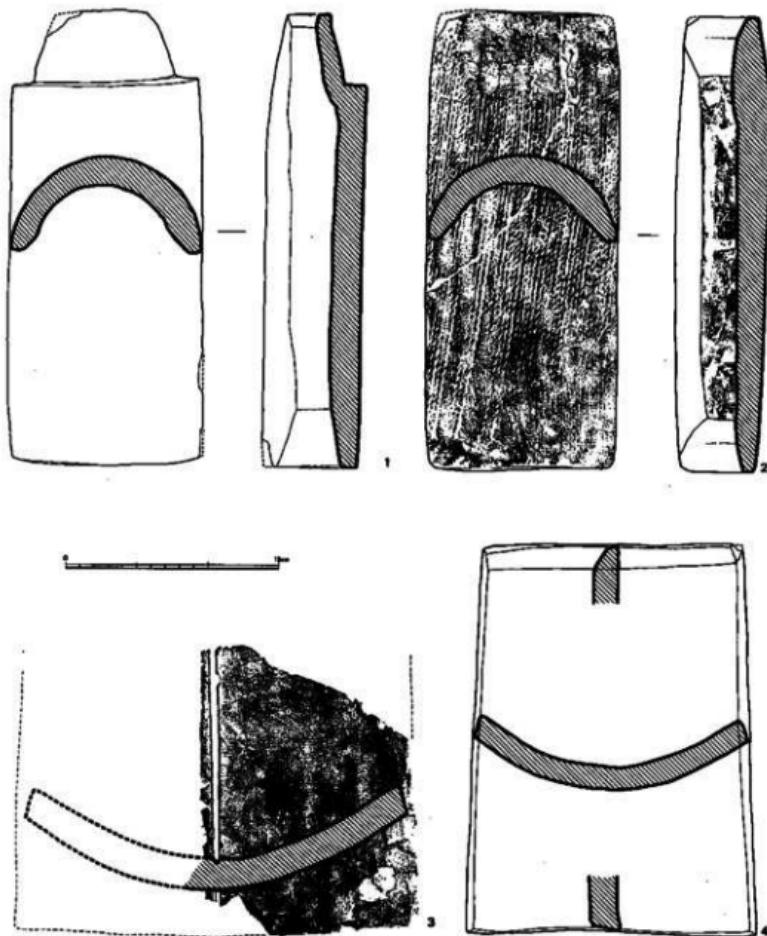
配し、周縁の立上りは高く、丸瓦は上縁近くに取付けられている。取付部には丸瓦の端部のへラによる刻みの痕跡が残っている。瓦当裏面は指ナデによって調整されている。軒平瓦は5種類に分けることができる。4が最も多く半数以上を占める半載菊花状の中心飾の左右に四回反転する葦草を配している。周縁は比較的低い。丸瓦部凸面は縱方向にていねいなヘラナデによって調整している。5は出土した破片いずれもが中心飾を欠いているため瓦当文様全体の構成については不明である。左右に繊細な葦草が流れる。外周は低く、両側縁の幅が広く、6よりは時代的に下るものであろう。

以上述べた軒瓦では一応1と5、2と4のセット関係が想定できるが、出土点数が僅少であるため断定することはさけておきたい。



第42図 軒先瓦拓影・実測図

次に丸瓦は2種類ある。第43図-1は全長32cmで凸面はかすかに縄目の叩きが認められるが全面的にナデによって調整されている。凹面は細かな布目が残り、一部に糸切り痕が残る。周縁部は大きくヘラケズリされている。胎土は比較的砂粒が多い。2はいわゆる行基式で全長32cmである。凸面には従方向の叩きが顕著に残っている。一方の端部は幅5cmにわたって大きく



第43図 丸・平瓦および熨斗瓦拓影実測図

ヘラケズリしている。凹面は細かな布目で周縁はヘラケズリが顕著である。平瓦は全長27.5cm、広端幅20.5cm、狭端幅18.5cmで比較的小形である。凹凸面ともナデによって調整されており、凹面狭端部はヘラケズリとヘラナデによって調整されている。熨斗瓦はいわゆる割熨斗で半載していないものが多くそのまま平瓦として使用されたものであろう。3はそのうちの1点で復原すると全長約32cm、広端部の幅が約28cmになる。中央部に縦方向にヘラによって半載のための線が刻まれている。雁振瓦は正確な全形を知り得るものはないが、復原すると全長28cm、幅22~23cm程度の比較的平坦なものと、全長は不明であるが幅25~26cm程度の傾斜の強いものとの二種類がある。いずれも表面は繩目の叩きをていねいにすり消し、裏面は丸瓦部の一部に布目を残し、他はていねいなナデによって調整されている。胎土は比較的砂粒が少なく、緻密なものが多い。

木製品

今回出土した木製品は量、種類とも多く、当時の日常生活様式を知る上で興味深い。出土品のうち主要なものを報告するにとどめ、各構造、層位別の出土品については第1表にまとめた。出土量では暗茶色土層と腐植土層がきわめて多く、ついで黒灰色土層とSK1470に多かった。また、木器はSB1440建物の周辺に殆んどが出土していることから建物の性質を検討する上でも注意をひく。

第1表 第57次調査出土木製品一覧表

遺構・土層名	木 製 品
黒灰土層	挽物容器1、箸、竹籠1、足駄の箇1、有孔円板1、方形曲物、栓状木製品1、用途不明木製品
暗灰土層	切出形木製品1、箸、漆容器1、用途不明木製品
暗茶色土層	箸多數、切出形木製品7、円形曲物4、針形木製品1、足駄2、方形曲物3、守護札状木製品1、木札1、杓子1、鑿柄?1、横帯3、漆容器8、栓状木製品6、櫻形木製品2、建築部材、桶材、木炭、用途不明木製品多數
茶色砂層	漆容器片1、出納のある角材1、その他角・板材
腐植土層	切出形木製品3、箸、鉤柄2、有孔円板1、足駄1、刀子形木製品2、漆容器8、蓋形木製品1、桶材、用途不明木製品
黒灰色砂土層	漆器片、箸、栓状木製品1、用途不明木製品1
焼土層	箸、櫻形木製品1、用途不明木製品3
青灰色粘土層	箸、蓋形木製品2、円形曲物(蓋)1、木炭、板・棒材
SK1470	箸多數、漆蓋2、鉢1、漆容器4、蓋形木製品3、栓状木製品3、麗形木製品2、方形曲物1、墨書き片、箱部品?1、有孔円板1、用途不明木製品
SK1471	足駄1
SK1472	木造像彫像頭部1、木片
SD1429-A	漆容器1、箸、用途不明木製品6
SD1429-B	箸、紡錘車1、麗形木製品1、用途不明木製品2、板・角材
SD1433-B	箸、卒膳婆
SD1436	箸、板・棒材
SD1437	箸、切出形木器1、棒・板材
SD1438-1439	足駄1、有孔円板1、箸、角・板材
SD1443	箸、漆容器
SD1446	横帯1、漆器片
ピット・その他	櫻形木製品1、円形曲物1、漆容器、板・角材

食器（第44図、図版42）

漆蓋（1～3） 1は蓋2のつまみになる可能性がある。一辺2cmの立方体の各隅に2等辺3角形の面取りを行ない、14面体になる。下面には0.8cmの円孔をあけ、別に製作した円棒の軸を挿入する。軸は先端を欠損する。軸部及びつまみの下面是素地のままで、他の面に黒漆をかける。SK1470出土。2は円板を手持ちの削りによって加工したものである。中央に0.8cmの方孔を穿ち、孔を中心として彫器を用いたV字形の刻線が放射状に走り、この先端はV字形の輪花状を呈する切り込みを入れ、花卉を表現している。現状から復原すると11弁となる。天井部から体部へ移る境に段を有する。外面は黒漆をかける。外径6.2cm、内径3.6cm 現存高 2.1cm、SK1470出土。3は内面を若干削りぬき、体部外面は2段ほど段がつく。表面に黒漆がかけられる。天井中央部には銅製の鉢をついている。外径12.2cm、内径11.0cm、高さ3.9cm、SK1470出土。

蓋形木製品（4～6） 円板を手持ちの削りによって加工したものである。

4・6は表面に黒漆をかける。5は白木のままで上面に墨書きされているが、文字は判読できない。いずれも小形容器などの蓋になるものと思われる。4は外径4.3cm、内径3.6cm、高さ1.2cm。腐植土層出土。5は内径3.2cm、高さ0.6cm。SK1470出土。6は外径5.3cm、内径4.5cm、高さ1.1cm。青灰色粘土層出土。

挽物容器（7） 一本から内部を削りぬいている。体部外面は口縁下2.3cmから上を1段薄く削り、底部は周縁に沿って幅3mm、高さ1mmの高台を削り出し、内外面は黒漆を塗っているが、剝落してその一部のみが認められる。口径5.8cm、高さ5.6cm。黒灰色土層出土。

漆容器（8～19） 8～14は皿、15～19は椀である。いずれも一本を挽いてつくっているが、10、12～14の体部外面は木地はケズリの凹凸そのままを残して漆をかけている。内外面とも黒漆塗りのものは10、18。内外面黒漆の地に朱漆で文様を描くものは8、9、12、13、14。外面黒漆、内面朱漆のものは15、16で15の外面は朱漆で文様を描く。内外面とも朱漆のものは11、17、19で、11、19は口縁端部が黒漆塗りである。11、18の高台部は黒漆塗りである。出土品のうち文様は例外なく朱漆で描かれている。8は牡丹を表現したものか。9は菊と思われる。15は竹か籠と思われる同一構成の文様を外表面に転回している。10、15は底部外面に記号様の陰刻がある。

生活用具（第45図、図版43）

杓子（1） 一本からくり出したもの。柄部は柄尻から13.5cmほどで145°の角度をなして折れ曲がる。柄尻とその屈折部の外側面は樹皮をはぎとったまま未加工であり、この

	口 径	高 さ	備 考
8	9.4	(2.4)	腐 植 土
9	10.6	2.2	SK 1470
10	10.5	2.2	腐 植 土
11	9.3	2.3	。
12	(9.8)	(2.2)	暗茶色 土
13	9.5	3.0	腐 植 土
14	9.7	2.6	。
15	15.0	5.0	暗茶色 土
16	15.5	5.9	SK 1470
17	15.0	6.9	腐 植 土
18	13.4	6.9	SD1429A
19	19.0	(5.2)	SK 1470

第2表 漆容器計測表（ ）は現存値

2辺を延長すると材料は径8cm前後の樹枝に復原される。柄部の断面をカマボコ形に削り、匙部は内面を切りぬいて受皿状にしており、汁器に使用されたものである。長さ31.8cm、柄部断面は 1.8×2.1 cm、匙部は長さ7.6cm、幅4.6cm、深さ1.2cm、厚さ1.4cm。暗茶色土層出土。

栓状木製品（2） 小枝を切断してつくり、上部はV字形の溝を彫り、下半は木口へ向って削るが、他の部分は皮をはいだままで加工はしていない。上部の木口面から、径2.5mm、深さ1.3cmの小孔が穿たれているが、孔は中心をはずれている。長さ7.8cm。上部径2.1cm、下部径1.6cm。黒灰色砂土層出土。

円形曲物（3） 容器の蓋と考えられるものである。蓋板に低い側板を桜皮で縫いつけたもの。蓋板周縁より1.5cmほどの内側には側板を縫いつけるため、2孔1対のとじ孔を8ヶ所にあける。側板は円筒形に曲げ両端を桜皮で縫いつける。蓋板の上面及び内面一部に刃物キズがみられる。蓋板は外径17.0cm、厚さ0.4cm。側板は径15.0cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm。総器高は1.7cm。青灰色粘土層出土。

横櫛（4・5） 脊の上部は弧状をなし、表裏面は滑らかで、研磨したものと思われる。齒は表裏から鋸状のもので交互にひき出したものである。4は齒の間隔があらい。現存幅3.8cm、高さ4.3cm、厚さ0.7cm、齒の長さ3.0cm。3cmあたりの歯数は10。暗茶色土層出土。5は歯の間隔が狭い。幅7.2cm、高さ4.2cm、厚さ0.8cm、歯の長さ2.9cm、歯数75。3cmあたりの歯数は33。SD1446出土。

木札（6） 頂部は鈍い圭頭状に、下部は両辺の幅を狭め、先端を平坦につくる。上部には両側辺からV字形の切り込みを入れる。表面に墨書きされているが、裏面にはない。文字は判読できない。長さ12.8cm、最大幅3.05cm、厚さ0.5cm。暗茶色土出土。

足駄（7・8） 7は一本から台部と歯部を削り出した連歯のもので、台部は長楕円形につくる。前壺は台幅の中央に穿たれる。足づれから左足用と思われる。後半部は大きく欠損するが、後鼻緒の一部がかろうじて残っている。歯部は四隅に面取りを行なう。現存台長14.1cm、台幅8.9cm、歯幅8.7cm、歯厚3.1cm、高さ3.6cm、前壺孔1.0cm。SD1438、1439出土。8は一本からつくる。長楕円形の台の中央部を鑿状のもので削りぬくが、前部及び側面の周縁は2cm、後部の周縁からは5cmほどを残して歯部とする。鼻緒は、後半部の1ヶ所を全く欠失する。歯部の周縁は台部から一段内側に削り込んでいる。前壺は台幅の中央に穿たれる。周辺に足ずれがみられる。長さ19.8cm、台幅8.4cm、高さ2.8cm。前壺孔1.5cm。SK1471出土。

工具類（I）（第46図、図版44）

刀子形木製品（1・2） 扁平棒材を加工してつくる。1は小形のもので、身部に数回の削りを加えて刃をつける。中央部では身の幅を1段細くして柄部を表現する。長さ11.4cm、身の長さ5.7cm、身巾1.0cm、柄巾0.75cm、厚さ0.2cm。2は同型のもので1よりひとまわり大きいもの。柄尻は鋭い圭頭形につくる。刃部は表面から側縁にそって幅2mmの面取りを行ない表現す

るが、裏面はこれを行なわず刃の断面は鋭く尖っていない。長さ20.4cm、身の長さ7.9cm、柄巾1.0cm、厚さ0.4cm、1・2とも腐植土出土。

切出形木製品（3～9）先端は切出形で、鋒を一直線にしたものである。長さ20cm前後の小形（3～6）と30cm前後の大形（7～9）とに分かれる。身の長さは全長の約5ほどにとり、刃の基部から側面を弓状に削りこんで幅を細くし、柄部をつくる。身部に数回削りを加えて刃をつけるが、3・4・6・7はとくに片面から多く加えている。ただし、刃部は鋭く尖がらず、台形をなすものが多い。柄部の断面は長方形で、4は柄尻が幅広くなる。7は柄尻が柄元より次第にひろがり、柄尻から2cmで径1.3cmの孔を両面から穿つ。8は柄尻から1.7cmで、径0.2cmの小孔を錐で穿つ。竪あるいは鍛などの機能が考えられる。大きさは第3表に示している。

工具類(II)・用途不明木製品（第47図、図版44）

錐柄（1）断面を円形に削り、柄尻をやや細めにする。柄元は1段低い切り込みを入れるが、この部分に幅1cmで茶白色の粘土状に変化したものが認められ、何かを巻きつけて補修したものと考えられる。鉄製の錐身部は落ちているが、断面方形の茎孔をとどめる。長さ23.9cm、中央径1.6cm、茎孔0.7×0.5cm。腐植土層出土。

笠形木器（2・3・4）一端を剝状にするものである。2は下部断面を長方形に、上部断面を梢円形につくり、先端部は摩滅している。表面に小刀の刃物キズが認められる。長さ20.0cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm。3は上部の片面側をとくに削り、断面をカマボコ形にする。長さ25.0cm、幅1.3cm、厚さ0.6cm、2、3ともS K1470出土。4も3と同様な加工、形である。先端を若干欠損する。現長22.0cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm。

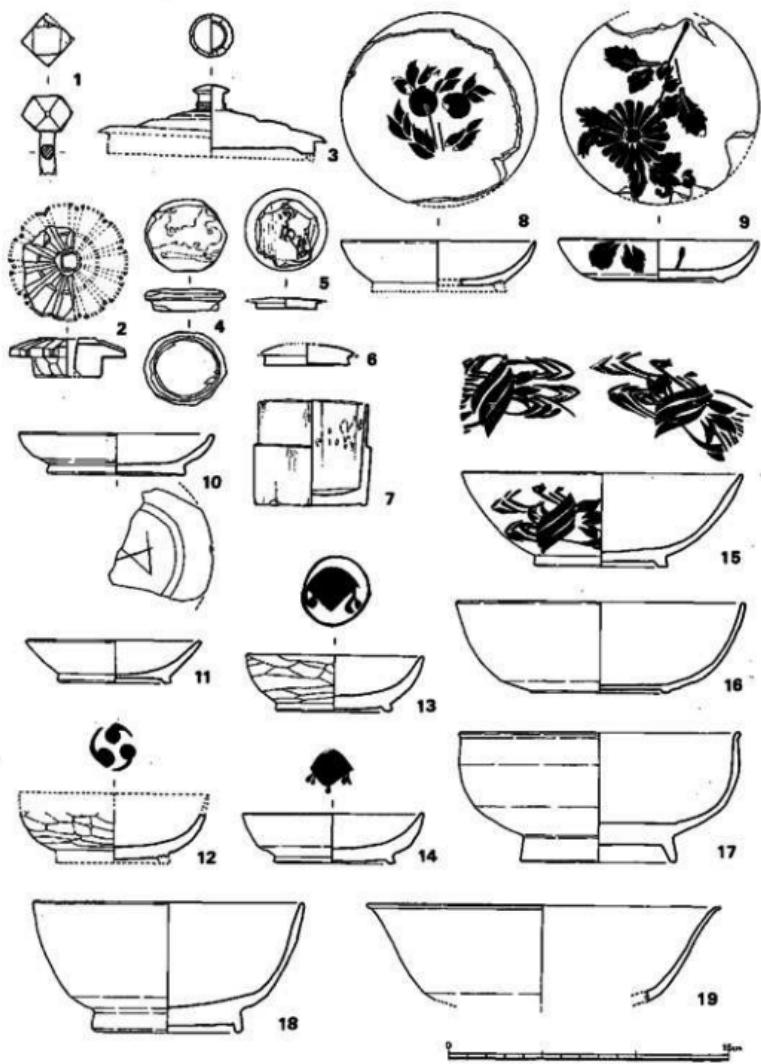
用途不明木製品 5は断面長方形の棒の両端に柄をつくり、中央部分の一側面から半円形のくり方をいれる。両端の柄は表裏と一側面の3方から加工したもので、柄の中央には2mmの円孔を錐で穿つ。全長20.0cm、幅2.4cm、中央幅1.8cm、厚さ1.2cm、柄の長さ1.5cm、幅2.1cm、厚さ0.7cm。暗茶色土層出土。

16は大形のもの。両端の柄は1側面を段状に欠き取り、表裏は木口の方へ若干削りこむ。木口の四隅は面取りを行なう。中央部分は一例面から鈍いV字形のくり方をいれ、対称の側面はわずかに弓形に凹む。長さ42.1cm、最大幅5.0cm、最大厚1.6cm、柄の長さ3.0cm前後、柄の幅2.2cm前後、厚さ1.2cm、S D1429-B出土。5・16は柄などの把手か。

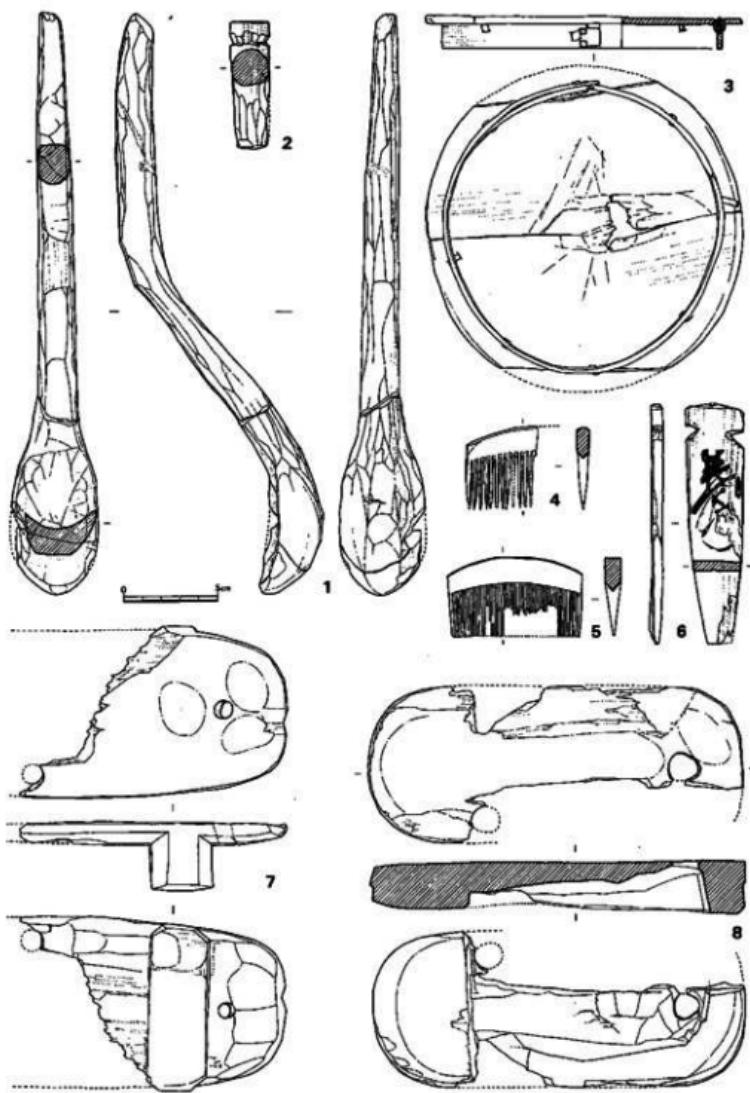
6は断面方形の柾目棒材の両木口にL字形の切り欠きを入れたもの。一端は欠損している。現存長20.7cm、断面1.2×1.4cm、一端の切り欠きは1.1×0.8cm。

	長さ	身の長さ	身幅	柄幅	厚さ	備考
3	19.0	6.6	3.1	1.7	0.4	暗茶色土
4	20.9	7.1	3.5	1.7	0.5	暗茶色土
5	22.3	6.0	2.6	2.0	0.3	腐植土
6	23.3	7.1	3.5	2.6	0.7	S D 1437
7	31.9	9.3	4.0	2.3 2.8	0.7	暗茶色土
8	31.8	7.9	3.3	2.2	0.8	暗茶色土
9	現存長 (24.0)	8.0	3.5	2.5	1.1	腐植土

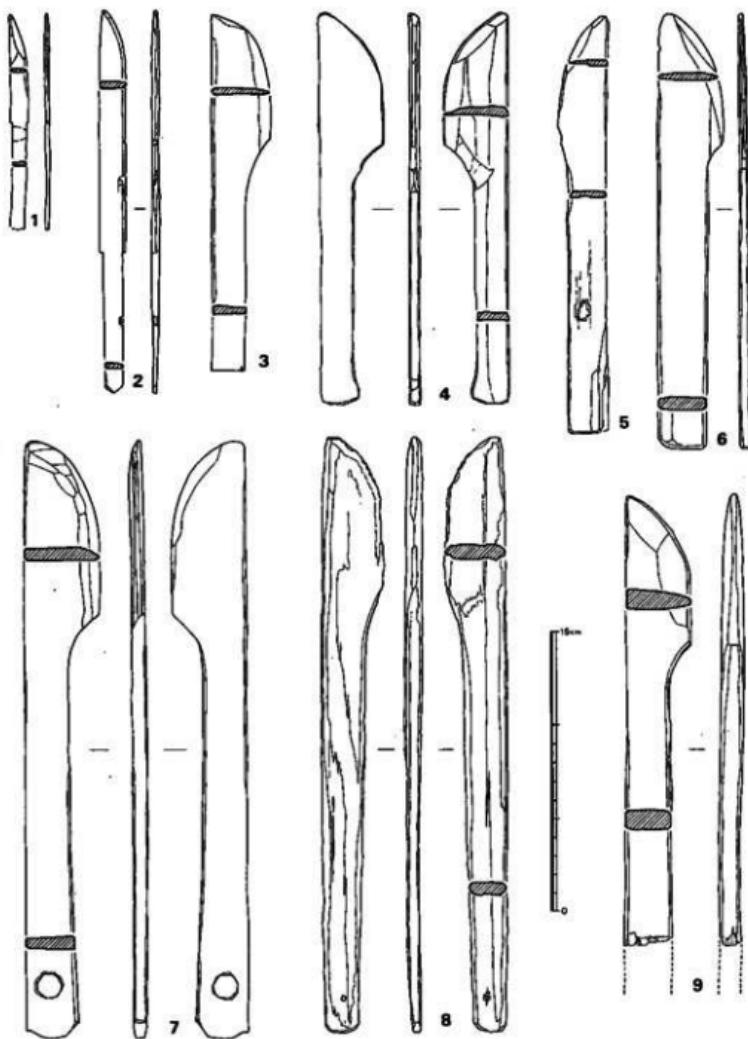
第3表 切出形木製品計測表（単位cm）



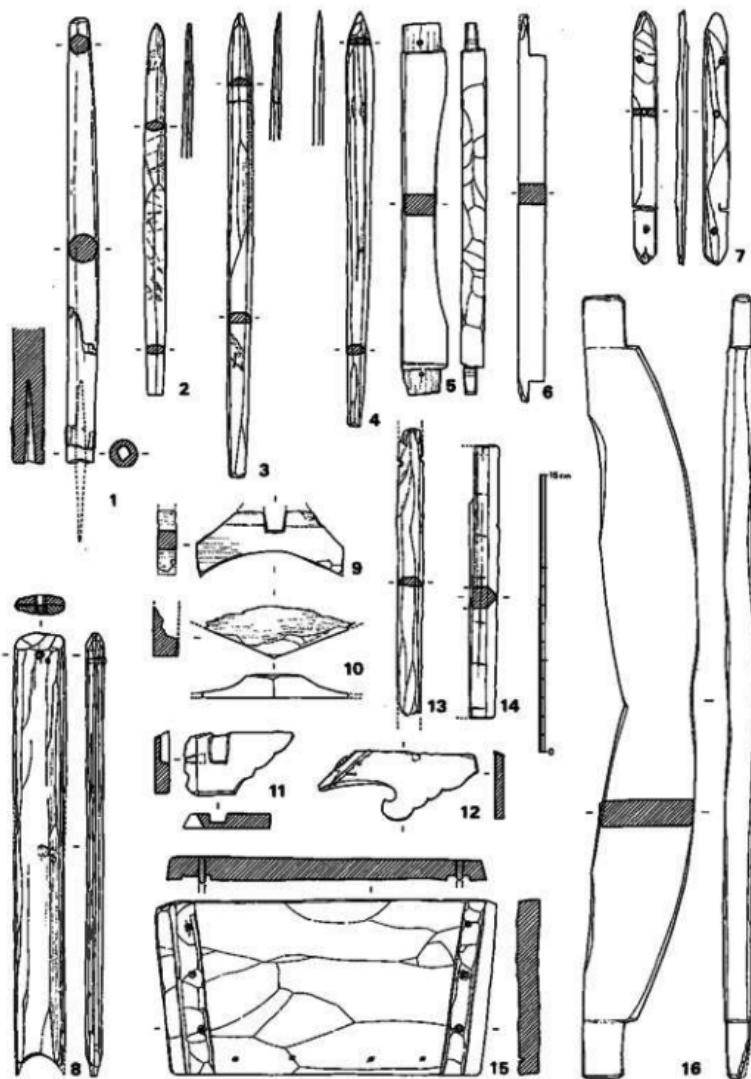
第44図 木製食器実測図



第45図 木製生活用具実測図



第46図 木製工具類実測図 (1)



第47図 木製工具（2）用途不明木製品実測図

7は板材の両端を尖頭状にくりり、錐で径2~3mmの小孔を穿ったもの。孔の間隔は一定していない。長さ13.6cm、中央幅1.3cm、厚さ0.5cm、暗茶色土層出土。

8は同形のもの2枚を重ねて木釘でとめている。1枚の表面は甲高に削り、裏面は平坦につくる。2枚を合わせて上端に径4mmの円孔を穿ち木の目釘でとめる。目釘穴の下方近くに木釘をうつが、後の補修ないしは、目釘穴を穿つ前に固定したものか不明。下端は弧状のくり方を入れる。2枚の間に何かをはさんだものと考えられる。復原長23.7cm、現存長23.1cm、幅2.8cm、一枚の最大厚0.5cm、SK1470出土。

9は全面を加工する。下部は弧状に欠き取り、上部には幅1.0cmほどの凹字形の欠き取りがある。何かの台の部分か。幅7.9cm、現存高3.5cm、厚さ1.0cm、暗茶色土層出土。

10は調度品などの一部とみられる。下面をのぞき、黒漆塗りの地に金色で着色している。残存する2側辺間の角度は135°である。現存長7.8cm、最大高さ1.3cm前後、黒灰色土出土。

11は板材を台形に加工し、斜めの一側辺に雲形のくり方をいれている。上辺は裏から、左辺は表面から面取りを行なって断面を三角にしている。表面から方孔を刺りぬき、裏面から蟻穴をつくり難手仕口とする。調度品などの一部品と考える。横5.8cm、縦3.3cm、厚さ0.8cm。方孔は1.5×1.0cm、深さ0.5cm、枘穴は幅0.2~0.5cm、最大長1.2cm。

12は板材の側辺を削り雲形に加工している。上辺は裏から、左辺は表面から面取りを行ない、断面を三角形にしている。この部分に漆が付着しており、他の部材に接合したと考えられる。調度品などの台か脚の一部と思われる。横8.5cm、縦3.7cm、厚さ0.5cm、腐植土層出土。

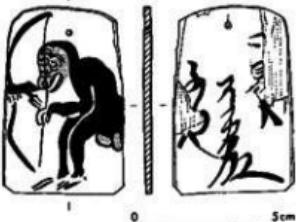
13は板材に長手方向の削りを行ない、表面を甲高に削り、裏面は平坦につくっている。両側辺に径3mmの穿孔した跡があるところから、この製品は2次的に加工されたものと思われる。現存長15.4cm、幅1.4cm、長さ0.5cm、SK1470出土。

14は柾目板材の一側辺に表裏から面取りを行ない、断面を三角としている。表面には1本の横線とこれに直行する7本の縦線を目盛状に墨書きしている。縦線の間隔は2.1~2.4cmまでばらつきがある。長さ14.6cm、現存幅1.4cm、厚さ1.2cm。暗茶色土層出土。

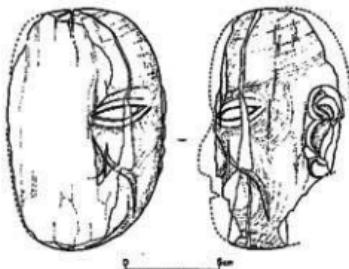
15は板材を台形にして上辺の両隅に隅切りを行なう。下辺と105°開く左右両辺に沿って両辺から内側0.9cmのところで幅1.2~1.4cmの溝を凹型にくりこみ、難手仕口とする。裏面から他の部材に固定するために、径3~4mmの木釘を溝中央3ヶ所に打ち、下辺に沿って0.8cm内側には表面側から木釘を打って固定したと思われる未貫通の小孔がある。左右両側の断面は80°程の角度で、裏面側から面取りがなされている。箱の部品と推定すると表面側を内面にしたと思われる。上辺18.3cm、下辺15.8cm、幅9.3cm、厚さ1.2cm、SK1470出土。

守護札状木製品（48図、図版43）

長方形板材の上部を若干幅狭くつくる。頂部を弧形に削り、下辺両端は隅切りを行なう。上部中央に径2mmほどの小孔を穿つ。表面には弓を弾く猿の姿が描かれているが、その体部は没



第48図 守護札状木製品実測図



第49図 木造僧形像頭部実測図

骨描写の手法を用い、面部や手足は指線を用いる。深い朱を面部と尻部にさしている。裏面は墨書きされているが、判読できない。守護札のような用途のものであろう。長さ6.6cm、最大幅4.3cm、厚さ0.2cm、暗茶色土層出土。

木造僧形像頭部残欠（第49図、図版45）

頭部半分の木部に、左面部表面をのこす当像は、樟材一木彫式の頭部とみられ、地方での中世末葉の影出と考えられる。

剃髪の頭部と表情の一部から窺って、僧形像のようであり、当寺宗派の祖始像あるいは当寺の開山か歴代像であったと思われる。現頭長11cmほどで、おそらく尺余の坐像であったと考えられる。頭部中心に本心があり、頭部内割りの形跡はない。出土した遺構はSK1472である。

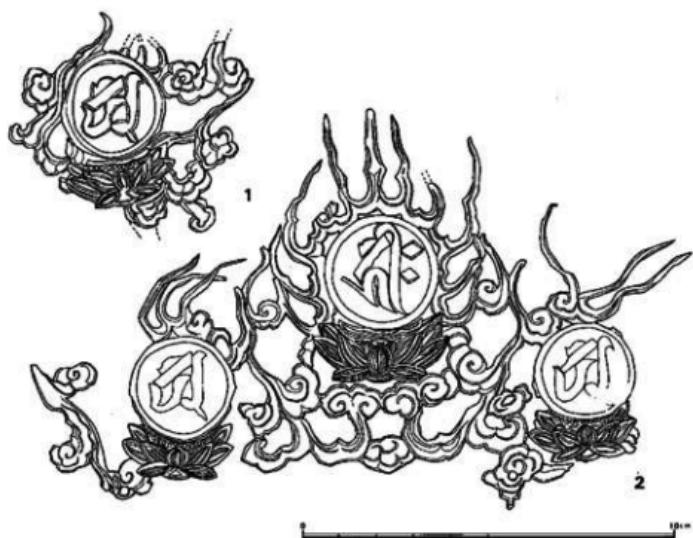
金属製品（第50・51図、図版46）

銅製宝冠残欠（1・2） 今回の調査で出土した1は、龕字を蓮台にのせて周間に雲文をあしらうものは、仏像宝冠の一部である。というのは先に当寺跡から出土し九州大学に所蔵されているほぼ完好な宝冠（2）と同巧同類のものであり、同時期に製作されたものであることもわかる。

種子を別につくって円板にとりつけ、それを嵌める円環を追錫してつくり、種子を受ける蓮華台を別錫し、留め金で雲文に嵌め込んでいる。全高のわかる九大藏宝冠でみると、ほぼ三角形に配した透し雲文の中央に龕（キリーグ）を蓮台にのせて取りつけ、左右に龕（ア）字のものを同様にとりつけている。雲文のところどころに細い針金がのこり、環路をとりつけていたものであろう。龕は阿弥陀の種子であり、観音の化仏としてつけられたと考えられ、両脇の龕字は諸仏の通種子で諸仏に通じるもの用いたと思われる。

阿弥陀脇侍觀音または複数の正觀音像とも考えられるが、これだけでは当寺安置の尊像を特定できない。

出土層位の判断では中世以降と考えられていて、鋳造の状況からも室町時代と思われ、中世



第50図 金属製品実測図（1）

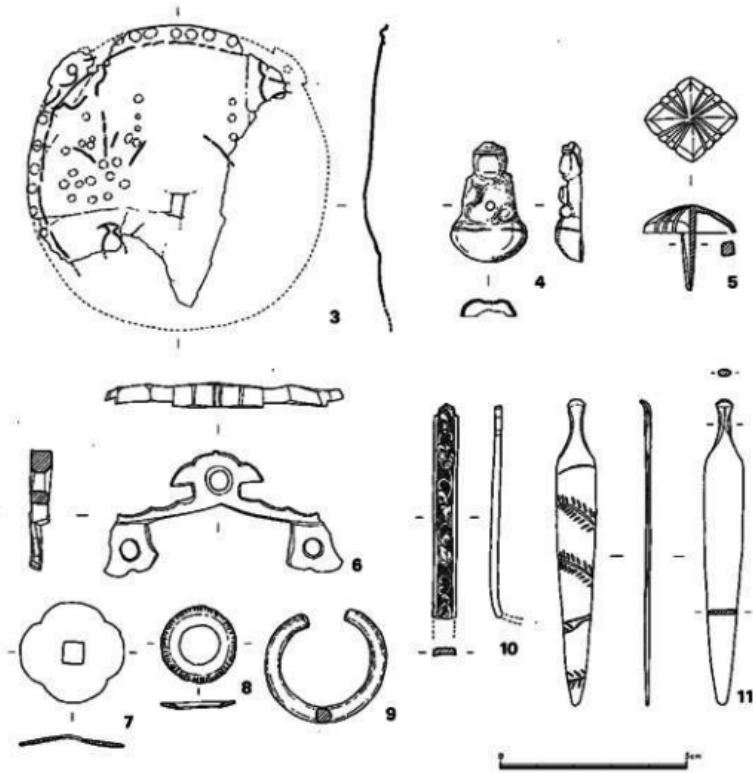
の宝冠と判断できるものの少ないなかで貴重の遺品と云えよう。出土した層は黒灰色土層からである。

銅板打出し御正体・銅板鏡板（3・4） 薄い銅板の打出しでつくられた尊像は蓮台共総高3.3cmのもので、頭部は如来形のものと思われ、右手は胸前にして、左手は膝上に安じているが、尊名は阿弥陀、釈迦、薬師などいずれとも特定しがたい。腹部の穴は鏡板に取りつけるための留め金のものと思われる。

一方、復元すると径8.3cmほどの円形銅板のこりがあり、併出とはいがたいが、同材、同製作のものが、付近で出土している。

中央や、下部に5mm×3mmほどの長方形の切り込みがあり、尊像留め金具の穴である。また、向って左上には釣り環をつくり、縁は裏から打って珠文をあしらって、圓線を跳影り風に打ち、尊像の右には花瓶と蓮花とを同じく跳影り風に打って線刻描とし、裏から打った珠文を散らして花をあらわしているようである。御正体は黒灰色土層出土のもので、鏡板は茶紗層から出土した。

飾鉄（5） 鋳造品で頭の平面は菱形をなし、頭部の頂点から3本単位の凹線が各辺の中央部に走る。鉄部分は一辺3mmの断面方形をなす。頭部表面は渡金されている。頭部長軸2.4cm、頭部厚1.5mm、長さ2.3cm、青灰色粘土層出土。



第51図 金属製品実測図（2）

飾金具（6～8） 6は鋳造の銅製品である。鶴頭形の鉢を有し、その中央に径5mmの孔を有する。鉢の下部では160°の角度で左右の2枝に分かれ各枝の上辺は山形の装飾をなす。両端下部は表面側が一段低くつくられて中央に径5mmの孔を有し、他材などに接合する部分と思われる。横幅6.3cm、鉢幅2.5cm。鉢の高さ1.5cm、鉢の厚さ0.6cm。青灰色粘土出土。7は四弁をかたどった薄い金具で、中央に1辺6mmの方孔がある。表面に金メッキが若干のこり、裏面には朱色の塗料が若干付着した金銅製品である。長径2.8cm、厚さ0.1cm、暗茶色土層出土。8は環状の金具で中央孔は1.1cm。周縁より低くなっている。先の細いタガネで周縁に毛彫を行ない文様を施したもの。表面は金メッキされた痕跡がある金銅製品である。S D1446出土。

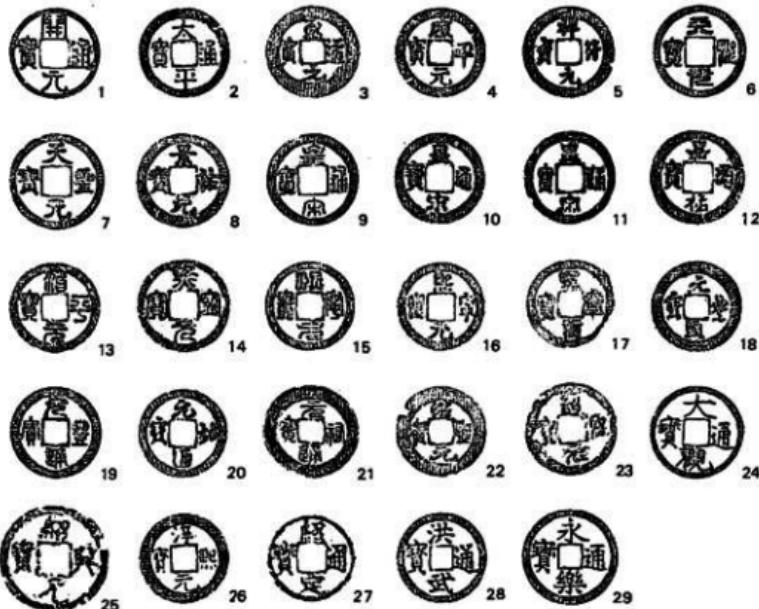
耳環（9） 表面は剝落して銅の地がみえる。径4mmの銅棒を環状に曲げたもの。暗茶色土層出土。

金具（10） 一端を欠損するか、端を山形にし、端部より6.5mmに径1.5mmの小孔がある。横断面は若干弓形をなす扁平長方形である。周縁に沿って1mmほど内側に細線を刻して区画し、その内部に唐草文を毛彫りして表現したものである。唐草文の外側は魚々子彫りを施す。幅6.0mm、現存長5.7cm、厚さ2mm。

耳搔状銅製品（11） 銅板で下端を剣状につくる。表面には毛彫を行ない最上位は弧状の線で区画し、その下の4ヶ所にシダ様の文様を表現する。刻線文様は側辺線では不自然に消えているので、もともと施された別の製品を2次的に加工して耳搔にしたと考えられる。現長8.2cm、最大幅1.1cm、厚さ0.1cm。腐植土層出土。

銅錢（第52図、第4表）

今回出土した銅錢は総数38点で、このうち1点は破片であるため分類できず、また1点は「寛永通宝」の破片である。錢種および初鑄年代については第4表に記す。



第52図 銅錢拓影(2/3)

銭種	初鋳年代	出土遺構・層位	銭種	初鋳年代	出土遺構・層位	銭種	初鋳年代	出土遺構・層位
1 開元通宝	621	青灰粘質土層	11 皇宋通宝	1039	麻植土層	21 元祐通宝	1086	青灰砂土層
2 太平通宝	976	黒灰土層	12 嘉祐通宝	1056	S X 1449	22 紹聖元宝	1094	暗茶色土層
3 至道元宝	955	黒灰土層	13 治平元宝	1064	黄茶色土層	23 紹聖元宝	1094	黒灰土層
4 成平通宝	998	麻植土層	14 圣宋元宝	1068	黄茶色土層	24 大觀通宝	1107	S D 1433B ピット
5 拜符元宝	1008	黒灰土層	15 熙寧元宝	1068	麻植土層	25 紹興元宝	1131	黒灰土層
6 天聖元宝	1023	麻植土層	16 熙寧元宝	1068	麻植土層	26 淳熙元宝	1174	黑色砂質土層
7 天聖元宝	1023	暗茶色土層	17 熙寧重宝	1071	青灰粘質土層	27 紹定通宝	1228	青灰粘質土層
8 景祐元宝	1034	暗茶色土層	18 元豐重宝	1078	暗灰土層	28 洪武通宝	1368	暗茶色土層
9 皇宋通宝	1039	暗茶色土層	19 元豐通宝	1078	暗茶色土層	29 永泰通宝	1412	暗茶色土層
10 皇宋通宝	1039	麻植土層	20 元祐通宝	1086	青灰粘質土層			

第4表 銅錢出土遺構・層位表

土製仏像（地蔵菩薩像）（図版45）

型づくりの仏像片が4点出土した。頭部・胸部・脚部のもので、直接には接合しないが、仏となり、その全容を知れる。脚部両膝には「□万寺印」とあり、最初の文字は「廉」ないし「庚」と読めるが明瞭でない。出土した層位は暗茶土とS D 1436からである。室町時代のものと考えられる。

土製人物像（図版45）

型づくりのもので、上半身を形どった人物像である。中心から左右に分けた長い頭髪は肩まで下がり、先端は内へカールしている。胸部には楽器のようなものを両手で抱えている。容貌と身に結った衣裳は南方系の人物を彷彿とさせる。

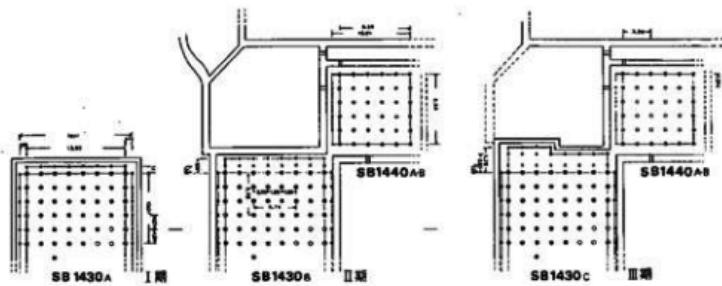
小結

『筑前国統風土記』によれば觀世音寺の子院として49院の名が記されており金光寺もそのうちの一つとしてその名がみえる。これらの子院についてはほとんど明らかでなく、絵図や地名などからある程度、位置ないし所在を推定できるものもあるが、それらの実体については、必ずしも明確ではない。
（註2）

ここで、以上述べた調査の所見を整理し、若干の考察を行ないたい。

まず礎石建物S B1430A・B・CとS B1440A・Bとの時期的相互関係についてであるが、Ⅰ期としたS B1430AにS B1440Aが当初から伴うものであるのかは先述したように層位的には見い出せず、溝との関連から、S B1440Aの周囲においてⅡ期以前の溝が存在しないことからすれば、当初なかった可能性も考えられる。

Ⅱ期にはS B1430Bに伴なってS B1440Aとその周囲をめぐる数条の溝がある。S B1430BとS B1440Aが併存することは、溝との関連から明らかである。しかしながら時期的に必ずしも並行関係にあるものとはいい難い。この2つの建物と溝から考えると、以下3つの組合わ



第53図 遺構時期別配置概念図

が出来る（第53図の概念図参照）。

- ① S B1430 B — S B1440 A
— S B1440 B
- ② S B1430 C — S B1440 A
— S B1440 B
- ③ S B1430 B — S B1440 A
S B1430 C — S B1440 B

すなわち、①、S B1430 B の存続期に S B1440 A から S B1440 B に移り、S B1440 B は S B 1430 C の時期にも繼續してある。②、S B1430 B から S B1430 C に短期間に移り、S B1430 B 時に建てられた S B1440 A が S B1430 C 時にも存続し、S B1430 C の、ある時期に S B1440 B に建て替えられた。③、S B1430 B の時に S B1440 B があり、S B1430 C の時に S B1440 C がある。いわゆる時期的に並行する場合である。S B1430 が一部の増、改築であることを考えると、①②の場合が妥当のようである。

次に各遺構の時期についてであるが、現段階では14世紀以降の土器編年については細かな検討が行なわれていないので断定出来ないが、大まかな年代については以下のように考えられる。

I期は土壌 S K1470およびI期満出土の土器より13世紀後半頃に比定される。

II期はとくに S B1440 A の整地層中から出土した遺物と廃絶の時期を示す腐植土層出土の遺物から14世紀後半が考えられる。
^(註3)

III期は S B1440 B を覆い、その建物の廃絶時期を示す暗茶色土層出土の遺物から15世紀代後半から16世紀前半代の時期が考えられる。
^(註4)

次に遺構の性格については、この二つの建物はいずれも礎石使用のものであるが、その大きさと建物の規模から明らかに用途の違いがみられるようである。

今回出土した遺物の土器・瓦類・木製品・金属製品のなかに、宝冠・僧形像・懸仏・絵馬等の寺院関係の遺物がみられ、S B1430は、その規模と使用された礎石の大きさから、一般の住

居とは考えにくく、寺院の本堂的なものと考えられる。さらに中央部北側の3間×2間の部分が内陣となる可能性が考えられるようである。また、SB1440は小礫石のもので、SB1430に付属して建てられたものであろう。今回出土した土器および多量の木製品は、この建物の部分から集中的に出土し、木製品の多くは日常什器として使われたものである。このことからここが日常生活の場であった事が伺われる。

以上、今回の調査での所見について記したが、遺構は更に北側及び西・東へ広がっており、今回検出した遺構が全体の中でどの位置にあたるのか、又どのような性格をもつものか今後の調査を俟ち、その時期についても遺物の細年作業が進むなかで、修正し、さらに検討を加えていきたい。

註1 1953年に九州大学九州文化総合研究所によって発掘調査されている。これについては、鏡山猛『北九州の古代遺跡』1956に概略が記されている。

註2 高倉洋彰「筑紫觀世音寺子院小考」『九州歴史資料館研究論集』3 1977

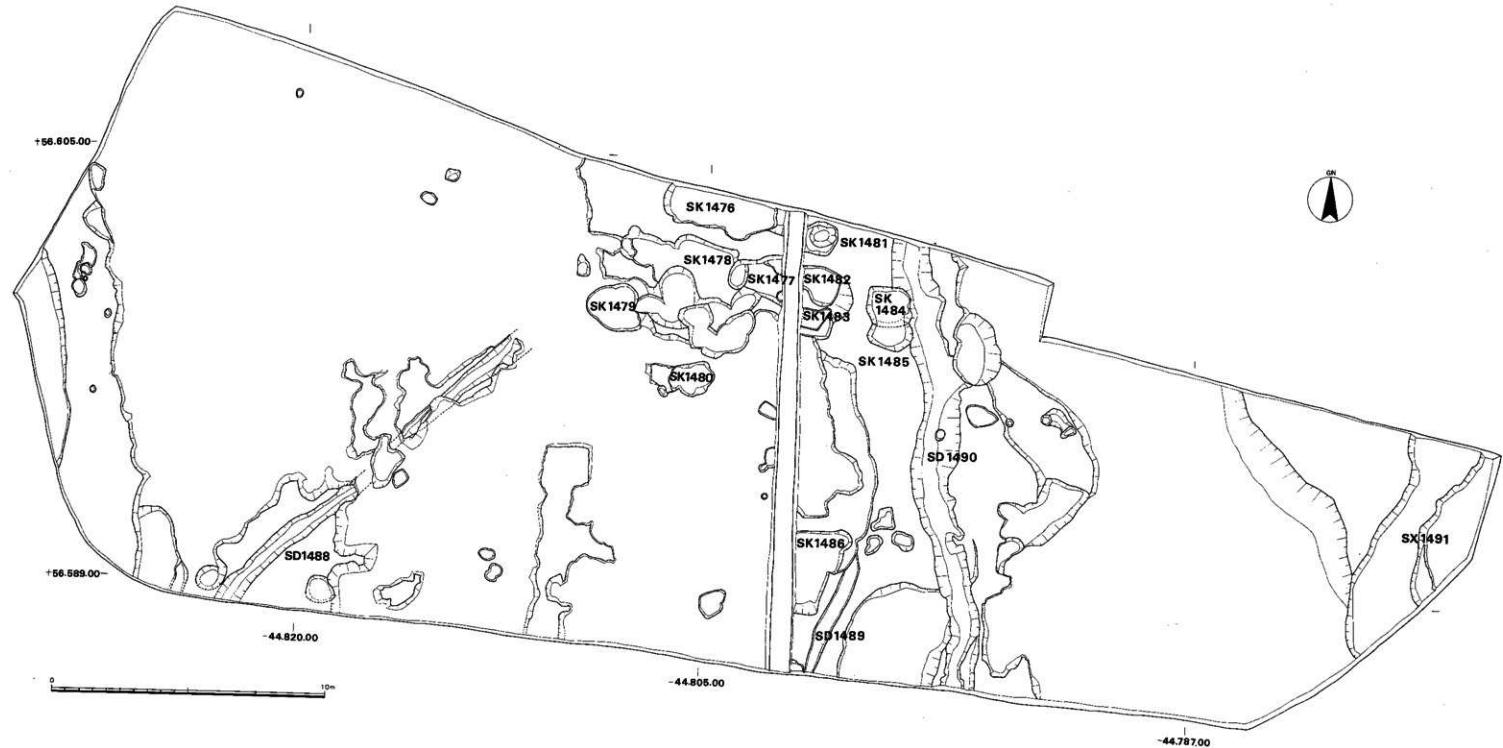
註3 横田賀次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究集』4 1978

I期の遺構であるSK1470出土の杯aおよび皿aは法量からSK601とSK830の中間の位置にあり、それからすると13世紀後半頃の年代が与えられる。

廃植土出土の杯a・皿bはSX1200（「元徳二年銘」 卒塔婆共伴土器）のものと法量的に後出するものであり、またⅡ期整地層から「洪武通宝」(1368)が出土しており、その上限をその時期に考えることができ、14世紀後半～15世紀初頭の年代が与えられる。

註4 暗茶色出土の杯b・皿bは廃植土層出土のものより、底径が小さく、器高の高いものである。また、皿b（第39図の14～17）は形態上、杯b（第39図の24～26）と同一に考えられず、さらに後出するものと考えられる。

この層からは明鏡の「永楽通宝」(1412)が出土しており、また、15世紀後半～16世紀の遺構である一乘谷朝倉氏館跡出土の陶磁器と類似したものがあり、上限を15世紀前半とし、16世紀の年代が考えられる。陶磁器については伝世することも十分考えられ、必ずしもその年代を示すものではないが、先述の皿b（14～17）が杯b（24～26）より後出するものであることから、ほぼ、その年代が与えられる。



第54図 第58次調査遺構配置図

7. 第58次調査

現在の県道、山家一関屋線は、府の中心である政府地域の南側に接して東西にのびている。この道路は遺構については不明であるが、旧大路のなごりと考えられ、条坊復原案では五条大路に相当するものと考えられている。この推定五条大路をはさんで政府より南側の地域は、一応府域外と考えられてきたが、昭和46年に行なった右郭五条二坊の第17次調査で礎石建物1棟が検出されたことや、昭和49年に行なった左郭五条二坊の第32次調査で掘立柱建物2棟が検出^(註1)されたことから、むしろ政府に関連した官衙的な遺構が存在する地域ではないかと考えられるようになってきた。しかしながら、これらの調査は住宅建築のための事前調査であり、狭小な範囲を調査したにとどまるので、いまひとつ遺構の具体的な範囲などを明らかにすることはできないまま現在に及んでいた。政府の南側中軸線上に想定される朱雀大路に關しても充分に学術的なメスが加えられたことはなかったが、最近になって太宰府町の土地区画整理事業計画がもちあがると、その事前調査も兼ねて朱雀大路の遺構そのものに対する具体的な解明が必要となってきたわけである。こうして第58次調査を計画した。

発掘地点は、政府南門から南方へ130m隔てた政府中軸線上を選び、調査区は東西54m、南北22mと東西に長く設定した。条坊復原案では、左郭五条一坊と、右郭五条一坊にかかっているが、大半は左郭五条一坊に属する。地番は太宰府町大字觀世音寺字不丁278-4番地である。遺跡地は標高37.7m程の水田地で政府の中心部との比高差は5mほどであり、北から南へのゆるやかな下り勾配となっている。

調査は、昭和53年7月5日から開始し、7月21日には遺構検出に入ったが、特記すべき遺構、遺物も認められず、又、当初予想された朱雀大路に關する遺構などを認めることはできなかつたので9月19日には調査が完了し、以後埋め戻しを行ない水田地に復帰した。

検出遺構

調査区は水田地で、厚さ約20cmの表土、床土をとり除くと部分的に薄い間層の黄褐色土がみられた。この層においても新しい陶器片などを含んでいたので、近世以降の堆積であることがわかる。その後ほぼ一面に暗茶色粘土のブロックを混じた灰茶色土層がみられた。これは約10~60cmほどの堆積をなしてて、厚いところでは上下2層ほどに識別することはできたが、上、下層ともに、それより下層の地山に含まれる暗茶色や黄色の粘土ブロックを含んでいて擾乱土であることが判明した。この灰茶色土の上面から掘り込む新期の遺構としてSK1479、1480がみられた。灰茶色土をとり除いていくと、砂と暗茶色、あるいは黄色の緻密な粘土が交互に堆積した堅い地山層に達した。地山層は調査区において一様のレベルを保っているわけではなく、擾乱の程度によって起伏があり、発掘区の西端、及び中央部などの箇所では表土下20~30cmほ

どで地山面に到達するので、この部分については地山から掘りこむ土壙 SK1476～1478、1481～1486、溝状の凹み S D 1489、1490などが残存して認められた。ただし、土壙は灰茶色土と同様な埋土からなっており、遺物のまとめたものは出土しておらず、擾乱と同様な掘り込みもあるものと考えられる。また、溝状の凹み S D 1488、1489、1490と東端のS X 1491などは砂の埋土からなるが、これも遺物は皆無に等しく、北から南への自然の流れとも思われる。

以上のように遺構は総計して、土壙11、溝3、その他2が認められたにすぎなかった。

出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、白磁、青磁、瓦類、銅津、ルツボなどあるが、出土点数は少なく、その殆んどは細片化したものであり、図示できるものは非常に限られていた。

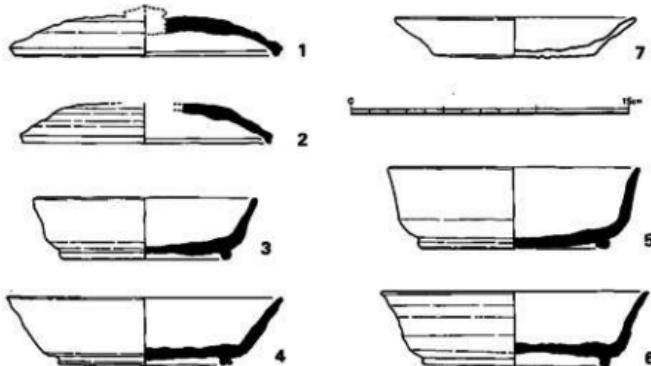
各層出土土器（第55図、別表）

1～6は須恵器、7は土師器である。1は黄褐色土出土。2～7は灰茶色土出土。

須恵器

杯蓋（1・2） 断面三角に近い口縁端部をもち、体部との境は明瞭に区別される。頂部につまみを有するものと思われる。1は口径14.6cm、現器高2.2cm。2は口径13.6cm、現器高2.2cm。いずれも内面はナデ、体部内外面は横ナデ、天井部はヘラ削りとする。

杯身（3～6） 底部に断面四角の低い高台を有する。3、5、6の体部下半は丸く内弯しつつ、上部が若干、外反ぎみに開くものである。体部の外面下半にヘラ削り痕を残す。4は



第55図 各層出土土器実測図

前者に比べ底部と体部の境が明瞭で、直線的に外開きする体部からなる。体部の外面下半にへラ削り痕を残すが、前者よりも削りの範囲が狭い。3は口径12.0cm、高さ3.3cm。4は口径14.7cm、高さ3.6cm。5は口径13.4cm、高さ4.4cm。6は口径14.3cm、高さ4.1cm。

土師器

杯a (7) 底部は糸切りされ、板状压痕がつく。口径13.0cm、高さ2.1cm、底径8.8cm。

以上のほかに灰茶色土からは白磁皿II、須恵器、土師器(皿、杯、碗)、ルツボ、瓦などの破片が出土した。これより上層の表土、床土、黄褐色土からは近世の遺物にまじって青磁、龍泉窯系碗I-5、I-6、III、同安窯系碗I、皿I、白磁碗VI、VII、皿IX、黄釉盤などの細片が少量出土している。灰茶色土は地山面を直接覆う層であり、遺跡地の擾乱された時代を示唆するよう思われる。この層の出土遺物は奈良時代のものが殆んどであり、ごく少数の平安時代、中世の遺物が加わる程度であったが、そのうち最も新しい時期を示すと思われるものは図示した土師器の杯aであり、その法量からみれば13世紀後半以降に属するものと思われる。

瓦類

この調査では、さきに述べたごとく発掘区全体が後世に擾乱を受けていることもあって、顕著な遺構は検出されていない。このためか出土遺物も少く、ことに瓦類では軒丸瓦6点、軒平瓦9点と若干の丸・平瓦が出土したにすぎない。軒丸瓦は陶輪式と老司系統のものであり、軒平瓦は9点中8点が老司II式である。

出土点数が少いために特に記すべきことはないが、軒丸・軒平瓦ともすべてが8世紀前半のものであることは一応注目しておく必要があろう。

小結

遺跡地は灰茶色土の遺物からみて少なくとも13世紀後半以降に擾乱されたと考えられる。残念ながら、今回の調査によって朱雀大路に関する知見は得られなかったが、2・3の問題点について触れてみたい。

朱雀大路に関する調査は今回が初めてではなく、昭和43~44年の第1次、2次調査では南門とその前面(五条大路との交差点)を発掘している。^(註3)調査の結果、南門の前面は室町時代頃に大きく流失していることが知られる。したがって、朱雀大路に関する手がかりはこれによつては得られない。一方、政庁中軸線を南方に下った水田、住宅地帯の中には一部の中軸線に沿つた地割を現在でも確認することができる。したがって遺構自体からの手がかりはないとはいえた朱雀大路の存否については現在の段階でも断定はできない。

ところで、朱雀大路に関する規模については平城京、平安京で路面幅は70mと推定されている。平安京は「延喜式」によるもので、平城京では実際の遺構から復原された幅である。^(註4)築地心心距離は平城京のものの方が大きいが、路面幅ではほぼ等しいと考えられている。今回調

査した東西両端部は、府の政庁中軸線に対して各々東へ45m、西へ9mを検出ずみである。条坊に関しては大宰府と平城京・平安京などとはその規模の点から同列には論じられないが、もし仮りに平城京等と府の朱雀大路幅が等しく70mと考えると、東半部路面幅は約35mとなり、すでに10mも外側を発掘していることになる。したがって側溝などの痕跡をみないことは、すでに後世の搅乱・削平などによって消滅していると考えた方が妥当のように思える。

しかし遺構の遺存度に若干の問題がある。第17次、第32次調査地点は、今回の地点を中心とすると各々東と西に100m強の隔りがあるが、この3点を結ぶ現標高は33~34mでほぼ一定しており、この間に地形的に大きな起伏はない。第17次、第32次調査の結果では遺構の遺存度が比較的良好であったのに対して、削平されているとはいえ当該地点のみが良好でないという点、疑問がもたれる。のことから、朱雀大路が本来この地域に存在していなかった可能性も考えられる。

以上の諸点をまとめると、朱雀大路自体に関連する遺構は今回の調査においても全く手がかりがなかったが、そればかりではなく、この地区には本来存在していなかった可能性も生じてきたことである。また仮りに、朱雀大路が存在するという前提に立つとき問題になるのは、その起点がどこに求められるかという点についてである。少なくとも今回の調査結果では朱雀大路が南門、あるいはその前面の推定五条大路との交差点を起点としているのかどうかについても再考を促す必要が生じてきている。なおこれらの問題は朱雀大路のみの問題ではなく、その周辺遺構との関連の上で考えられるべき問題であるので、将来にわたり周辺地域の学術的調査が進んだ時点で再考する必要があろう。

註1 九州歴史資料館編『大宰府史跡昭和46年度発掘調査概報』1972

註2 *『大宰府史跡30、31、32次発掘調査概報』1974

註3 福岡県教育委員会編『大宰府史跡昭和43年度調査概報』1969

*『大宰府史跡昭和44年度発掘調査の概要』1970

註4 奈良市教育委員会編『平安京朱雀大路発掘調査報告』1974

8. 第59次調査

本調査は住宅建設に伴う事前調査である。この地の北側では以前調査され、奈良時代の造構・遺物が検出されている市ノ上遺跡があり、昨年度、この遺跡に含まれる地域で奈良期の井戸が検出され、その中から出土例の少ない絞胎の破片が出土している。また本調査地は条坊の十条三・四坊の推定地で、三坊の線が通る。

本調査の目的は、条坊造構および奈良時代の造構の検出を主たるものとし、調査を開始した。地番は筑紫郡太宰府町大字通古賀字貝出868・869番地である。

調査は昭和53年8月22日に開始し、同年8月30日に終了した。

検出遺構

調査対象地域に、東西方向のトレンチを9ヵ所に設定し調査した。検出した主な遺構は、溝1と土壌2である。

溝

S D1495 ほぼ東西方向の溝で、幅約1.40m、深さ0.70mを測る。長さ15mについて検出した。溝の埋土は黒褐色を呈する堅くしまった土で、埋土中より出土した土器から平安時代後半期に埋没したものと考えられる。

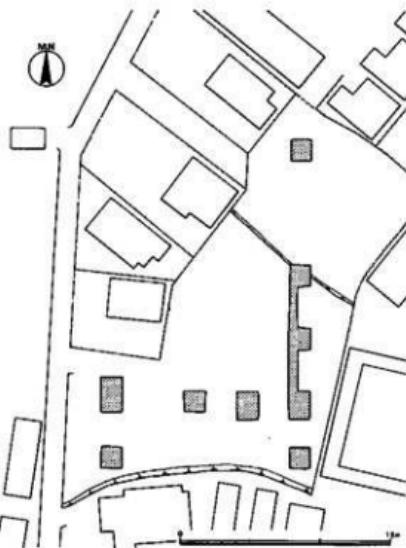
S D1498 西端の2つのトレンチで検出したもので、幅約1.20m、深さ0.25m前後のもので、S D1495と切り合いがあり、S D1495よりも古期の溝である。

出土遺物（第58図、別表）

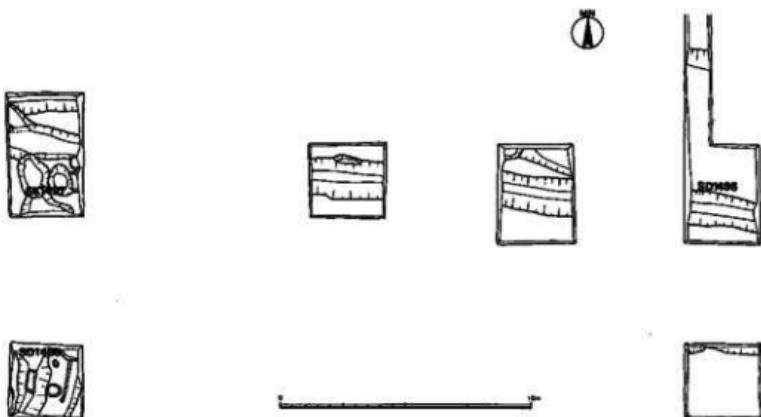
第59次調査で出土した遺物は少なく小破片の物が多い。遺物の多くは黒褐色土層から出土したものである。

須恵器

杯蓋（1） 天井部をヘラ削りし、体部を横ナデしている。天井部、体部の境界はさほど明瞭ではない。口縁端部を直角に内折させている。



第56図 第59次調査地周辺図



第57図 第59次調査遺構配置図

楕（2） 小片であるが直線的な体部を持っている。高台は底部端に貼付している。

皿（3） 復原口径17.9cm、器高2.2cmを測る。底部はヘラ切りで体部は横ナデ、内底は横ナデ、後ナデ調整を施している。

杯（4・5） 4は口径8.8cm、器高3.5cmの深い杯である。体部下半はヘラ削りし、底部はヘラ切りである。5は小片であるが、復原口径25.4cm、器高5.0cmの大形のものである。高台は断面四角のもので、底部と体部の境界より内側に貼付している。溝S D 1495より出土したものである。

高杯（6） ほぼ完形に近いもので、杯部の口径9.9cm、器高8.2cmをはかる。脚はさほど高くない。脚部端部はわずかにつまみ出している。

硯（7） 小片で全形は不明である。陸部と脚部の一部が残っている。陸部はさほど高くなく貼り付けたものである。

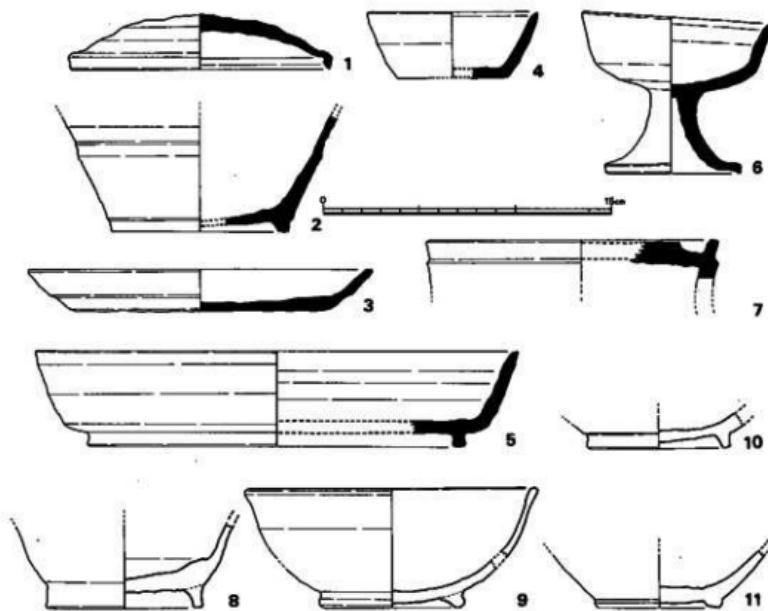
土師器

楕（8） 底部のみの破片で、高台は底部端につけられやや高めの高台が貼付されている。内外面とも横ナデで、淡茶色を呈する。

黒色土器

楕（9） 内面が漆黒色を呈する楕である。復原口径は15.0cm、器高6.3cmのものである。体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反させ、端はやや厚くなっている。高台は低く外開きのものが貼付されている。

青磁



第58図 各層出土土器実測図

椀（10・11） 越州窯産の青磁である。いずれも底部のみであるが、1は細い輪状高台のもので、内外面に施釉されている。疊付部は露胎となっており、この部分と内底に重ねの目跡がある。11は低い高台のもので、内外の全面に施釉され、疊付部は露胎である。

小結

本調査で検出した主要な遺構はほぼ東西方向を示す溝S D1495である。含まれる遺物は奈良、平安期のものであるが、ほとんど細片であり、埋土の状況からは流れたような形跡はみられなかった。

この溝は条を画する推定線とは位置的にかなりのずれがあり、条坊に関するものであるかは決め難い。

9. 第61次調査

本次調査は史跡地環境整備（便所設置）にともなう事前調査である。当該地は觀世音寺の寺域内に位置し、南面築地の外側に所在した祇園社およびその西隣に相当する。寺域内の諸施設の中で築地外のそれは内部にくらべて一層明らかでなく、遺構の在り方の手懸りをうるべく便所設置の予定個所を対象として調査を実施した。地番は大宰府町大字觀世音寺字今道63-2である。

調査期間は昭和53年11月24日から12月5日までである。

検出遺構

第61次調査では対象地域の東北隅にトレンチを設定し、約50m²を発掘した。調査の結果、土壌・溝各1を検出した。発掘地はすでに史跡地環境整備のため厚く土盛りされていたが、旧表土のほぼ直下に地山面が認められ、土層による遺構の先後関係の把握はできなかった。しかし、二つの遺構は遺物からみる限り大きな時期差があり、現象的には掘込みが同一面から認められるが、土壌は古墳時代、溝は江戸時代に属するものであった。

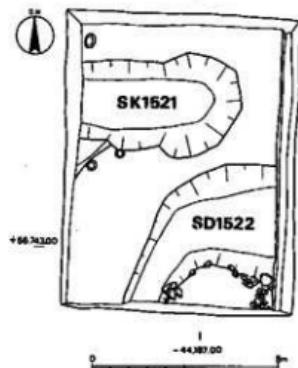
土壌

SK1521 トレンチ北辺で東西に細長い土壌1基を確認した。その西端は未掘である。東西に細長くのび、東端を半円形に結ぶ。既掘部分で東西約4.3m×東北約2.3~2.8mをはかる。最深部は東端付近で、約0.7mをはかり、西側に向かって浅くなる。

溝

SD1522 トレンチの南東辺で南北方向から東西方向へ流れる1条の溝を検出した。溝の南東岸および溝中には人頭大の石が多くみられたところから、この溝の南東岸は本来石で護岸されていたと思われる。溝内には多数の土師器・近世陶磁器・木製品・瓦などが含まれており、生活の臭いを感じさせる。これらのことから溝の南東部にはおそらくこの溝に囲まれる建物の所在を推定しうる。

出土遺物



第59図 第61次調査遺構配置図

旧表土出土土器（第60図、別表）

旧表土およびSD1522付近にうすく堆積していた黒色土からは多数の近世陶磁器、土師器、瓦片などが出土した。

土師器

皿a（1～6） いずれも底部を糸切り離しにしたもので、体部を横ナデしている。口径6.3前後の中形のものと、8.7～9.6cmとやや大形化するものがある。前者は内底を凸状をつくる特色をもつ。後者はいずれも器形に変化がみられる。

杯b（7） 硬度に焼成された土師

器で、ていねいな横ナデの調整がみられる。糸切りで底部を切離している。

瓶（9） 全体に乳白色をなすが、その上半部はスヌ状の付着物によって黒色化している。灯明などの用途で用いられたものであろう。

黒色土器

瓶（8） 梅瓶形をした小形の瓶で、黒色に焼かれている。ヘラケズリされた器表に横方向のヘラミガキを加えて調整しており、ことに肩部によく認められる。底部は有孔のままつくった胴部の下部に粘土塊をつめ込み成形している。

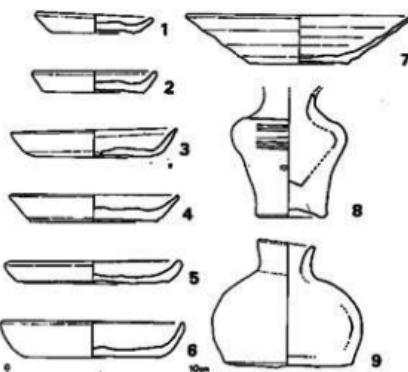
SK1521出土土器（第61図、図版36、別表）

弥生土器・土師器・須恵器・瓦などの小片を含んでいたが、土壤の上部付近で完形ないし完形に近い須恵器を一括して検出しており、その出土状態からこれらの一括須恵器をこの土壤の本来の伴出遺物と判断した。4・5・10は旧表土からの出土であるが、時期・破片の大きさが他の旧表土出土遺物と顕著に異っており、SK1521に所属すると考えている。

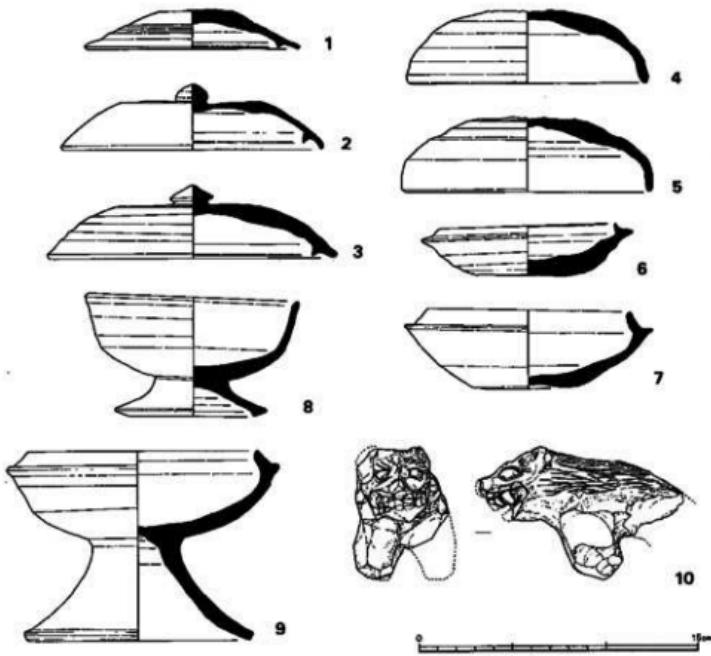
須恵器

杯蓋（1～5） いずれも天井部をヘラ削りし、他の部分を横ナデないしはナデで調整している。形態的に大きく三類に区別できる。1は口縁部内側にかえりがつき、天井につまみを有しない小形の蓋である。2・3は13.8～15.2cmと口径が大きくなり、口縁部内側のかえりの形は1と似るが、天井部に擬宝珠形のつまみを有する。天井部と体部との境は稜をなさない。4・5は全体に丸味をもつ蓋で、やや外開きとなる口縁端部も丸くおさめられている。天井部と体部の境近くに約1cmほどの幅広の凹線をめぐらしている。

杯身（6・7） 6は器肉の厚さから外見にくらべ底の浅い杯身をなす。立ち上がりは0.3cm



第60図 旧表土出土土器実測図



第61図 SK 1521出土土器実測図

で低い。外底を乱雑にヘラナデしているが、他の部分は内外ともていねいに横ナデの調整を加えている。体部と底部の境はそれほど明瞭でない。7はきわめて硬質に焼成された杯身で、約0.9cmの高い立ち上がりを口縁部に有する。口縁部は内傾しつつ立ち上がった後にわずかに外反して丸味をもった端部に終わる。

高杯（8・9） いずれも小形の高杯で、完形に近い。8は杯部外底の一部を除き全面をていねいに横ナデで調整されている。杯部と脚部との境に一条の沈線をめぐらす。低くつくられた脚部は端部に向って大きく広がる。端部内側に小さく三角突帯を貼付け、脚端の整形・補強をはかっている。9は生焼けのため脆弱な高杯で、7に似た杯部に大きく裾を広げる脚部をつける。杯部内底に同心円状のタタキの痕跡が明瞭に認められる。外底には同心円状の深い沈線がめぐらされ、杯部・脚部の接合の強化をはかっている。

動物形須恵製品（10） 大粒の砂を混じえた胎土を用いており、全体をナデで調整しつつ成形している。顔面の一部、一方の足および体部下半を欠く。ヘラ状工具で体毛、目の輪郭、歯

牙を陰刻し、特に耳や口、および歯牙の間隙はヘラで胎土を削りとて立体感をだしている。また眼もいくぶん隆起させ表現の立体感を強めている。一見したところ狛犬をほうふつとさせるものがあるが、飛び出すように生々しくつくられた眼、歯牙の特徴、鼻筋などから受ける面貌的印象、陰刻された毛並の流れなどから犬科の動物、狼、山犬などを想起させる。

本例は旧表土からの出土で他の須恵器と同時期と考える根拠はないが、先にも述べたように完形に近い須恵器がこの土壤から一括して出土しており、さらに須恵器の出土部位が土壤の上部付近に集中していたため、調査時に遺構面の一部を削平した折の出土物を旧表土出土としていることや本例も土壤近くからの出土であることなどから、その一連の遺物とみることができよう。

S D1522出土土器（第62図、別表）

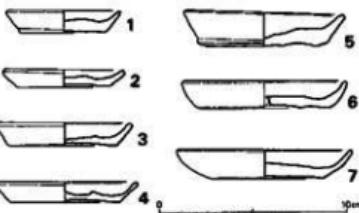
溝内からは多数の近世陶磁器・土師器・瓦類・木製品・寛永通宝などが出土した。瓦類は完形の平瓦も多くあったが、いずれも近年まで觀世音寺に葺かれていたものと同じものであった。近世陶磁器の多くは茶碗類で、他に指鉢などが含まれ、いずれも日常使用される雑器の類であった。木製品の中で下駄は今日のそれと同形であるなど、使用時期の新しさをうかがわせるものであった。

土師器

皿a（1～7） 旧表土出土の土師器と同様の傾向を示し、いずれも底部を糸切離しにし全体を横ナデ調整する手のものであった。口径6.0cm前後の内底部を凸状につくる小皿（1・2）が特徴的である。4は底部に板状圧痕がみられる。

小結

小範囲のため検出した遺構は土壤・溝各1にとどまった。土壤出土の須恵器はこの地方でⅣ期に編年されるものを中心とし一部Ⅴ期に降るものも含む。したがってこの土壤は7世紀中頃に創建された觀世音寺に先行する遺構である。一方、おそらく建物を区画すると思われる溝からの出土遺物は江戸時代に降るものであった。ところでこの溝を含む一帯は觀世音寺庫裏（公文所別当屋敷）の旧位置に相当すると思われる。寛政5年（1793）に完成した加藤一純・鷹取周成の編による『筑前國統風土記付録』によれば、この建物に相当するとと思われる部分に「公文所別当」屋敷が描かれている。ところが文政3年（1820）の『觀世音寺村之内旧跡確現改之図』によれば「公文所別当」屋敷は仁王門（中門）の西に所在しており、すでに現在の庫裏の位置に移転していることがうかがえる。この地への移転は觀世音寺所蔵文書によって文化



第62図 S D1522出土土器実測図

11年（1814）に行なわれたことが知られ、したがって溝S D1522およびこの溝に囲繞されると思われる建物は観世音寺公文所別当屋敷であり、文化11年（1814）頃を下限とすると判断される。出土遺物の時期観もこの付近に求めて大過ないものであった。

註1 岩瀬正信・酒井仁夫・川述昭人「御笠川東岸における須恵器の編年について」（『九州縦貫自動車道開通埋蔵文化財調査報告』X号）1977

註2 観世音寺現住職石田琳園師によれば、当該地付近を庫裏「もと屋敷」と伝えているとのことであった。

註3 第39－1次調査の報告（『大宰府史跡』昭和50年度発掘調査概報、1976）では別当屋敷の位置を県道開削一山家線の南側に想定しているが、註2および県道の南側に観世音寺の旧地が伸びないことなどから、繪図の見誤りであり、訂正しておく。

10. 第62次調査

本次調査は、住宅建設に伴う事前の発掘調査である。当該地は、太宰府天満宮の南東部に隣接し、天満宮から櫻社へ上る神幸祭の通路（通称「どんかん道」）に接した地域である。安樂寺天満宮周辺に形成されたであろう門前町関係の遺構の検出を目的として調査を実施した。地番は太宰府町大字太宰府字新町2348-1、2351-1である。

調査期間は昭和53年12月16日から12月20日までである。

検出遺構

対象地域に南北・東西のT字形のトレンチを設定し、約44m²を発掘した。調査の結果、土壌およびピットを検出した。土壠は不定形なものが多く、またピットは建物としてまとまるものはなかった。これらの遺構出土の遺物は平安時代後半から鎌倉時代にかけてのものである。

ここでは、一括して土器が出土したSK1525について報告する。

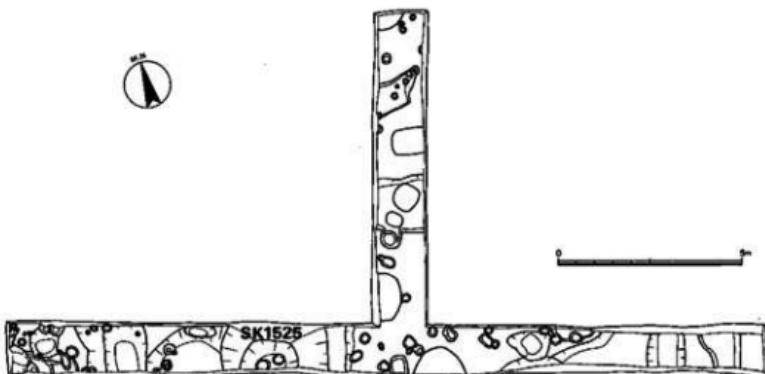
土壠

SK1525 東西トレンチ西半中央部で検出した土壠で、深さ約1.3mを測る。底面から浅い円形の凹みを検出した。井戸かとも考えられるが、湧水層まで達していない。

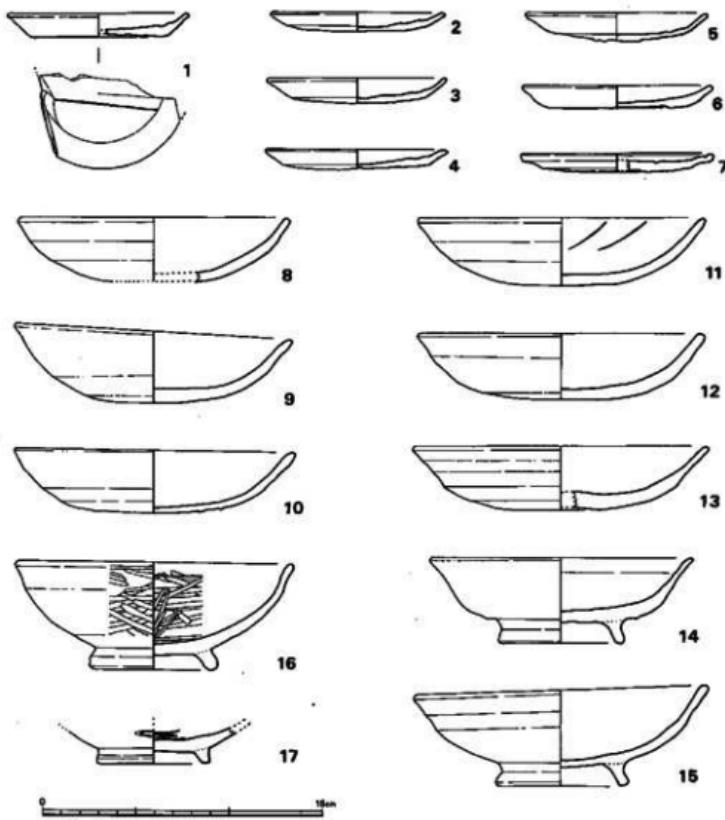
出土遺物

SK1525出土遺物（第64・65図、図版37、別表）

土師器、黒色土器、陶磁器、瓦および刀子などが出土した。土師器がもっと多く、完形およびそれに近いものが埋土中から検出された。



第63図 第62次調査遺構配置図



第64図 S K 1525 出土土器実測図

土師器

Ⅲa (1~7) 9.4~10.3cmまでの小皿で全てヘラ切り離しである。1は体部の一部を欠いているが、その割れ面は削って平滑にされている。7は口縁部内面に一条の沈線を有し、一見蓋風なものである。

丸底の杯 (8~13) 口径14.7~15.8cmを測る。内器面を磨き、外面の体部中位以下に指頭圧痕が乱雑に残る丸底の杯である。11には「コテあて跡」が放射状に入っている。

椀（14・15・17） 14は丸底の杯に高台を貼付した椀である。15は丸底の杯と同手法でつくられたもので、内面はヘラミガキされ、体部中位には指頭圧痕が数多くみられる。17は糸切り離しきれた椀の破片で、体部の大部分を欠失している。硬質の焼きで淡赤褐色を呈する。内外面をヘラミガキされている。他地域からの搬入品であろう。

黒色土器

椀（16） 内外面をヘラミガキされた後に真黒色に焼かれたものである。

陶磁器

全て破片であり、しかも細片化している陶磁器が5点出土した。白磁椀IV類2点（1・b1点）、青白磁碗2点、越州窯系青磁碗I類2点、褐釉陶器擂鉢1点出土した。

鉄器

刀子（18） 基端部および刀

身の一部を欠くが、ほぼ完形に近い。残存長15.5cm、刀身は長さ9.1cm、最大幅1.4cmを測る。



第65図 S K 1525出土刀子実測図（1/2）

闇の部分は鍛のため図のように斜めになるかどうか定かでない。

小結

目的とした安樂寺天満宮の門前町関係のまとまった遺構は検出されなかった。かろうじて11世紀代の井戸跡かとも考えられるS K1525のみが頗るな遺構であった。この土坡は出土遺物からSD1330段階のものと考えられ、11世紀末から12世紀初頭頃にその実年代を求めることができる。他地域からの搬入品と考えられる土器（第64図17）の発見も注意される。
(註1)

(註2)

註1 横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978

註2 大宰府跡からの出土土器で、他地域からの搬入品と考えられるものには須恵器、土師器、黑色土器（内面を焼したもの）がある。土師器では、本例が初めてである。

別 表

番号	排卵番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状疣瘍 の有無
					ヘ	ラ		
S D 605(第33次補足調査)								
皿 a								
1	2	8.1	0.9	6.6		○	○	○
2	3	8.1	1.0	6.5		○	○	○
3	4	8.2	1.2	5.8		○	不 明	不 明
4	5	8.1	1.1	6.6		○	○	○
5	6	8.4	1.4	6.2		○	○	○
6	7	8.6	1.15	6.8		○	○	○
7	8	8.7	1.0	6.8		○	○	○
8	9	8.7	1.5	6.4		○	○	○
9	10	9.0	1.6	7.3		○	不 明	○
10	11	8.9	1.15	6.8		○	○	○
11	12	9.1	0.9	7.2		不 明	○	不 明
皿 b								
1	1	6.5	1.65	5.4		○	○	不 明
杯 a								
1	13	12.4	2.4	10.0		○	○	○
2	14	13.1	2.7	8.8		○	不 明	○
3	15	13.2	2.6	7.9		○	○	○
4	16	13.3	2.4	8.5		○	○	○
5	17	15.8	3.8	9.0		○	不 明	×
S X 1532								
皿 a								
1		12.8	2.65	9.3		○	○	○
2		15.2	3.7	9.1		不 明	○	○
S X 1536								
皿 a								
1		8.4	1.3	6.3		○	○	○
2		8.4	1.15	7.35		○	不 明	不 明
3		8.8	1.4	7.15		不 明	○	○
杯 a								
4		12.4	2.3	8.6		○	不 明	不 明
S X 1537								
皿 a								
1		8.3	1.0	6.7		○	○	不 明
S K 1538 (A)								
皿 a								
1		6.9	1.5	5.1		○	○	○
2		7.4	1.0	6.2		○	○	○
3	1	7.8	1.2	5.8		○	不 明	○

番号	検査番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部の ナゲの有無	板状圧痕 の有無
					ヘラ	糸		
4	2	8.1	1.1	5.4		○	不明	○
5	3	8.1	1.2	6.2		○	不明	○
6	4	8.2	1.1	5.6		○	不明	○
7	5	8.2	1.3	5.65		○	不明	○
8	6	8.2	0.9	6.0		○	○	○
9	7	8.2	1.0	6.25		○	○	○
10	8	8.3	1.2	5.85		○	○	○
11	9	8.3	1.4	6.65		○	不明	○
12	10	8.3	1.0	6.25		○	○	○
13	11	8.4	1.0	6.9		○	○	○
14	12	8.4	1.2	7.05		○	○	○
15	13	8.5	1.3	6.8		○	○	○
16	14	8.8	1.1	6.2		○	○	不明
17		8.8	1.3	6.0		○	○	○
18		8.8	1.0	6.95		○	○	○
19	15	8.9	1.35	6.55		○	○	○
20		8.9	1.0	6.2		○	○	○
21	16	9.0	1.1	7.0		○	○	×
22		9.1	0.85	7.45		○	○	○

杯 a

1		11.2	2.5	8.9		○	○	×
2		11.5	2.45	8.5		○	○	○
3		11.9	2.6	7.5		○	○	○
4	17	12.1	2.4	7.8		○	不明	○
5	18	12.1	3.0	8.05		○	不明	○
6	19	12.2	2.75	8.7		○	○	○
7	20	12.3	3.0	8.1		○	○	○
8	21	12.3	2.6	9.2		○	○	○
9	22	12.5	2.9	7.7		○	○	○
10	23	12.5	2.4	8.0		○	○	○
11	24	12.6	2.55	8.4		○	○	○
12	25	12.7	2.5	8.8		○	○	○
13	26	12.8	2.4	8.35		○	○	○
14	27	12.9	2.6	9.1		○	○	○
15		13.0	2.55	9.1		○	○	○

S K 1538 (B)

		皿 a						
1		8.0	1.3	5.4		○	○	不明
2		8.2	1.2	6.4		○	○	○
3		8.2	1.1	6.8		○	○	○
4		8.2	1.1	6.8		○	○	×
5	29	8.3	1.25	5.7		○	不明	○
6	30	8.4	0.9	6.65		○	○	○
7	31	8.4	1.05	7.15		○	不明	○

番号	持団番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し系		内底部のナヂの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	ラ		
8	32	8.5	1.2	6.4		○	不 明	○
9	33	8.6	1.15	6.8		○	不 明	○
10	34	8.7	1.3	7.7		○	○	○
11	35	8.7	0.95	7.15		○	○	○
12	36	8.8	1.05	7.05		○	○	○
13		8.8	1.2	7.15		○	○	不 明
14		8.8	1.05	8.0		○	○	○
15		8.9	1.1	6.8		○	○	○
16		9.1	0.9	6.8		○	○	○
17		9.4	1.05	7.4		○	○	○
18		9.6	1.2	8.15		○	○	○
杯 a								
1	37	12.9	2.75	7.85		○	○	○
2	38	13.2	2.8	8.4		○	○	×
3		13.4	2.9	8.15		○	○	○

S K 1538 (C)

杯 a								
1	39	12.2	2.4	7.4		○	不 明	○

S K 1538 (D)

皿 a								
1		7.8	1.05	6.6		○	○	不 明
2		8.0	0.85	6.8		○	不 明	○
3		8.05	1.1	6.85		○	○	○
4		8.1	1.3	6.6		○	○	○
5		8.25	1.35	6.7		○	○	○
6	42	8.3	1.1	6.95		○	○	○
7		8.3	1.0	7.0		○	○	○
8		8.35	1.2	6.7		○	○	×
9		8.4	1.0	6.75		○	○	○
10	43	8.4	1.25	6.85		○	不 明	○
11		8.4	0.95	7.2		○	○	○
12		8.4	0.7	7.35		○	○	○
13		8.4	0.85	7.35		○	○	○
14		8.45	1.2	5.8		○	○	○
15		8.5	1.1	5.95		○	○	○
16	44	8.5	1.1	6.5		○	○	○
17	45	8.5	1.5	6.6		○	○	○
18		8.5	0.9	6.9		○	○	○
19		8.5	0.9	6.9		○	○	○
20		8.5	1.05	6.9		○	○	○
21		8.5	1.1	6.9		○	不 明	不 明
22	46	8.5	1.1	6.95		○	○	○
23		8.5	1.0	7.0		○	○	不 明

番号	持因番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナブの有無	板状圧痕の有無
					ヘ	ラ		
24		8.5	1.0	7.05		○	○	不明
25		8.5	0.95	7.15		○	○	○
26		8.55	1.05	7.4		○	○	○
27		8.6	1.05	6.2		○	○	○
28		8.6	1.1	6.5		○	○	○
29	47	8.6	1.2	6.7		○	○	○
30	48	8.6	1.45	6.8		○	○	×
31	49	8.6	1.2	6.95		○	不明	不明
32	50	8.6	1.15	7.0		○	○	○
33		8.6	1.15	7.0		○	○	○
34		8.6	1.05	7.25		○	○	○
35		8.6	1.0	7.4		○	○	○
36		8.65	1.4	7.1		○	○	○
37		8.65	1.45	7.3		○	○	○
38	51	8.7	1.2	6.75		○	○	○
39	52	8.7	1.3	7.4		○	不明	○
40		8.75	1.1	7.65		○	○	○
41	53	8.8	1.3	6.55		○	○	○
42		8.8	1.4	7.05		○	○	○
43		8.8	1.3	7.3		○	○	×
44		8.8	1.0	7.4		○	不明	○
45		8.8	1.0	7.5		○	不明	○
46	54	8.8	1.3	7.5		○	○	×
47		8.8	1.1	7.65		○	○	○
48		8.8	1.2	7.8		○	○	不明
49		8.8	1.2	7.9		○	不明	不明
50		8.85	1.4	6.6		○	○	○
51	55	8.9	1.0	6.75		○	○	不明
52		8.9	1.1	7.1		○	○	○
53	56	8.9	1.2	7.35		○	○	○
54	57	9.0	1.2	6.85		○	○	○
55		9.0	1.1	7.2		○	不明	○
56		9.0	1.25	7.35		○	○	○
57		9.0	1.1	7.5		○	○	×
58		9.0	1.1	7.8		○	○	○
59		9.0	1.2	7.85		○	不明	○
60		9.0	1.25	7.85		○	不明	○
61		9.0	1.15	8.1		○	○	○
62		9.1	1.15	7.2		○	不明	○
63		9.1	0.9	8.1		○	不明	○
64		9.2	1.15	7.4		○	○	○
65		9.2	1.4	7.5		○	不明	○
66		9.2	1.0	7.55		○	○	○
67		9.2	1.1	7.6		○	○	○
68		9.2	1.2	7.8		○	○	○

番号	排図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナゲの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
69		9.2	1.05	8.1		○	不明	○
70		9.2	1.25	8.1		○	○	○
71		9.2	1.2	8.3		○	○	○
72		9.3	1.2	7.6		○	○	不明
73		9.3	1.05	8.0		○	不明	不明
74		9.4	1.3	7.65		不明	○	不明
75		9.4	1.25	7.7		○	○	×
76		9.6	1.1	7.75		○	○	○
77		9.8	1.0	8.3		○	不明	不明
杯 a								
1		12.2	2.6	8.8		○	不明	○
2		12.3	2.3	9.2		○	○	○
3		12.35	2.5	8.8		○	○	○
4		12.4	2.95	7.6		○	○	不明
5		12.4	2.5	8.6		○	○	不明
6		12.4	2.2	8.7		○	○	○
7		12.4	2.6	9.3		○	不明	○
8		12.5	2.8	8.95		○	不明	○
9		12.6	2.5	8.6		○	○	○
10		12.6	2.65	8.95		○	○	○
11		12.8	2.55	8.6		○	○	○
12	58	12.8	2.6	8.95		○	○	○
13		12.8	2.5	9.0		○	○	不明
14		12.8	2.35	9.1		○	○	○
15	59	12.8	2.75	9.1		○	○	○
16	60	12.8	2.5	9.45		○	○	○
17		12.85	3.1	8.8		○	○	○
18		12.9	2.4	8.0		○	○	○
19	61	12.9	2.5	9.0		○	○	○
20		13.0	2.8	8.3		○	不明	×
21	62	13.0	2.45	8.35		○	○	○
22	63	13.0	2.9	9.6		○	○	○
23	64	13.0	2.5	9.8		○	○	不明
24		13.2	2.8	8.0		○	○	○
25		13.2	3.0	8.2		○	○	○
26	65	13.2	2.55	8.5		○	○	○
27	66	13.2	2.9	8.6		○	○	○
28	67	13.2	3.0	8.6		○	○	○
29		13.2	2.8	8.7		○	○	不明
30	68	13.2	2.75	9.1		○	○	不明
31	69	13.2	2.95	9.2		○	○	○
32		13.2	2.8	9.3		○	○	○
33	70	13.2	2.8	9.8		○	○	○
34		13.2	2.7	9.95		○	不明	○
35		13.25	2.7	8.75		○	○	×

番号	説明番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘ	ラ		
36	71	13.3	2.7	9.0	○	○	○	○
37		13.3	2.45	8.6	○	○	○	○
38	72	13.4	2.55	9.1	○	○	○	○
39		13.4	2.8	9.3	○	○	○	○
40		13.4	3.15	9.3	○	○	○	不明
41		13.4	2.3	9.5	○	○	○	○
42		13.4	3.0	9.7	○	○	○	不明
43		13.5	3.0	8.8	○	○	○	○
44		13.5	2.9	9.6	○	○	○	不明
45		13.6	2.85	9.1	○	○	○	不明
46		13.6	2.9	9.1	○	○	○	○
47		13.6	2.9	9.1	○	○	○	不明
48		13.6	2.8	9.2	○	○	○	○
49		13.6	2.3	10.1	○	○	○	不明
50		13.8	2.5	8.6	○	○	○	不明
51		13.8	2.65	12.5	○	○	○	×
52		14.0	2.7	9.1	○	○	○	不明
53		14.0	2.95	9.6	○	○	○	○
54		14.0	2.5	10.2	○	○	○	不明
55		14.4	2.9	8.8	○	○	○	○
56		15.0	2.8	11.4	○	○	○	不明
57	73	17.6	3.2	12.9	○	○	○	○

S K 1539(上層)

組 a						
1		7.2	1.1	5.5	○	○
2		7.5	1.15	5.6	○	○
3		7.5	1.15	5.9	○	○
4		7.6	1.05	5.9	○	○
5	1	7.6	1.35	5.9	○	○
6	2	7.7	1.2	5.7	○	○
7	3	7.7	1.35	5.6	○	○
8	4	7.7	1.3	6.55	○	○
9	5	7.8	1.4	4.75	○	○
10	6	7.8	1.4	4.9	○	○
11	7	7.8	1.3	5.6	○	○
12	8	7.8	1.1	5.8	○	○
13	9	7.8	1.05	5.9	○	○
14	10	7.85	1.45	5.6	○	○
15	11	7.9	1.45	5.6	○	○
16	12	7.9	0.95	5.8	○	○
17	13	7.9	1.1	5.8	○	○
18	14	7.95	1.0	5.8	○	○
19	15	8.0	1.4	5.7	○	○
20	16	8.0	1.1	5.8	○	○

番号	排図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘ	ラ		
21		8.0	1.25	6.45		○	○	○
22		8.05	1.2	5.25		○	○	○
23		8.1	1.2	6.2		○	○	○
24		8.15	1.3	6.3		○	○	○
25		8.2	1.15	5.7		○	○	○
26		8.3	1.3	6.15		○	○	○
27		8.3	1.15	7.5		○	不 明	○
28		8.4	1.05	6.3		○	○	○
29		8.4	1.1	6.5		○	○	○
30		8.6	1.25	6.9		○	○	○
杯 a								
1		11.4	2.3	7.6		○	○	○
2		11.75	2.2	8.1		○	○	○
3		11.8	2.4	7.45		○	○	○
4		11.8	2.6	7.55		○	○	○
5	17	11.8	2.5	8.1		○	○	○
6	18	11.8	2.65	8.3		○	○	○
7		11.9	2.75	6.6		○	○	○
8	19	11.9	2.5	7.95		○	○	○
9	26	11.9	2.5	8.25		○	○	○
10	27	12.0	2.7	7.6		○	不 明	○
11	20	12.0	2.7	7.9		○	○	○
12	21	12.1	2.8	7.7		○	○	○
13	22	12.1	2.4	8.5		○	○	○
14	23	12.15	2.5	8.2		○	○	○
15	24	12.2	2.4	8.0		○	○	○
16		12.2	2.4	8.1		○	○	○
17	25	12.2	2.3	8.6		○	○	○
18		12.25	2.8	7.7		○	○	○
19		12.25	2.65	7.85		○	○	○
20		12.3	2.7	9.1		○	×	×
21		12.9	2.5	8.1		○	○	○
皿 a								
1	31	7.0	1.4	6.8		○	○	○
2	32	7.3	1.0	5.6		○	不 明	○
3	33	7.4	1.2	5.4		○	○	○
4	34	7.5	1.5	5.5		○	不 明	○
5	35	7.6	1.0	5.7		○	不 明	○
6	36	7.7	1.0	6.1		○	○	○
7	37	7.8	1.2	5.0		○	○	○
8	38	7.8	1.3	5.3		○	○	○
9	39	7.8	1.1	5.6		○	不 明	○
10	40	7.8	1.1	6.0		○	○	×

S K 1539(下層)

番号	特徴番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部の ナゲの有無	板状圧痕 の有無
					ヘ	ラ		
11	42	7.8	1.0	6.4		○	○	○
12	43	8.0	0.9	5.8		○	○	不明
13	44	8.0	1.25	5.9		○	不明	○
14	45	8.2	1.2	5.1		○	不明	×
15	41	8.4	1.35	6.4		○	○	○
16	46	8.6	1.2	6.75		○	○	×
17		8.7	1.15	7.1		○	○	○
18		8.8	1.2	7.1		○	○	○

杯 a

1		11.5	2.7	7.5		○	不明	○
2		11.6	2.4	8.0		○	○	○
3	47	11.8	2.6	8.0		○	○	○
4	48	11.8	2.85	8.5		○	○	○
5	49	11.9	2.6	6.9		○	○	×
6	50	11.9	2.5	8.3		○	○	○
7	51	11.95	2.6	8.6		○	不明	○
8	52	12.1	2.5	8.3		○	○	○
9	53	12.1	2.6	8.8		○	○	○
10	54	12.2	2.65	6.45		○	○	○
11	55	12.2	2.85	8.2		○	○	○
12	56	12.2	2.4	8.85		○	○	○
13	57	12.25	2.55	8.5		○	○	○
14	58	12.4	2.9	8.1		○	○	○
15	59	12.5	2.85	8.05		○	○	○
16		12.7	2.9	7.55		○	不明	○
17		12.8	2.3	7.4		不	明	○

S K 1540

皿 a

1	1	7.6	1.2	5.7		○	○	○
2	2	8.1	1.3	5.8		○	○	○
3	3	8.2	1.2	6.3		○	○	○

整地層下(第54次調査)

須恵器(蓋)

1	1	14.6	2.9		不	明	○	
2	2	12.4	3.1		不	明	○	
3	3	22.0	3.7		不	明	○	

須恵器(杯)

4	4	13.1	4.2	11.7	○		○	
---	---	------	-----	------	---	--	---	--

整地層

須恵器(蓋)

1	1	15.0	2.4		不	明	○	
2	4	13.7	2.5		不	明	○	

番号	掉団番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部の ナブの有無	板状圧痕 の有無
					ヘラ	糸		
3	5	13.7	不明		不明		○	
4	7	16.4	2.9		不明		○	
5	8	17.6	不明		不明		○	
6	12	13.6	1.9		不明		○	

須恵器(高台付杯)

1	7	不明	不明	(9.6)	不明		○	
---	---	----	----	-------	----	--	---	--

須恵器(杯)

1	9	16.0	5.1	10.0	不明		○	
---	---	------	-----	------	----	--	---	--

丸底の杯

1	10	18.6	3.4		不明		不明	
---	----	------	-----	--	----	--	----	--

青褐粘土層

須恵器(蓋)

1	5	15.6	2.3		不明		○	
---	---	------	-----	--	----	--	---	--

2	6	16.9	2.1		不明			
---	---	------	-----	--	----	--	--	--

3	7	14.9	1.7		○		○	
---	---	------	-----	--	---	--	---	--

須恵器(杯)

1	8	15.2	2.5		○		○	
---	---	------	-----	--	---	--	---	--

2	9	19.3	1.7	14.6	不明		不明	
---	---	------	-----	------	----	--	----	--

3	10	13.0	3.9	7.9	○		不明	
---	----	------	-----	-----	---	--	----	--

須恵器(高台付杯)

1	11	14.3	5.9	8.0	○		○	
---	----	------	-----	-----	---	--	---	--

2	12	17.8	6.9	9.2	不明		○	
---	----	------	-----	-----	----	--	---	--

皿

1	14	14.5	1.6	11.4	○		○	
---	----	------	-----	------	---	--	---	--

S X 1390

須恵器(蓋)

1	1	12.8	1.5		○		○	
---	---	------	-----	--	---	--	---	--

S X 1394

須恵器(蓋)

1	2	15.6	3.0		不明		○	
---	---	------	-----	--	----	--	---	--

S X 1386

須恵器(蓋)

1	3	13.6	不明		不明		不明	
---	---	------	----	--	----	--	----	--

S D 1401

須恵器(杯)

1	4	13.2	3.3	7.8	○		○	
---	---	------	-----	-----	---	--	---	--

S K 1392

杯 a

1	1	11.9	3.2	7.7	○		不明	
---	---	------	-----	-----	---	--	----	--

番号	持団番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部の ナメの有無	板状圧扁 の有無						
					ヘ	ラ								
S X 1396														
高台付杯														
1	2	12.2	4.55		○		○							
S D 1395B														
皿 c														
1	4	10.5	2.3	7.4	○		○							
杯														
1	5	(5.2)	(3.9)	(6.4)	不 明		○							
S D 1395														
椀														
1	6	14.0	6.2	6.2	○		○							
須恵器(蓋)														
1	7	12.4	1.1		不 明		○							
灰白色砂土層														
皿(c)														
1	1	12.6	2.4	9.4	不 明		不 明							
高台付杯														
1	2	13.1	5.6	7.2	○		○							
灰色土層														
皿 c														
1	4	12.9	2.4	7.8	不 明		不 明							
杯														
1	5	11.2	2.6	7.5	○		○							
S X 1423(第56次調査)														
皿 a														
1	3	(9.2)	7.4	1.1		○	○	○						
2	4	9.2	7.4	1.0		○	○	○						
3	5	(9.0)	5.6	1.6		○	×	×						
4	6	9.0	6.8	1.1	○		○	○						
5	7	9.1	7.4	1.7	○		○	○						
6	8	9.4	7.4	1.1	○		○	○						
7	9	9.5	6.8	1.3	○		○	○						
8	10	9.5	7.1	1.1	○		○	○						
9	11	9.6	7.5	1.4	○		○	○						
10	12	9.7	7.2	1.4	○		○	○						
11	13	10.0	8.0	1.4	○		○	○						
皿 c														
12	14	9.7		2.4										

番号	排固番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し系		内底部のナゲの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
杯 a								
1	15	12.9	9.0	2.1	○		○	○
丸底の杯								
1	16	16.5		2.8	○			○
2	17	14.3		3.3	○			不明
3	18	14.5		3.3	○			○

S E 1425

皿 a								
1	15	9.0	1.7		○		○	○
2	16	9.6	1.4		○		○	○
3	17	10.0	1.4		○		○	○
4	18	11.2	0.8		○		○	○
5	19	11.0	0.9		○		○	○
黒色土器(皿 a)								
1	20	11.6						
杯 c								
1	21	17.0	4.9					不明
瓶								
1	22	15.6	5.6					

S X 1424

皿 a								
1	1	10.0	1.4		○		○	○
2	2	9.8	1.5		○		○	○
3	3	9.0	1.4		○		○	○
杯 a								
1	4	(15.0)	2.6	10.2		○	不明	○
2	5	15.3	2.3	10.8		○	不明	○
3	6	16.4	2.7	11.4		○	不明	○
丸底の杯								
1	7	(15.4)	3.0		○			○
2	8	18.4	4.0		○			○

青灰粘土層(第57次調査)

皿 b								
1	2	6.7	1.9	3.6		○	○	不明
2	1	(7.0)	2.1	4.2		○	○	○
杯 a								
1	3	(15.2)	2.5	10.7		○	○	○

番号	持団番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し系		内底部のナゲの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
S K 1470								
皿 a								
1	9	7.4	1.4	5.6		○	○	不明
2	10	7.8	1.3	5.0		○	×	×
3	11	8.0	1.2	6.2		○	○	○
4	12	8.1	1.4	5.3		○	○	×
5	13	8.4	1.3	5.8		○	○	○
6	14	8.6	1.5	6.1		○	×	×
7		8.7	1.5	7.5		○	○	○
皿 b								
1	1	6.8	1.8	4.9		○	○	○
2	2	6.9	1.8	4.4		○	○	○
3	3	7.0	1.8	5.0		○	○	○
4	4	7.1	1.95	4.6		○	○	○
5	5	7.2	1.9	4.6		○	○	不明
6	6	7.3	2.1	5.1		○	○	○
7		7.4	2.0	5.1		○	○	○
8	7	7.5	2.1	4.6		○	○	○
9	8	7.7	2.0	4.2		○	○	○
皿								
1	15	8.7	2.1	5.5		○	○	○
2	16	9.0	1.8	6.4		○	○	○
3	17	9.2	1.9	6.4		○	○	○
4	18	(9.4)	2.0	5.8		○	○	○
5	19	9.8	2.0	6.5		○	○	○
大皿								
1	26	21.2	2.8	16.2		○	○	○
杯 a								
1	20	12.7	2.7	7.8		○	○	○
2	21	(12.7)	2.45	9.0		○	○	○
3	22	(12.8)	2.5	8.3		○	○	○
4	23	(13.2)	3.0	8.4		○	○	○
5	24	13.2	2.5	8.5		○	○	○
6	25	17.6	4.2	10.7		○	○	○
S D 1443								
皿 b								
1	28	6.7	1.8	4.4		○	○	○
杯 a								
1	29	(13.3)	3.1	9.3		○	○	○
S D 1427								
杯 a								
1	1	12.9	3.0	9.8		○	○	○

番号	排泄番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し ヘラ系	内底部 ナデの有無	板状圧痕 の有無
S D 1431							
		a					
1		9.4	2.2	6.1		○ ○ ○	
S D 1433 S D 1436 S D 1438							
		a					
1		(6.8)	1.2	4.5		○ ○ ○	
2		(6.8)	1.3	5.2		○ ○ 不明	
3	6	(6.8)	0.9	5.9		○ ○ ○	
		b					
1		6.1	2.0	4.4		○ × ×	
2	4	(6.2)	1.9	3.8		○ 不明 不明	
3		7.1	1.6	5.0		○ ○ ○	
		a					
1	7	(10.0)	2.0	6.8		○ ○ 不明	
2	8	(11.0)	1.8	7.0		○ ○ ○	
3	9	(11.4)	2.1	8.6		○ ○ 不明	
4	11	(11.8)	2.6	7.6		○ ○ 不明	
5	10	(12.8)	2.5	9.2		○ ○ ×	
S D 1427 A・B							
		b					
1	17	(6.9)	1.8	5.0		○ ○ ○	
2	18	(7.0)	1.95	4.7		○ ○ ○	
3	19	(7.1)	2.1	4.6		○ ○ ○	
		a					
1	20	13.1	3.0	8.1		○ ○ ○	
2	21	(13.2)	2.7	9.5		○ ○ ○	
3	22	(13.4)	2.9	9.7		○ ○ ○	
S D 1437							
		a					
1	25	7.8	1.2	6.6		○ ○ ○	
		b					
1	24	(6.5)	1.8	3.5		○ ○ ×	
		a					
1	26	(11.0)	2.2	8.4		○ ○ ○	
S D 1441							
		a					
1	27	13.6	2.8	8.4		○ ○ ×	

番 号	持図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切 り 難 し		内底部の ナゲの有無	板状圧痕 の有無
					ヘ	ラ		
暗茶色土層								
皿 a								
1		6.6	5.6	1.1		○	○	○
2		7.0	5.1	1.5		○	×	×
3		7.2	5.4	1.1		○	○	○
4	1	7.2	6.1	1.1		○	○	○
5	2	7.4	6.0	1.0		○	○	○
6	3	7.9	7.0	1.0		○	○	○
7	4	8.3	6.4	1.2		○	○	○
8	5	8.6	6.8	1.2		○	○	○
皿 b								
1		6.3	4.3	1.6		○	○	×
2	6	6.4	4.2	1.9		○	○	○
3	7	6.6	4.1	1.9		○	○	○
4	8	6.9	4.4	1.8		○	×	×
5		6.9	5.2	1.6		○	○	×
6	14	7.0	3.8	1.8		○	○	×
7	9	7.0	5.0	1.5		○	○	×
8	10	7.0	5.4	1.4		○	○	○
9	11	7.2	5.0	1.5		○	○	○
10	12	7.3	5.0	1.3		○	○	○
11	13	7.4	5.5	1.7		○	○	×
12	15	8.0	4.4	1.7		○	×	×
13		8.0	5.4	1.7		○	○	○
14	17	8.4	4.2	2.2		○	不 明	不 明
15	16	8.4	4.8	1.7		○	×	○
杯 a								
1	21	(10.8)	8.4	2.0		○	○	○
2	18	11.2	7.2	2.2		○	○	○
3	19	11.8	6.7	2.7		○	○	○
4	22	12.0	6.4	2.7		○	○	○
5	20	12.0	9.0	2.1		○	○	×
6	23	12.4	8.4	2.4		○	○	○
7		12.8	8.8	2.6		○	○	○
杯 b								
1	24	11.8	5.8	2.7		○	×	×
2	25	13.2	8.6	2.7		○	不 明	不 明
3	26	13.6	7.9	3.2		○	○	○
4		(14.2)	10.6	2.5		○	○	×
S D 1434								
皿 a								
1		7.3	1.7	5.0		○	○	○

番号	採団番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部の ナメの有無	板状圧似 の有無
					ヘ	ラ		
黒灰色土層								
皿 b								
1	1	6.4	1.7	4.3		○	不明	不明
2		6.9	1.5	5.1		○	○	○
3		7.2	1.4	4.6		○	不明	×
4		7.2	1.7	5.2		○	○	×
5		7.4	1.5	5.8		○	○	○
6		7.4	1.7	6.8		○	○	○
7		8.8	1.4	8.0		○	○	×
杯 a								
1		10.6	2.0	7.4		○	○	○
2		11.2	2.8	5.6		○	不明	不明
3		12.8	2.5	9.3		○	○	○
4		13.2	3.3	8.7		○	○	○
5		17.2	4.0	9.8		○	○	不明
青茶色土層								
皿 a								
1		7.2	1.8	4.8		○	○	○
杯 a								
1		(11.8)	2.3	7.5		○	○	○
炭化層								
皿 a								
1		6.3	2.0	5.0		○	○	○
		(7.6)	1.75	6.2		○	○	○
2		杯 a						
3		11.9	3.0	8.1		○	○	○
灰砂層								
皿 a								
1		(7.2)	1.5	4.8		○	×	不明
2		7.5	1.35	6.2		○	○	×
3		(8.1)	1.5	6.4		○	不明	○
皿 b								
1		6.2	1.6	4.1		○	○	○
2		6.9	1.85	3.7		○	○	○
杯 a								
1		(12.5)	2.7	8.3		○	○	○
黄褐色土層(第58次調査)								
須恵器(蓋)								
1	1	13.9					○	

番号	持図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部の ナメの有無	板状圧痕 の有無						
					ハ	ラ								
灰茶色土層														
須恵器(蓋)														
1	2	13.4	不 明		不 明		○							
須恵器(高台付杯)														
1	3	12.0	3.3	9.0	○		○							
2	5	13.5	4.4	10.0	○		○							
3	6	14.4	4.1	10.0	○		○							
4	4	14.8	3.6	9.3	○		○							
杯 a														
1	7	13.0	2.1	8.8		○	不 明	○						
黒褐色土層及びSD1495(第59次調査)														
須恵器(蓋)														
1	1	9.4		2.9										
須恵器(皿)														
1	3	17.9	13.4	2.2	○									
須恵器(杯)														
1	4	8.8	5.9	3.5	○									
須恵器(高林) 杯														
1	6	9.8	7.0	8.3										
須恵器(高台杯)														
1	5	25.4	5.0											
黒色土器A														
1	9	15.4		6.3										
旧表土(第61次調査)														
黒 a														
1	1	6.3	1.1	4.3		○	○	×						
2	2	6.7	1.2	5.2		○	○	×						
3	3	9.0	1.6	6.0		○	○	×						
4	4	9.0	1.5	6.8		○	○	×						
5	5	9.4	1.3	8.1		○	○	×						
6	6	9.8	1.9	7.2		○	○	×						
杯 b														
1	7	12.1	2.65	5.4		○	不 明	×						
SK1521														
須恵器(蓋)														
1	1	11.5	2.1		○		○							
2	2	14.1	3.5		不 明		○							
3	3	15.6	3.9		○		○							
4	4	12.9	3.9		○		○							
5	5	13.4	4.0		○		○							

番号	挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し系		内底部のナゲの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	ラ		
須恵器(身)								
1	6	9.4	2.85	7.0	○		○	
2	7	10.9	4.3	5.7	○		○	
須恵器(高杯)								
1	8	11.5	6.7				○	
2	9	12.3	10.1				不明	
須恵器(杯)								
1		8.6			○		○	
S D 1522								
皿 a								
1	1	6.2	1.2	4.6		○	○	×
2	2	6.5	1.0	4.8		○	○	×
3	3	7.4	1.3	5.7		○	○	×
4	4	7.8	1.1	5.8		○	○	○
5	5	8.6	1.9	6.4		○	○	×
6	6	8.8	1.5	7.0		○	○	×
7	7	9.4	1.6	5.9		○	○	×
S K 1525 (第62次調査)								
皿 a								
1	1	9.9	1.3	7.5	○		○	○
2	2	9.4	1.0	6.8	○		○	○
3	3	9.7	1.4	7.3	○		○	○
4	4	9.8	1.1	7.8	○		○	○
5		9.8	1.3	7.4	○		○	○
6	5	9.8	1.3	7.1	○		○	○
7	6	10.1	1.2	7.5	○		○	○
8	7	10.3	1.0	7.9	○		○	○
丸底の杯								
1	8	14.7	(3.5)		○			
2	9	14.9	3.9		○			
3	10	15.1	3.3		○			○
4	11	15.4	3.7		○			○
5	12	15.5	3.6		○			○
6	13	15.8	3.5		○			
高台付の碗								
1	14	14.2	4.6	6.8				
2	15	15.9	5.2	7.1				
黒色土器(碗)								
1	16	15.1	5.8	6.9				

図 版

図版 1

第33次補足調査

西トレーンチ（西から）



東トレーンチ（北から）





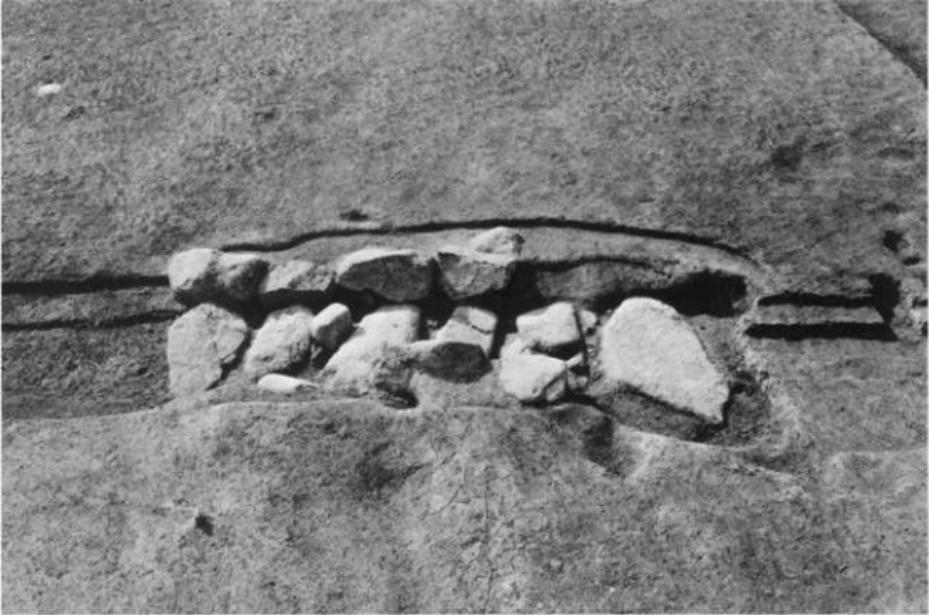
図版2 第54次調査区全景 (上) 東から、(下) 西から



図版 3

(上) S A 1410 築地 (北から)
(下) S D 1395 A・B 溝 (東から)





図版4

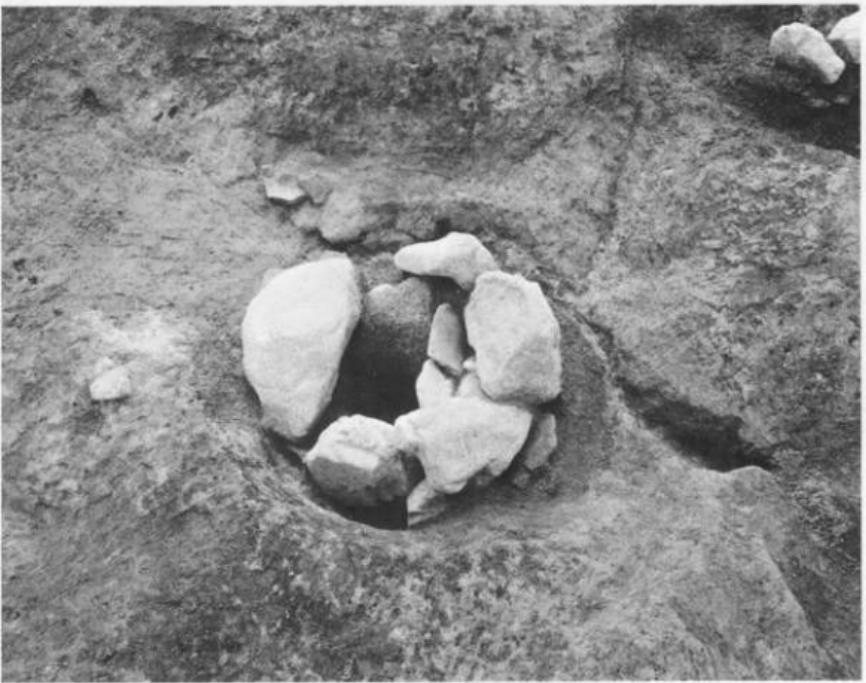
(上) SX1385 暗渠 (東から)
(下) 同上 (北から)



図版5

(上) S X 1390 暗渠 (東から)
(下) 同上 (北から)





図版6 (上) S E 1387 井戸・S X 1388 土壠 (北から)・(下) S X 1386 井戸 (西から)

図版 7

下層遺構

S X 1406 (西から)



下層遺構

S X 1403 (東から)





図版8

H地区の調査

(上) SD 1403溝(北から)

(下) 近世の溝(東から)

図版9

第55次調査

南北トレンチ（北から）



東西トレンチ（東から）



図版10
第56次調査
Aトレンチ (西から)



同上 (東から)



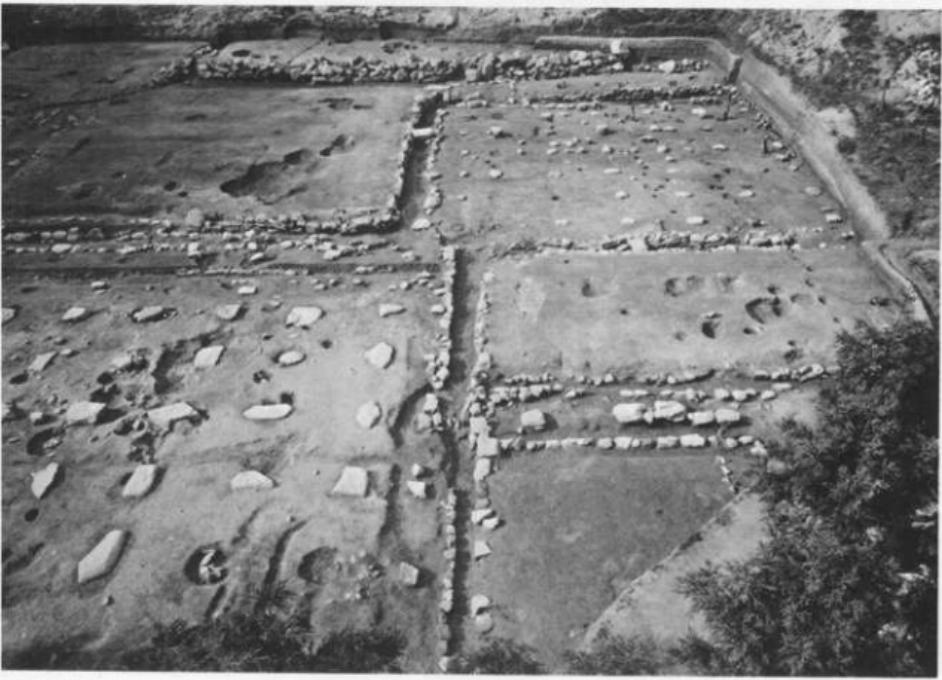
図版11

日トレンチ (東から)



S E 1425 井戸 (北から)





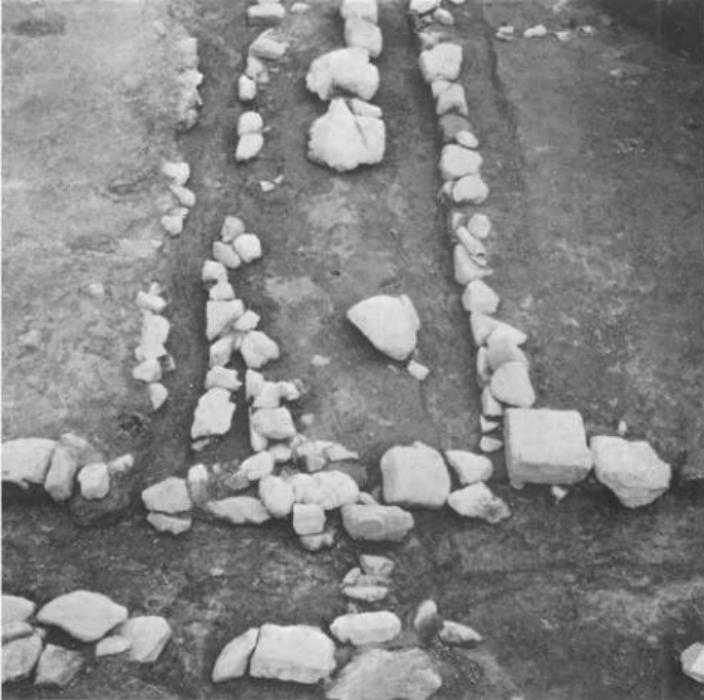
図版12 第57次調査区全景（北から）・（下）同（南から）



図版13 (上) SB1430礎石建物 (北から)・(下) 同 (東から)

図版14

S D 1429A・B溝（西から）



S D 1427・1433A・B溝（東から）





図版15（上）SB1440礎石建物（西から）・同（南から）

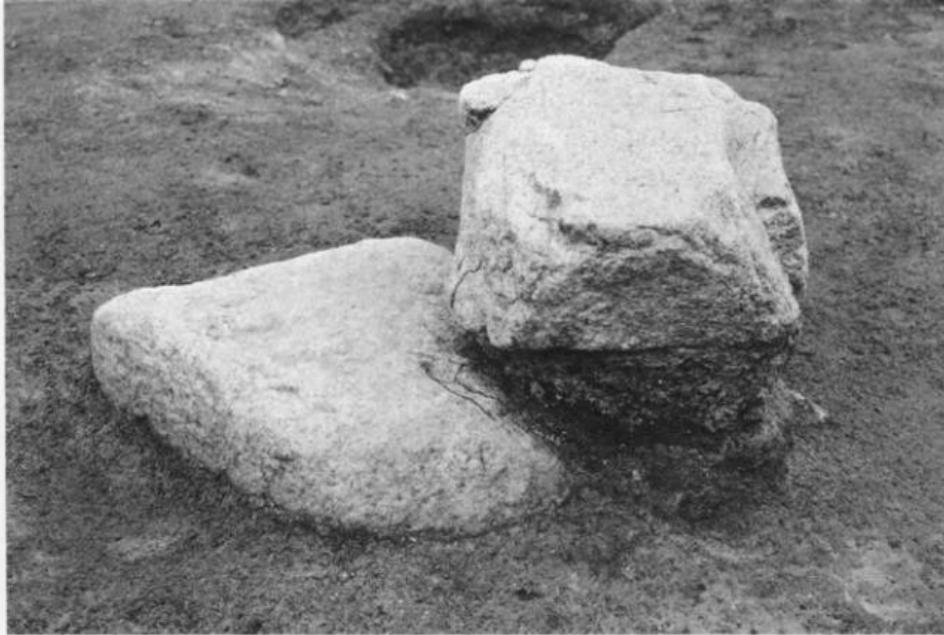
図版16

S X 1455歩廊状遺構（西から）
S D 1437・1438溝（西から）



S D 1436溝（南から）
S X 1454渡り石（南から）





図版17 (上) SB 1440A・B 磨石 (南から)・(下) SB 1440磨石上の柱根 (西から)



図版18 (上) SB1440礎石上の柱根 (西から)・(下) SX1460暗渠 (南西から)

図版19

S D 1439・1441溝（西から）



S D 1438・1439の北側石積

(南から)



図版20

S K 1470土壙（西から）



S F 1435石積遺構（東から）





図版21 第58次調査区全景（上…東から、下…西から）



図版22

第59次調査区全景

(上) (南西から)

(下) 同上、南北方向トレンチ

(南から)

図版23

東西方向トレンチ（西から）



S D 1495溝（北から）





図版24 (上) S D1495溝・S K1447土壤 (北から)・(下) S D1496溝 (北から)



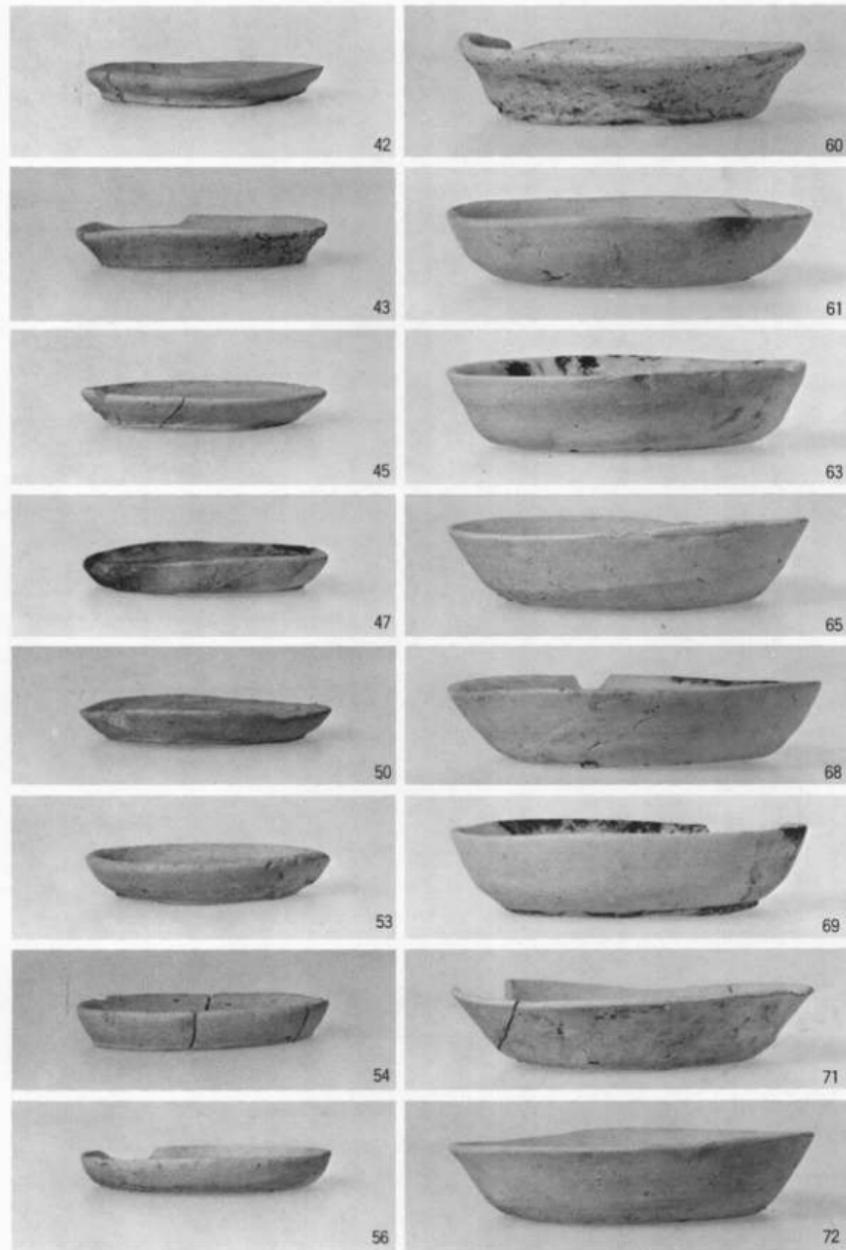
図版25 第61次調査区(上)全景(南から)・(下)同(西から)

図版26
第62次調査区全景
(西から)

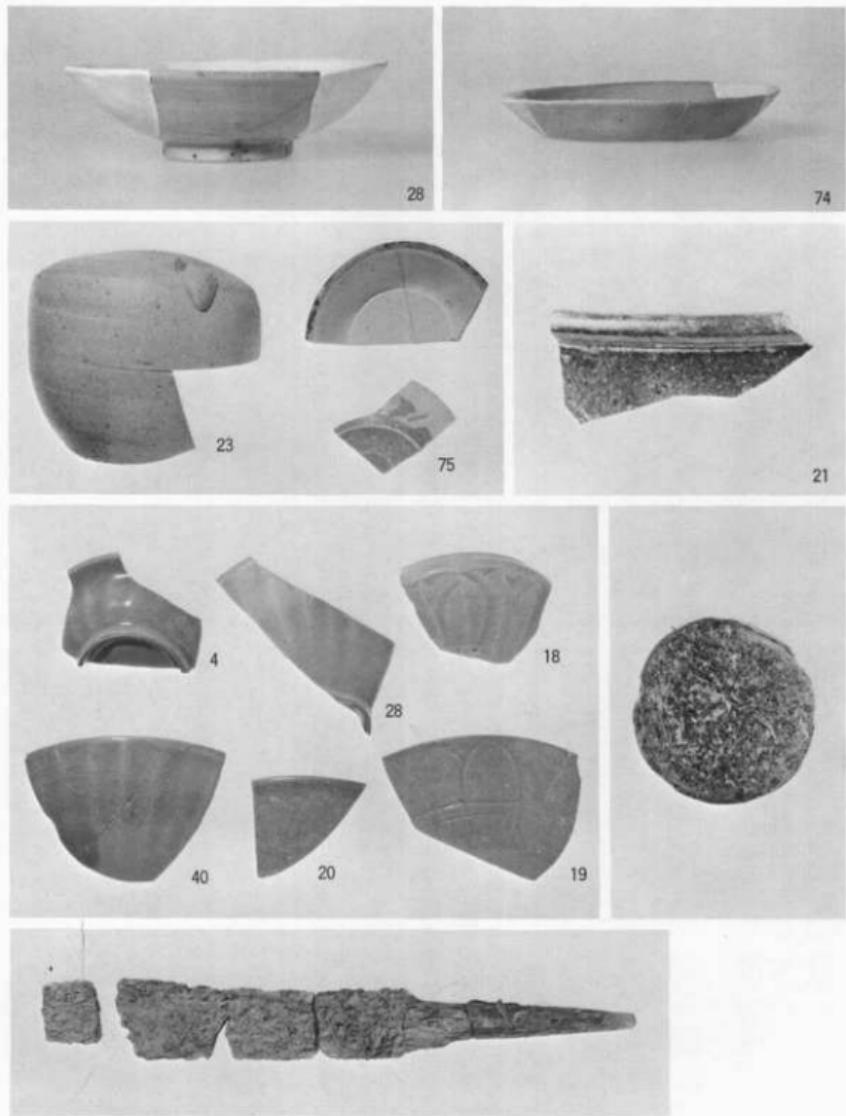


同上 (東から)

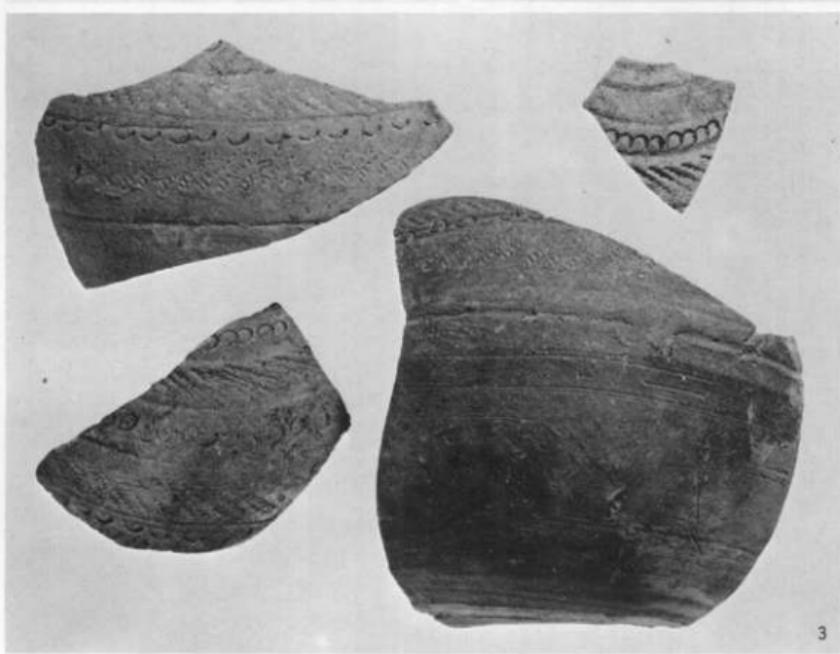




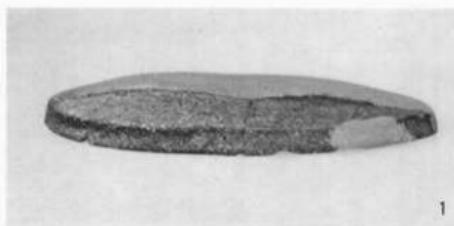
図版27 第33次補足調査 S K 1538 D 出土土器 (1/3)



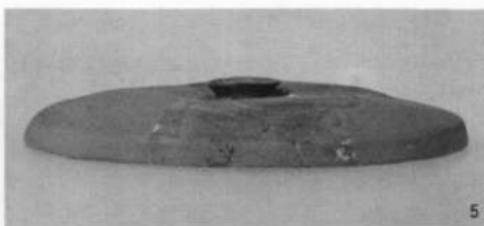
圖版28 第33次補足調查 S D 605 (18・19・20・21) S K 1538A (28) S K 1538C (40)
 S K 1538D (74・75) S K 1539上層 (23・28) S K 1540 (4) 出土磁器、S D 605
 出土刀子、S K 1539出土石製品



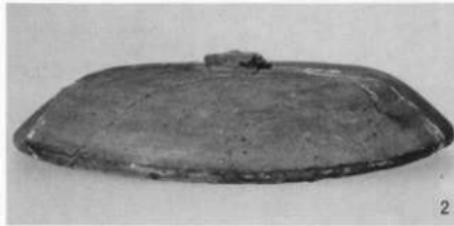
圖版29 第54次調查 腐植土下層 (1) 滴茶色土 (1) 明黃色土 (4) 淡黃色粘土 (13) 炭層 (3)
出土土器



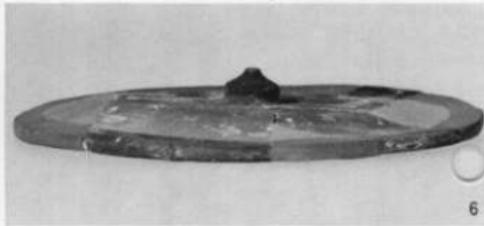
1



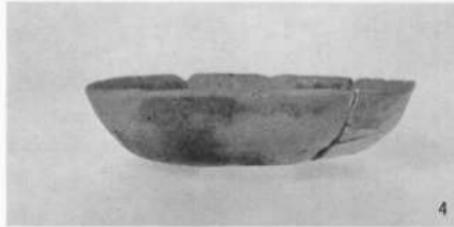
5



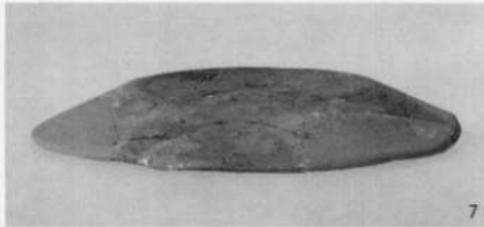
2



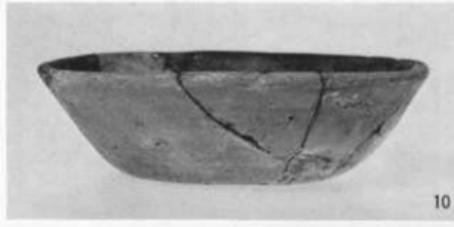
6



4



7



10



11

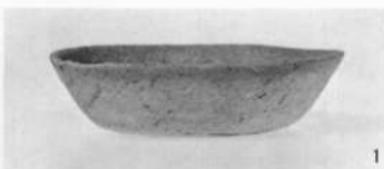


9



12

図版30 第54次調査 S X 1390 (1) S X 1394 (2) S D 1401 (4) 青褐色粘土 (5~7・9~12) 出土土器



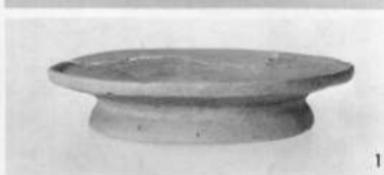
1



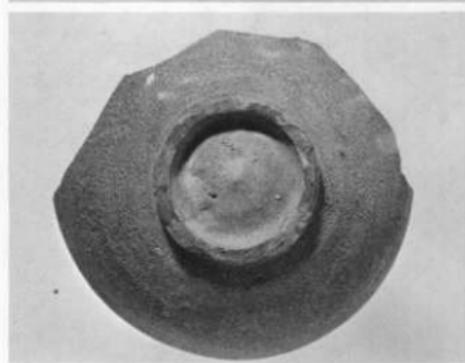
6



3



1



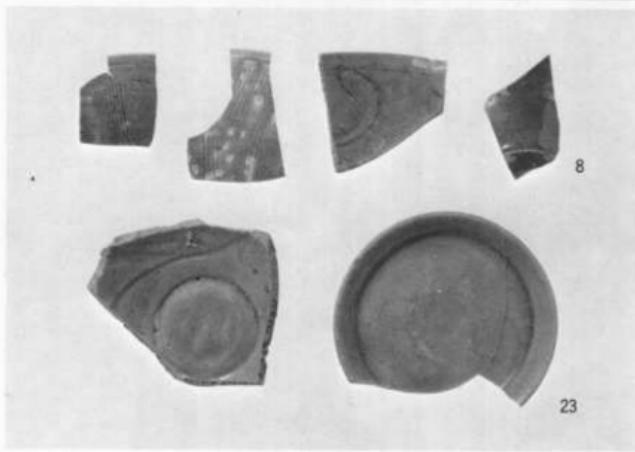
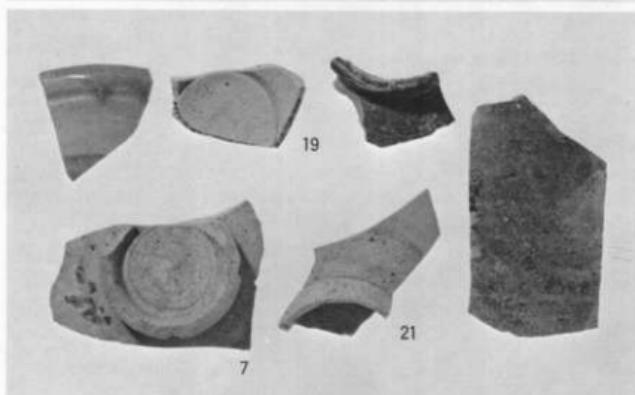
2

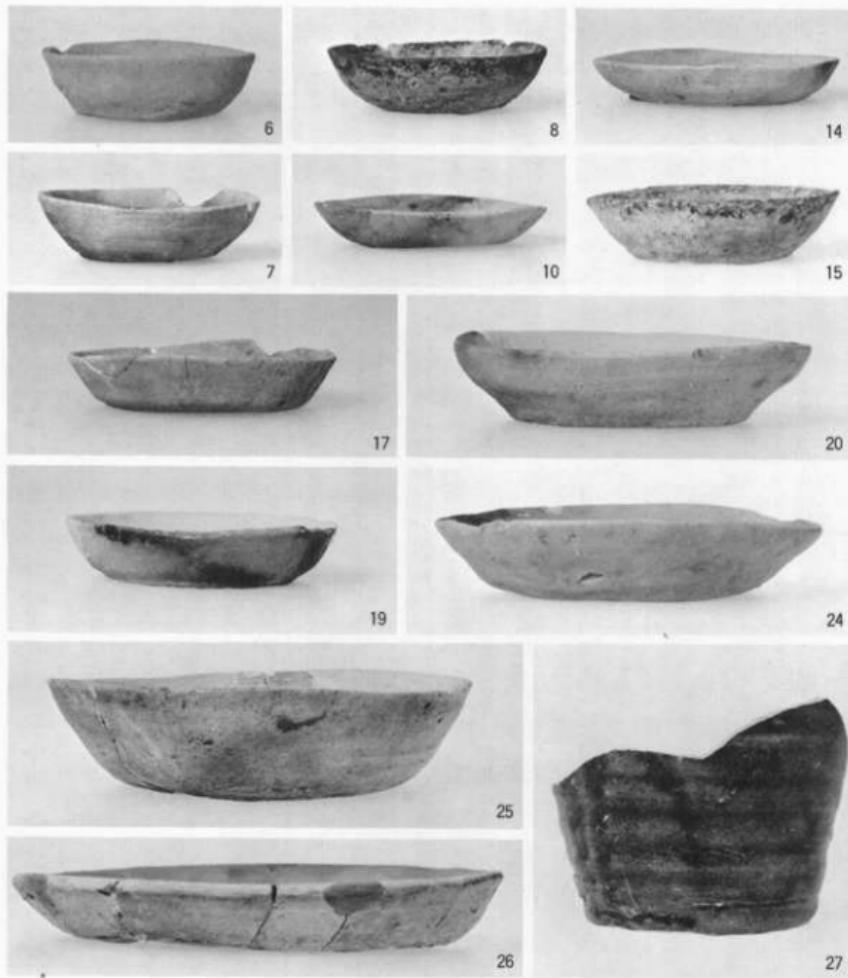


4

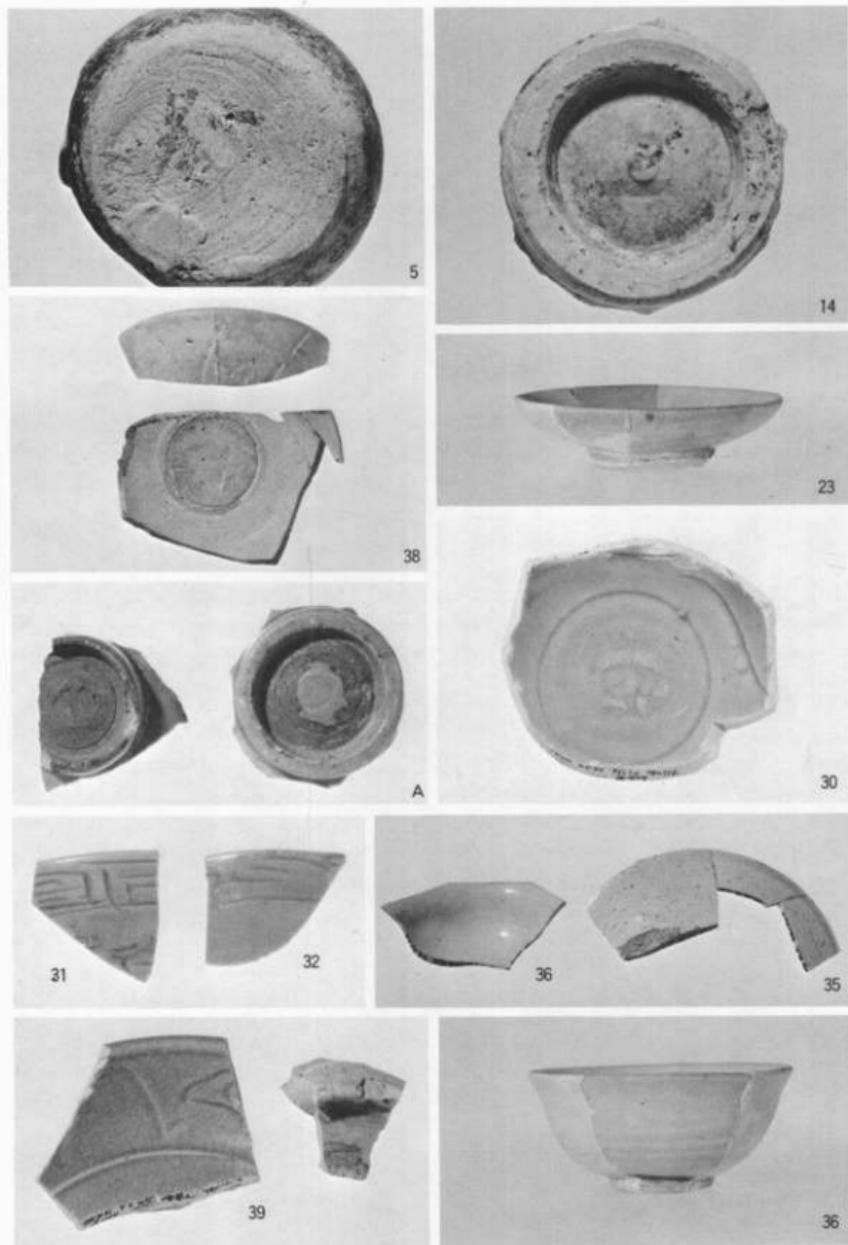
図版31 第54次調査 SX1388(3) SK1391(1) SD1395A(6) 灰白色砂土(1・2)出土
土器・陶磁器

図版32
第56次調査
S K 1418(1) 出土土器(1/3)
S X 1423(19・21・23)
出土磁器
S K 1420(7・8) 出土土器





図版33 第57次調査 SK 1470出土土器・陶器 (6~27) (1/3)



図版34 第57次調査 SD 1436 (5) SD 1438 (14) 出土墨書き土器・陶器、
SD 1429 (23) 腐植土 (A・23・30) 暗茶色土 (31~39) 出土磁器



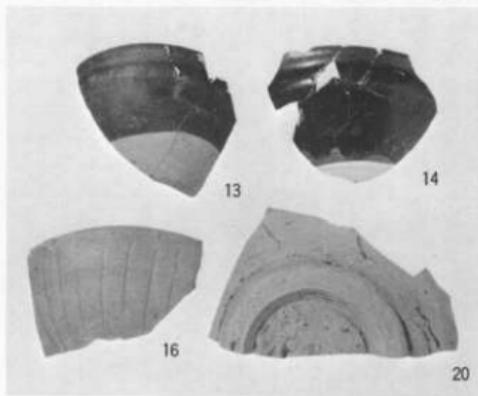
27



32



12



13

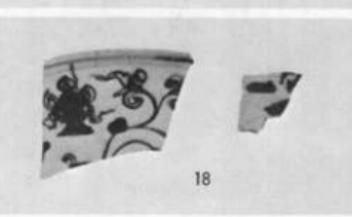
14

16

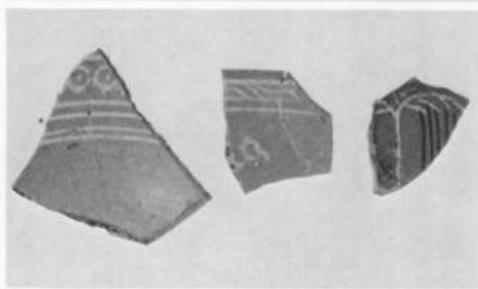
20



17

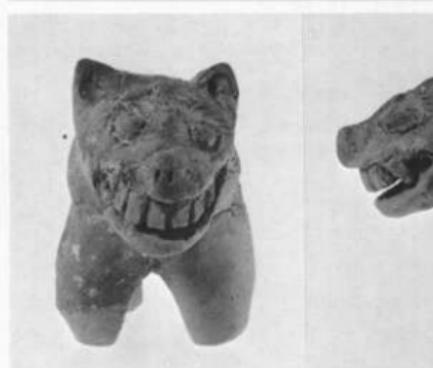
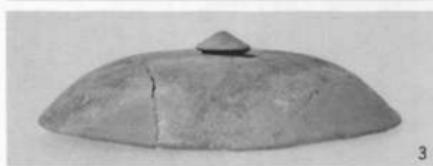
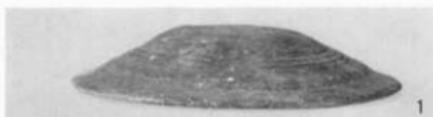


18

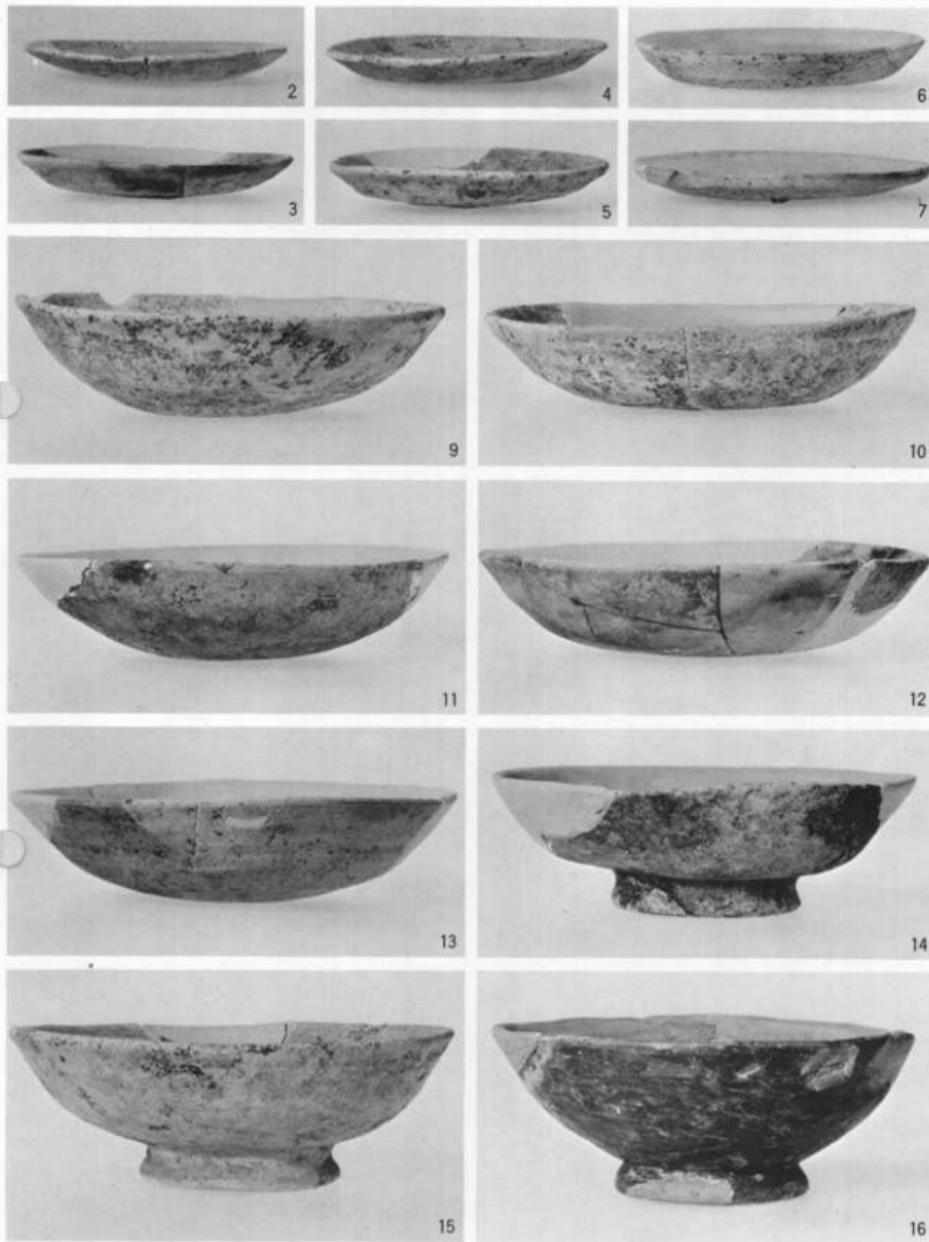


圖版35 第57次調查

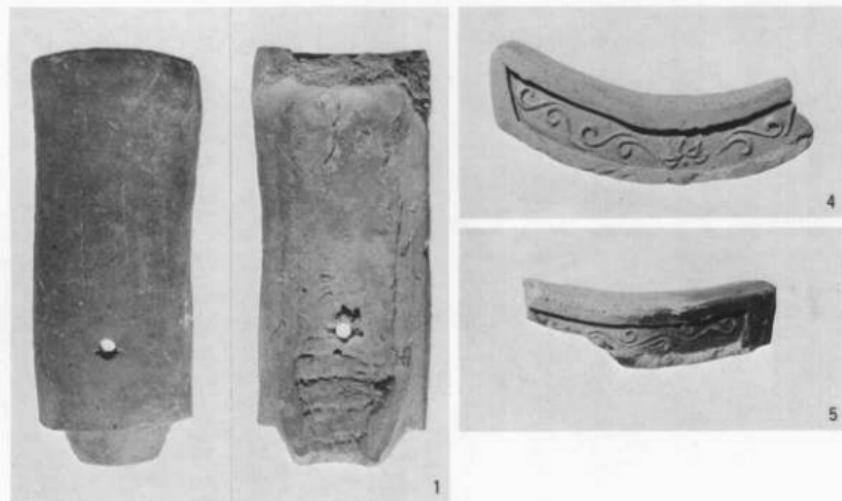
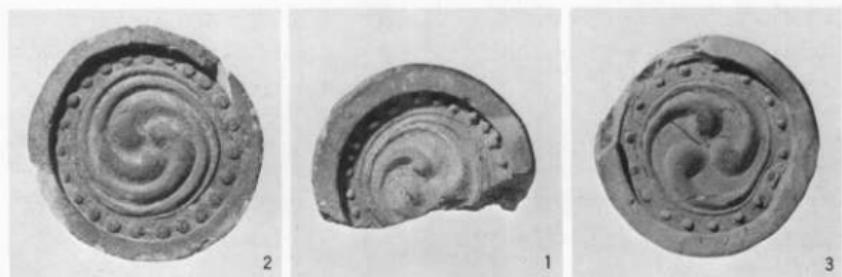
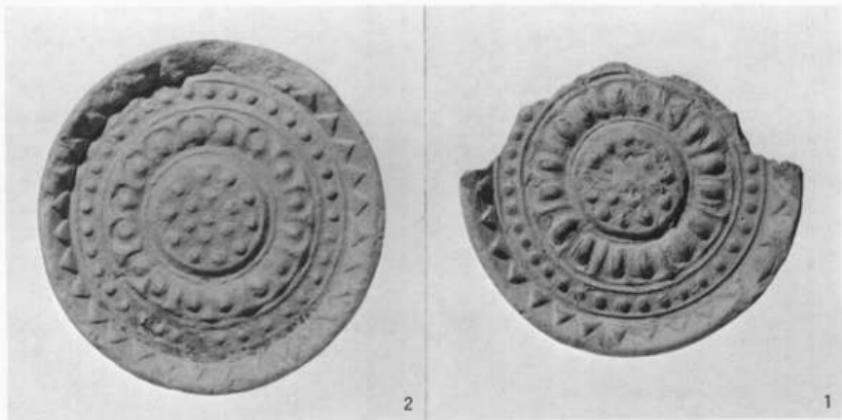
暗茶色土 (27・32) 出土土師器・陶器、
黑灰色土 (12~20) 出土陶磁器



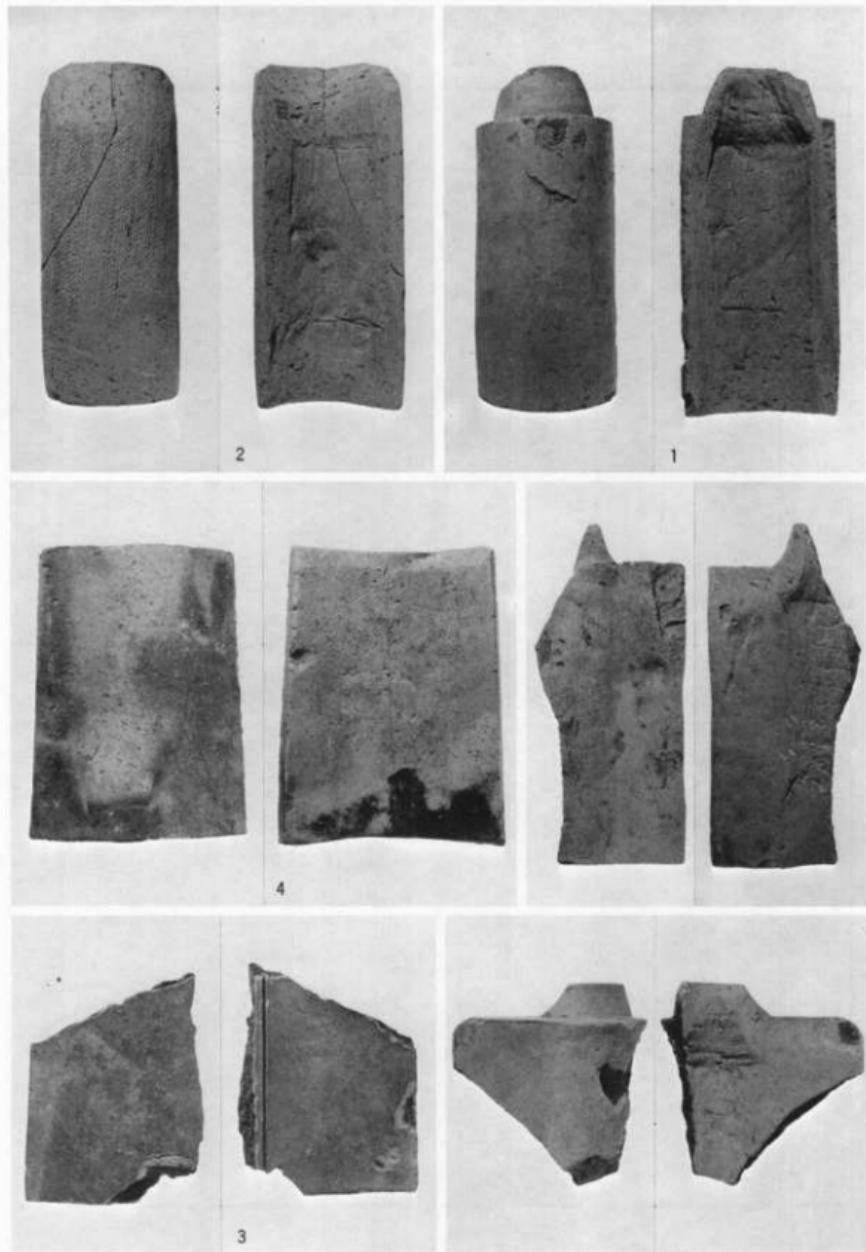
圖版36 第61次調查出土土器・動物形須惠製品



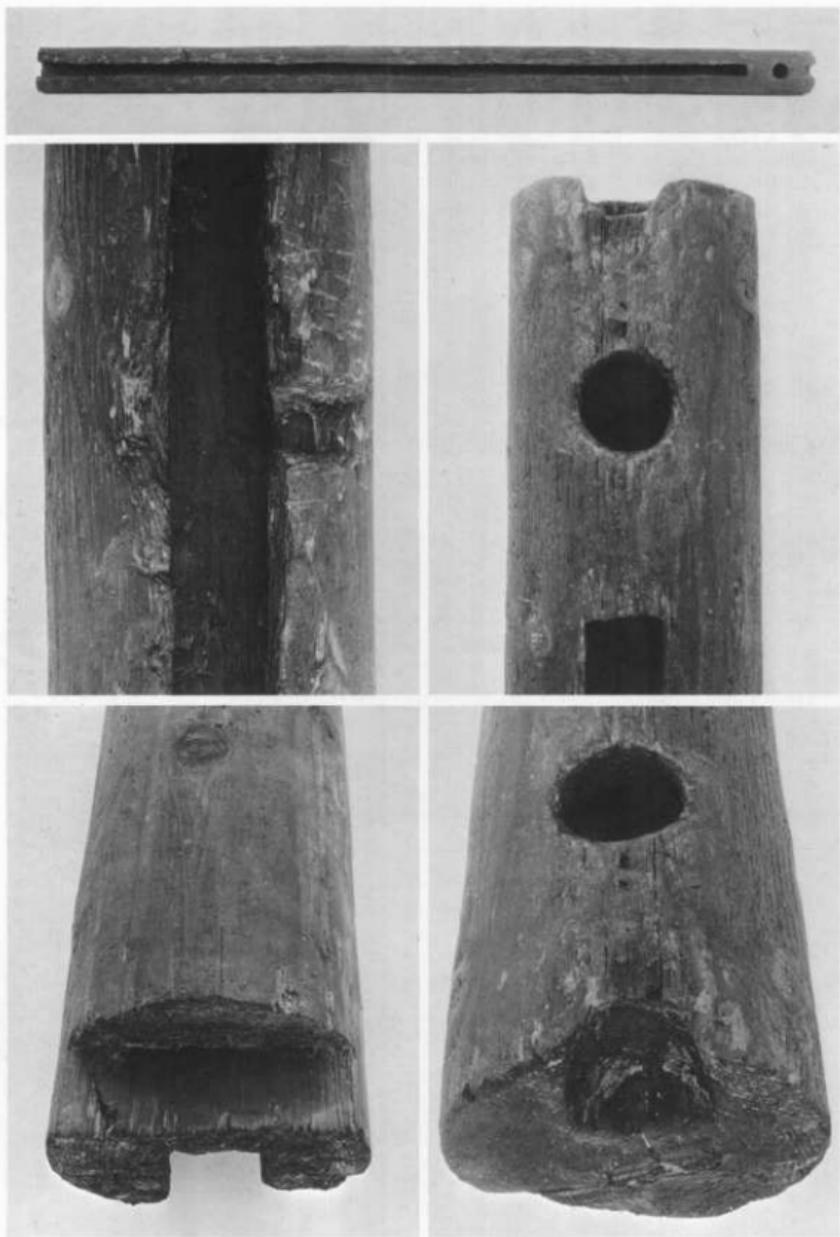
図版37 第62次調査 SK 1525出土土器 (1/3)



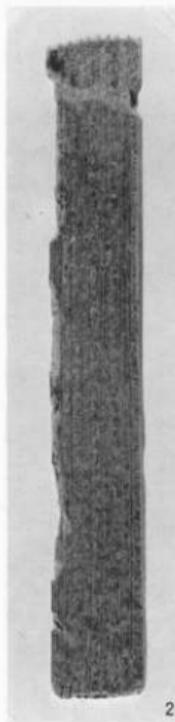
図版38 第54次調査出土軒丸瓦（1・2）第57次調査出土軒先瓦（1～5）



図版39 第57次調査出土丸・平瓦および熨斗瓦・雁振瓦



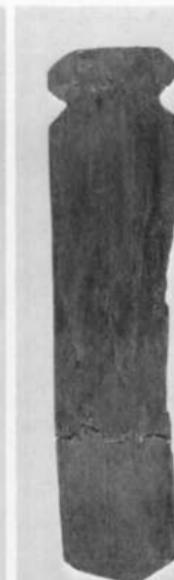
図版40 第54次調査出土木製品



2



3



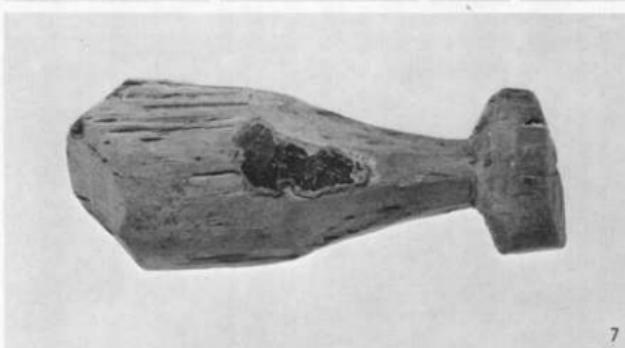
4



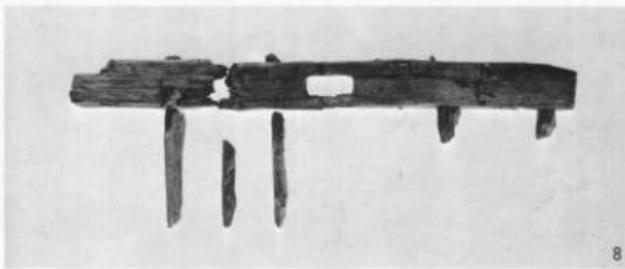
5



6



7



8

図版41 第54次調査出土木製品



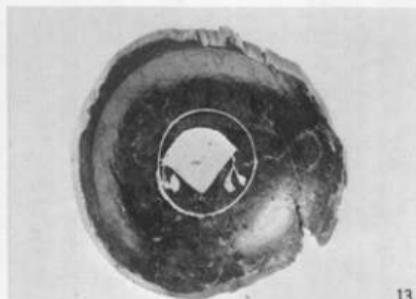
8



15



9



13



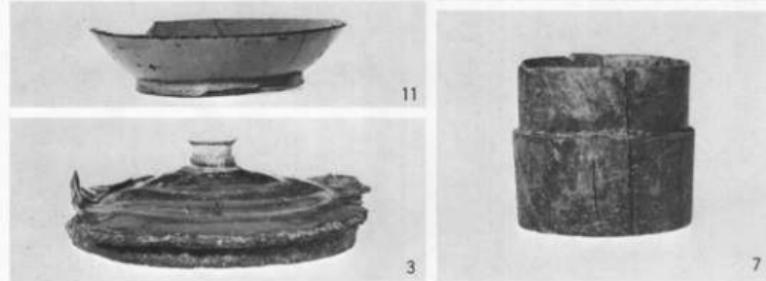
12



14



11

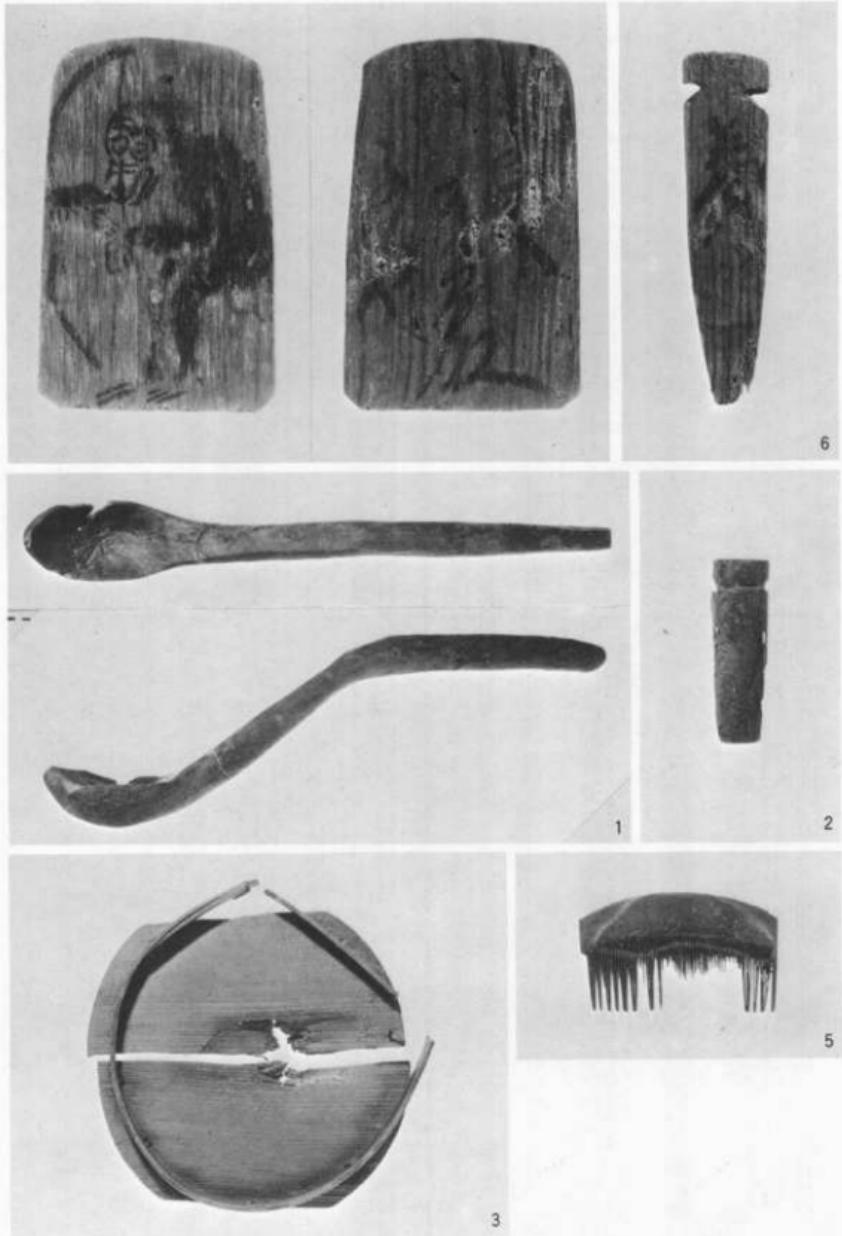


3

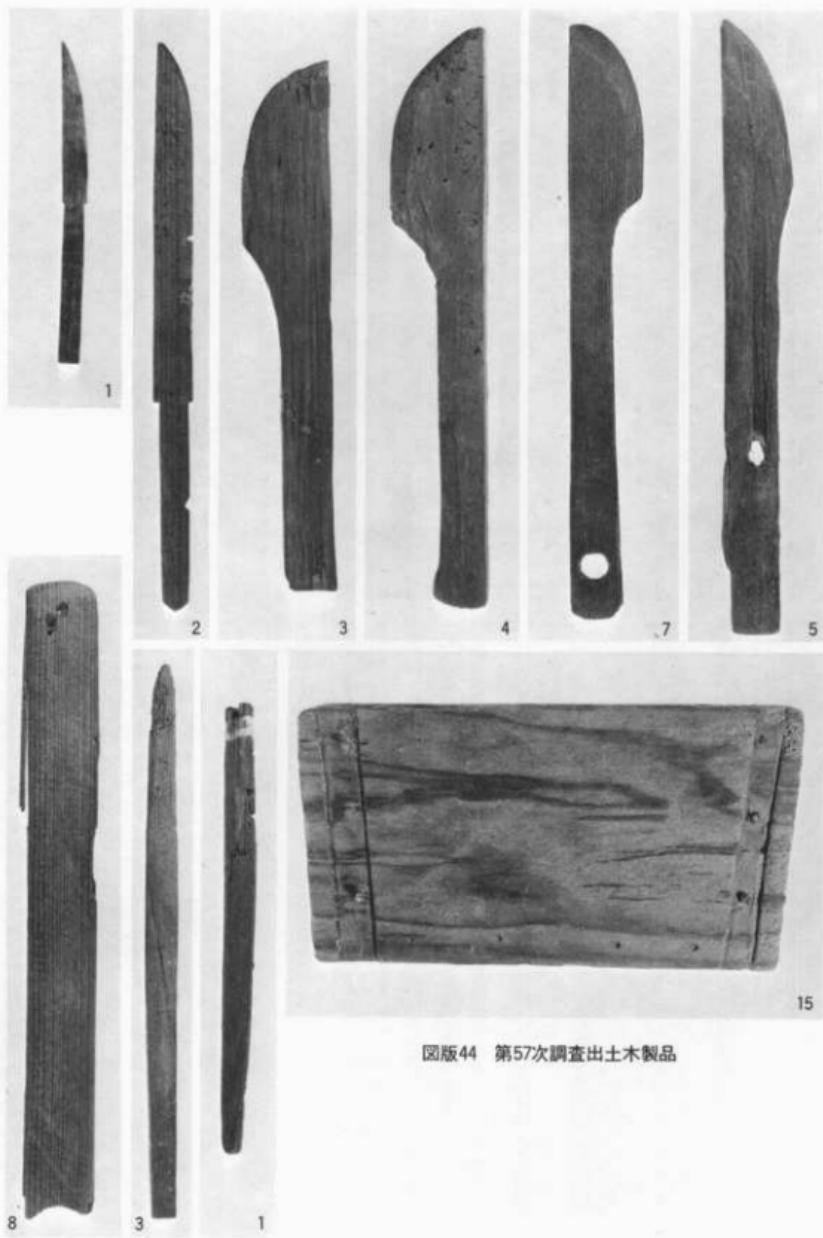


7

図版42 第57次調査出土木製品



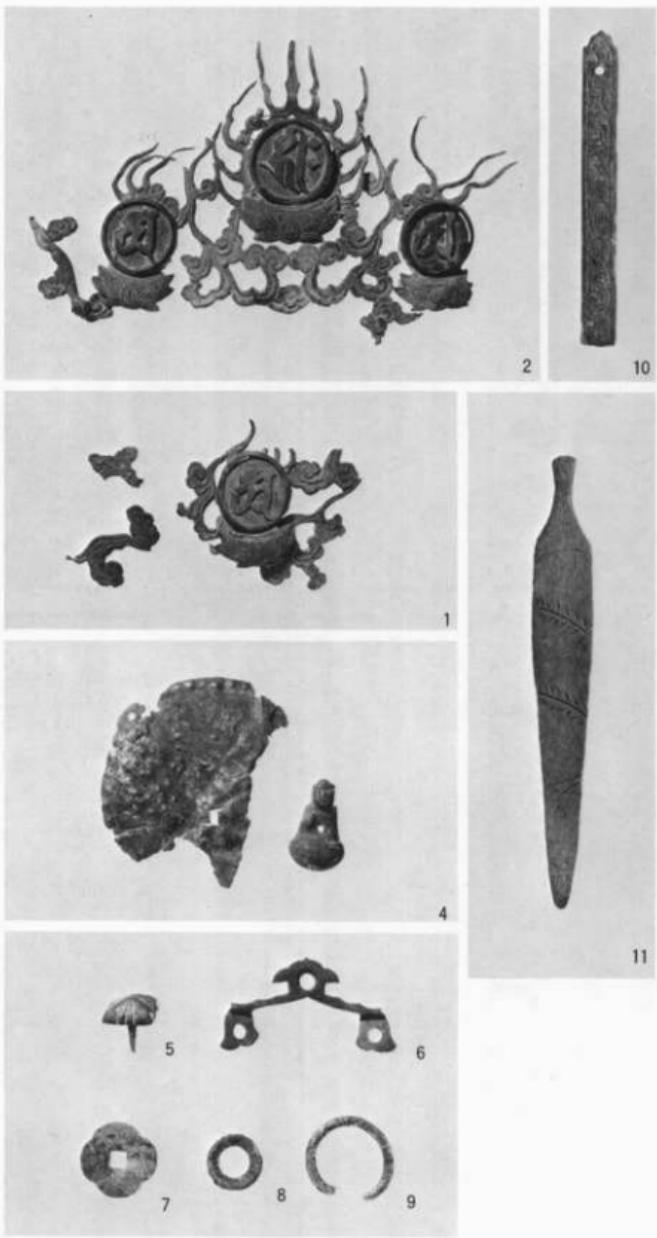
図版43 第57次調査出土木製品



図版44 第57次調査出土木製品



圖版45 第57次調查出土木製・土製人物・仏像



図版46 第57次調査出土金属製品

付 篇

例　　言

- 1、本書は、大宰府条坊内八条七～八坊の発掘調査の概要報告である。
- 2、実測図作製は大宰府史跡南門中門間の原点杭No1からの数値による。
- 3、調査は、第1次調査（昭和53年2月13日～3月18日）を故前川威洋（当時、福岡県教育庁文化課主任技師）が、第2次調査（昭和53年6月12日～6月17日）を馬田弘稔（福岡県教育庁文化課技師）が担当した。尚、第1次調査は、九州歴史資料館調査課の石松好雄、高橋章および調査補助員の沢田康夫（現那珂川町教育委員会文化財係）、真玉秀樹が参加した。
- 4、本報告では遺構番号・遺物番号の表示、あるいは遺物の分類基準などを『南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』に準拠しており、「大宰府史跡」とは必ずしも一致していない点がある。
- 5、掲載の遺構写真は調査担当者が、遺物写真は石丸洋（九州歴史資料館学芸第一課）が撮影した。遺物実測等の整理は補助員の川村博・田浦郁子・山本祥子・大坪安子があたり、付録の執筆・編集は川村・田浦があたった。

条坊の調査(八条七・八坊)

当遺跡は、大宰府郭内域の大宰府条坊遺跡と呼称され、「大宰府史跡」(昭和46~53年発行)『南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』(第2・3・6・8・8〔下〕集)にその成果が整理報告されつつある。

今回の調査は、大型店舗建設に伴なう緊急調査で、地番は太宰府町大字太宰府字月見山2738~43他であり、鏡山 猛氏の復原条坊では八条七一八坊にあたる。調査期間は昭和53年2月13日から3月18日までである。

尚、調査終了時より、検出した溝が条坊に関係するものかという問題や奈良期の須恵器・土師器などを多量に包含する層の存在のため、遺構の検出などを目的として、補足調査をおこなった。調査期間は昭和53年6月12日から6月17日までである。

検出遺構

井戸12基・土壙57基・溝22条の遺構を検出した。

以下、主な遺構について記す。

井戸(第3図)

S E01 挖方は円形プランで、約70×67cm、深さ約45cmを測り、桶様の枠が据えられている。上端は欠失し、下端は約48×50cmを測る。

S E04 挖方はほぼ円形プランで、約190×180cm、深さ約82cmを測り、2段の桶様の枠を据えている。上段はほとんど欠損し、下段は上端で径約70cmで、下端で約80cmである。なお、東側の杭は、S E04井戸・S D02溝のいずれに伴なうものか不明である。

S E06 挖方はほぼ方形プランを呈し、約140×130cm、深さ90cmを測る。下段は3個の曲物で、上段には方形の枠組が据えられている。方形枠組は約55×58cmを測る。

S E07 S E06井戸の東側に隣接し、約140×130cm、深さ90cmを測り、桶様の枠が据えられている。上端は径約62cmで、下端は径約60cmを測る。

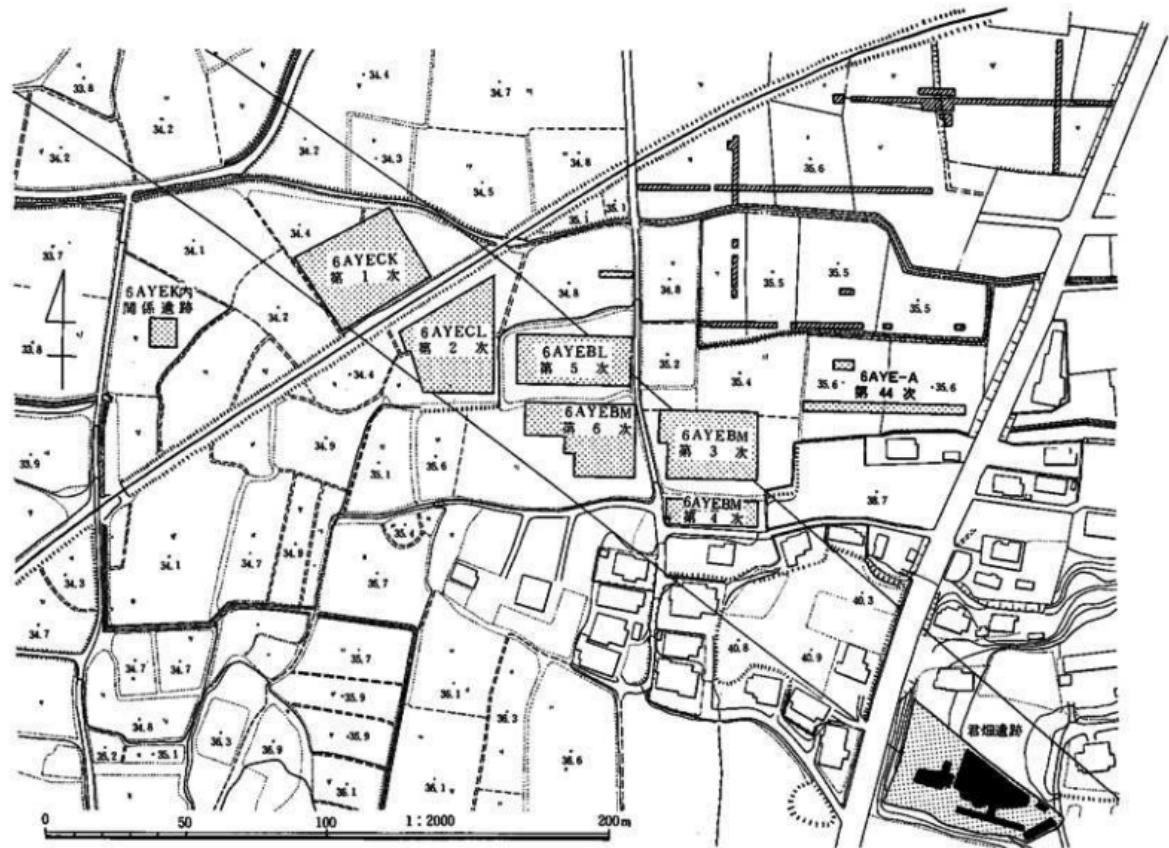
S E10 S K37土壙を切っており、挖方は不整形プランで、方形枠組を据えている。枠組はほぼ正方形で一辺50cm前後である。

土壙(第3図)

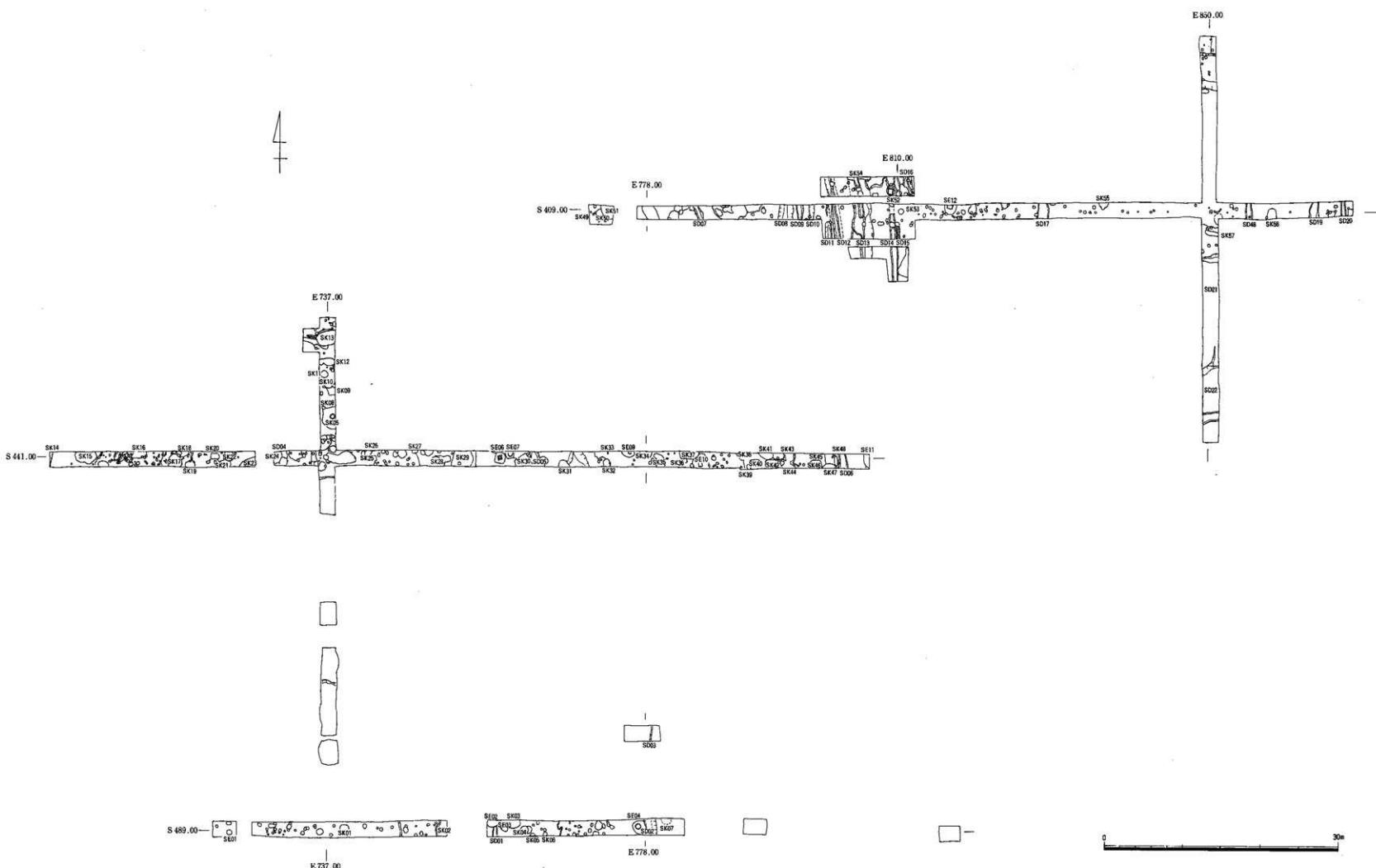
S K52 ほぼ円形プランで、109×106cm、深さ約56cmを測り、一辺の長さ70cm、厚さ約14cmの方形厚板が据えられ、厚板の上に6個の石塊が持ち送り状に重ねられている。方形厚板の直下は地山(暗褐色粘質土)であった。

溝(第2図)

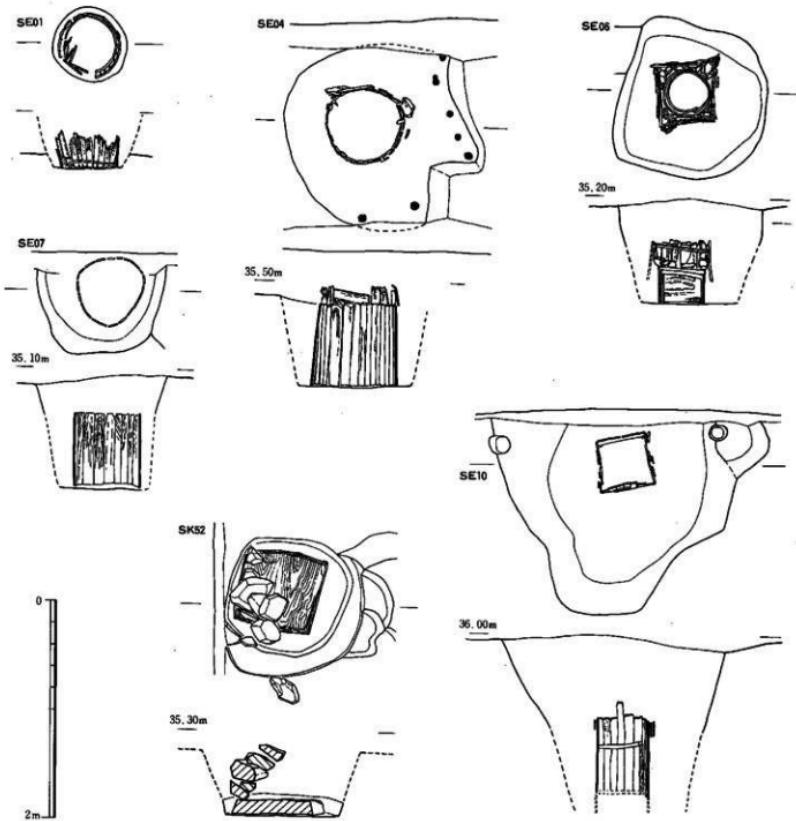
S D02・S D03 S D02およびS D03は南北溝で、幅約190cm、深さ35cmである。北側の



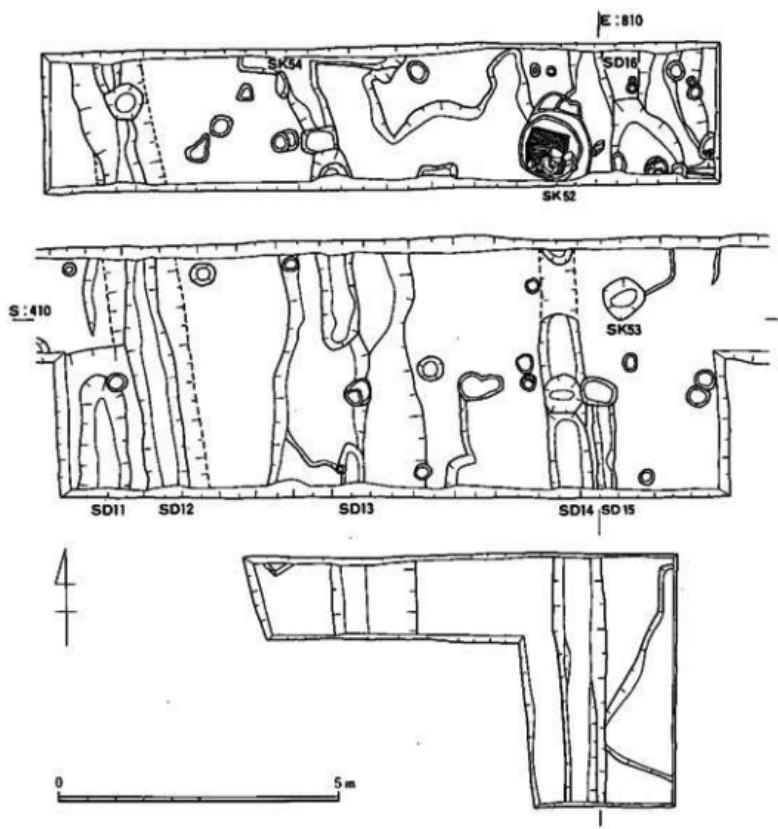
第1図 八条七・八坊周辺地形図



第2図 遺構配置図 (1/400)



第3図 SE01・SE04・SE06・SE07・SE10・SK52 実測図



第4図 SK52～SK53・SD11～SD16実測図

トレンチでは検出できず、削平されていたと考えられる。南側では、大宰府史跡第44次調査のSD1175に接続するものと考えられる。

他の遺構は、第1・2表にみるとおりである。

第1表 井戸一覧表

(単位cm)

井戸番号	旧井戸	掘方規模		井戸分類	出土遺物
		平面	深さ		
S E 0 1		70 × 67	45	II-B-C(?) IV-A(?)	土師器II-4類。須恵器。瓦。磁器(R ₁ , S類)。雜器9類。
0 2	2号	- × -	-		土師器I類。須恵器。黒色土器。常滑。磁器(A類)。
0 3	1号	138 × -	-		土師器II-3~II-4類。須恵器。黒色土器。内黒土器。瓦。土鍋。雜器(1類)。磁器(A, M, R ₄ , T, Y類)。
0 4	3号	(190) × (180)	82	II-B-C(?) IV-A(?)	土師器II-4類。土鍋。石鍋。片口。瓦。雜器。
0 5	1号	- × -	-	II-A (?)	土師器。須恵器。瓦。片口。磁器(A, O, P, R ₄ , R ₅ , Z類)。
0 6	6号	140 × 130	90	II-A	土師器。須恵器。磁器(R類)。桃の種子。
0 7	5号	110 × -	110	IV-A	土師器。瓦。片口。雜器。磁器(R ₃ , T類)。
0 8					土師器II類。須恵器。磁器(R ₁ , R ₂ , R ₄ 類)。
0 9	3号	158 × -	-		土師器。須恵器。磁器(R ₄ 類)。
1 0	2号	- × 230	160	II-A	土師器II-3~II-4類。須恵器。瓦。土鍋。綠釉。雜器7類。磁器(M, L, Q, R, R ₄ , S, U類)。
1 1		- × -	-	不明	土師器II-4類。須恵器。雜器。瓦玉。磁器(R ₁ , T類)。
1 2		118 × -	-	II-A (?)	土師器。須恵器。磁器(A類)。内黒土器。瓦。

第2表 土壙一覧表

(単位m)

遺構番号	地 区	旧番号	平面形態	規 模			出 土 遺 物
				長径	短径	深さ	
SK 01	6AYEAL-1A	P-1	不 整 形	1.2	0.86	0.1	土師器(奈良末~II-5類) 瓦器・磁器(R ₄ 類)
* 02	* -1B	P-3	不 整 形			0.16	土師器・須恵器・土鍋・石鍋・ 片口・火舎・雜器8類
* 03	* -1B	P-1	不 整 形			0.17	土師器II-4類・須恵器・瓦・ 雜器・磁器(R ₄ 類)
* 04	* -1B	P-2	円 形	1.02	1.05	0.2	土師器II-3類・須恵器・瓦・ 雜器7類・磁器(R ₄ , U類)
* 05	* -1B	P-5	?			0.21	
* 06	* -1B	P-4	隅九方形			0.17	土師器II類
* 07	* -1C	P-6	円 形				土師器II類
* 08	6AYEAK-2C	P-27	橢 円 形	(0.6)	0.4	0.25	土師器II類
* 09	* -2C	P-31	不 整 形			0.43	土師器II-3~4類・瓦・ 磁器(R ₄ 類)
* 10	6AYEAL-2C	P-28	円 形	1.0	0.91	0.48	土師器II-5A類・須恵器・石鍋・ 瓦・雜器7類・磁器(A-I-O-R ₄ 類)
* 11	* -2C	P-30	円 形	0.8	0.95	0.14	
* 12	6AYEAK-2C	P-29	不 整 形	1.9	1.1	0.55	土師器I-2類・II-2類・須恵器・ 磁器(F-Q-Y類)
* 13	6AYEAL-2D	大土壤	不 整 形	?	1.9	0.53	土師器II-3類・須恵器・瓦器・土 鍋・片口・高色土器・鋲型・磁器 (E-O-Q-R ₃ -R ₄ -S-T-U-X類)
* 14	6AYEAK-3A		不 明				土師器・瓦
* 15	* -3A	P-10	不 整 形	2.73	?	0.28	須恵器・土鍋・片口・雜器11類 磁器(O-Q-R ₃ -R ₄ -T-W-Z類)
* 16	* -3A	P-9	隅九長方形?	2.22	?	0.17	須恵器II-5A類・須恵器・内黑 土器・土鍋・雜器・ 磁器(O-R ₃ -R ₄ -S-T類)
* 17	* -3A	P-7	橢円形?	1.63	?	0.71	土師器・須恵器・瓦器・内黒土器・ 瓦・片口・土鍋・雜器(3~7~10類) 磁器(E-F-H-J-P-R ₃ -R ₄ -U-V類)
* 18	* -3A	P-8	不 整 形	0.85	?	0.3	土師器・雜器7類 磁器(E-R ₃ -R ₄ 類)
* 19	* -3A	P-6	不 整 形	1.3	?	0.8	土師器II-1~2類・須恵器・土 鍋

遺構番号	地 区	旧番号	平面形態	規 模			出 土 遺 物
				長径	短径	深さ	
SK 20	6AYEAK-3B	P- 5	隅丸長方形	1.1	0.75	0.26	
◆ 21	◆ -3B	P- 4	長方形?	1.43	?	0.1	土師器II-5A類・須恵器・瓦・磁器(T類)
◆ 22	◆ -3B	P- 3	円 形	1.3	(1.2)	0.58	土師器II-5B類・須恵器・瓦・土鍋・片口・磁器(O-R ₃ -R ₄ -T類)
◆ 23	◆ -3B	P- 2	不 整 形			0.35	
◆ 24	◆ -3B	P- 1	不 整 形	(1.0+?)	(0.5+?)	0.25	土師器II-4~5類・須恵器・石鍋・片口・鉄釘・磁器(R ₃ -T類)
◆ 25	◆ -3B	P-26	円 形	0.87	0.83	0.35	土師器 II-2類
◆ 26	◆ -3B	P-25	隅丸長方形	0.56	0.3	0.25	土師器II-5A類・磁器(R ₄ 類)
◆ 27	◆ -3C	P-24	楕 円 形	0.73	?	0.11	土師器II-2~3、II-5類・土鍋・瓦器・白磁片
◆ 28	◆ -3C	7号井戸	不 整 形	1.9	?	0.4	土師器II-5A類・磁器(Q-R ₃ -U類)
◆ 29	◆ -3C	P-22 23				0.43	土師器・須恵器・土鍋・瓦・雜器I類 磁器(I-O-R-R ₄ -T類)
◆ 30	◆ -3C	P-21	隅丸方形	(2.0)	1.10	0.23	土師器・磁器(S類)
◆ 31	◆ -3D	P-20	円 形				
◆ 32	◆ -3D	P-18	不 整 形	0.86		0.33	土師器II-4類・須恵器・瓦・片口・鑄物・磁器(A-O-R-R ₄ 類)
◆ 33	◆ -3D	P-19	円 形	0.2	0.18	0.13	土師器
◆ 34	◆ -3D	P-16	楕 円 形	1.53		0.06	土師器・瓦・磁器(R ₄ 類)
◆ 35	◆ -3D	P-15	不 整 形	1.25	?	0.08	土師器II-2~II-3類・須恵器・磁器(R ₄ 類)
◆ 36	◆ -3D	P-14	楕 円 形	0.46	0.37	0.185	
◆ 37	◆ -3D	P-13	長 方 形	2.14	?	0.48	土師器II-3類・須恵器・片口・土鍋・鑄型・瓦玉・常滑・綠釉・鍍器7類・磁器(P-Q-R-R ₄ -R ₅ -T-U-VX類)
◆ 38	◆ -3E	P-12	不 明			0.12	土師器・須恵器・瓦

造構番号	地 区	旧番号	平面形態	規 模			出 土 遺 物
				長径	短径	深さ	
SK 39	6AYEAK-3E	P-11	不 明			0.16	土師器II-5A類・須恵器・片口・火舍・瓦玉・雜器・磁器(R-S-U類)
* 40	* -3E	P-10	橢円形?	1.73	?	0.19	
* 41	* -3E	P-8	不 整 形	1.92	?	0.23	土師器II-5B類・須恵器・片口・瓦・雜器
* 42	* -3E	P-7	橢円形?	1.9	?	0.1	土師器II-5A類・滑石製品・綠釉・磁器(O-R ₁ 類)
* 43	* -3E	P-6	不 整 形			0.16	土師器II-3類・須恵器・雜器・染付・磁器(O-R ₁ -R ₂ -T-W類)
* 44	* -3E	P-5	不 明			0.22	土師器II-5B類・火舍・磁器(M類)
* 45	* -3E	P-2	不 整 形	1.7	?	0.07	土師器II-4類・片口・土鍋・須恵器・磁器(O-Q-T-U類)
* 46	* -3E	P-4	隅丸方形?	1.53	?	0.32	土師器II-3類・雜器・磁器(U類)
* 47	* -3E	P-3	橢円形?	1.55	?	0.38	
* 48	* -3E	P-1	橢円形	1.49	0.55	0.24	
* 49	6AYEAJ-4A	P-2	円 形	0.33	0.33		土師器・須恵器
* 50	* -4A	P-3	円 形 ?	0.29	?		
* 51	* -4A	P-1	橢円形				土師器・片口・磁器(R ₁ -R ₂ -U類)
* 52	* -4C		円 形	1.09	1.06	0.56	土師器・須恵器・土鍋・瓦・石鍋・磁器(R類)
* 53	* -4C	P-5	円 形	0.75	0.76	0.13	土師器II-1A類以前・須恵器
* 54	* -4C		不 整 形	2.98	?	0.28	土師器I-1A類以前・須恵器
* 55	* -4D	P-2	不 整 形	1.22	?	0.04	
* 56	* -4E	P-1	橢円形?	1.14	?	0.11	土師器I-4類・須恵器・黑色土器・石鏡・磁器(C-D-F類)
* 57	* -5B		橢円形?	(1.58+?)	0.55	0.205	

出土遺物

I-1 A類以前の須恵器・土師器(第5図)

I-1 A類以前に属するものはSK53土壤より出土した。

土師器

杯蓋(2566) 口径16.6cmを測り、外面は天井部をヘラ削り、体部を横ナデ後に細かいヘラみがきを、内面にもヘラみがきを施している。

須恵器

杯蓋(2567~2571) 口径11.1cmと14.0~15.5cmの大小がみられる。天井部はヘラ削りで、口縁部体部内外面には横ナデが、内面はナデ調整がある。

杯身(2573~2575) 2573・2574は、口径14.6cm・19.0cm、底径9.9cm・10.6cm、器高4.2cm・5.5cmを測り、体部は横ナデ、底部はヘラ切り後ナデを加え、高台を接合している。2573は内面漆塗りである。2575は、口径16.8cmを測り、体部は横ナデであり、口縁部は曲折する。

皿(2576・2577) 口径19.0cm・19.4cm、底径12.8cm・15.4cm、器高2.45cm・2.4cmを測り、体部は横ナデ、内底はナデ、外底はヘラ切り後ナデられている。

葉壺・蓋(2572) 口径11.1cm、器高2.35cmを測り、天井部はヘラ削り後部分的にナデが、体部には横ナデが、内底にはナデがみられる。

I-2 B類(第5図)

この類は、1A区3層で出土した。

b、小皿(I-2B-b)(2578~2580) 口径10.4~11.2cm、底径7.0~8.7cm、器高1.6~2.05cmで、体部に横ナデが、内底にナデがみられ、外底にはヘラ切り痕と板目が残る。淡黄色ないし灰黄色を呈す。

g、椀(I-2B-g)(2581) 口径12.6cm、器高3.7cmを測り、体部は内湾しつつ立上がる。黄灰色を呈す。

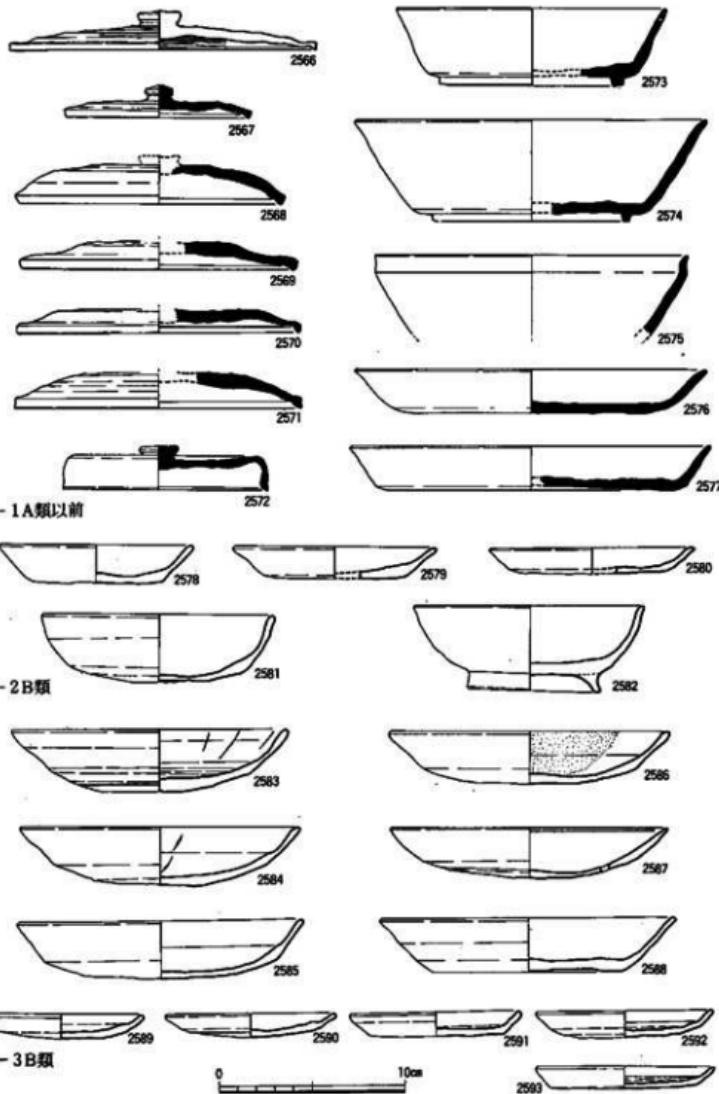
i、高台付小椀(I-2B-i)(2582) 口径12.0cm前後の高台付小椀であり、口径12.5cm、高台径7.25cm、器高4.8cmを測る。黄灰色を呈す。

I-3 B類(第5図)

この類はSD14溝で出土した。

b、小皿(I-3B-b)(2589~2593) 口径8.7~10.0cm、底径6.05~7.8cm、器高1.2~1.65cmを測り、体部に横ナデ、内底部にナデがみられ、外底はヘラ切り痕と板目をみる。淡橙黄色ないし黄灰色を呈す。

m、丸底杯(I-3B-m)(2583~2587) 口径14.5~16.5cm、器高2.8~3.7cmを測り、体内部にはコテ状工具のあたりがみられ、外底にヘラ切り痕と板目をみる。淡橙灰色ないし黄灰



第5図 I-1A類以前～I-3B類の須恵器・土師器実測図

色を呈す。2587は穿孔がみられ、2586は体部内面に煤付着をみる。

平底杯（2588） 口径16.0cm、底径10.3cm、器高2.95cmを測る。体部は横ナデ、内底はナデで、外底はヘラ切り痕と板目をみる。淡黄灰色を呈する。

II-1類（第6図）

2A区4層の土師器がこの類に属する。

b、小皿（II-1-b）（2596～2599） 口径9.1～9.7cm、底径6.7～7.8cm、器高1.0～1.2cmを測り、体部に横ナデ、内底にナデ、外底には糸切り痕と板目が残る。黄灰色を呈す。

c、杯（II-1-c）（2594～2595） 口径15.1～15.2cm、底径8.0cm、器高2.1～2.5cmを測り、体部には横ナデが、内底にはナデが、外底には糸切り痕と板目が残る。黄灰色ないし灰白色を呈する。

II-2類（第6図）

この類に属するものはSK25土壤から出土し、SK12土壤・2D区3層にもみられた。

b、小皿（II-2-b）（2664～2607） 口径8.3～9.2cm、底径6.0～7.4cm、器高0.9～1.3cmで、体部に横ナデ、内底にナデが、外底には糸切り痕と板目をみる。淡橙灰色ないし灰白色を呈する。

c、杯（II-2-c）（2600～2603） 口径14.6～15.0cm、底径9.9～10.7cm、器高2.5～3.1cmを測り、体部は横ナデ、内底はナデをみ、外底には糸切り痕と板目が残る。淡橙灰色ないし灰白色を呈す。

以上、2600～2607はSK25土壤より出土した。

II-3類（第6図）

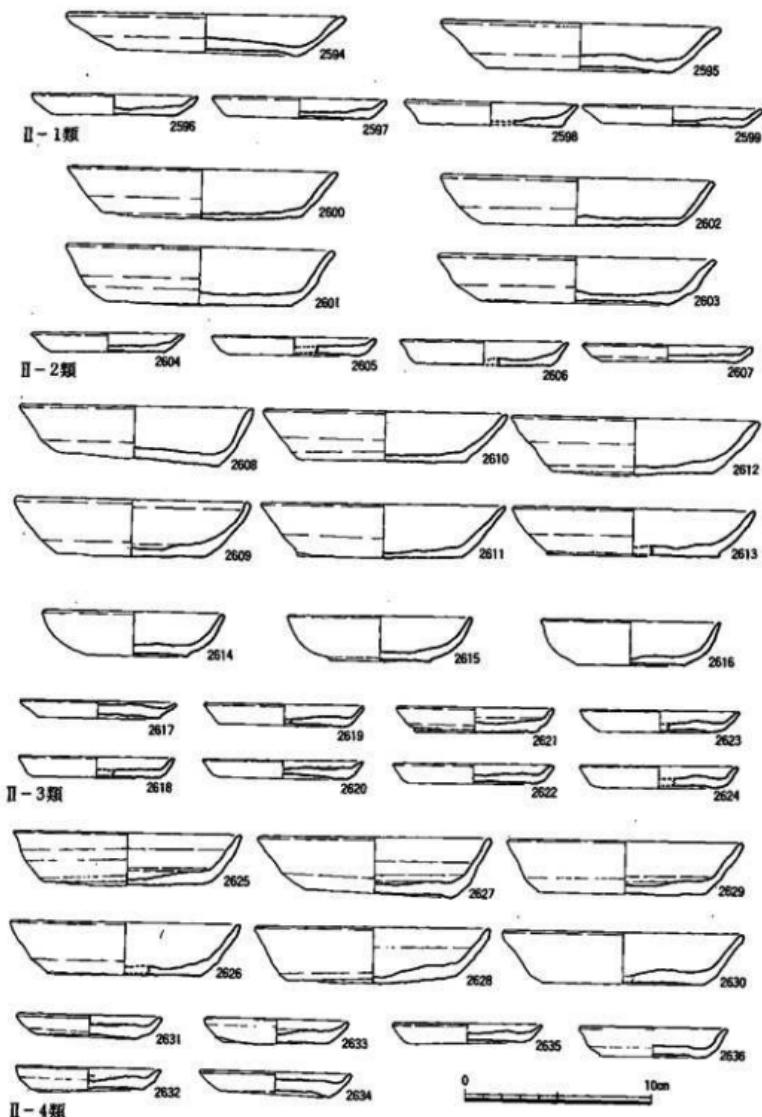
SK13土壤・SD05溝出土の土師器がこの類に属し、SE10井戸・SK04土壤にもみられる。

b、小皿（II-3-b）（2617～2624） 口径8.4～8.6cm、底径6.4～6.9cm、器高0.9～1.35cmを測り、体部に横ナデを、内底にナデをみ、外底には糸切り痕と板目が残る。浅黄橙色ないし黄褐色を呈す。この小皿はSK13土壤出土である。

c、杯（II-3-c）（2608～2616） 口径12.6～13.4cm、底径8.0～9.2cm、器高2.6～3.1cmを測り、体部に横ナデ、内底にナデ、外底には糸切り痕と板目が残る。橙灰色ないし黄橙色を呈す。2608～2612はSK13土壤出土で、2613はSD05溝出土である。

中皿（II-3）（2614～2616） 口径9.6～10.0cm、底径5.3～5.8cm、器高2.4cmを測り、体部は内湾気味に立ち上がり、外底部には糸切り痕が残るが、板目はない。黄褐色ないし黄橙色を呈す。胎土は、他の器形に比べて精選されており、砂粒を含んでいない。2614・2615はSK13土壤出土、2616はSD05溝出土である。

なお、2614～2616は法量・体部・調整等からみれば新器形であり、出現時期等は検討を必要とする。また、器形名も適当でないと考える。



第6図 II-1類～II-4類の土器実測図

II-4類(第6・7図)

S K03土壌・S E11井戸・S D06溝・1F区3層出土の土師器がこの類に属し、SK16土壌・SK24土壌出土のものはII-4類の新しい類とすることができる。

a、特小皿(II-4-a) (2645~2647) 口径7.0~7.1cm、底径5.2~5.7cm、器高1.2~1.65cmを測り、内底にナデ、外底に糸切り痕と板目を残す。灰黄色ないし灰白色を呈す。

b、小皿(II-4-b) (2642~2644) 口径8.0~8.2cm、底径5.8~6.05cm、器高1.1~1.5cmを測り、内底にナデをみ、外底に糸切り痕と板目を残す。灰白色ないし黄灰色を呈す。

c、杯(II-4-c) (2637~2641) 口径12.0~12.6cm、底径7.9~8.5cm、器高2.5~2.8cmを測り、内底にナデを、外底には糸切り痕と板目を残す。灰白色ないし黄灰色を呈す。

以上の、2637~2647は1F区3層出土である。

b、小皿(II-4-b) (2631~2636) 口径7.75~8.0cm、底径5.5~6.1cm、器高1.05~1.6cmを測り、内底はナデ、外底は糸切り痕と板目を残す。浅黄橙色ないし浅黄灰色を呈す。

c、杯(II-4-c) (2625~2630) 口径12.3~13.0cm、底径8.25~9.1cm、器高2.8~2.9cmを測り、内底にナデ、外底には糸切り痕と板目を残す。浅黄橙色ないし浅黄灰色を呈す。

以上、2625~2636はII-4類の新しい類に属し、SK24土壌より出土した。

II-5A類(第7図)

この類には、SK10土壌・SK39土壌・SK42土壌出土の土師器が属する。

a、特小皿(II-5A-a) (2656) 口径7.4cm、底径5.4cm、器高2.4cmを測り、外底に糸切り痕と板目を残し、黄橙色を呈す。

b、小皿(II-5A-6) (2655) 口径8.2cm、底径6.8cm、器高1.2cmを測り、外底に糸切り痕と板目をみ、浅橙色を呈す。

c、杯(II-5A-c) (2648~2653) 口径12.0~12.6cm、底径7.1~8.1cm、器高2.8~3.2cmを測り、内底にナデをみ、外底に糸切り痕と板目を残し、浅黄橙色を呈す。2654は口縁部に煤の付着をみる。

以上の2648~2656はSK10土壌出土である。

II-5B類(第7図)

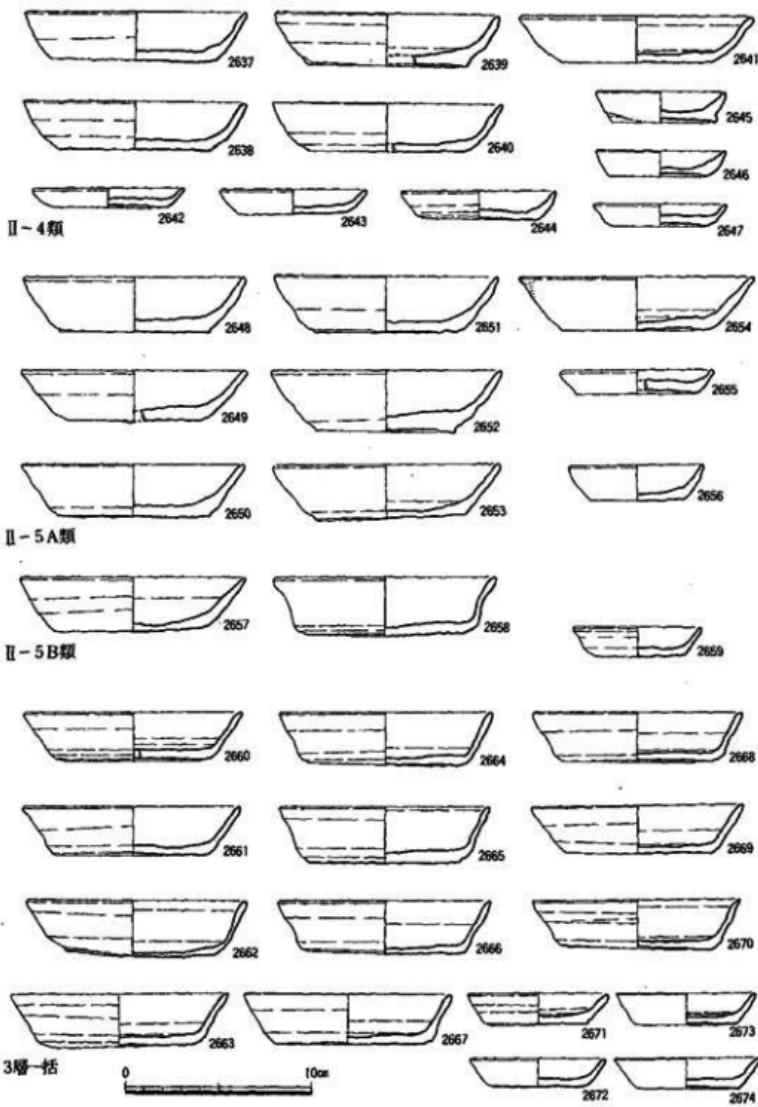
この類に属する土師器の出土遺構はなく、4S区2層のものが該当する。

a、特小皿(II-5B-c) (2659) 口径6.8cm、底径4.7cm、器高1.65cmで、内底にナデ、外底に糸切り痕と板目を残す。浅黄橙色を呈す。

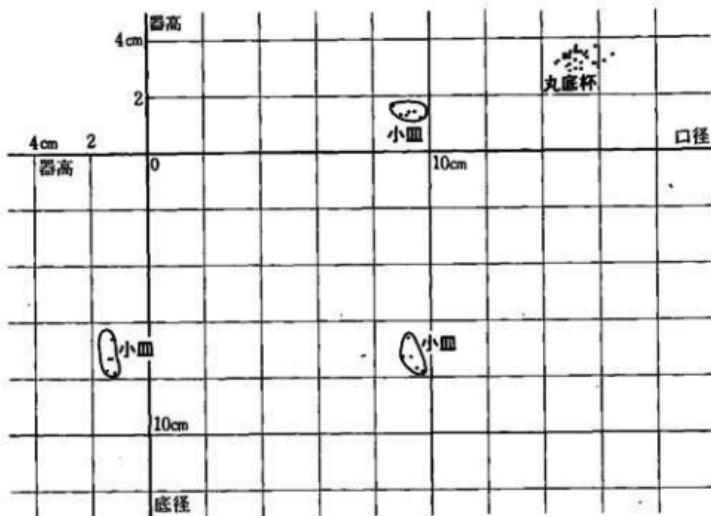
c、杯(II-5B-c) (2657~2658) 口径11.8~12.1cm、底径7.7~8.5cm、器高2.9~3.0cmを測り、内底にナデ、外底に糸切り痕と板目痕を残す。灰白色を呈す。

3層一括(第7図)

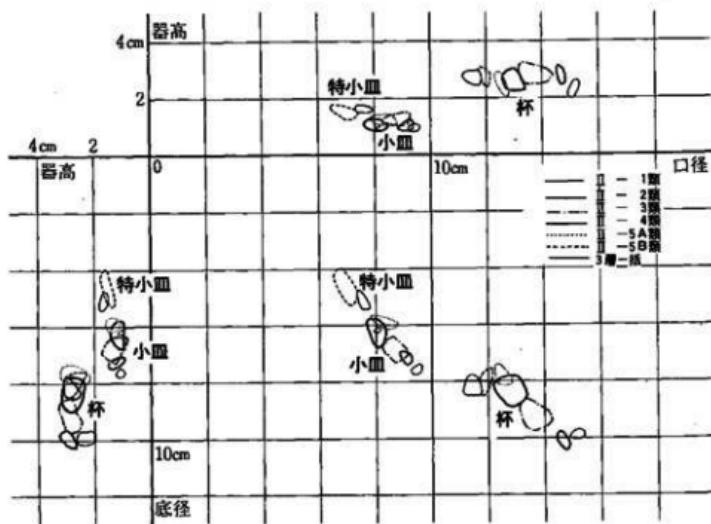
第2次調査で、水田床土の下層(3層)で一括と確認できる土師器(特小皿・杯)が出土



第7図 II-4類～II-5B類・3層一括の土師器実測図



第3表 I類(I-3)土師器法量表



第4表 II類土師器法量表 (代表的な法量のみで明示)

した。

a、特小皿 (2671~2674) 口径7.4~7.7cm、底径4.8~5.5cm、器高1.6~1.7cmを測り、外底に糸切り痕と板目を残し、灰白色を呈す。

c、杯 (2660~2670) 口径11.3~11.8cm、底径7.8~8.5cm、器高2.5~3.0cmを測り、外底部に糸切り痕と板目を残す。灰白色ないし黄灰色を呈す。

以上の土師器の中で、杯は法量上Ⅱ-5B類とⅡ-6類の間におくことができるが、特小皿はⅡ-3類より古いものである。よって、時間的差異がみられるため、問題として保留したい。

その他の出土土器

4 N区・4 S区・4 C区の4層より8世紀後半と比定できる土師器、須恵器、内黒土器、青磁A類が出土した。

土師器(第8図)

杯a (2675) 口径9.3cmを測り、外面はヘラみがきの後丹塗りを施こし、内面はヘラみがきを施こしている。

杯b (2676) 口径10.2cm、底径6.7cm、器高3.9cmを測り、体部は横ナデ後ヘラみがきし、底部はヘラ切りである。口縁部は曲折している。

杯c (2677~2679) 口径13.5~15.0cmを測り、体部は横ナデ後ヘラみがきし、底部はヘラ削りである。

杯d (2685~2686) 口径10.1cm~11.5cm、底径6.4cm~6.2cm、器高4.05cm~3.3cmで、体部は横ナデで、ヘラみがきは施されていない。底部はヘラ切りである。

杯蓋 (2681~2682) 口径14.9cm~21.2cmを測り、天井部にはヘラ削りが、口縁部体部は横ナデ後にヘラみがきを施している。

高台付杯 (2680) 口径15.8cm、高台径9.5cm、器高6.0cmを測り、体部中位に横ナデ後沈線を施している。内面にはヘラみがきをみる。底部はヘラ切りの後に高台を接合している。

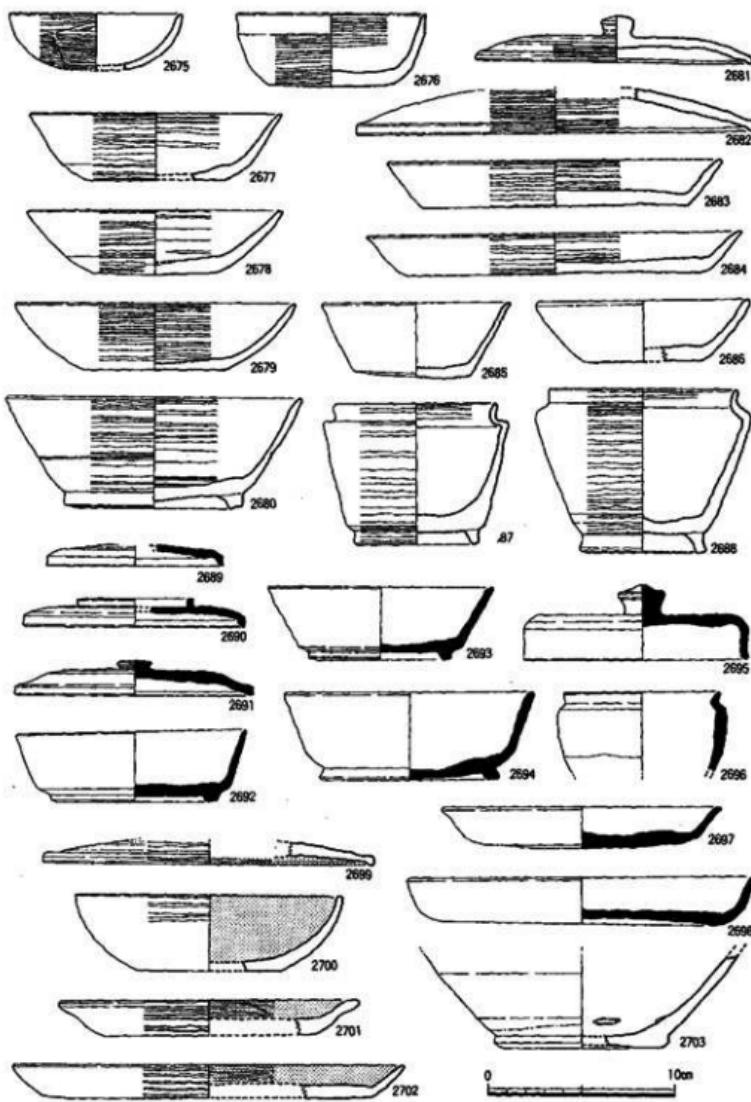
皿 (2683~2684) 口径17.9cm~20.1cm、底径14.1cm~15.2cm、器高2.5cm~2.2cmを測り、体部は横ナデ後ヘラみがきをし、底部はヘラ切りである。

壺 (2687~2688) 口径8.6cm~10.2cm、高台径6.2cm~8.8cm、器高7.55cm~8.8cmを測り、口縁はほぼ垂直に立ち上がる。口縁内面はヘラみがきが、体部外面は横ナデ後ヘラみがきが、内面は横ナデがみられる。底部はヘラ切りである。

須恵器(第8~9図)

杯蓋 (2689~2691) 口径9.5~12.5cmを測り、天井部はヘラ削りが、体部は横ナデがみられる。2690は高台様の鉢をもち、縁部に径9.95cmの杯身口径の重焼き痕跡をみる。

杯身 (2692~2694) 口径12.0~13.3cm、高台径7.6~9.3cm、器高3.75~4.7cmを測り、体部は横ナデが、底部はヘラ切り後に高台を接合している。



第8図 その他の出土土器 (4N・4S・4C区) (1)

皿 (2697・2698) 口径15.0cm・18.6cm、底径10.4cm・14.5cm、器高2.2cm・2.5cmを測り、体部は横ナデが、内底はナデが施され、外底はヘラ切りである。

壺 (2696) 口径8.3cmを測り、口縁部は横ナデでやや外反気味に立ち上がる。体部は横ナデで下半部はヘラ削りをみる。

薬壺 蓋 (2695) 口径12.6cm、器高4.0cmを測り、体部は横ナデをみ、天井部はヘラ削りが施されている。

薬壺 (2706) 口径12.4cm、高台径12.9cm、器高21.7cm、胴部最大径21.7cmを測る。口縁部は横ナデで垂直に立ち上がる。体部は横ナデ後、下半部にはヘラ削りが施されており、内面の、下半部は横ナデ後ナデられている。

高杯 (2705) 口径26.0cm、底径13.1~13.3cm、器高13.8~16.2cmを測る。杯部は外面が横ナデ後ヘラ削りされ、内面は横ナデ後ナデられている。脚部は、ねじりを加えて成形し、外面は横ナデ調整をみ、縦方向に削りが施されている。杯部と脚部接合には、外面にナデ調整をみる。

円面鏡 (2704) 台部がほぼ3分の2現存している。陸部・外縁の復原径は16.3cm・22.8cmを測り、海部断面はほぼU字形を呈し、脚部には25カ所前後の透孔があったと推測でき、全面に横ナデ調整をみる。陸部は摩滅痕跡があり、使用を示唆するものである。

内黒土器 (第8図)

杯蓋 (2699) 口径17.8cmを測り、天井部はヘラ削りされ、体部は横ナデされ、その後にヘラみがきをみる。鉢は欠失している。

杯 (2700) 口径14.3cm、底径7.6cm、器高4.05cmを測り、体部は内湾しつつ立ち上がり、横ナデ後内外面にヘラみがきを施す。底部はヘラ削り痕をみる。

皿 (2701・2702) 口径16.0cm・20.8cm、底径11.2cm・17.8cm、器高1.9cm・1.8cmを測り、体部は横ナデ後に内外面にヘラみがきを施している。外底はヘラ削りである。2701は体部がやや外反している。

越州窯系青磁 (第8図)

碗 (2703) 底径8.4cmを測り、体部はほぼ直線的に立ち上がる。胎土は灰色、釉は闇緑灰色を呈す。体部内面下部に重ね土をみる。A類である。

その他の磁器 (第10・11図)

従来と同様に、多種の磁器類が出土した。よって、〔A〕~〔Z〕の分類に従って記す。

A類 (2707) いわゆる越州窯系の青磁である。2707は高台疊付部は露胎で、器表内外面に施釉され、胎土は灰褐色で、釉は暗緑茶色である。S D13溝出土。

K類 (2708) 白磁の小皿で、見込みに段を有し、低い高台を持つ。2708は内外面に貫入をみ、胎土が黄灰白色で、釉が灰白色である。S K56土壤出土。

M類 (2710~2712) その他の白磁としたものである。2710は、体部内面と見込みに沈線を

もち、胎土が乳白色を、釉が緑白色を呈する。出土不明。2711は体部は縦長にくぼませており、復原で全周6カ所である。SD20溝出土。2712は体部外面には縦に沈線をめぐらせ、内面に沈線がみられる。胎土は灰白色、釉は緑白色である。SK56土壤。

O類(2713～2716) いわゆる口禿の白磁で、椀・皿などを含む。2713～2715は皿で、胎土が灰白色で、釉が明緑色である。1F区3・4層出土である。2716は椀で、体部内面上部と見込みに沈線をみ、胎土が淡灰白色を、釉が緑白色を呈し、3A区3層出土である。

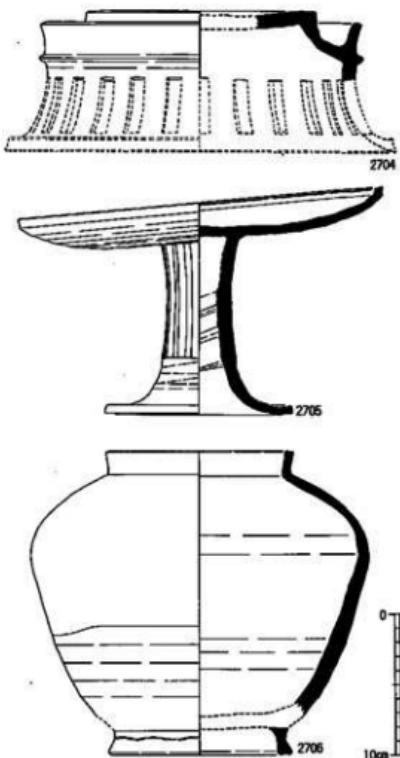
P類(2709) 口唇部の尖った白磁の皿の類として、2709をP類としたが、M類としてもさしつかえない。3A区3層出土。

R類 いわゆる龍泉窯系の青磁としている底部の厚いものである。

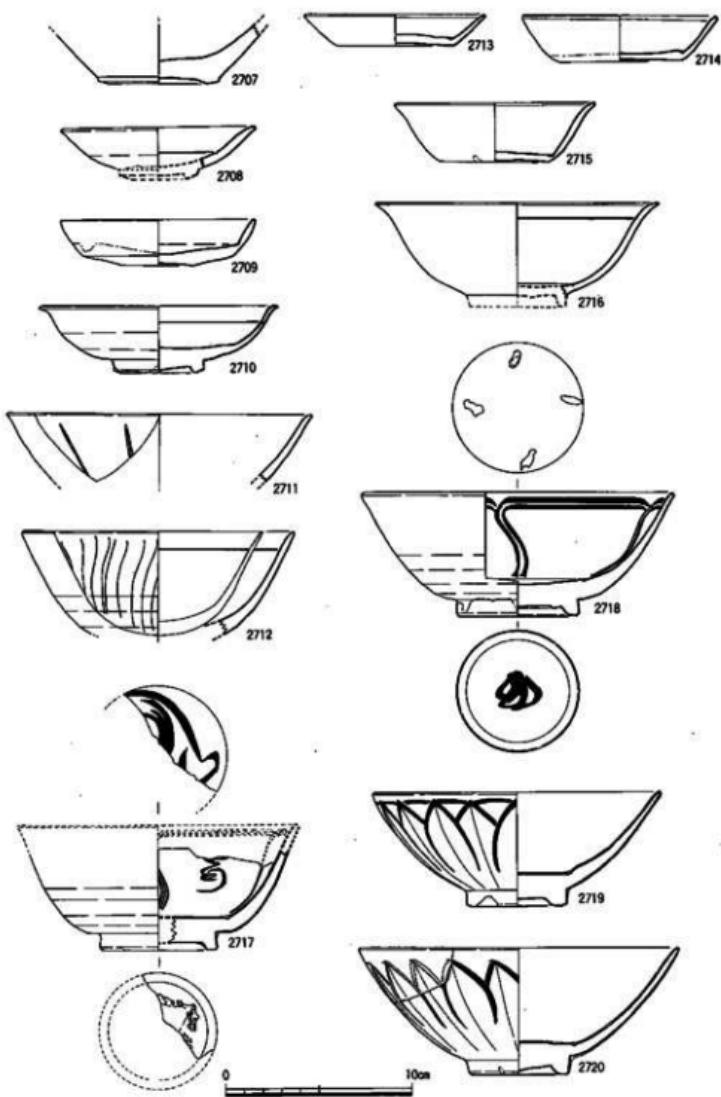
R1類(2717・2718) 外面は無文で、内面は沈線で区切られ、飛雲文を描いている。2717は、区画の沈線間にワラビ状草花文を、見込みに草花文を描く。外底部には棒(筒)状の焼台(方柱状)の痕跡をのこす。胎土は黄味の灰白色で、釉は灰緑色を呈す。2718は区画間では無文で見込みに4足の目跡を残す。外底部には「花押」的な墨痕をみる。胎土は灰白色を、釉は緑灰色を呈する。2717はSK37土壤出土、2718はSD01溝出土である。

R3類(2719・2720) 外面に蓮弁を有するものである。2719は、胎土が灰白色で、釉が淡緑灰色である。SE07井戸出土。2720は、胎土が灰白色で、釉が灰黄緑色である。SK03土壤出土。

R4類(2721) 内外面無文のものである。2721は、胎土が灰色で、釉が灰黄緑色を呈す。



第9図 その他の出土土器(4N・4S・4C区)
(2)



第10図 磁器実測図（1）

外底に棒（筒）状の焼台の痕跡をみ、見込みには目跡などはみとめられない。SK13土壙出土。

なお、2722・2723は、内外面無文であり、R4類であるが、小柄とすべきである。2722は、胎土が灰白色で、釉が淡灰緑色を呈す。3A区3層出土。2723は口縁部に輪花状に切込みを入れており、胎土が灰白色で、釉が濃黄緑色を呈する。SK22土壙出土。

R5類（2724） 外面には蓮弁に櫛齒文をいれている。2724は胎土が灰色で、釉が暗黄緑色を呈し、内外面に貫入を見る。SK37土壙出土。

S類（2725～2727） 龍泉窯系青磁のR類とセットになる小皿である。2725・2726は、見込みに魚文を描いている。2725は1D区3層出土で、2726は外底部に棒（筒）状の焼台痕を有し、SD21溝出土である。2727はヘラ・櫛齒で施文され、外底部には焼成前のカキ取りを見る。胎土は灰青色を、釉は淡緑青色で、4S区2層出土。

T類（2729～2732） 体部に厚く施釉され、高台端は施釉後カキ取られている、いわゆる砧青磁とされているものである。2731は体部に蓮弁を施し、胎土が灰白色で、釉が淡緑灰色を呈す。1D区3層出土。2729は見込みに双魚を貼付けた小碗で、胎土が灰白色・釉は淡緑色で、SK29土壙出土である。2730は扇式香炉で口頸部を欠損し、脚は接合している。胎土が灰白色で、釉が明緑灰色を呈し、溝トレ3層出土。2732は高台付盤であり、胎土が灰色で、釉は灰緑色を呈す。SK15土壙出土。

U類（2728） 同安窯系青磁とされているもので、胎土は灰白色で釉が灰緑色を呈し、SK04土壙出土。

Y類（2733・2734） 合子類である。2733は体部に沈線が縦に入れられており、釉は淡緑白色を呈す。SK13土壙出土。2734は蓋で、受け部が波状であり、鋲を持つ。釉は淡黄緑色で、細かい貫入を見る。

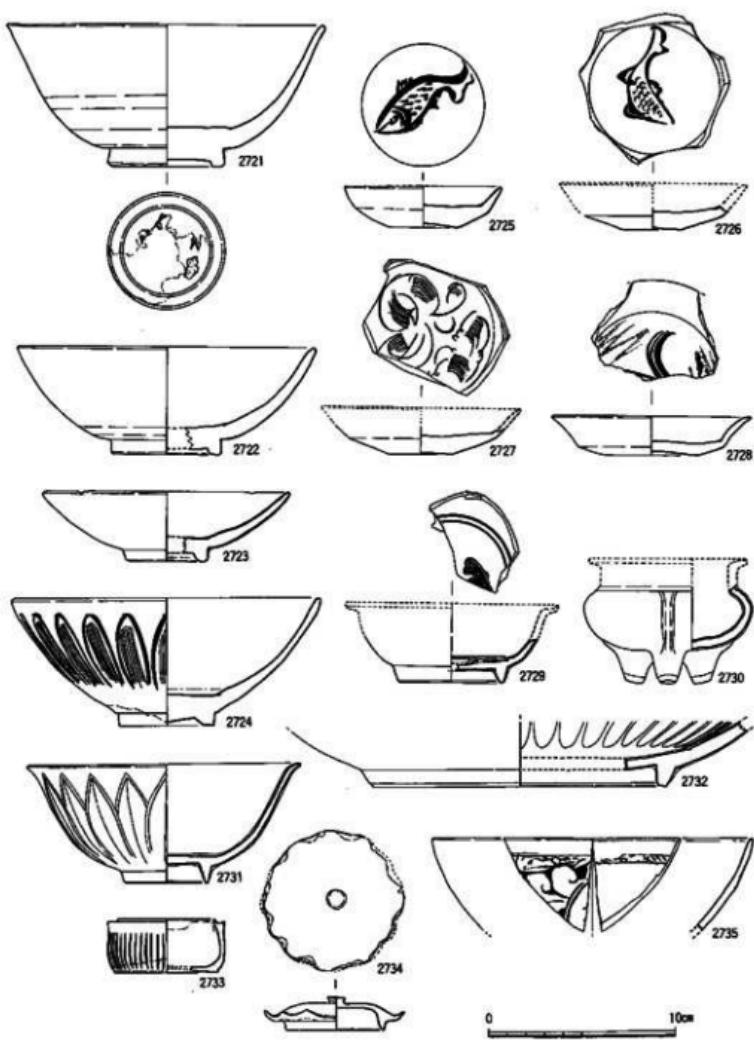
Z類（2735） 高麗青磁とされているもので、2735は体部外面に白・黒象嵌をみ、内面口縁下に白象嵌を見る。胎土が灰色で、釉が緑灰色を呈す。SE05井戸出土。

黒色土器（第12図）

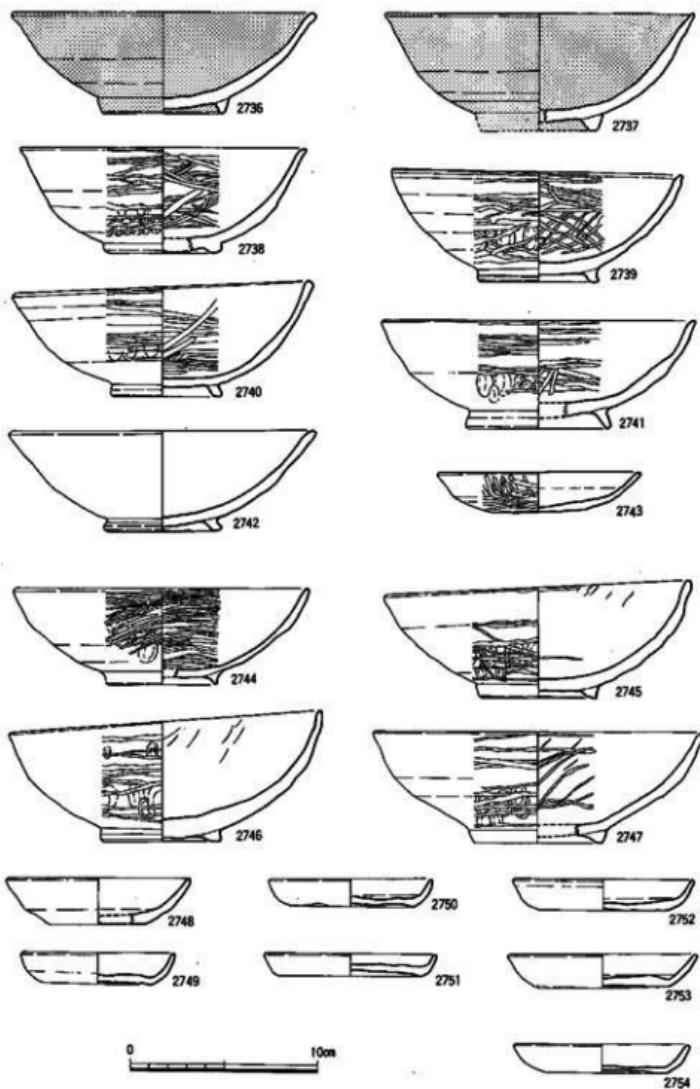
2736は、口径16.4cm、高台径6.4cm、器高5.4cmを測り、体部は内湾しつつ立ちあがり、外面に指頭圧痕を見る。2737は、口径16.5cmを測り、高台を欠失する。2736・2737はSD14溝出土。

瓦器（第12図）

椀（2738～2741・2744～2747） 2738～2741は、口径15.4～16.7cm、高台径5.5～7.7cm、器高5.7～5.9cmを測る。体部外面の中位下半には指頭による形成の後、ほぼ横方向にヘラみがきが施され、内面には、口縁部で横方向の、体部で横方向の後に斜方面のヘラみがきが施されている。2744は、口径15.8cm、高台径6.0cm、器高5.2cmで、体部外面下半に指頭で成形し、内外面にヘラみがきを施している。2745～2747は、口径16.3～17.2cm、高台径5.7～7.0cm、器高5.9～6.3cmを測り、体部外面下半には指頭による成形の後にヘラみがきを施す。内面には、



第11図 磁器実測図（2）



第12図 黒色土器・瓦器・研磨土器実測図

コテ状の痕跡をみる。2738～2741はS D14溝出土、2744はS D13溝出土、2745～2747はS K13土壌出土である。

小皿（2743・2749～2754） 2743は、口径10.8cm、器高3.1cmを測り、体部外面にはヘラみがきを内面にはみがきをみる。底部はヘラ切りである。2749～2754は、口径8.3～10.2cm、底径5.8～7.6cm、器高1.2～1.8cmを測り、体部は横ナデで底部には糸切り痕と板目痕を残す。2743はS D14溝出土、2749～2753はS K13土壌出土、2754はS D05溝出土である。

中皿（2748） 口径9.8cm、底径5.2cm、器高2.5cmを測り、底部には糸切り痕を残す。S K13土壌出土である。

研磨土器（第12図）

2742は楕で、口径16.4cm、高台径5.8cm、器高5.4cmを測り、内面にわずかに研磨をみる。S D14溝出土である。

帶金具・石蒂（第13図）

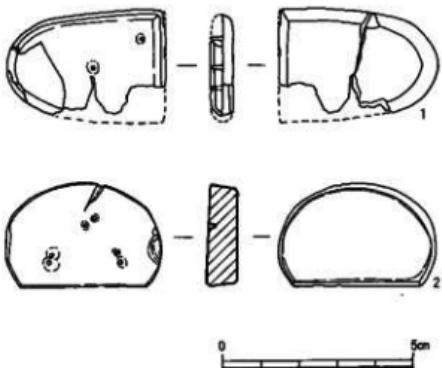
1は青銅製帶金具の鈎尾である。長さ3.65cm、復原幅3.0cmを測る。表面は一部欠損し、裏面は先端部を残し、ほぼ欠損している。表面より3本の鉢が鋳出され、裏面に接合するであろう。S K53土壌・S D09溝の両遺構より破片が出土し、同一個体であった。2は碧玉製の石蒂で丸柄である。長さ4.1cm、巾2.1cm、厚さ0.8～0.9cmを測り、裏面の一部を欠失している。裏面をこし研磨され光沢が残り、裏面に3カ所2個ずつかがり穴がうたれ、暗緑色を呈す。

木製品（第14・15図）

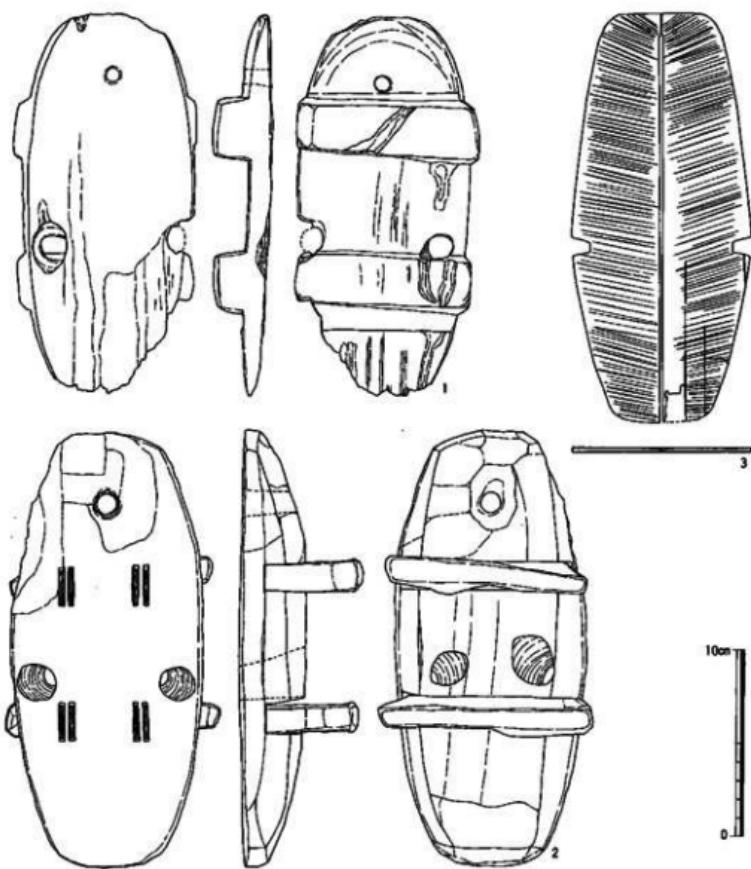
1は連歯の下駄で、台部の踵部が欠損して、全長20.5cm、台幅9.2cm、高さ3.2cmを測る。前歯の前部と後歯の後部の摩滅が著しい。4 A区4層出土。2は差歛の下駄で、台部前方の一部を欠損し、全長23.3cm、台幅10.3

cm、高さ6.6cmを測る。歯は台部の枘穴8カ所よりの楔で固定され、前・後歯ともに摩滅している。S E01出土。3は履物状木製品で、全長21.9cm、巾9.6cm、厚さ2.5mmを測る。先端部に径2mmの孔が穿かれているが、紐ずれ等による摩滅はみられない。1 B区D-2出土。

4は横櫛で、ほぼ半分が残存する。背は弧状で、表裏に溝2本を刻み、下の溝より櫛歯を削り出している。溝トレ4層出土、5は漆器の匙で



第13図 帯金具・石蒂実測図



第14図 木製品実測図 (1)

柄手部は欠損している。出土層位は不明である。

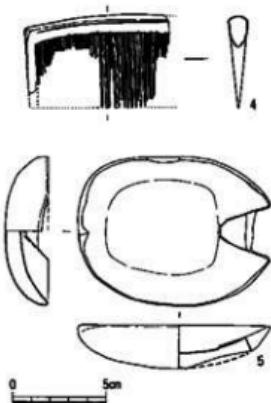
銅錢 (第16図、第5表)

銅錢 6 枚が出土したが、錢貨名・出土地点等は第5表に示すとおりである。

小 結

今回の検出の溝・井戸等からの出土遺物は時期的に奈良後半から中世に至るまで幅広く認められるが、トレンチによる調査のため遺跡全容を明確にできなかった。よって、問題点の列記に留めたい。

1. S D02・03溝は、大宰府史跡第44次調査で検出した S D1175と接続するが、条坊閑闊遺構とは認めがたい。
2. S D13・14溝から奈良後半・平安期の遺物が出土したが、条坊把握のために今後の問題として留意すべきである。尚、SK53土壙、4N・4S・4C区4層等も同様である。
3. II-3類土師器の中で、中皿(仮称)は SK13土壙・SD05溝から出土したが、その上限等は今後の問題である。
4. II-4類土師器を2期に分けたが、今回は新たに分類を設けず、前回の報告に従った。



第15図 木製品実測図 (2)



第16図 銅錢拓影

第5表 銅錢一覧表

図版号	錢貨名	外径		外縁 厚さ	出土地点		初鑄年	備考
		水平	垂直		地区	層位		
1	元豐通宝	25.00	24.95	1.60	2D区	3層	宋 神宗 1078	
2	聖宋元宝	20.20	19.55	1.30	1F区	3層	宋 徽宗 1101	外縁周囲欠損
3	太平通宝	24.30	24.30	1.15	1F区	あげ土	宋 太宗 976	
4	治平元宝	24.05	24.25	1.45	1F区	あげ土	宋 仁宗 1064	
5	紹聖元宝	24.50	24.55	1.45	1F区	あげ土	宋 哲宗 1094	
6	元符通宝	23.80	23.80	1.45	1F区	あげ土	宋 哲宗 1098	

別 表

番号	掛図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無						
					ヘ	ラ								
S K 03														
小皿														
1		9.5	7.6	1.1		○	○	○						
杯														
1		10.6	7.0	2.5		○	○	○						
2		11.3	7.8	2.3		○	○	○						
3		12.3	7.7	2.15		○	○	○						
4		12.6	8.6	3.05		○	○	○						
5		12.6	8.9	2.7		○	○	○						
丸底杯														
1		15.3		3.8	○									
S K 04														
小皿														
1		8.2	6.5	1.1		○	○	○						
2		8.3	6.9	0.9		○	○	○						
3		8.6	6.6	1.4		○	○	○						
4		8.6	6.8	1.3		○	○	不明						
5		8.6	6.6	1.2		○	○	○						
6		8.6	6.8	1.15		○	○	○						
7		8.8	6.9	1.45		○	○	○						
8		8.8	6.9	1.2		○	○	○						
9		8.8	6.9	0.95		○	○	○						
10		8.8	6.6	1.3		○	○	○						
11		8.8	7.2	1.0		○	○	○						
12		8.9	6.8	1.2		○	○	不明 ○						
13		8.9	6.9	1.45		○	○	○						
14		8.9	7.1	1.1		○	○	○						
15		9.0	6.7	1.15		○	○	○						
16		9.0	7.2	1.1		○	○	○						
17		9.4	7.7	1.0		○	○	○						
杯														
1		12.5	8.2	2.3		○	○	○						
2		12.6	8.3	2.8		○	○	○						
3		12.7	8.7	2.5		○	○	○						
4		13.1	9.0	2.65		○	○	不明						
S K 10														
特小皿														
1	2656	7.4	5.4	2.4		○	○	○						
小皿														
1	2655	(8.2)	(6.8)	1.2		○	不明	不明						
杯														
1	2648	12.0	8.0	2.95		○	○	○						
2	2649	(12.0)	(7.1)	(2.8)		○	○	○						
3	2650	12.05	8.0	2.8		○	○	○						

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し系		内底部の ナゲの有無	板状圧痕 の有無
					ヘラ	系		
4	2651	12.1	7.9	3.05		○	○	○
5	2652	12.2	7.0	3.2		○	○	○
6	2653	12.2	8.0	2.8		○	○	○
7	2654	12.6	8.1	2.9		○	○	○
8		(13.0)	(8.5)	2.95	-○		○	○

S K 12

小皿

1		8.25	6.9	1.1		○	○	○
2		10.4	7.0	1.7	○		○	不明

杯

1		14.6	10.4	2.9		○	○	○
---	--	------	------	-----	--	---	---	---

S K 13

小皿

1		8.0	5.7	0.95		○	○	○
2		(8.1)	6.2	1.1		○	○	○
3		(8.2)	(6.0)	1.2		○	○	不明
4	2618	8.4	6.9	1.05		○	○	○
5	1617	(8.4)	(6.4)	0.9		○	○	○
6	2619	(8.45)	(6.9)	1.0		○	○	○
7	2621	8.5	6.7	1.35		○	○	○
8	2620	8.5	6.9	1.0		○	○	○
9	2622	8.6	6.5	1.1		○	○	○
10	2623	(8.6)	(6.9)	1.1		○	○	○
11	2624	(8.6)	(6.8)	1.2		○	○	○
12		9.0	7.0	1.0		○	○	不明

杯

1	2614	9.8	5.3	2.4		○	不明	×
2	2615	10.0	5.4	2.4		○	不明	×
3	2608	12.6	8.5	2.8		○	○	○
4	2609	12.7	8.0	3.05		○	○	不明
5	2610	13.2	9.1	2.7		○	○	○
6	2611	13.2	8.9	2.9		○	○	○
7	2612	13.4	8.5	3.05		○	○	○
		14.3	9.5	2.9		○	○	○

S K 16

小皿

1		7.8	6.3	1.15		○	○	×
2		8.1	6.4	1.0		○	○	○
3		8.2	6.4	1.3		○	○	○
4		(8.2)	6.6	1.0		○	○	×

S K 22

特小皿

1		(6.4)	(4.3)	1.75		○	○	○
---	--	-------	-------	------	--	---	---	---

番号	排団番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ系	内底部の ナブの有無	板状压痕 の有無
小皿							
1		8.0	6.2	1.1		○	○
杯							
1		(12.0)	(7.6)	2.4		○	○

SK 24

小皿							
1		7.6	5.4	1.2		○	○
2		(7.6)	(5.4)	1.2		○	○
3		7.7	5.9	1.1		○	○
4		7.7	5.9	1.1		○	○
5	2631	7.75	5.5	1.2		○	○
6	2632	7.8	6.1	1.1		○	○
7	2633	7.85	6.1	1.3		○	○
8	2634	7.9	6.1	1.2		○	○
9	2635	7.95	6.01	1.05		○	○
10	2636	8.0	5.8	1.6		○	○
11		8.1	6.9	0.9		○	×
12		8.4	6.2	1.4		○	○
13		8.4	6.2	1.4		○	○
杯							
1		12.2	7.4	2.95		○	○
2		(12.2)	8.8	2.9		○	○
3	2625	12.3	8.6	2.9		○	○
4	2626	12.4	8.3	2.8		○	○
5	2627	12.6	8.25	1.8		○	○
6	2628	12.65	9.1	2.8		○	○
7	2629	12.9	8.7	2.9		○	○
8		12.9	8.0	3.0		○	○
9		12.95	8.8	3.1		○	○
10	2630	(13.0)	(8.6)	2.8		○	○
11		13.1	10.1	2.7		○	○
12		(13.2)	(9.8)	2.4		○	○
13		13.2	8.2	2.8		○	○
14		13.2	8.9	3.0		○	○
15		13.2	8.4	2.4		○	○

SK 25

小皿							
1		8.3	6.2	1.1		○	○
2		8.8	7.0	1.0		○	○
3		9.1	7.4	1.3		○	○
4		9.2	7.2	0.9		○	○
杯							
1	2601	14.6	9.9	3.1		○	○
2	2600	14.65	10.7	2.7		○	○
3	2602	14.8	10.4	2.6		○	○
4	2603	15.0	9.9	2.5		○	○

番号	排図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ 系	内底部の ナゲの有無	板状压痕 の有無
S K 35							
小皿							
1		8.2	6.3	1.4		○	○
2		8.8	7.0	1.0		○	○
杯							
1		12.4	8.4	2.45		○	○
2		12.7	8.35	2.45		○	○
3		14.0	10.4	2.6		○	○
4		14.2	9.2	2.6		○	○
5		14.65	10.2	2.9		○	○
S K 37							
小皿							
1		8.2	6.65	0.9		○	○
2		8.2	6.4	1.1		○	○
3	(8.2)	6.2	1.3			○	○
4		8.3	7.0	1.05		○	○
5		8.4	7.0	0.95		○	○
6		8.4	7.0	1.05		○	○
7		8.6	6.9	1.1		○	○
8		8.6	6.2	1.1		○	○
9		8.6	7.0	1.0		○	○
10		8.7	6.7	1.4		○	○
11		8.8	6.9	1.2		○	○
12		8.8	6.9	1.2		○	○
13		8.9	7.5	1.15		○	○
14		9.0	7.3	1.2		○	○
15		9.1	6.95	1.2		○	○
16		9.1	7.0	1.05		○	○
17		9.2	7.1	1.6		○	○
18		9.25	7.5	1.15		○	○
杯							
1		12.6	8.1	3.0		○	○
2		13.2	9.4	2.8		○	○
3		13.2	8.6	3.3		○	○
4		13.3	9.5	2.95		○	○
5		13.4	8.7	2.8		○	○
6		13.5	9.8	2.4		○	○
7		13.7	9.1	2.55		○	○
8		13.8	8.9	2.85		○	○
9		13.8	9.7	2.9		○	○
10		14.0	9.1	2.65		○	○
S K 39							
特小皿							
1		7.1	4.25	1.45		○	○

番号	持因番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底盤のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	系		
2		7.1	4.5	1.55		○	○	×
3		7.2	4.7	1.6		○	○	×
4		7.4	4.4	1.7		○	○	×
小皿								
1		7.7	5.4	1.0		○	○	
2		(7.8)	(5.9)	1.15		○	○	不明
3		8.0	5.7	1.05		○	○	×
杯								
1		11.8	7.15	2.5		○	○	○
2		11.9	7.1	2.5		○	○	○
3		12.2	7.8	2.7		○	○	○
4		12.4	7.9	3.2		○	○	○
5		12.6	7.3	2.6		○	○	○
S K 41								
特小皿								
1		6.7	4.0	1.6		○	○	○
2		7.0	5.4	1.3		○	○	○
3		7.2	4.9	1.6		○	○	○
杯								
1		(11.8)	(7.8)	3.1		○	○	○
S K 42								
小皿								
1		7.8	5.8	1.3		○	○	○
2		7.8	5.8	1.2		○	○	○
3		8.4	6.1	1.45		○	○	不明
4		8.8	6.0	1.15		○	○	○
杯								
1		12.4	7.4	3.0		○	○	不明
2		12.4	8.0	2.6		○	○	○
3		12.8	8.0	2.1		○	○	○
S K 43								
小皿								
1		8.4	6.0	1.4		○	○	○
2		8.4	6.9	1.1		○	○	○
3		8.6	6.3	1.4		○	○	○
杯								
1		(14.0)	8.2	2.9	○		○	×
S K 45								
小皿								
1		(8.6)	(7.2)	1.2		○	○	不明
杯								
1		(9.0)	6.0	2.1		○	○	×
2		(12.2)	(8.2)	2.25		○	○	○

番号	持國番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナゲの有無	板状正規の有無
					ヘ	ラ		
3		(12.2)	(7.3)	2.55		○	○	○
4		(12.7)	(9.6)	2.6		○	○	不明

S K 56

小皿							
1		9.8	7.6	1.5	○		○ ×
丸底杯							
1		15.5		3.05	○		○ ×

S D 05

小皿							
1		(8.0)	(7.3)	1.2		○	○ ○
2		8.2	6.6	1.1		○	○ ○
3		(8.5)	(7.4)	1.15		○	○ ○
4		(8.5)	(7.0)	1.2		○	○ 不明
5		(8.5)	(6.7)	1.2		○	○ 不明
6		(8.6)	(7.5)	1.1		○	○ ○
7		9.0	7.5	1.0		○	○ ○
杯							
1	2616	(9.6)	(5.8)	2.4		○	○ ×
2	2613	(13.0)	9.2	2.6		○	○ ○
3		(13.8)	9.25	3.0		○	○ ○
4		(14.2)	(10.2)	2.8		○	不明 ○

S D 06

小皿							
1		(8.3)	(6.4)	1.25		○	○ 不明
杯							
1		(12.4)	(7.7)	2.5		○	○ 不明
2		12.4	8.0	2.55		○	○ ○
3		12.6	8.1	2.45		○	○ ○

S D 12

皿							
1		(18.8)	(15.5)	1.65		不明 不明	×

S D 13

小皿							
1		9.8	7.4	1.0		○	○ ○
杯							
1		(16.4)	10.5	3.15	○		不明 ×

S D 14

小皿							
1		8.7		1.65	○		○ ○
2	2589	9.0	7.3	1.3	○		○ ○
3	2590	(9.2)	6.6	1.3	○		○ ○

番号	排団番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し系		内底部のナゲの有無	瓶状压痕の有無
					ヘラ	ラ		
4	2159	9.3	7.3	1.4	○		○	○
5	2592	9.5	7.7	1.45	○		○	○
6	2593	9.7	7.8	1.2	○		○	○
7		(10.0)	6.05	1.65		○	○	×
九底杯								
1		14.5		3.1	○			○
2		14.6		3.15	○			○
3		14.8		3.45	○			○
4		14.8		3.35	○			×
5		14.8		3.4	○			○
6	2583	14.9		3.4	○			○
7		14.9		3.35	○			×
8		14.9		3.0	○			○
9		15.0		3.3	○			○
10		15.0		3.45	○			○
11		15.0		3.3	○			○
12		15.0		3.5	○			×
13	2586	15.0		2.8	○			×
14	2584	15.2		3.2	○			○
15	2587	15.2		2.9	○			○
16		15.2		3.6	○			×
17		15.2		3.5	○			○
18		15.2		3.05	○			○
19		15.2		3.7	○			○
20		15.3		3.5	○			×
21		15.3		3.5	○			○
22		15.4		2.9	○			×
23	2585	15.4		3.1	○			×
24		15.4		3.5	○			×
25		15.5		3.4	○			×
26		15.6		3.3	○			×
27		15.6		3.3	○			○
28		15.65		3.5	○			○
29		15.8		3.05	○			○
30		15.9		3.1	○			○
31		15.9		3.7	○			○
32		16.2		3.2	○			×
33		16.5		3.4	○		○	○
34	2588	16.0	10.3	2.95	○		○	○
瓦器椀								
1		15.6						
2		15.8						
3		16.0						
4		16.0		5.5				

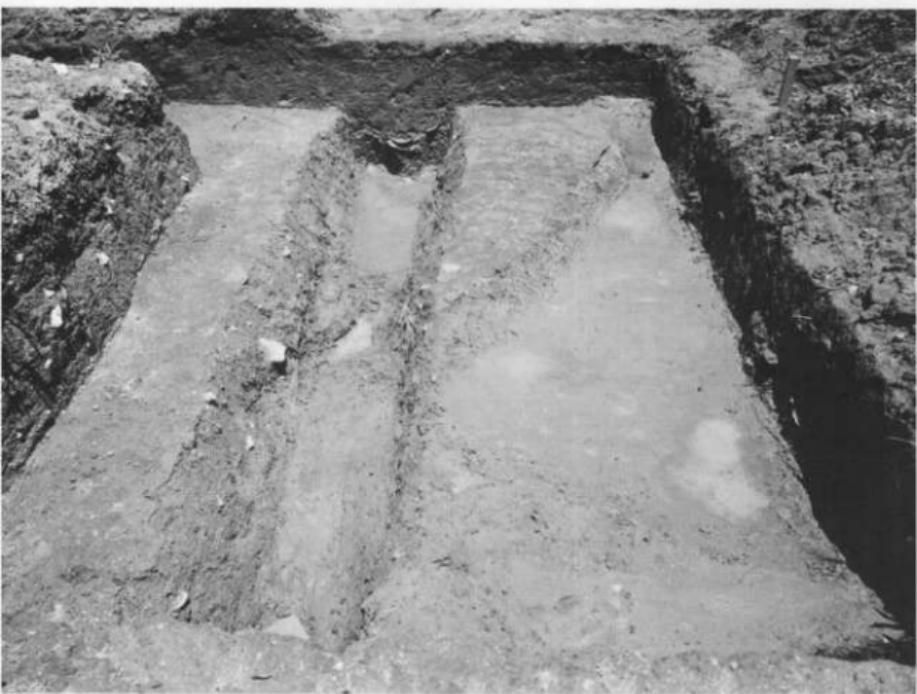
番号	拂団番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナゲの有無	板状研食 の有無
					ヘ	ラ		
S E 01								
		小皿						
1		(7.8)	5.8	1.25		○	○	○
杯								
1		12.6	7.1	2.8		○	○	○
S E 03								
		小皿						
1		(8.2)	7.5	1.1		○	○	不明
2		(8.3)	(7.1)	0.95		○	○	○
3		8.4	6.7	1.15		○	○	○
4		(8.9)	(6.8)	1.15		○	○	○
杯								
1		(12.6)	8.1	2.35		○	○	○
2		(13.4)	(8.9)	2.7		○	○	○
S E 04								
		小皿						
1		(8.0)	6.3	1.25		○	○	○
高台付小皿								
1		(9.2)	(7.2)	1.55		○	不明	×
杯								
1		12.2	8.3	3.0		○	○	○
2		12.4	8.05	2.95		○	○	不明
3		12.7	7.8	2.9		○	○	○
4		(13.0)	(9.2)	2.85		○	○	○
S E 07								
		小皿						
1		8.1	6.4	1.2		○	○	○
S E 10								
		小皿						
1		9.0	6.2	1.1		○	○	○
2		9.1	7.1	1.05		○	○	○
杯								
		12.4	8.4	2.4		○	○	○
1		12.4	8.3	2.6		○	○	○
2		12.6	7.6	3.1		○	○	○
3		13.0	8.8	2.8		○	○	○
4		13.2	9.4	2.8		○	○	○
5		13.5	9.4	2.7		○	○	○
S E 11								
		小皿						
1		(8.3)	(6.7)	1.2		○	○	○

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナゲの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
2		(8.4)	(6.4)	1.2		○	○	○
3		(8.4)	(6.2)	1.25		○	○	○
4		(8.5)	(7.0)	1.0		○	○	○
杯								
1		11.95	7.7	2.6		○	○	○
2		12.0	7.9	2.7		○	○	○
3		(12.0)	(7.8)	2.35		○	○	○
4		12.2	8.0	2.8		○	○	○
5		12.2	8.6	2.7		○	○	○
6		(13.3)	(8.7)	2.7		○	○	○
7		(12.5)	(8.7)	2.25		○	○	○
8		12.6	8.0	2.35		○	○	○
3層								
特小皿								
1	2672	7.4	4.8	1.6		○	○	○
2	2671	7.5	5.4	1.6		○		×
3	2673	7.5	5.5	1.7		○		×
4	2674	7.7	5.5	1.7		○		×
杯								
1	2666	11.4	8.5	2.9		○	○	○
2		11.25	8.3	2.7		○	○	×
3	2667	11.3	8.4	2.8		○	○	○
4	2670	11.3	8.5	2.8		○	○	○
5	2669	11.4	7.8	2.6		○	○	不明
6	2668	11.4	8.4	2.9		○	不 明	不 明
7	2665	11.6	8.1	3.0		○	○	○
8	2664	11.6	8.5	3.0		○	○	○
9	2661	11.7	8.5	2.7		○	○	○
10	2663	11.7	8.5	2.9		○	○	○
11	2662	11.8	8.5	3.0		○	○	○
12	2660	11.8	8.4	2.5		○	○	○
13		11.8	8.5	3.0		○	○	○
14		12.2	8.4	2.9		○	○	不明
S K 53								
土師器・杯蓋								
1	2566	16.6	不 明	2.1	不 明	不 明		
須恵器・杯蓋								
1	2567	9.9	不 明	1.8				
2	2568	(14.0)	不 明					
3	2569	(14.8)	不 明					
4	2570	(15.3)	不 明					
5	2571	(15.5)	不 明					
須恵器・蓋蓋								
1	2572	11.1	不 明	2.35				
須恵器・杯身								

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
					ヘラ	糸		
1	2573	(14.6)	(9.9)	4.2				
2	2574	(19.0)	(10.6)	5.5				
3	2575	(16.8)						
須恵器・皿								
1	2576	(19.0)	(12.8)	2.45				
2	2577	(19.4)	(15.4)	2.4				
1 A区3層								
小皿								
1	2578	10.4	7.0	2.05	○			
2	2579	11.0	7.6	1.7	○			
3	2580	11.2	8.9	1.4	○			
楕								
1	2581	12.6	不 明	3.7	○			
高台付小皿								
1	2582	12.5	7.25	4.8				
2 A区4層								
小皿								
1	2596	9.1	6.7	1.1		○		
2	2597	9.4	7.7	1.1		○	○	○
3	2598	(9.4)	(7.8)	1.2		○	○	○
4	2599	9.7	7.6	1.1		○	○	○
杯								
1	2594	15.1	10.0	2.1		○	○	○
2	2595	15.2	10.0	2.1		○	○	○
1 F区3層								
特小皿								
1	2645	7.0	5.7	1.65		○	○	○
2	2646	7.0	5.5	1.4		○	○	○
3	2647	7.1	5.2	1.2		○	○	○
小皿								
1	2642	8.0	6.0	1.1		○	○	○
2	2643	8.0	5.8	1.35		○	○	○
3	2644	8.2	6.05	1.5		○	○	○
4 S区2層								
特小皿								
1	2659	6.8	4.7	1.65		○	○	○
杯								
1	2657	12.1	7.7	2.9				
2	2658	11.8	6.5	3.0				



図版1 [上] SE 06 井戸・SE 07 井戸（北から）・[下] SE 10 井戸（北から）



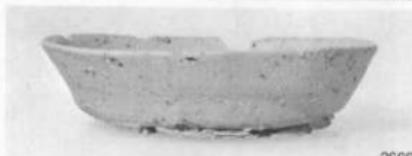
図版2 [上] SK52 土壠 (北から)・[下] SD14溝 (南から)



2663



2666



2666



2668



2710



2704



2705



2721

図版3 出土遺物 (1)



2719



2720



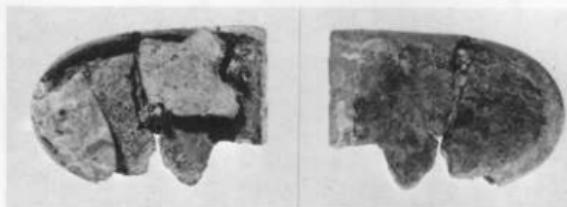
2725



2731



2730



1



2

図版4 出土遺物(2)

大宰府史跡

昭和53年度発掘調査概報

昭和54年3月

発行 九州歴史資料館
福岡市太宰府町大字太宰府字太郎丸近1025

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目5番